

福岡市

# 広石古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集



1977

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第41集

# 広石古墳群

—福岡市西区拾六町広石所在古墳群の調査—



1977年3月

福岡市教育委員会

## 序 文

文化財行政の当面する課題の一つに、埋蔵文化財の保護対策があります。

近年、福岡市及び周辺地域の開発にともなって、必然的に人口の増加を、ひいては児童生徒の増加を招いているのが現状であります。今回の調査もこのような人口の増加とあいまって高等学校への進学率は毎年高くなり、その中でも公立普通科高等学校への進学希望者が特に増加の傾向にあることから、昭和50年度に新設され、51年4月に開校された市立福岡西陵高校建設地内に所在する遺跡であります。

調査に際しましては、関係諸方面のご協力を得て、多くの成果をあげることができました。これも関係者の埋蔵文化財への深いご理解とご協力に深甚の敬意を表します。

なお、本書に収録された資料が永く保存され、市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に、学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

昭和52年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 戸田成一

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が計画した市立西陵高等学校建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が昭和50年8月～昭和51年3月に行なった広右古墳群のうち調査した7基の報告書である。
2. 本書には大沢正己氏に從来より依頼していた鉄滓の分析結果をまとめていただき、第4章に収録することができた。その他の執筆には、山崎純男、柳沢一男、浜石哲也があたり、各分担は文末に銘記した。
3. 本書に使用した図の作製、製図には主に山崎、柳沢、浜石があたった。
4. 本書の写真は現地は主に柳沢の撮影によるもので、遺物写真は宮島成昭氏によるところが多い。
5. 各古墳の遺物番号は実測図番号と一致する。
6. 本書に掲載した地形図及び空中写真は建設省国土地理院の5万分の1地形図及び空中写真を複製したものである。　（承認番号）昭52九復.第114号
8. 本書の編集は山崎、柳沢、浜石が担当した。

# 広石古墳群

## 本文目次

第 1 章	序説 .....	1
1	はじめ .....	1
2	古墳群の位置 .....	2
3	広石古墳群とその周辺 .....	3
第 2 章	調査の概要 .....	9
1	調査の方針と古墳各部の名称 .....	9
2	古墳の呼称 .....	9
3	調査の概要 .....	11
第 3 章	調査の記録 .....	13
1	I - 1 号墳 .....	13
2	II 群の概要 .....	49
3	II - 1 号墳 .....	50
4	II - 2 号墳 .....	66
5	II 群の土塁 .....	86
6	III 群の概要 .....	87
7	III - 1 号墳 .....	89
8	III - 1 号墳東側土塁出土遺物 .....	103
9	III - 2 号墳 .....	104
10	III - 3 号墳 .....	111
11	III 群の土塁と溝状遺構 .....	121
12	IV 群の概要 .....	123
13	IV - 2 号墳 .....	123
14	その他の遺物 .....	149
第 4 章	広石古墳群をめぐる諸問題 .....	155
1	墳丘基底面および墳丘外部の土塁について .....	155
2	広石古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討 .....	157
3	福岡平野を中心とした古代製鉄について .....	173

4	福岡市平野を中心に出土した鉱滓の分析	195
第 5 章	総 括	219
1	古墳の立地と石室の方位	219
2	横穴式石室の平面図形について	221
3	石積み技法について	231
4	出土遺物について	234
5	古墳群の形成過程	240

## 図版目次

本文対照頁

<b>PL. 1</b>	広石古墳群周辺航空写真（国土地理院）	2
<b>PL. 2</b>	広石古墳群遠景(1)航空写真（東から）	2
	（2）航空写真（北東から）	2
<b>PL. 3</b>	広石古墳群遠景(1)生の松原ゴルフ場より（東から）	2
	（2）I・II群航空写真（北から）	13
<b>PL. 4</b>	広石古墳群近景(1)II群全景航空写真（調査終了後）	49
	（2）III群全景航空写真（墳丘遺存面露出作業中）	87
<b>PL. 5</b>	I-1号墳 (1)調査前全景（南から）	13
	（2）墳丘遺存状況全景（南から）	17
<b>PL. 6</b>	I-1号墳 (1)遠景（東から）	13
	（2）遠景（東から）	13
<b>PL. 7</b>	I-1号墳 (1)墳丘遺存状況（南から）	17
	（2）墳丘除去後状況（南から）	13
<b>PL. 8</b>	I-1号墳 (1)石室左側壁體構築状況（東から）	18
	（2）掘り方と石室の関係（北から）	17
<b>PL. 9</b>	I-1号墳石室各部 (1)奥壁	18
	（2）前壁	18
<b>PL. 10</b>	I-1号墳遺物出土状況 (1)玄室・羨道（北から）	19
	（2）羨道後半部（玄室から）	19
<b>PL. 11</b>	I-1号墳遺物出土状況 (1)玄室・羨道後半部（東から）	19
	（2）羨道後半部（東から）	19
<b>PL. 12</b>	I-1号墳遺物出土状況 (1)羨道後半部（上から）	19
	（2）羨道後半部（玄室から）	19
	（3）羨道後半部（墓道から）	19
<b>PL. 13</b>	I-1号墳出土遺物 I (装身具・武器・不明鉄器)	21
<b>PL. 14</b>	I-1号墳出土遺物 II (須恵器)	25
<b>PL. 15</b>	I-1号墳出土遺物 III (須恵器)	27
<b>PL. 16</b>	I-1号墳出土遺物 IV (須恵器)	29
<b>PL. 17</b>	I-1号墳出土遺物 V (須恵器)	30
<b>PL. 18</b>	I-1号墳出土遺物 VI (須恵器)	32

<b>PL. 19</b>	I - 1号墳出土遺物VII (須恵器) .....	33
<b>PL. 20</b>	I - 1号墳出土遺物VIII (須恵器) .....	39
<b>PL. 21</b>	I - 1号墳出土遺物IX (須恵器) .....	41
<b>PL. 22</b>	I - 1号墳出土遺物X (須恵器・陶質土器) .....	42
<b>PL. 23</b>	I - 1号墳出土遺物XI (土師器) .....	42
<b>PL. 24</b>	II群調査前全景 (1)北から .....	49
	(2)南東から .....	49
<b>PL. 25</b>	II群全景 (北から) .....	49
<b>PL. 26</b>	II群全景 (1)墳丘遺存状況 (北から) .....	49
	(2)墳丘遺存状況 (北東から) .....	49
<b>PL. 27</b>	II - 1号墳 (1)調査前全景 (北西から) .....	50
	(2)墳丘遺存状況全景 (北西から) .....	51
<b>PL. 28</b>	II - 1号墳 (1)石室全景 (閉塞石・遺物検出状況・南から) .....	53
	(2)石室全景 (閉塞石除去後・南から) .....	53
<b>PL. 29</b>	II - 1号墳 (1)掘り方と石室 (西から) .....	53
	(2)掘り方と石室 (西から) .....	53
<b>PL. 30</b>	II - 1号墳 (1)掘り方と石室 (北から) .....	53
	(2)掘り方と石室 (東から) .....	53
<b>PL. 31</b>	II - 1号墳 (1)奥壁 .....	53
	(2)玄室・羨道後半部遺物出土状況 (上から) .....	55
<b>PL. 32</b>	II - 1号墳遺物出土状況 (1)羨道後半部 (玄室から) .....	55
	(2)羨道後半部 (上から) .....	55
<b>PL. 33</b>	II - 1号墳出土遺物 I (須恵器) .....	57
<b>PL. 34</b>	II - 1号墳出土遺物 II (須恵器) .....	58
<b>PL. 35</b>	II - 2号墳出土遺物 III (須恵器) .....	60
<b>PL. 36</b>	II - 1号墳出土遺物 IV (須恵器・土師器・武器・工具) .....	61
<b>PL. 37</b>	II - 2号墳 (1)調査前全景 (北から) .....	66
	(2)墳丘遺存状況全景 (北から) .....	67
<b>PL. 38</b>	II - 2号墳 (1)墳丘遺存状況 (西から) .....	67
	(2)墳丘遺存状況 (南から) .....	67
<b>PL. 39</b>	II - 2号墳石室各部 (1)奥壁 .....	69
	(2)前壁 .....	69
<b>PL. 40</b>	II - 2号墳遺物出土状況 (1)玄室・羨道後半部 (上から) .....	71
	(2)玄室 (上から) .....	71

<b>PL. 41</b>	II - 2号墳遺物出土状況 (1)玄室.....	71
	(2)玄室右袖隅角.....	69
	(3)鋤先.....	73
	(4)鉗.....	72
<b>PL. 42</b>	II - 2号墳出土埴物 I (装身具・武器・直刀・農工具) .....	73
<b>PL. 43</b>	II - 2号墳出土遺物 II (須恵器) .....	75
<b>PL. 44</b>	II - 2号墳出土遺物 III (須恵器) .....	77
<b>PL. 45</b>	II - 2号墳出土遺物 IV (須恵器) .....	78
<b>PL. 46</b>	II - 2号墳出土遺物 V (須恵器・土師器) .....	80
<b>PL. 47</b>	II - 2号墳出土遺物 VI (土師器) .....	82
<b>PL. 48</b>	II群土塚 (1)第1号土塚.....	86
	(2)第2号土塚.....	86
	(3)第3号土塚.....	86
<b>PL. 49</b>	III 群 (1)調査前全景 (東から) .....	87
	(2)調査前全景 (北から) .....	87
<b>PL. 50</b>	III群全景 (南から) .....	87
<b>PL. 51</b>	III群全景 (1)墳丘遺存状況 (西から) .....	87
	(2)墳丘遺存状況 (東から) .....	87
<b>PL. 52</b>	III - 1号墳 (1)調査前全景 (南から) .....	89
	(2)墳丘遺存状況全景 (南から) .....	90
<b>PL. 53</b>	III - 1号墳 (1)墳丘遺存状況 (北西から) .....	90
	(2)墳丘と花崗岩添頭との関係 (北から) .....	90
<b>PL. 54</b>	III - 1号墳 (1)墳丘除去後全景 (南から) .....	90
	(2)掘り方と石室 (西から) .....	90
<b>PL. 55</b>	III - 1号墳 (1)掘り方と石室 (南から) .....	90
	(2)掘り方と石室 (北から) .....	90
<b>PL. 56</b>	III - 1号墳石室各部 (1)奥壁 .....	92
	(2)袖石と櫛石 .....	92
<b>PL. 57</b>	III - 1号墳遺物出土状況 (1)葬道後半部 (玄室から) .....	94
	(2)葬道後半部 (上から) .....	94
<b>PL. 58</b>	III - 1号墳出土遺物 I (須恵器) .....	95
<b>PL. 59</b>	III - 1号墳出土遺物 II (須恵器) .....	97
<b>PL. 60</b>	III - 1号墳出土遺物 III (須恵器・土師器・紡錘車・鉢津) .....	99

<b>PL. 61</b>	III-2号墳 (1)調査前全景（南から） .....	104
	(2)墳丘遺存状況全景（南から） .....	105
<b>PL. 62</b>	III-2号墳 (1)墳丘遺存状況（西から） .....	105
	(2)墳丘遺存状況（北から） .....	105
<b>PL. 63</b>	III-2号墳 (1)墳丘除去後全景（南から） .....	106
	(2)地山整形と石室・掘り方との関係（北から） .....	106
<b>PL. 64</b>	III-2号墳 (1)奥壁 .....	107
	(2)遺物出土状況 .....	107
<b>PL. 65</b>	III-2号墳出土遺物（須恵器・土師器・鉄鎌） .....	109
<b>PL. 66</b>	III-3京墳 (1)調査前全景（南から） .....	111
	(2)石室検出状況（南から） .....	112
<b>PL. 67</b>	III-3号墳 (1)地山整形と石室の関係（南から） .....	112
	(2)地山整形と石室の関係（東から） .....	112
<b>PL. 68</b>	III-3号墳 (1)地山整形と石室の関係（北から） .....	113
	(2)石室（上から） .....	113
	(3)石室（南から） .....	113
	(4)石室（東から） .....	113
<b>PL. 69</b>	III-3号墳出土遺物I（須恵器） .....	117
<b>PL. 70</b>	III-3号墳出土遺物II（須恵器・装身具） .....	118
<b>PL. 71</b>	田群土塚 (1)第1号土塚 .....	121
	(2)第2号土塚 .....	121
<b>PL. 72</b>	IV-2号墳 (1)調査前全景（北から） .....	123
	(2)調査前全景（東から） .....	123
<b>PL. 73</b>	IV-2号墳 (1)全景（手前は田群1・2号墳・北から） .....	123
	(2)墳丘遺存状況（西から） .....	123
<b>PL. 74</b>	IV-2号墳 (1)墳丘除去後全景（北から） .....	126
	(2)墳丘除去後全景（北西から） .....	126
<b>PL. 75</b>	IV-2号墳 (1)墳丘基底面と列石（西から） .....	126
	(2)石室と掘り方（西から） .....	126
<b>PL. 76</b>	IV-2号墳 (1)石室・遺物検出状況（西から） .....	130
	(2)石室・遺物検出状況（東から） .....	130
<b>PL. 77</b>	IV-2号墳 (1)掘り方と石室（西から） .....	128
	(2)掘り方と石室（東から） .....	128

<b>PL. 78</b>	N - 2号墳石室各部 (1)奥壁.....	128
	(2)前壁.....	128
<b>PL. 79</b>	N - 2号墳遺物出土状況 (1)羨道・玄室(羨道から).....	130
	(2)玄室・羨道(玄室から).....	130
<b>PL. 80</b>	N - 2号墳遺物出土状況 (1)羨道後半部(上から).....	130
	(2)羨道後半部(玄室から).....	130
<b>PL. 81</b>	N - 2号墳出土遺物 I (装身具・紡錘車・武器・馬具).....	133
<b>PL. 82</b>	N - 2号墳出土遺物 II (須恵器).....	135
<b>PL. 83</b>	N - 2号墳出土遺物 III (須恵器).....	137
<b>PL. 84</b>	N - 2号墳出土遺物 IV (須恵器).....	141
<b>PL. 85</b>	N - 2号墳出土遺物 V (須恵器).....	143
<b>PL. 86</b>	N - 2号墳出土遺物 VI (須恵器・土師器).....	145
<b>PL. 87</b>	縄文時代遺構・遺物 (1)III群溝状遺構.....	149
	(2)溝状遺構出土灰白式土器.....	149
	(3)広石古墳群出土石器.....	149
<b>PL. 88</b>	縄文時代遺物(石器・土器).....	149
<b>PL. 89</b>	鉱滓の顕微鏡組織 I .....	196
<b>PL. 90</b>	鉱滓の顕微鏡組織 II .....	197
<b>PL. 91</b>	鉱滓の顕微鏡組織 III .....	197
<b>PL. 92</b>	鉱滓の顕微鏡組織 IV .....	198
<b>PL. 93</b>	鉱滓の顕微鏡組織 V .....	199
<b>PL. 94</b>	鉱滓の顕微鏡組織 VI .....	199
<b>PL. 95</b>	鉱滓の顕微鏡組織 VII .....	200
<b>PL. 96</b>	鉱滓の顕微鏡組織 VIII .....	201
<b>PL. 97</b>	鉱滓の顕微鏡組織 IX .....	202
<b>PL. 98</b>	鉱滓の顕微鏡組織 X .....	202
<b>PL. 99</b>	鉱滓の顕微鏡組織 XI .....	203
<b>PL. 100</b>	鉱滓の顕微鏡組織 XII .....	204
<b>PL. 101</b>	鉄器の顕微鏡組織 .....	205
<b>PL. 102</b>	下山門敷町遺跡出土鉱(顕微鏡試料No.34)のE.P.M.Aによる分析.....	201
<b>PL. 103</b>	上和白遺跡出土鉱(顕微鏡試料No.43)のE.P.M.Aによる分析.....	204
<b>PL. 104</b>	.....	206

## 挿 図 目 次

	本文頁	
<b>Fig. 1</b>	周辺遺跡分布図.....	4
<b>Fig. 2</b>	旧志岐村における古墳時代遺跡の分布.....	6
<b>Fig. 3</b>	古墳各部の名称.....	8
<b>Fig. 4</b>	広石古墳群分布図.....	10
<b>Fig. 5</b>	I - 1号墳の立地.....	12
<b>Fig. 6</b>	I - 1号墳墳丘測量図.....	14
<b>Fig. 7</b>	I - 1号墳墳丘遺存図.....	15
<b>Fig. 8</b>	I - 1号掘り方および地山整形.....	16
<b>Fig. 9</b>	I - 1号墳閉塞部実測図.....	18
<b>Fig. 10</b>	I - 1号墳石室基底面実測図.....	19
<b>Fig. 11</b>	I - 1号墳遺物出土状況図.....	20
<b>Fig. 12</b>	I - 1号墳遺物実測図 I .....	21
<b>Fig. 13</b>	I - 1号墳遺物実測図 II .....	23
<b>Fig. 14</b>	I - 1号墳遺物実測図 III .....	25
<b>Fig. 15</b>	I - 1号墳遺物実測図 IV .....	27
<b>Fig. 16</b>	I - 1号墳遺物実測図 V .....	29
<b>Fig. 17</b>	I - 1号墳遺物実測図 VI .....	30
<b>Fig. 18</b>	I - 1号墳遺物実測図 VII .....	32
<b>Fig. 19</b>	I - 1号墳遺物実測図 VIII .....	33
<b>Fig. 20</b>	I - 1号墳遺物実測図 IX .....	35
<b>Fig. 21</b>	I - 1号墳遺物実測図 X .....	36
<b>Fig. 22</b>	I - 1号墳遺物実測図 XI .....	37
<b>Fig. 23</b>	I - 1号墳遺物実測図 XII .....	39
<b>Fig. 24</b>	I - 1号墳遺物実測図 XIII .....	41
<b>Fig. 25</b>	I - 1号墳遺物実測図 XIV .....	42
<b>Fig. 26</b>	II群全体測量図.....	48
<b>Fig. 27</b>	II群発掘風景写真.....	49
<b>Fig. 28</b>	II - 1号墳墳丘測量図.....	50
<b>Fig. 29</b>	II - 1号墳の掘り方および地山整形.....	52
<b>Fig. 30</b>	II - 1号墳閉塞部実測図.....	54

<b>Fig. 31</b>	II - 1号墳石室基底面実測図	55
<b>Fig. 32</b>	II - 1号墳遺物出土状況図	56
<b>Fig. 33</b>	II - 1号墳遺物実測図 I	57
<b>Fig. 34</b>	II - 1号墳遺物実測図 II	58
<b>Fig. 35</b>	II - 1号墳遺物実測図 III	60
<b>Fig. 36</b>	II - 1号墳遺物実測図 IV	61
<b>Fig. 37</b>	II - 1号墳遺物実測図 V	62
<b>Fig. 38</b>	II - 1号墳遺物実測図 VI	63
<b>Fig. 39</b>	II - 2号墳墳丘測量図	66
<b>Fig. 40</b>	II - 2号墳掘り方および地山整形	68
<b>Fig. 41</b>	II - 2号墳石室基底面実測図	70
<b>Fig. 42</b>	II - 2号墳遺物出土状況図	71
<b>Fig. 43</b>	II - 2号墳遺物実測図 I	72
<b>Fig. 44</b>	II - 2号墳遺物実測図 II	73
<b>Fig. 45</b>	II - 2号墳遺物実測図 III	75
<b>Fig. 46</b>	II - 2号墳遺物実測図 IV	77
<b>Fig. 47</b>	II - 2号墳遺物実測図 V	78
<b>Fig. 48</b>	II - 2号墳遺物実測図 VI	80
<b>Fig. 49</b>	II - 2号墳遺物実測図 VII	折り込み
<b>Fig. 50</b>	II - 2号墳遺物実測図 VIII	82
<b>Fig. 51</b>	II群の土塁実測図	86
<b>Fig. 52</b>	III群中における花崗岩器頭部	87
<b>Fig. 53</b>	III群全体測量図	88
<b>Fig. 54</b>	III - 1号墳墳丘測量図	89
<b>Fig. 55</b>	III - 1号墳掘り方および地山整形	91
<b>Fig. 56</b>	III - 1号墳閉塞部実測図	92
<b>Fig. 57</b>	III - 1号墳石室基底面実測図	93
<b>Fig. 58</b>	III - 1号墳遺物出土状況図	94
<b>Fig. 59</b>	III - 1号墳遺物実測図 I	95
<b>Fig. 60</b>	III - 1号墳遺物実測図 II	97
<b>Fig. 61</b>	III - 1号墳遺物実測図 III	99
<b>Fig. 62</b>	III - 1号墳遺物実測図 IV	100
<b>Fig. 63</b>	III - 1号墳東側土塁遺物実測図	103

<b>Fig. 64</b>	III - 2号墳墳丘測量図	104
<b>Fig. 65</b>	III - 2号墳掘り方および地山整形	106
<b>Fig. 66</b>	III - 2号墳遺物実測図 I	107
<b>Fig. 67</b>	III - 2号墳遺物実測図 II	109
<b>Fig. 68</b>	III - 3号墳墳丘測量図	111
<b>Fig. 69</b>	III - 3号墳掘り方および地山整形	112
<b>Fig. 70</b>	III - 3号墳墳丘断面図	113
<b>Fig. 71</b>	III - 3号墳石室実測図	114
<b>Fig. 72</b>	耳環	115
<b>Fig. 73</b>	III - 3号墳遺物実測図 III	117
<b>Fig. 74</b>	III - 3号墳遺物実測図 III	118
<b>Fig. 75</b>	III - 3号墳遺物実測図 IV	119
<b>Fig. 76</b>	III群土塁及び溝状遺構実測図	121
<b>Fig. 77</b>	IV - 2号墳墳丘測量図	124
<b>Fig. 78</b>	IV - 2号墳墳丘遺存図	125
<b>Fig. 79</b>	IV - 2号墳掘り方および地山整形	127
<b>Fig. 80</b>	IV - 2号墳閉塞部実測図	128
<b>Fig. 81</b>	IV - 2号墳石室基底面実測図	129
<b>Fig. 82</b>	IV - 2号墳遺物出土状況図	130
<b>Fig. 83</b>	IV - 2号墳遺物実測図 I	133
<b>Fig. 84</b>	IV - 2号墳遺物実測図 II	134
<b>Fig. 85</b>	IV - 2号墳遺物実測図 III	135
<b>Fig. 86</b>	IV - 2号墳遺物実測図 IV	137
<b>Fig. 87</b>	IV - 2号墳遺物実測図 V	139
<b>Fig. 88</b>	IV - 2号墳遺物実測図 VI	141
<b>Fig. 89</b>	IV - 2号墳遺物実測図 VII	143
<b>Fig. 90</b>	IV - 2号墳遺物実測図 VIII	144
<b>Fig. 91</b>	IV - 2号墳遺物実測図 IX	折り込み
<b>Fig. 92</b>	IV - 2号墳遺物実測図 X	145
<b>Fig. 93</b>	縄文式土器実測図 I	150
<b>Fig. 94</b>	縄文式土器実測図 II・石器実測図	151
<b>Fig. 95</b>	弥生式土器・石器実測図	153
<b>Fig. 96</b>	広右 I - 1号墳出土須恵器のヘラ記号	159

Fig. 97	広石古墳群の杯蓋以外の須恵器のヘラ記号	160
Fig. 98	広石II-1・2号墳出土須恵器のヘラ記号	162
Fig. 99	広石III-1・2・3、IV-2号墳出土須恵器のヘラ記号	163
Fig. 100	福岡市周辺鉄津出土遺跡分布図I	175
Fig. 101	福岡市周辺鉄津出土遺跡分布図II	176
Fig. 102	相原3号墳出土ルツボ状遺物実測図	206
Fig. 103	FeO-Anorthite-SiO <sub>2</sub> 系状態図	212
Fig. 104	福岡県下の地質略図と砂鉄、磁鐵鉱、硫化鉄鉱の成分	214
Fig. 105	各古墳石室平面図	221
Fig. 106	III-2号墳石室の方眼による操作結果	222
Fig. 107	II-2、IV-2、I-1号墳石室の方眼による操作結果	225
Fig. 108	III-1、II-1号墳石室の方眼による操作結果	228
Fig. 109	蓋、杯の分類	238
Fig. 110	古墳群の形成過程	242
Fig. 111	古墳群と墓道想定図	243

## 付 図 目 次

Fig. ①	I-1号墳填丘断面図	13
Fig. ②	I-1号墳石室実測図	17
Fig. ③	II群(1・2号墳)填丘遺存図	49
Fig. ④	II-1号墳填丘断面図	51
Fig. ⑤	II-1号墳石室実測図	53
Fig. ⑥	II-2号墳填丘断面図	67
Fig. ⑦	II-2号墳石室実測図	69
Fig. ⑧	III群(1~3号墳)填丘遺存図	87
Fig. ⑨	III-1号墳填丘断面図	90
Fig. ⑩	III-1号墳石室実測図	92
Fig. ⑪	III-2号墳填丘断面図	105
Fig. ⑫	III-2号墳石室実測図	106
Fig. ⑬	IV-2号墳填丘断面図	123
Fig. ⑭	IV-2号墳石室実測図	126
Fig. ⑮	広石古墳群石積み状況一覧図	231

## 付 表 目 次

	本文頁
<b>Tab. 1</b> I - 1 号墳出土玉類計測表	43
<b>Tab. 2</b> I - 1 号墳出土土器計測表	44
<b>Tab. 3</b> II - 1 号墳出土土器計測表	64
<b>Tab. 4</b> II - 2 号墳出土玉類計測表	74
<b>Tab. 5</b> II - 2 号墳出土土器計測表	84
<b>Tab. 6</b> III - 1 号墳出土上器計測表	101
<b>Tab. 7</b> III - 1 号墳東側土塚出土土器計測表	102
<b>Tab. 8</b> III - 2 号墳出土土器計測表	110
<b>Tab. 9</b> III - 3 号墳出土土器計測表	120
<b>Tab. 10</b> IV - 2 号墳出土土器計測表	146
<b>Tab. 11</b> 広石古墳群における須恵器とヘラ記号の割合	165
<b>Tab. 12</b> 周辺古墳における須恵器とヘラ記号の割合	167
<b>Tab. 13</b> 片江辻遺跡における須恵器とヘラ記号の割合	168
<b>Tab. 14</b> 福岡市周辺鉄津出土遺跡地名表	177
<b>Tab. 15</b> 製鉄関連遺跡の年代	186
<b>Tab. 16</b> 鉄津供獻古墳一覧表	187
<b>Tab. 17</b> 福岡市周辺古墳群調査状況と鉄津供獻古墳	188
<b>Tab. 18</b> 鉄津供獻古墳の比率	189
<b>Tab. 19</b> 鉄津のX線回折結果	203
<b>Tab. 20</b> 鉄器の分光分析結果	205
<b>Tab. 21</b> 各種粘土の性状調査結果	207
<b>Tab. 22</b> 木炭の組成	208
<b>Tab. 23</b> 鉱物化学組成と推定年代	209
<b>Tab. 24</b> 製鍊陣と鍛冶陣の区別	210
<b>Tab. 25</b> 鉄津の製鍊過程に於ける成分変動	211
<b>Tab. 26</b> 供試試料の履歴及び調査項目（その1）	・折り込み
<b>Tab. 27</b> 供試試料の履歴及び調査項目（その2）	・折り込み
<b>Tab. 28</b> 製鍊陣・鍛冶陣・鍛打陣の化学分析結果	・折り込み
<b>Tab. 29</b> 広石古墳群各古墳の規模一覧	・折り込み
<b>Tab. 30</b> 広石古墳群各古墳石室計測表	220
<b>Tab. 31</b> 広石古墳群出土遺物一覧表	235
<b>Tab. 32</b> 盖・杯の分類対称表	239

# 第1章 序 説

## 1 はじめに

昭和50年、本調査の契機となった市立高等学校建設計画が具体化し、諸々の事情により最終的予定地として福岡市西区拾六町字広石の広範な地域が決定され、福岡市教育委員会用地課より文化課に対して埋蔵文化財の有無の確認の依頼があった。これを受けた文化課では、数回にわたって現地踏査を実施し、同予定地内に相当数の古墳が分布することを確認した。文化課では古墳の確認に伴い、用地課と協議を行い、古墳群の保存に努めたが、予定地の変更は不可能であり、また予定地内に存在する古墳はその立地が丘陵尾根上、丘陵斜面、谷底と多彩であるため造成工事によりすべてが埋没してしまう結果となり現状保存は困難であるとの結論に達し、造成工事前に発掘調査を実施し記録にとどめることとなった。

発掘調査は昭和50年8月25日～昭和51年3月25日の7ヶ月にわたって実施した。予定地内および近接して計10基の古墳が存在したが調査したのは予定地内の6基と一部墳丘がかかる1基の計7基で、工事に直接関係がなく影響をうけない3基については現状のままにして、手をつけなかった。調査にあたっては、教育委員会用地課をはじめ地元各氏より多くなる協力をたまわった記して感謝の意を表したい。

### 調査関係者

福岡市教育委員会

教育長	古村澄一（前任）
	戸田成一（現任）
施設部長	石藏公一郎
用地課長	久我公一郎（前任）
	徳田信久（現任）
主査	柳良夫
係員	大谷征夫
社会教育部長	青木崇
主任幹	志鶴幸弘
文化課長	清水義彦
庶務会計	三宅安吉
埋蔵文化財係長	木村義一
発掘調査	山崎純男

## 第1章 序 説

柳沢一男

補 助 員 浜石哲也、小林義彦(明治大学)、東潮、東中川忠美、小木野孝司、真玉秀樹、藤好史郎、宮内克己(九州大学)、奈良崎和典(同志社大学)、谷口俊治(平安博物館)、疋山佳明、安河内満、谷芳樹、黒田裕司、若丹省吾、奥村俊久(別府大学)

整 理 補 助 山中香恵里、花田早苗、山口克子、住吉鈴子  
写 真 宮島成昭

### 地元協力者

山下才一郎、持田久、米島芳樹、米島しず、米島かよ、藤みよ、曾根田すえ、原美津代、原みよ子、原とし子、高宮久子、高宮のぶ江、真鍋ひで子、米島ハツネ、米島トシ江、藤君江、藤きみえ、高田ひさの、森永ちか子、原まつこ、浅田貞子、山田まゆみ、能美須賀子、小宮和子、西原春子、藤タケ、西原利枝、杉村文子、藤美智、真鍋千枝子、清水文化、下田安枝、別府秀子、財津良子、清水君枝(故人)

## 2 古墳群の位置 (Fig. 1)

福岡市の平野部は大きくは東の福岡平野と西の早良平野とに分断される。早良平野は自然・歴史上一つの完結した単位をなして、政治的にも古くよりまとまりのある地域であった。この早良平野を囲む油山、脊振山系の派生支脈である飯盛山、叶岳、長垂山の東山麓には数100基におよぶ後期群集墳の形成がみられる。これらの古墳群は一つの文化圏の中において歴史的に形成されたものとして「サワラ古墳群<sup>図示</sup>」の名称が与えられ、主に自然地形より①愛宕山、小戸山支群、②拾六町支群、③羽根戸、野方支群、④長石・乙石・森原支群、⑤重留支群、⑥駄ヶ原支群、⑦片江・七隈支群の7つの支群に分けられ、これら支群が後の郷と一致するという指摘がある。本古墳群はこれら支群の中の拾六町支群の中に包括される。

本古墳群は、早良平野の北西部、長垂山と叶岳を分かつ大きな谷の奥部に位置し、その立地は叶岳の山麓部が開折されて分岐し、多くの低丘陵形成がみられる部分に位置し、その立地は丘陵尾根上や丘陵斜面、谷と多彩な様相をしめしている。本古墳群の占地する谷は、早良と糸島を結ぶ重要なルートであったことは、後の律令時代の官道が額田駅(現在の野方とするのが通説)から広石を通じ、怡土群比菩駅に通じていたと想定されるところよりもうなづけ、広石古墳群が交通路にそって形成されていることは注目される。

註1 亀井明彦「古墳時代の早良平野」『宮の前遺跡(A~D地点)』、福岡県労働者住宅生活協同組合 1971年

### 3 広石古墳群とその周辺

早良平野における歴史的環境はすでに他の報告書において言い尽くされた感があるので、ここで広石古墳群をとりまく極限られた地域、すなわち福岡市に合併前の早良郡宅岐村の範囲に限定して本古墳群の歴史的位置をみてみたい。宅岐村は自然地形的に早良平野の中央部を貫流する室見川に東を限られ、西に長垂山、叶岳が横たわり、南は日向川によって限られ、北は博多湾に面する地域で、下山門、拾六町、野方、戸切、橋本、福重、石丸の大字を含む。大正12年刊行の『早良郡誌』によれば、同地域の田地は517町3反3歩で、畠地は58町8反2畝29歩で、1戸あたり田地1町1反5畝29歩、畠地1反3畝5歩となり早良郡の中では原、内野、田隈村とならび農業依存度が高く、1戸あたりの田畠も他の町村に比較し広い。またこれらの田畠の灌漑水利は室見川の橋本に築いた堰より橋本、福重、石丸が潤され、戸切地内の溜池は十郎川上流以東を、拾六町、下山門の12ヶ所の溜池は十郎川以西を、野方の溜池は野方及び拾六町の一部を灌漑している。この宅岐村の地域は和名抄にいうところの、額田郷に比定される地域で、地名として野方にその名残りがみられる。早良地域の中で最も調査の進展が著しい地域であると共に、最もその変貌が激しい地域である。古くは早良炭鉱による地盤沈下の埋土に伴う採土や、牛ノ松原ゴルフ場建設に伴い多くの遺跡が消滅し、最近では宅地の急増により、造成化が進み遺跡の発見、調査が最も多い地域である。最近の発掘調査による成果によって同地域の歴史的環境をながめてみよう。

繩文時代の遺跡は散発的ではあるが遺物の発見によって知ることができる。しかし、今だその実態は把握できない。この地域に積極的な人間の働きかけが始まるのは弥生時代前中期である。中期にいたってその面的拡大がみられ、後期に継承される。その生産活動は現代と同様に農業に対する依存度が高かったと考えられ、湯納遺跡からは多量の木製農耕具の出土がある。しかしその生産地としての可耕地は湯納遺跡の発掘結果や、他遺跡の分布が丘陵上から麓にかけて位置し、平野部の般町遺跡が自然堤防上にその立地を求めていることからすれば、かなり限定されていたことが想定される。しかし般町遺跡出土の3本の中広銅矛にみられるように同地域内にも青銅器を保有しするほどの力の蓄積があったと考えられる。後期にその力の具体化したものとして、宮ノ前C地点の墳墓があげられる。この墳墓は大形の箱式石棺を内部主体として墳丘を有する原始古墳としてとらえられる。その周囲には箱式石棺3基が存在し、同地域を代表する突出個人を有する特定近親者集団墓とみることができる。内部主体の人形の箱式石棺内は盗擾を受けたが、管玉・ガラス小玉の玉類の副葬がみられた。やや後出する野方遺跡の第1号石棺墓からは後漢の腰帶鏡片1枚、刀子1点、玉類、第3号石棺墓からは後漢の内行花文鏡、玉類等の副葬品が出土している。宮ノ前遺跡、野方遺跡の墳墓の関係は明白でないが、同地域内における富の蓄積とそれに伴う政治的変動を看取することができる。

第1章 序 説

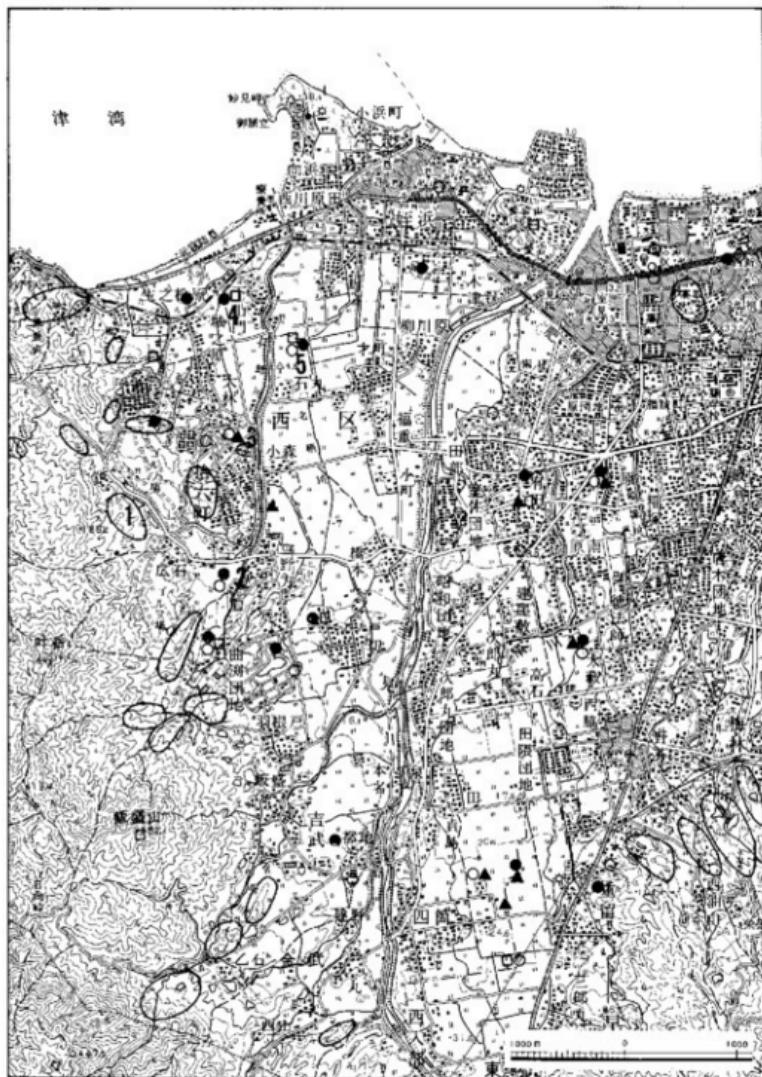


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1. 幌石古墳群 2. 野方中原遺跡 3. 湖納遺跡 4. 下山門遺跡 5. 敷的遺跡)

弥生時代末～古墳時代初頭にかけての集落は宮ノ前・湯納・野方遺跡にみることができる。特に野方遺跡では試掘調査で37軒、第一次調査で57軒の計94軒の住居址が確認されているが、調査範囲は遺跡の3割程度にすぎずその数はさらに増加することが想定され、弥生末～古墳時代初期の集落は前代よりさらにその内部的充実がみられる。またこの時期の生産活動は農業に加えて海岸部、あるいは河川における漁業活動があったことが知られる。野方・宮ノ前・湯納遺跡からは滑石製の漁網鍊が出土し、野方遺跡からは若干ではあるが、サメ・タイ類等の魚骨の出土がある。しかし、この時期の漁業活動は、野方・湯納遺跡で滑石製の漁網鍊とともにその未製品が出土しているように、石錐の製作及び漁業活動が集落ごとに行なわれたことが知られ、また漁網鍊出土遺跡の立地条件からしても漁業活動が組織的なものでなく、農業生産の副次的活動として位置づけられる。しかし、古墳時代後期にいたっては、下山門・大又遺跡のように海岸砂丘の後背地や、海岸部近くに立地する遺跡が出現し漁業活動の進展を示している。特に下山門遺跡では土製・滑石製の漁網鍊に加えてタコ壺が多量に出土し、大又遺跡でもタコ壺が存在する。<sup>25</sup> 下山門遺跡では木製農耕具の出土もあるが、遺跡の立地・発掘所見からすれば可耕地は極めて限られた狭い地域であったことが推測されその主生産活動は漁業に依存していたと想定され、漁業民としての専業化がうかがえる。このことは、とりもなおさず内陸平野部における農業生産力の増大と安定を前提条件としていることはいうまでもない。そして、この農業生産力の増大は鉄製農具の普及によるることは先学の指摘のとおりである。

こうした生産活動の発展の中で同地域の墳墓は前述した宮ノ前遺跡あるいは野方遺跡以後、早良平野を統括した首長墓と考えられる五島山古墳を見るのみで、以後、後期古墳の出現時までの期間に相当する古墳はみられない。このことは早良平野全体においても一般的傾向である。後期古墳になるといわゆる群集墳の形成がみられる。今回調査した広石古墳群もそれらの一部をなすことはいうまでもない。古墳群は平野の西側山麓に連なり、北（海）側より長垂古墳群<sup>26</sup>（6基）草場古墳群<sup>27</sup>（5基）草刈古墳群<sup>28</sup>（6基）高崎古墳群<sup>29</sup>（5基）コノリ古墳群<sup>30</sup>（8基）広石古墳群<sup>31</sup>（13基）小松ヶ丘古墳群<sup>32</sup>（17基）羽根戸原古墳群<sup>33</sup>（53基）の計113基の存在が知られているが、中には存在のみが知られ、すでに消滅した古墳も多い。またゴルフ場等によって存在もわからず消滅した古墳を入れればさらにその数は増加する。このような多数の古墳の築造は前述したように単に農業生産力の増大と安定に起因するものでないことは、広大な可耕地を有しながらも群集墳の形成のない地域が存在することからも肯認できよう。では古墳築造における経済的背景としてどのような生産活動があげられるであろうか。今回調査した広石古墳群のⅢ-1号墳とした古墳の石室内および漢道より出土した鉄滓はそれを暗示するものである。

早良・今宿には鉄滓を出土する遺跡が多く筑前に於ける製鐵遺跡のひとつの中心をなしている。若狭地区内には20ヶ所余の鉄滓出土地が確認されていて、長垂山を介した今宿と共に最も

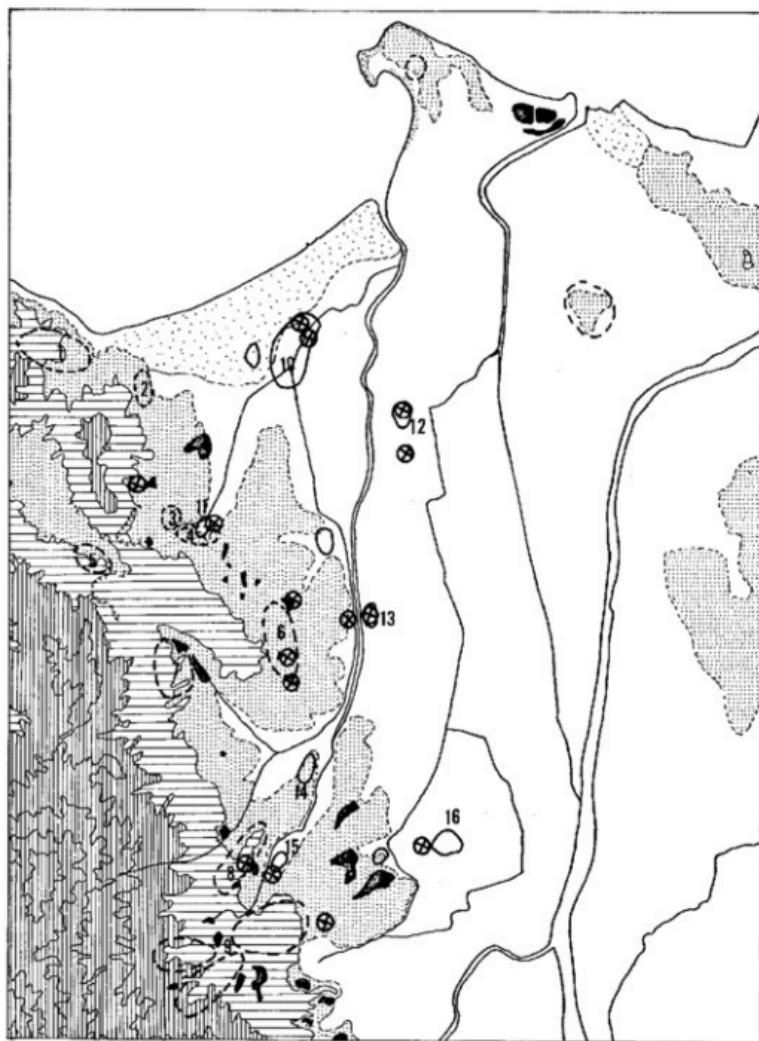


Fig. 2 Iwaiwaeguchiにおける古墳時代遺跡の分布と製鉄遺跡(◎)

1. 長垂古墳群
2. 草場古墳群
3. 草刈古墳群
4. 高崎古墳群
5. (広石古墳群)
6. コノリ古墳群
7. 広石古墳群(本報告分)
8. 小松ヶ丘古墳群
9. 羽根戸原古墳群
10. 下山門遺跡
11. 大又遺跡
12. 鶴町遺跡
13. 牟多田遺跡
14. 野方中原遺跡
15. 野力城原遺跡
16. 戸切遺跡

濃密な分布を示している。最近まで鉄津の出土のみで、鉄生産活動の年代をはっきりと把握することができなかつたが、最近の調査により序々に判明しつつある。コノリ遺跡において調査された数基の製鉄炉は未報告であるためにその詳細は明らかでないが、第Ⅳ期の須恵器が伴い製鉄遺跡の一部が古墳期までさかのはることが判明した。このことは、鉄生産が群集墳の築造にかかわるひとつの基盤であったことを証明するものであるが、群集墳の形成の解明は個別の古墳の分析と共に、集落地・生産地の解明・分析とその両者間の関係をもとめる中で進展をみるものであり、今後の大きな課題として残されている。

古墳時代以降、壱岐地区内における鉄生産はさらなる進展をみせる。敷町遺跡では奈良～平安時代、下山門遺跡では平安時代の製鉄址が確認されている。敷町遺跡では製鉄遺構と共にそれらに関連あると考えられる握立柱の建物12棟が調査され、出土遺物としては製鉄関係・生活什器類の他、墨書き土器、綠釉陶器がある。下山門遺跡では製鉄遺構に伴い越州窯産陶磁器と平城京出土品と同じ白磁器・布目瓦の出土がある。敷町遺跡の建物群は規模も大きく、その性格は官衙的要素が強い。また下山門遺跡出土の陶磁器は、その需要層は寺院・官衙が多く、九州においては官人層の私物および富豪層であるとの指摘があり<sup>4) 5)</sup>、敷町・下山門両遺跡の鉄生産の性格の一端を示している。延喜式卷24・主計寮にみられる筑前国の中納品の中に銀・鉄が含まれていることと符合するものではなかろうか。

敷町・下山門遺跡の西に位置する城ノ原廃寺はすでにその破壊が著しく伽藍配置は判明しないが、瓦類より奈良～平安時代にかけて存続したことが推定され、早良平野に他に寺院址が確認されていない現在、その性格は私守としてよりは早良の郡守としての可能性が強く、敷町・下山門遺跡の性格とあわせ、また、額田駅が野方に比定されることなどからして、この地域が古代において早良の中で最も有力な地域であったことが想定される。また、鴻臚館に併置された警固所の瓦もまたこの地域の斜ヶ浦丘陵地においてやかれたものである。

以上、壱岐地区的歴史的環境の概略をのべたが、文化財の破壊が著しい昨今、今後最も注意を要する地域のひとつであることはいうまでもなかろう。

(山崎)

註1 下條信行他「吉ノ前遺跡(A-D地点)」福岡県労働者生活協同組合 1971年 をはじめに10編あまりの報告書が刊行されていて、それらの中において早良平野の歴史的環境はのべられている。

2 早良郡役所「早良郡誌」1923年

3 末原和彦他「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第4集 福岡県教育委員会 1976年

4 註1書と同

5 柳田純孝他「野方中原遺跡調査報告」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集) 1974年

6 山崎純男編「下山門遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集) 1973年

7 別島邦弘「大又遺跡」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 福岡県教育委員会 1970年

8 郡出北志「農具鉄器化の二つの面相」考古学研究第13巻 第3号 1967年

- 註9 亀井明徳「福岡市五島古墳と発見遺物の考察」九州考古学38 1970年
- 10 山崎純男「京ノ段道路」段谷地所株式会社 1976年
- 11 三本文雄氏により発掘された。報告書未刊
- 12 浜田信也「高崎古墳群」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970年  
栗原和彦、上野精志「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第3集 1973年
- 13 日大により発掘された。報告書未刊
- 14 本報告(7基分)
- 15 鈴木重治氏により発掘された。報告書未刊
- 16 亀井明徳「日本出土の越州唐陶器の諸問題」『研究論集』1 1975年
- 17 玉泉大塚「壇岐村城ノ原庭寺址」(福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書 第6集) 1931年

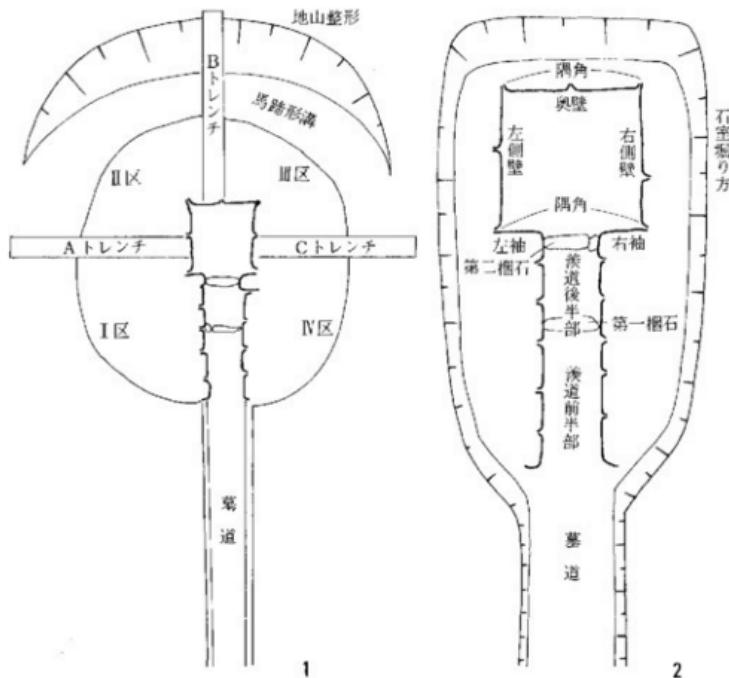


Fig. 3 古墳各部の名称

## 第2章 調査の概要

### 1 調査の方針と古墳各部の名称

#### 1) 調査の方針

市立高等学校用地造成工事によって破壊される広石古墳群の7基の調査にあたって、我々は次のような調査方針をたて実施することとした。

- ① 個別の古墳の調査にあたっては、古墳築造に関する全面積を調査する。（但し、石材採取・運搬ルート等は不明であるので、除外せざるをえない。）
- ② したがって、古墳築造に伴う地山整形は全面にわたって、また、石室掘り方は墳丘盛土をすべて除去し露出して観察を行う。
- ③ 古墳築造に関する他の遺構の存在（祭祀、墓道等）を考慮して、最大限広範囲を調査する。

等であった。調査は当初の方針をほぼ満足させることができた。②についてはII-2号墳の盛土除去を安全性の上から断念したが、他の6基の古墳はすべて盛土の除去まで実施し、古墳築造に伴う地山整形等については、完全な調査をなしえた。③については、墓道が当初予想していたよりも保存状態が悪く、谷の流路に破壊され充分な成果はあげえなかつたが、各古墳に伴うと考えられる土塙（火をうけて壁は赤変し、内部には炭が充満する。）を検出し、古墳築造前あるいは築造時における祭祀形態を把握することができた。

#### 2) 古墳各部の名称

各個別の古墳の調査方法も統一することにし、Fig.3-1のようにトレンチを設定し地区名を付した。また、本文叙述にあたっては石室各部呼称をFig.3-2のように統一して使用した。

### 2 古墳の呼称

古墳群は山麓が開拓されて分枝した低丘陵の尾根から斜面にかけて分布していたが、そのあり方は1ヶ所に集中することなく、1基～3基がひとまとまりとなって尾根上・斜面に散在するあり方を示していた。我々は調査にあたって、1～3基のひとまとまりを古墳群形成の最小単位と考え、また未発見古墳の出現があつても混乱がないように、それぞれ北よりI群～VI群の呼称を与えた。調査中に新たにII群とIII群の尾根上に古墳を発見したが、この古墳は尾根先端に立

第2章 調査の概要

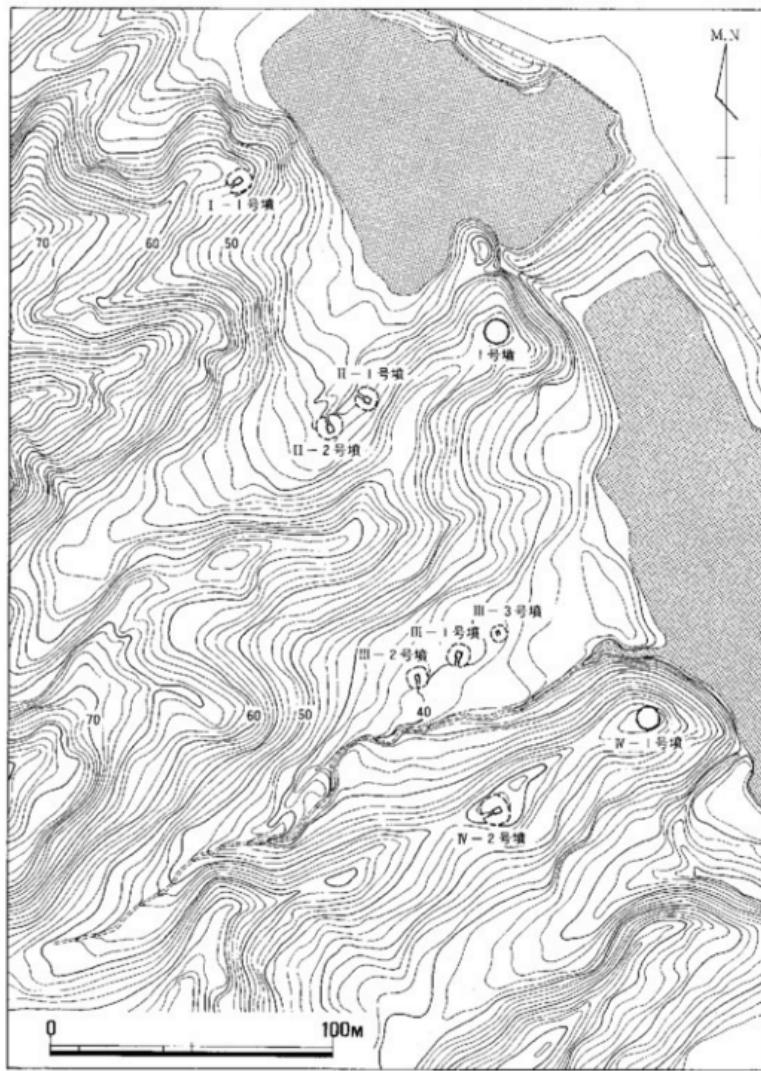


Fig. 4 広石古墳群分布図 ( $\frac{1}{400}$ )

## 古墳の呼称

地し、谷をはさんで I 群とむかい合い I 群との関連が考慮されたので I 群とした。この小群を整理すると次のようになる。

群	号 数	立 地
I 群	1 号墳	丘陵尾根上
I' 群	(1 号墳)	丘陵尾根上
II 群	1 号墳、2 号墳	丘陵斜面
III 群	1 号墳、2 号墳、3 号墳	谷底・瀬高地
IV 群	(1 号墳)、2 号墳	丘陵尾根上

( ) は未掲

### 3 調査の概要

調査は昭和50年8月～昭和51年3月までの7ヶ月間にわたって実施した。調査した古墳は7基で、残る2基は工事に直接関係なく現状のままとした。以下、調査した古墳について概略を列記する。

I - 1 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室天井部と右側壁の大部分を失っている。副葬品としては約100点の須恵器、土師器、勾玉・丸玉・小玉・金環等の装身具類、鉄鏃、刀子がみられた。容器類の中に存在した朝鮮陶質土器の出土は注目される。

II - 1 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室は天井部を失う。副葬品として約30点の須恵器、土師器、鉄鏃、刀子がある。

II - 2 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室は天井部と羨道の一部を失う。副葬品として約50点の須恵器、土師器、U字形鋏先・鉄鏃、直刀・鉄劍・銀環・玉類がある。羨道には須恵器、土師器の供獻がみられた。

III - 1 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室は天井部を失う。副葬品として約40点の土師器類と刀子・鉄鏃、紡錘車・鉄滓が存在した。出土遺物の中では玄室・羨道前半部より出土した鉄滓が注目される。

III - 2 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室羨道部と天井部を失う。副葬品として須恵器・鉄鏃・玉類があるが、その数は少い。墳裾に土師高杯の供獻がみられる。

III - 3 号墳 小石室(堅穴式か?)を内部主体とする小円墳で、副葬品として金環がある。墳裾溝より須恵器の出土がある。

IV - 2 号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳で、副葬品として須恵器・土師器・馬具・金環・鉄鏃・鎧(直刀)がみられ、墳丘に列石が存在し、須恵器の供獻がみられた。

その他、古墳に伴うと考えられる土壙(祭祀用?)の検出や、縄文時代の土器・石器類等の発見は、福岡市域においてその類例が少いだけに注目される。

本古墳群の調査は群集墳の一群を一定地域内でまとまりのあるものとして把握し、その分析には成果をあげることができた。

(山崎)

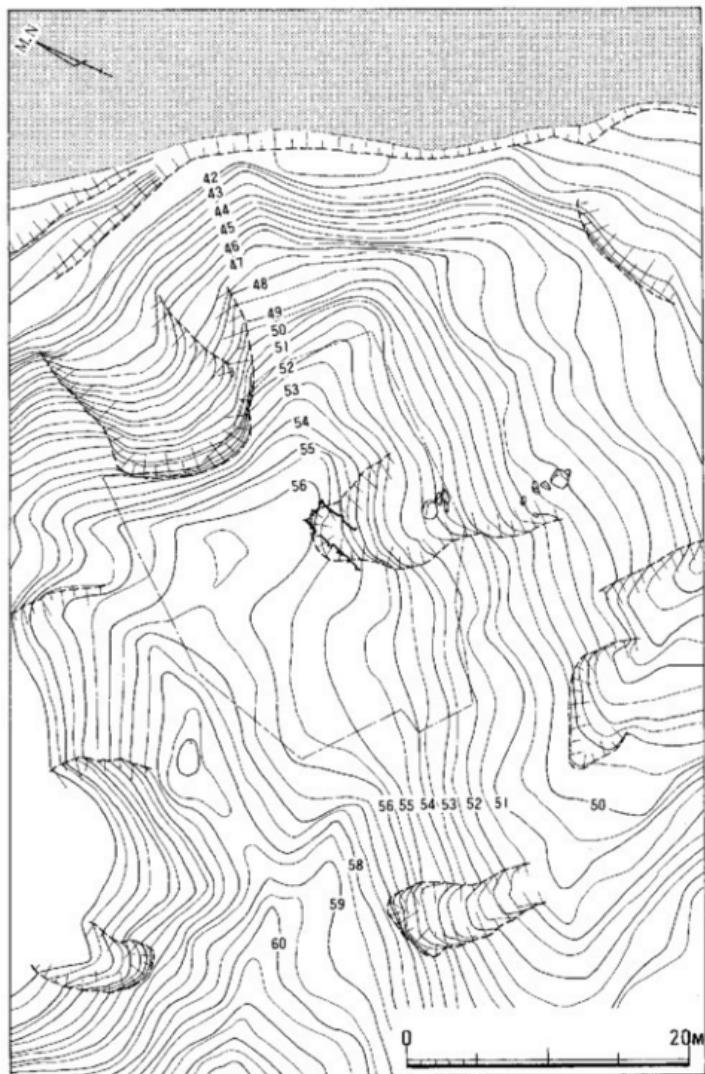


Fig. 5 1-1号墳の立地 (No. 1)

## 第3章 調査の記録

### 1 I-1号墳

#### 1) 位置と現状

I群は広石古墳群中最北にある1基の古墳より成る。これをI-1号墳と呼ぶ。

本墳は叶岳の山麓より分岐し西南に延びる丘陵先端の南寄りに位置し、西北側基底面で55.50mの標高をもつ。古墳の西北部はわずかに高い平坦面をつくる。北側から東側にかけては少し張り出しをみせたのち、急な傾斜をもって広石第1池に落ち込む。西側から南側はいくぶんか緩い傾斜面をもち、花崗岩の露頭した南側の丘陵との間に浅い谷をつくりながら南東に下る。また南はII群の古墳を見下し、さらに遼く早良平野および油山を眺望する。

調査前の観察では、この丘陵端から南東方向へ山崩れ状の陥みがあり、その中に花崗岩の転石が多く見受けられ、また奥壁と思われる立石が露出していたことから、古墳存在の予測がついた。しかし視覚的にも、測量後の等高線の流れにおいても、墳丘の高まりは明確さを欠いた。発掘の結果、南東に下る陥みの一帯に石室が右壁の一部および天井石を流出した形で検出され、同時に墳丘の東側が失われていることが明らかになった。

#### 2) 墳丘

**地山整形** 本墳は丘陵端の南東側斜面に、南東方向の等高線にはば平行させて石室を構築している。このため西北側が丘陵端の高まり、北部が広石第1池に落ち込む傾斜面という地形を呈し、墳丘基底面を作るための地山整形はきわめて複雑な様相を示す。

まず西北部の高まりを、石室中軸線から5.5~6.0mの付近で等高線と直交させて深さ0.5mほどのゆるい傾斜で切り離す。この切り離しはII区から始まり、ゆるい弧を描いて崖面を消える。石室の背面に当るII・III区では、石室奥壁から約3m付近を0.5mほどの深さにはば垂直に削り落とし、その前面にテラス状の張り出しを作る。この段落ちとテラス状の張り出しがIV区との境あたりで流出している。これらの地山整形は後述する墳丘との関係から考えてみると、より墳丘を目立たせるための要素を含んだものであるといえよう。

II区との切り離しの斜面と、II区からIII区にかけての段落ちの間は削平・整地され、墳丘基底面となる。この削平面はほとんど平坦である。しかし、I区の部分は自然地形をそのまま利用しており、また流出したIV区がその勾配からみて若干の盛土を行って基底面を作った可能性をもつことを考え合わせれば、その削平面積はあまり大きくなかったといえよう。削平面に旧地

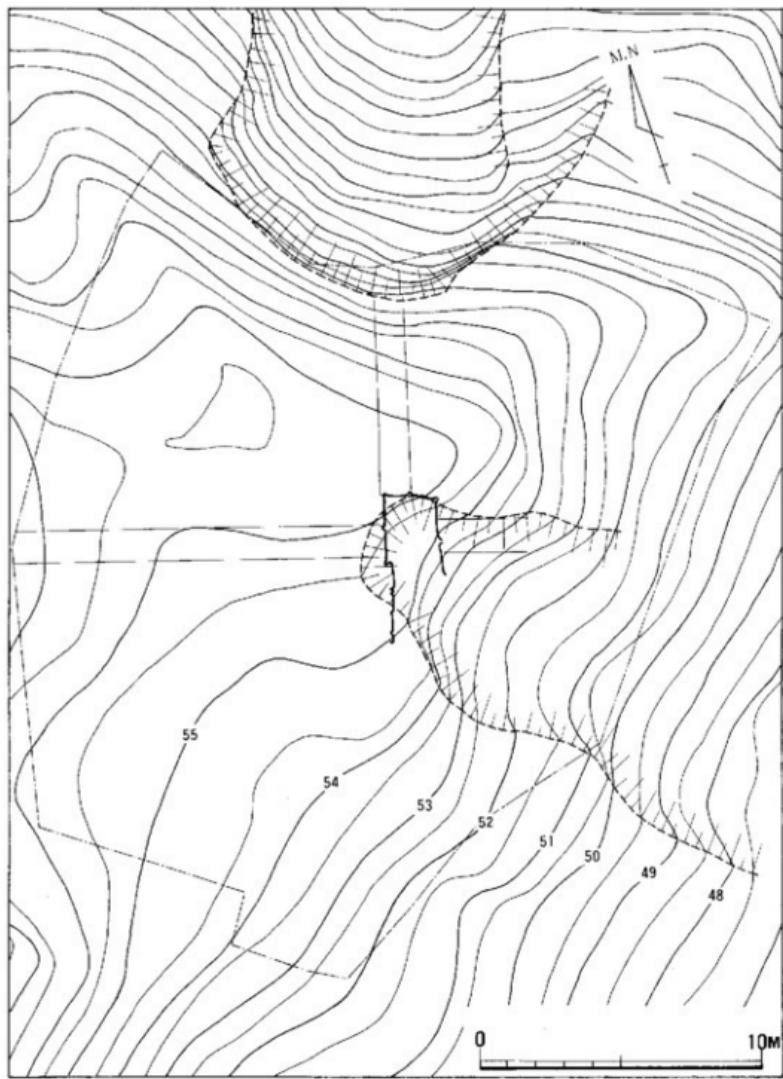


Fig. 6 I-1号填塗丘測図(1/20)

I-1号墳

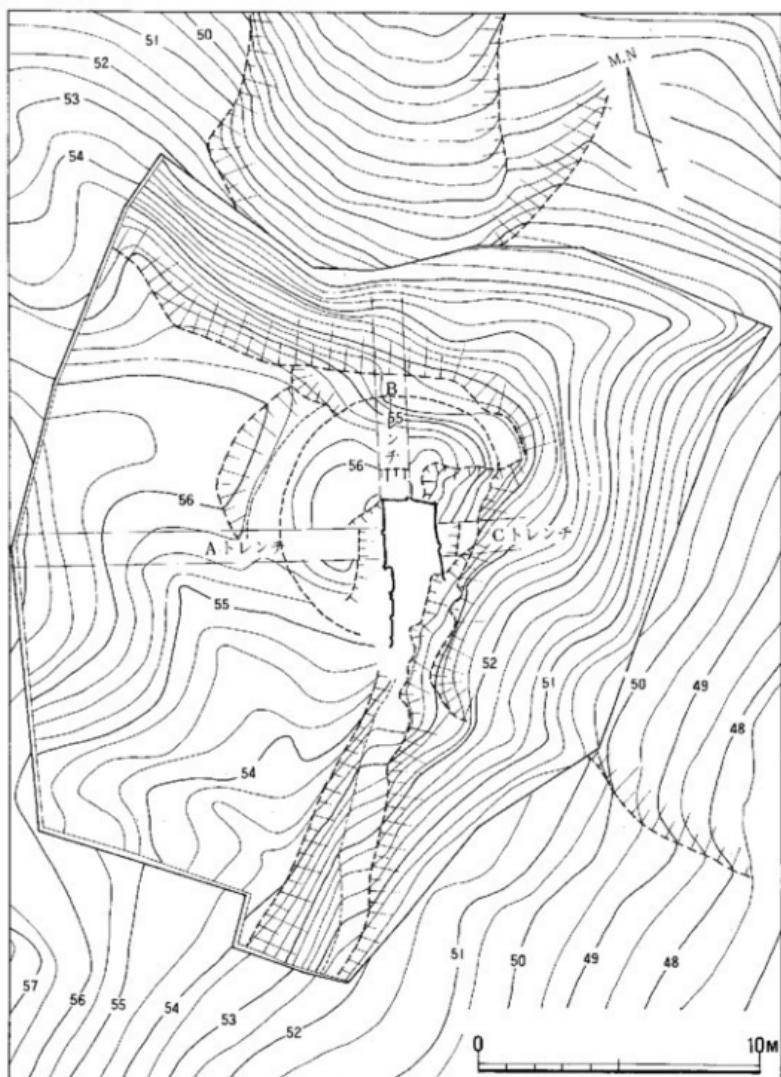


Fig. 7 I-1号墳地形図 (X60)

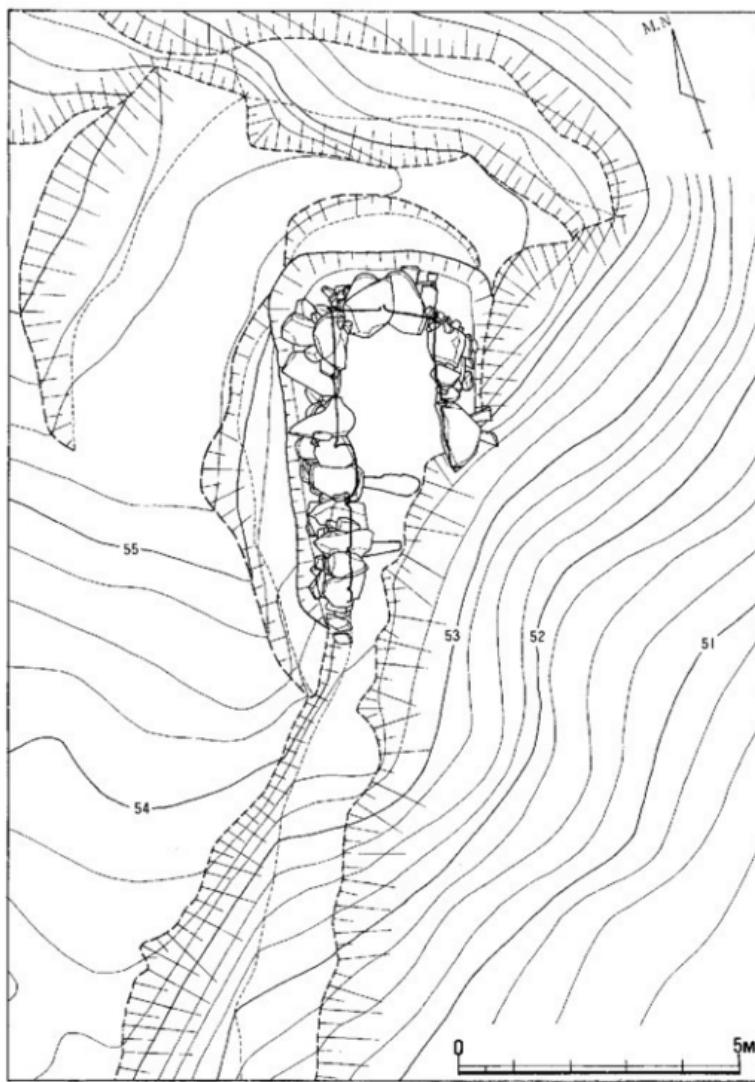


Fig. 8 I-1号掘り方および地山整形 (5m)

表の存在は認められなかった。

**墳丘** 墳丘は崩壊・流出の度合いが大きく、II・III区でその形態をつかむにとどまった。それでみると、墳丘は削平面を基底となし、II区では切り離しの段落ち底から約1.0mの間隔をおいたところから、またII区からIII区では段落ちの上端ぎりぎりから盛土を行う。

墳丘の盛土は地山と同じ花崗岩のバイラン土を主に用いており、層序の確認は困難を作なったが、その築造過程はおおむね2段階に分けてとらえることができた。第1段階は石室の裏込めをかねた盛土である。この段階における層は小さくまた繋りがよい。石室掘り方をまず埋め、さらにその上に積み重ねられる壁石に傾斜させるようにして裏込めを行う。壁石の間には小石や粘土を詰め込み固定を図っている。石室掘り方より上になると層序は複雑さをみせる。こうして石室の固定が終った後、墳丘の形を整える第2段階の盛土が行われる。暗赤褐色の花崗岩バイラン土層がこれに当り、第1段階と異なり一氣に行われ墳丘の外側を厚く覆う。墳丘の現存最高部は、西北基底面より1.7m、石室基底面より4.9mの盛り上りをみせる。

墳丘の裾線はAトレンチで石室中軸線より5.5m、Bトレンチで奥壁内側より3.1mの所にあり、II・III区でみる限りにおいては円形をなす。これから推定すると墳丘平面形は、やや歪みをもつものの径8.5mの円形をなしていたといえよう。

### 3) 横穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸をS-18°-Wにとり、西南の浅い谷に向って開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井石を欠き、また右壁の袖石から渓道部までを流出していた。

石室は掘り方の内側に構築され、渓道部の先に谷へ下る墓道が連結する。石室の平面は長方形の玄室に細長い渓道をつけた通有のもので、左壁は全長5.30m、右壁は2.65mが残存する。さらに左壁には貼石が奥壁より6.30mまで延び、石室掘り方端と一致する。石室を構成している石材はすべて花崗岩である。

**石室掘り方** 切り離しによる段落ち底より3.5~4.0m離れた削平面では、等高線に平行し、また削平の行われていない第1区では等高線に直交して石室の掘り方が作られている。第4区は流出して不明だが、他の場所で掘り込みが2段になっている。下段は石室を取り囲むようにして作られた縦7.8m、幅4.0m弱の隅丸長方形を呈するもので、掘り込みの角度も鋭く深さ1.2mの端整な形をなす。ただ、渓道端に行くにつれて掘り方の幅・深さが小さくなる傾向にある。上段のものは左壁部および奥壁部で下段の掘り込みを開むように作られた弧状の浅い掘り込みで、下段の掘り込み上端まで狭い平坦面を作り出している。石室は下段の掘り込みの内側に構築されているが、左右両壁がほとんど掘り方いっぱいに置かれるのに対し、奥壁は掘り方の間に余裕をもって配置されている。

石室床基底面は、渓道から第1樋石、樋石間、玄室と奥に行くほどその面が低くなる。また

腰石および櫛石を配置する場所はさらに深い掘り込みを行い、その安定を図っている。

### 玄室 奥幅1.85m、前幅2.00m、左壁長2.42m、右壁2.65mを計る。

壁面の構成を見ると、左右両壁および奥壁とも巨大で表面に凹凸のない削石を2石、腰石として用いているため、左壁が袖石に向っていくぶん開くものの、全体的には直線に近い壁線をなす。壁面を個別的にみると、奥壁では2石の腰石が上部で尖り気味になるため、その間隙に小石を埋め込んで上端を整え、さらにその上に大ぶりの削石を2石配置する。残存するのは3段目までで、腰石はほぼ垂直であるが、2段目より徐々に石室内側にせり出してゆく。左壁は袖石側で腰石の上に大ぶりの削石を2段目とするのに対し、奥壁側ではその半分ほどの転石を2石積み重ねて2段目とする。一部は3段目まで残り、腰石から上段に向うにつれ石室内側に張り出してゆく。右壁は一部2段目まで残るが、腰石自体に高さがなく、2段目まで合わせて、左壁の腰石の高さと同じ位である。現存する石室高は奥壁で、床基底面より1.75mである。奥壁と左右両壁の間の上部には力石の架構が見られる。

玄門部は右袖石を欠くが、単純な両袖を設けたと考えられる。残存した左壁の袖石は、巨大な腰石を用い、0.3m内側にせり出させる。また玄室左壁とは力石を用いて、その固定を図っている。

第2櫛石から玄室にかけての床面は全面敷石が行なわれていたと考えられるが、中央部付近

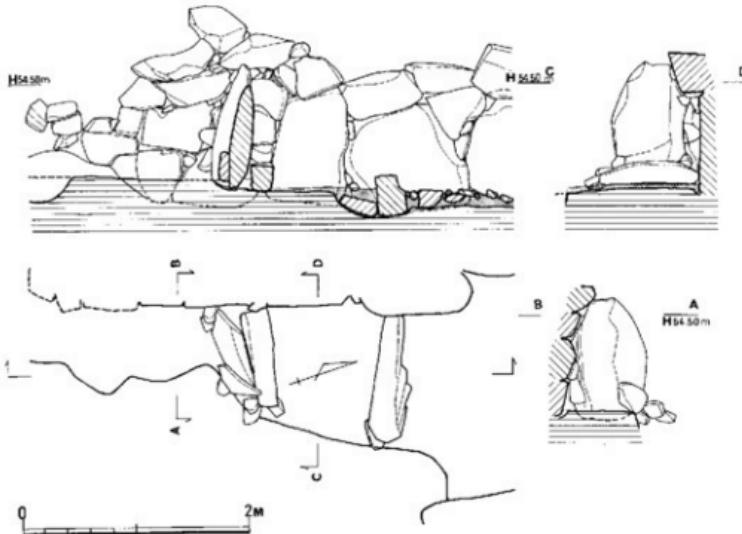


Fig. 9 I-1号墳 閉塞部実測図(%)

が搅乱されており、その痕跡をとどめなかった。蓋石は20cmほどの転石を最大とし、それ以下の小石で構成されている。表面が平坦なものを選んだものと考えられるが、中には凹凸の著しいものもかなり混っていた。

**美道** 残存するのは左壁および樋石だけである。左壁美道長は2.94m、美道奥幅は第2樋石から推定して1.15m前後になる。左壁面は樋石間までは右室の右組と変化がないが、入口から第1樋石にかけては蓋石が小さくまた2段目も、小ぶりの石を多く積み重ねている。壁石の間には小石を挟んで固定している。

平面的にみると第1樋石は美道端より0.9~1.0mにあり、0.9~1.0mの間隔をもって第2樋石を配置している。ともに細長い1石の転石を用いているが、その上面は平坦である。

**墓道** 墓道は美道端に連接して、ほぼ直線的に南西に下る。西側は緩い傾斜面を鋭い角度で切っているが、東側はすでに流出しており、その形態は明確にしがたい。美道から離れるにしたがって、西側の斜面が人工的なものか流出によるものか判然としなくなり、墓道自体も不明瞭になる。大勢として墓道は南側の花崗岩の露頭がある丘陵との間の浅い谷へ下ってゆくようである。

**閉塞施設** 高さ0.9m、幅0.7mの板状の転石を第1樋石にもたせかけて閉塞としている。床面と左壁の間には小転石をつめこんでそれを固定する。

#### 4) 遺物

**遺物出土状況** 遺物は石室内からのみ出土した。玄室は前述したように搅乱が著しく、玉類・耳環が浮いた状態で出土した。しかし敷石の残存する玄門部付近では、遺物が敷石上面に接して出土した。その多くは袖石周辺に集中し、それ以外は玄門より少し内側に入った玄室内で須恵器を1個体出土しただけである。左袖石側では土師器と鐵鏡、右袖石側では須恵器9個体と広根式を中心とした鐵鏡が出土した。

遺物が集中して出土したのは、美道後半部の第1樋石と第2樋石の間である。天井石がすで

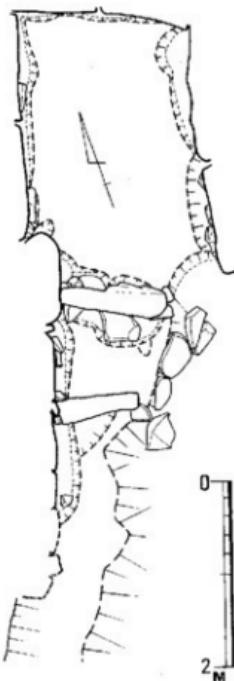


Fig.10  
I-1号墳石室基面実測図(%)

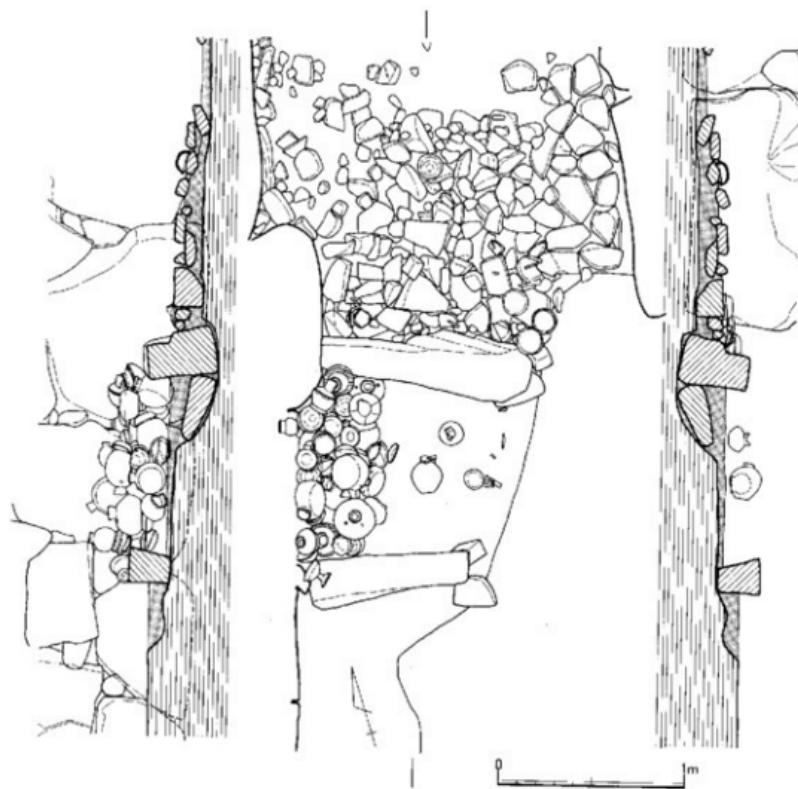


Fig. 11 I-1分構造物出土状況図(%)

に失なわれ、右壁部が流出した悪状況のなかで、須恵器・土師器あわせて88個体、多数の鉄鎌・刀子などを検出した。土器の多くは左壁側に積み重ねられており、その配置の仕方は無造作である。右壁側の床面では須恵器3個体と土師器片および鉄鎌・刀子などが出土した。陶質土器もここよりの出土である。

上述した石室内の出土遺物が、副葬時の原位置を保つものかどうかは問題が残る。装身具・上器などからみて、数度にわたって追葬が行なわれたのは確実である。とすれば漢道後半部に

びっしりと積み重ねられた土器は、その追葬の過程において整理・集積されたものとも想定できる。このことは、集積された土器がいくつかの型式を順序なしに含んでいることからも示唆することができる。しかし、杯で本墳中最も古い1類が、この集積された土器群の壁側最下位にあることから、一部の上器はすでに副葬時にこの場所に置かれていた可能性もある。玄門部付近から玄室にかけて出土した須恵器杯は、10個体のうち6個体が本墳で最も新しい時期に属するIII-b類を構成する。残りの4個体は漢道後半部に集積された土器と類を同じくし、うち3個体はその中のものとセットをなす可能性が強いものである。これは4個体の土器が整理の際取り残され、新たにIII-b類が副葬されたとも考えられる。とすれば土器が整理・集積されたのは追葬の最終段階に近い時期と想定することもできよう。漢道後半部右壁側の上器は集積された土器群から転落したものか、副葬時に置かれたものかは明確にし難かった。

出土遺物は以下の通りである。

#### 装身具

耳環

玉類

武具

鐵鏃

農工具

刀子

容器

須恵器

陶質土器

土師器

以下において詳述する。

装身具 (Fig.12)

**耳環 (1~4)** 5個体の出土をみた。いずれも中実の銅胎に金箔を施したものである。1・2は長径2.4cm、短径2.1cm~2.2cm、断面は径0.4cmの凸形をなし、一对になるものと考えられる。3は半分を欠くが金箔の保存状態が良く、また形態的には1・2に近い。4は身が太くなり、断面橿円形を呈する。長径2.6cm、短径2.4cmで1~3に比べやや大きめであるが、突合せ部の間隙は0.1cmほどで狭くなる。図示しなかった1点は、歪みと腐蝕が著しいが、形態的には1~3に近いものである。突合せ部は接する。

**勾玉 (5)** メノウ製のものが1個出土した。長さ4.0cmで、全体的に磨きが良くかかっている。頭部の穿孔は二方から行う。頭部で一部橙色をなすが、他は乳白色を呈する。

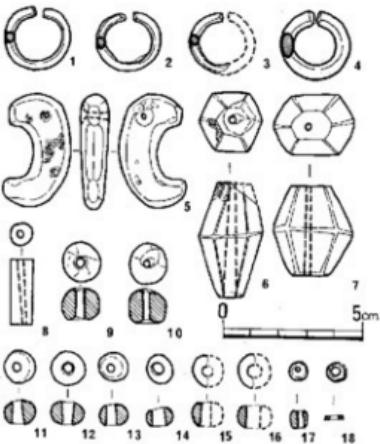


Fig. 12 I-1号墳出土遺物実測図 (5)

**切子玉(6・7)** 水晶製のものが2個体出土した。6は長さ3.2cmで身幅が広く、上下面は長方形に近い六角形をなす。7は長さ4.0cmで、上下面是ほぼ正六角形をなし、6に比べ細身である。いずれも一方からの穿孔を行っている。角は磨滅して丸くなる。

**管玉(8)** 濃緑色の碧玉製で、長さ2.3cm、身幅0.8cm前後を計る。やや斜方向に一方より穿孔を行う。

**丸玉(9~16)** メノウ製・ガラス製の両種が出土した。9・10は橙色のメノウ製で、径が1.4cm前後、高さが1.1~1.2cmである。材質そのものは良いが、孔端部付近以外は磨き加減が悪く、面にはかなりの凹凸がみられる。孔はともに一方より穿られたものである。

11~16のガラス製の丸玉は、メノウ製のものより小型で、半欠になり腐蝕が激しい15・16を除けば、径1.2cm前後、高さ0.8~0.9cmをなす11・12と、それよりやや小さい径1.0cm前後、高さ0.7cm前後の13・14に分けることができる。前者は明緑色、後者は暗緑色を呈する。

**土製練玉(17)** 径0.7cm、高さ0.6cm、孔径0.2cmを計る練玉が1個出土した。黒色を呈し、一部を欠損する。

**臼玉(18)** 径0.7cm、高さ0.15cmの滑石製である。平面的にみると一部欠損するものの、一边0.3~0.4cmの六角形をなす。

#### 武具(Fig.13)

**鉄鎌(1~18)** 15本以上が玄室および狭道後半部より出土した。広根式(I類)と尖根式(II類)があり、その数はほぼ折半する。

**I a類(1・2)** 広根の変形定角式といえるものである。1は菱形に近い身が、小さな闊をもって断面方形の短い茎部へと続く。身の頭付近は断面両丸造りであるが、闊に近づくにつれ平造りとなる。復元全長11.4cm。2もやはり菱形に近い身をもつが、下半部が伸び、突出した笠被に続く。茎は太く、断面は楕円形を呈する。身の断面は両丸造りである。

**I b類(3~9)** 広根の斧箭式に属するものである。いずれも円頭をなすが、その形態は細部で変化を見せる。3・4は長方形の身からゆるいカーブをもって闊を作り茎部へ続くもので、笠被をもたない。身は断面平造りで、頭部は両刃である。茎はいくぶんか丸みをおびた方影をなす。5・6は3・4の闊の部分に突出した笠被をもつものである。5の身の長さが2/3ほどに短い他は、3・4と作りの変化はない。6の茎部には樹皮が残る。7は逆三角形の身に短い茎部がつくもので、全長6.2cm。明晰な闊も笠被もたない。断面は身が平造り、茎部が方形をなす。8・9は3~7に比べ小型化するが、ともに広根の斧箭式として考えたい。8は3・4と形態的に変わらないが、身幅が小さくなる。茎部には樹皮が残る。9は闊・笠被をもたず身が直接茎に続くものと考えられる。断面は丸みをもつた長方形である。

**II類(10~18)** 身は三角形に近いもの(10・13)と、柳葉形状のもの(11・12)がある。10は身が片刃造りの三角形をなし、闊から12.0cmの所で棘状突起をもつ。笠被も茎部も断面方

I - 1号墳

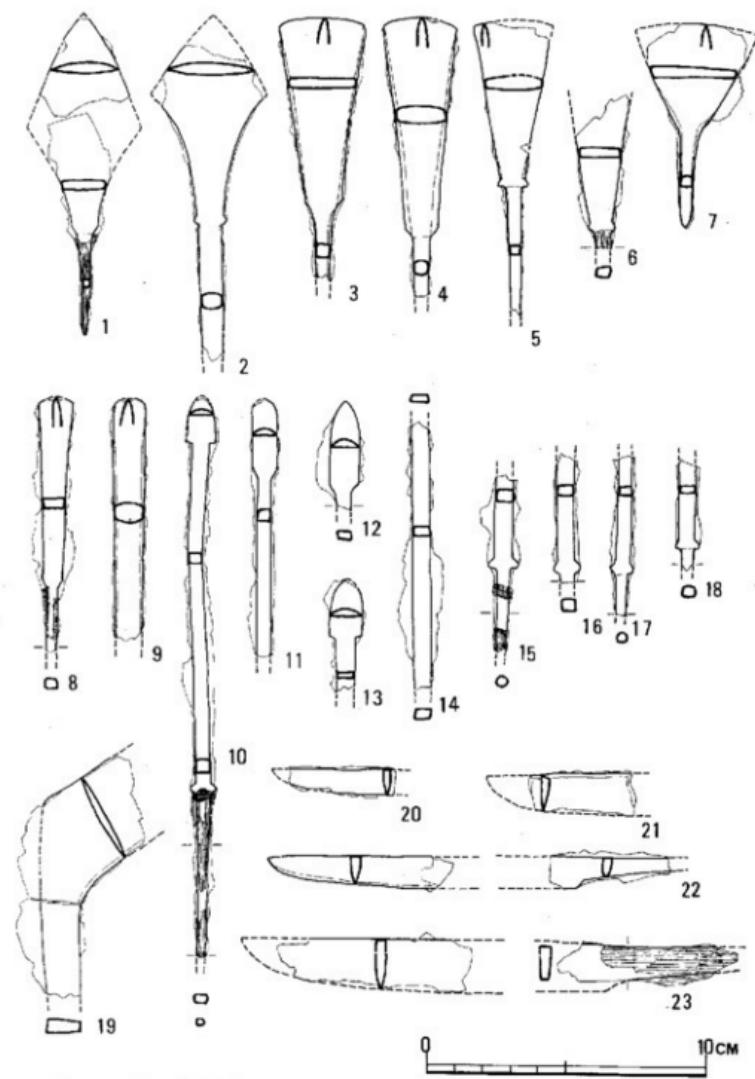


Fig. 13 T-1号墳遺物実測図 II (1/2)

形をなす。残長19.7cm、13も10に近いものであるが、範被断面が扁平になる。11・12は闊がゆるくカーブし、片丸作りの身が長い。14~18は範被もしくは茎部破片である。断面は方形を主になすが、15・17のように茎部で丸くなるものもある。10・15の茎部には糸を巻いた痕が残る。

#### 農工具 (Fig.13)

**刀子 (20~23)** いずれも小破片である。20・22のように小ぶりのものと、21・23のような大ぶりのものがある。刀身の断面はいずれも二等辺三角形を呈する。茎部は22が二等辺三角形の断面をなすが、23は長方形で表面に木痕が残る。

**不明鉄製品 (19)** 「L」字状を呈する鉄製品片である。身幅1.3cmで長方形の樹面をなす部分が、外側では角ばかり、内側では丸くカーブして屈曲し、薄い凸レンズ状の断面をもつ身幅4.3cmの部分につながる。部分的な破片のため、その用途については明確にしがたい。

#### 須恵器

##### 杯 (Fig.14~17)

杯は身・蓋あわせて58個体が出上り、本墳の出土土器の大半を占める。そのほとんどが完形品であり、細分にわたって観察を行った。その結果法量を中心に形態などを考慮して、身・蓋ともI~III類に大別した。また、成形・焼成・ヘラ記号・セット関係など個体的な特徴によってII・III類をさらに細分した。大まかにはI類が法量・形態的にかけ離れているのに対し、II・III類の関係はより近いものといえよう。

**杯蓋 (Fig.14・15-1~28)** その法量によりI類(口径14.5cm)・II類(口径12.7~13.3cm)・III類(口径11.2~12.6cm)に大別する。II類とIII類にはその法量がほとんど変わらないものもあるが、形態差によって区別した。

**I類 (1)** 口径14.5cm、器高4.7cmと杯蓋ではこの1点がとびぬけて大きい。天井部から口縁端まで丸く内傾し、口縁部内面に小さな段を設ける。天井部の1/2強にヘラ削りを行い、その上にヘラ記号を付す。丁寧な作りで、29とセットをなす。

**IIa類 (2~4)** 天井部は扁平な丸みをもち、やや外傾ぎみに立つ体部に統くが、その境は明瞭でない。口縁端はほぼ丸くおさめる。いずれも天井部の約1/2に丁寧なヘラ削りを行う。また天井部から体部にかけ焼成時の黒変がある。ともに同じヘラ記号を有し、胎土・焼成などの点でも似ている。杯蓋IIa類と対応し、3は30と、4は32とセットをなす。

**IIb類 (5~8)** 形態的にはIIa類とあまり変わらないが、ただ体部が長く外傾する。7は長めの体部がほぼ垂直に立つ。いずれも口縁端は丸くおさめる。この類で特徴的なのは器面整形法である。すなわち、天井部の1/2強に、回転を利用しない静止ヘラ削りを縦横に行っていることである。このヘラ削りは丁寧で、器面の凹凸はほとんどない。体部は回転を利用した横ナデを施している。いずれも胎土・焼成・色調が類似し、また8以外は同じヘラ記号を天井部から体部にかけて付す。これらのこととは、8に少し問題は残るにしろ、IIb類が同一工人、同一

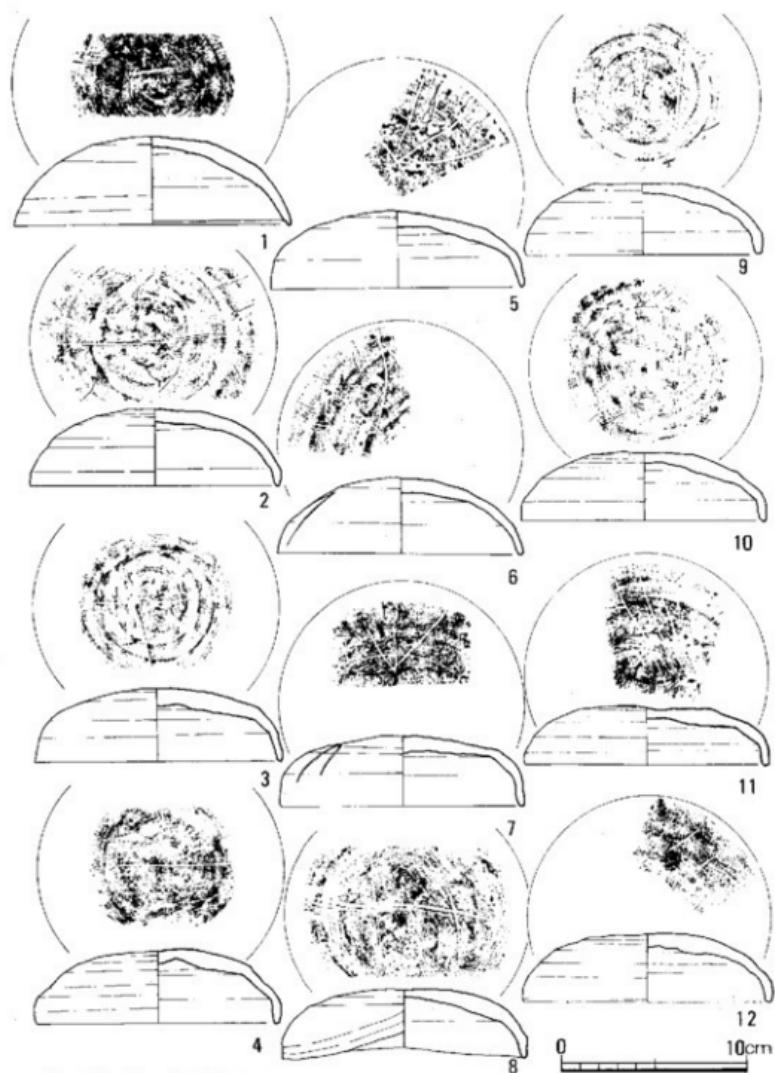


Fig. 14 I-1号墳遺物実測図 III (%)

窯によって製作された可能性が強いことを窺わせる。杯蓋II b類と対応し、5と35、7と37はセット関係にあり、また6と37もその可能性が強い。

II c類（9・10） 天井部がやや平坦になり、明瞭な境をもたないまま、短く立つ体部へつながる。口縁端は丸くおさめる。天井部の1/2～2/3に丁寧なヘラ削りを行い、また他の部分の調整も丁寧である。9・10ともに胎土・焼成・色調が似、天井部に同じヘラ記号を有することなどから、同一工人・同一窯の製作によるものと断定していいだろう。杯身II c類と完全に対応し、9は39、10は40とセット関係をなすと考えられる。

II d類（11・12） 口径に比べ器高が低く、全体的にみて扁平である。平坦な天井部から明瞭な境をもたないまま外傾する体部に続く。口縁部は短く立ち、端は丸くおさめる。天井部の1/2～1/3にヘラ削りを行う。ともに胎土・焼成・色調はほぼ同じで、また体部に同じヘラ記号を付す。杯蓋II dと相まって同一工人・同一窯による製作であろう。11は41と、12は42とセットをなす。

II e類（13～16） 口径は13.0cm前後であるが、上記のa～d類に入らないものである。13は出土時には31の杯身とセットになっており、胎土・焼成・色調の面からもII a類に似るが、ヘラ削りは荒く、また器形の歪みが著しい。14～16はゆるやかな丸みをもった天井部（15は平坦）から、境を不明瞭にしたまま体部が外傾し、口縁部が短く立つ。天井部の1/2ほどに荒いヘラ削りを行うが、16はわずかに粘土の切り離しが残る。この3個体は焼成において堅緻さを欠く。また天井部から体部にかけてヘラ記号をもつが、その形はまちまちである。この類に対応する杯身は、焼成などの点で問題は残るが、II e類と考えてよいであろう。

III a類（17～22） 口径がわずかにII類より小さくなり、天井部が平坦化するとともに粘土の切り離しが残るものである。器高は4.0cm前後で、口縁部が短く立つものの、天井部と体部の境が不明瞭なまま直線的に続くため、全体的にみて台形状を呈する。ヘラ削りはほとんど天頂部に限られ、しかも荒いため、未調整の部分が残る。17・18は焼成に堅緻さを欠き、また形態的にもII e類に近いといえる。この類は杯身III a類と対応し、21は48、22は49とセット関係にある。また19と51、20と52もセットをなす可能性が強い。

III b類（23～25） 天井部は丁寧なヘラ削りでは平坦になり、体部が垂直に立つことにより、全体的に丸みを失う。口縁端は角ばる。25は口径が小さくなり、箱形に近くなる。いずれも焼成があまく、堅緻さがない。杯身III b類と対応し、27と54、24と55はセットをなすとともに、同一工人・同一窯によって製作されたと考えられる。

III c類（26～28） 口径に比べ器高が大きくなるもので、全体的にみて半円形に近い形態を呈する。26は口縁部が肥厚し、端部は内面から尖るようにおさめる。天井部はヘラ削り、他の部分は横ナデで調整を行うが、天井下半から体部にかけては器面の凹凸が激しい。27・28は天井部の1/2強にヘラ削りを行い、成形・胎土・焼成・色調の面でよく似、同一工人・同一窯で製

I-1号墳

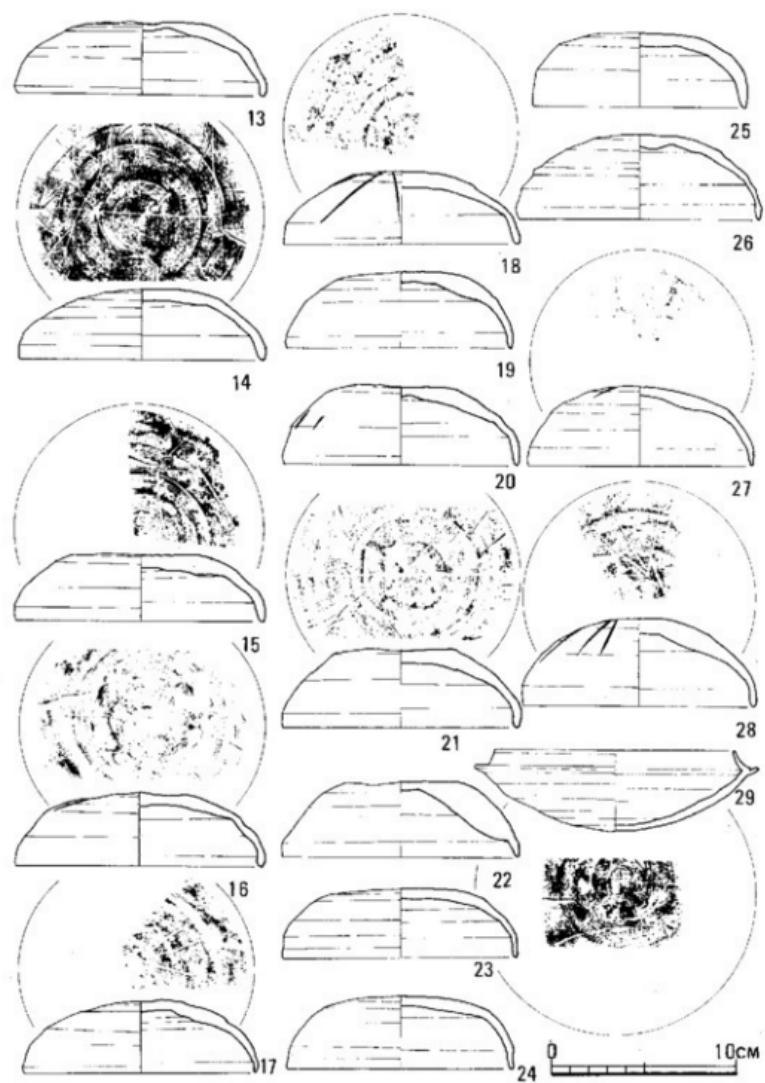


Fig. 15 I-1号墳遺物実測図 IV (%)

作されたものと考えられる。27は57と、28は58とセット関係にある。

#### 杯身 (Fig.15~17-28~58)

I類 (29) 口径13.6cm、器高4.4cm。立ち上りは細く、わずかな弯曲をもって内傾し、その端部付近で少し屈曲して立つ。受部は立ち上りと凹線をもって分かれ、ほぼ直横に引き出す。体部から底部は扁平な丸みをもって続く。底部の3/4ほどに丁寧なヘラ削りを行う。器壁は薄くほぼ一定である。

II a類 (30~34) 立ち上りは受部より内傾し、端部付近をつまみ上げ短く立たせる。端部は尖り気味である。受部はわずか上方に引き出され、体部との境を不明瞭にしたまま底部へ続く。底部はゆるやかな丸みをもち、安定感はない。底部の1/2強にヘラ削りを行い、その上に同一のヘラ記号を付す。

II b類 (35~38) 立ち上りは内傾し、その端部は丸みをもつが細い。受部は上方に引き出され、体部との境には明瞭な段を設ける。底部は扁平な丸みをもつ。ただ38は体部が直線的に内傾し、器内は深みがある。底部の成形法は杯蓋 II b類と全く同じで、静止ヘラ削りを行う。胎土・焼成・色調の点でも変わることろがない。ただ焼成時に溶解した砂粒が底部に多く付着している。35以外は同じようなヘラ記号を付す。

II c類 (39・40) 立ち上りは直線的に内傾するが頃く、高さはいずれも0.5cm前後である。受部は立ち上りと凹線で分かれ、わずか上方に引き出す。体部はゆるやかな丸みをもち、底部は平底に近い。器面調整は杯蓋 II c類と同じく丁寧で、胎土・焼成・色調・底部に記すヘラ記号も全く同じである。

II d類 (41・42) 全体に丸みがなく、扁平な形態をなす。立ち上りは内傾し、途中で垂直につまみ上げられ、端は尖る。受部は立ち上りとほぼ直角に上方へ引き出す。底部は平底に近い。内面は、立ち上りから底部までほとんど屈曲せずに立つため、浅い箱形を呈する。底部の1/2~2/3にヘラ削りを施す。胎土・焼成・色調は杯蓋 II d類と変わらない。

II e類 (43~45) 立ち上りは43・45が直線的に内傾するのに対し、44は基部がやや肥厚して内傾し、端部はつまみ上げられて立つ。受部は上方に引き出され、体部との境を明瞭にしないまま丸みをもった底部へ続く。底部の1/2~2/3にヘラ削りを行う。30・31は歪みがあるものの、ヘラ記号も含め造りの上でほとんど同じである。

III a類 (46~52) 口径はII e類と変わらないが、底部が平坦になり、またヘラの切り離しが残るものである。立ち上りは内傾するが、48のように基部が肥厚し、受部との間に凹線を設けるものもある。受部は上方に引き出され、体部との境は不明瞭である。体部は直線的に内傾し、荒いヘラ削りを行った底部へ続く。個体差はあるが、全体的に器体は深みをもつ。

III b類 (54~56) 口径が10.6~10.9cmと小さくなる。立ち上りは直線的に内傾し、その高さは0.7~1.0cmを計る。受部は上方に引き出され、体部との境はほとんどない。底部は丁寧な

I - 1号墳

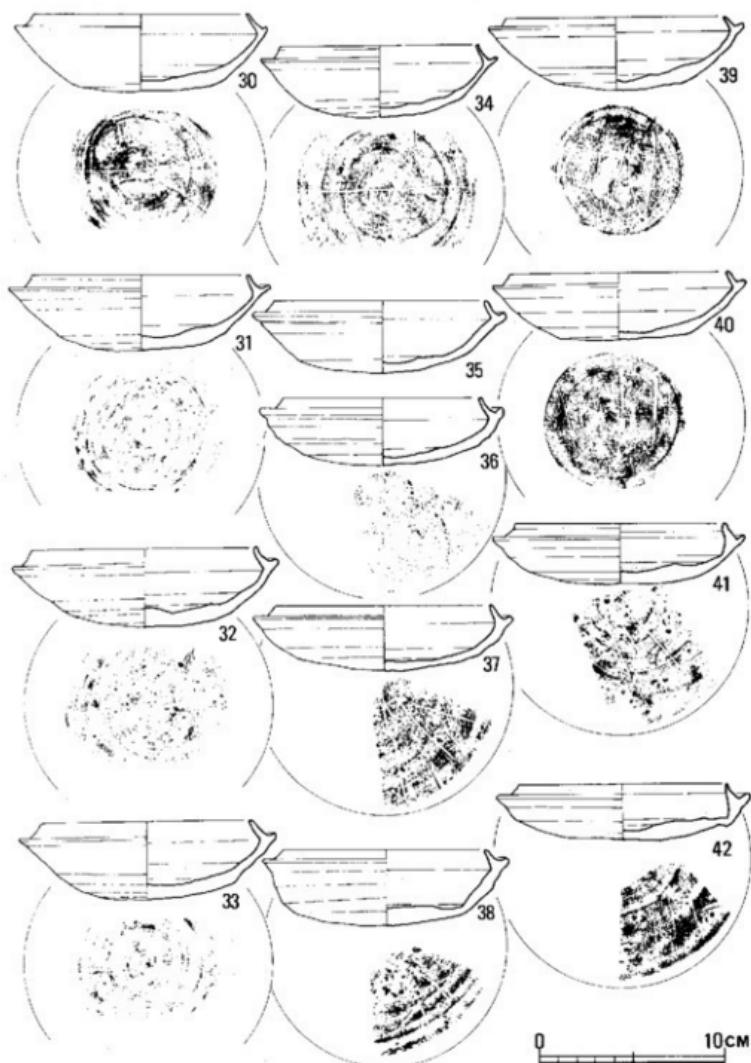


Fig. 16 I-1号墳遺物実測図 V (5)

第3章 調査の記録

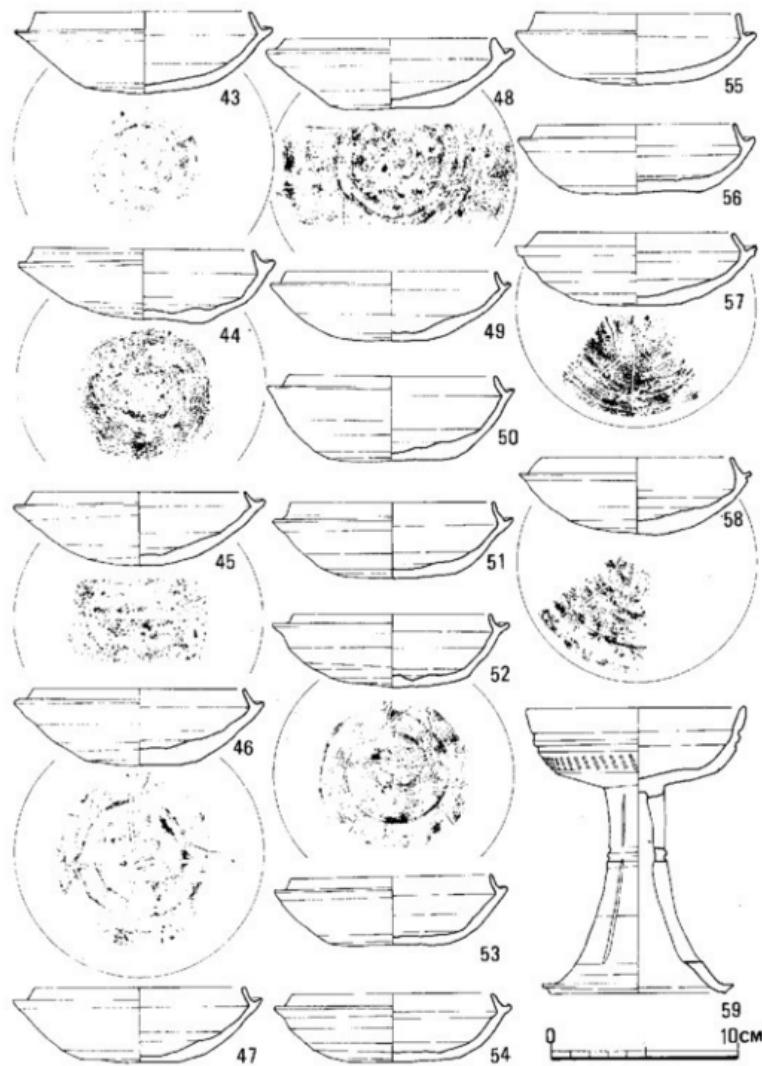


Fig. 17 I-1号墳遺物実測図 VI (2)

ヘラ削りで平底に近い。調整がよくいきとどき、器體はほぼ一定である。いずれも焼成に堅穢さがない。

**IIIc類 (57・58)** 口径10.2~10.5cm。受部は外側に膨むように内傾し、端部は内側に下り角ばる。受部は、57がほぼ直横に細く引き出し、体部との境に凹線をめぐらす。58は立ち上りとの境に凹線を入れ、太めの受部を上方に引き出し、さらにその端部に一条の凹線を配する。体部から底部はゆるやかな丸みをもって続く。ヘラ削りは底部のほぼ全部に行う。胎土・焼成・色調・ヘラ記号は杯蓋IIIc類の27・28と変るところがない。

**無蓋高杯 (Fig.17~59)** 須恵器の高杯はこの1個のみである。全高15.0cm。ほぼ直線的に外反する杯体部には2本の太い凹線をめぐらす。口縁端は丸くおさめる。底部との境にはマッチの軸の尻で擦したような点列文がめぐり、さらにその下に細い凹線を施す。脚部は細長で、脚部の広がりも余り大きくない。脚筒部の一番緊った場所に2本の凹線を入れ、それを挟んで上下2段の細い透孔を三方に配する。脚端部は外に引き出され尖る。杯底面にはヘラ削りを行っている。

**提瓶 (Fig.18~22)** 12個体出土した。その法量により小型のもの（器高20cm以下）、大型のもの（器高20cm以上）に区別して分類する。さらにその口縁形態によって各々をI~III類に細分する。

#### 小型提瓶 (Fig.18~19-60~65)

**I類 (60)** 口頭部は細く外反し、口縁部が彎曲して外向にやや垂れ下る。口唇には一条の凹線をめぐらす。体部は前面・背面ともゆるやかな丸みをもつが、張りがなく扁平な感じを与える。体部にはタッチの荒いカキ目を施し、その前面には自然釉がかかる。

**II類 (61)** 口頭部は外反し、段を作つて口縁部が外に引き出される。口唇下端に一条の凹線をまわす。体部は球形で、その背面は肩部以下がヘラ削りにより直線的になるが、カキ目調整により全体的には丸みをおびる。

**III類 (62~65)** 口頭部が直線的に外反し、口縁部は内傾して立つもの。肩部に乳状の突起をつけるものと、つけないものがあり、形態もバリエーションをもつ。62は肩部に一对の装飾的な乳状突起をつける。口頭部は細長く、5条の細い凹線をめぐらす。体部前面はゆるやかな丸みをもち、背面は静止ヘラ削りでほぼ直線的になるため、横断面はカマボコ状に近い。体部背面にはヘラ記号をもつ。

63・64・65は突起をもたない。63は口縁を欠くがこの類の口縁部になる可能性が強い。口頭部に2本の凹線を入れ、体部は全体的に丸みをおびる。体部背面にヘラ記号をもつ。64は体部前面が中央部に向つて尖るように張り出す。体部には荒いカキ目が施され、その前面には自然釉がかかる。65は口頭部に横書きの波状文をめぐらす。体部は前面が丸く、背面はヘラ削りにより直線的になる。横断面は厚みをもつ。口頭部から体部全体にカキ目を施す。口頭・体部前

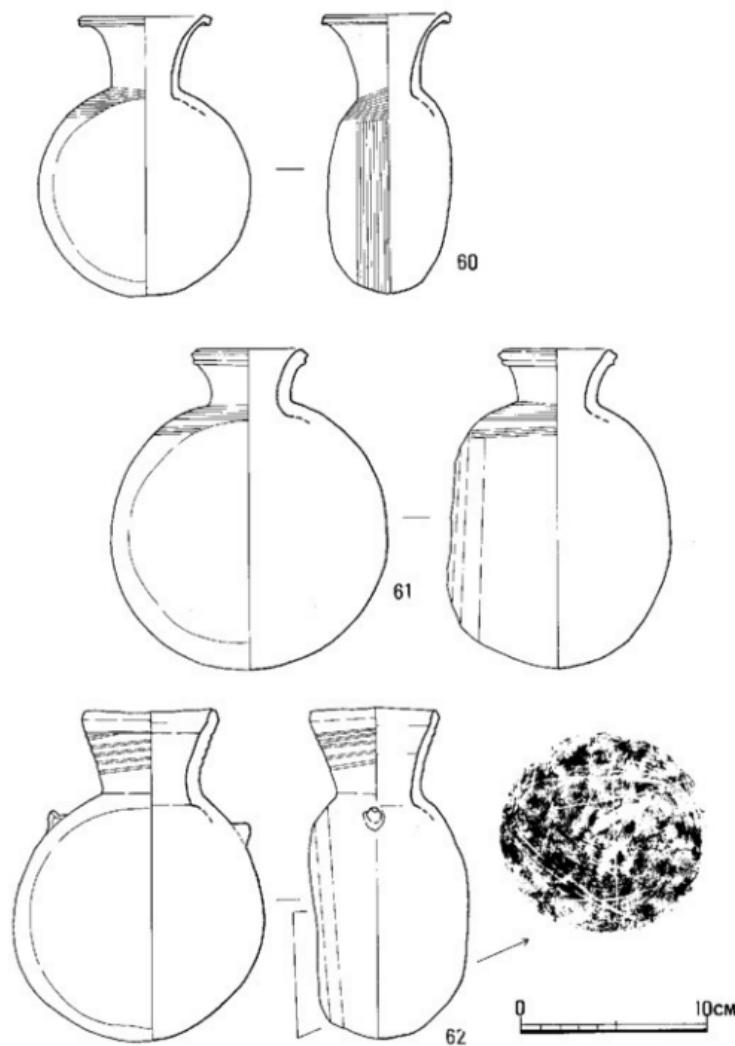


Fig. 18 I-1 号墳遺物実測図 雜(16)

I-1号墳

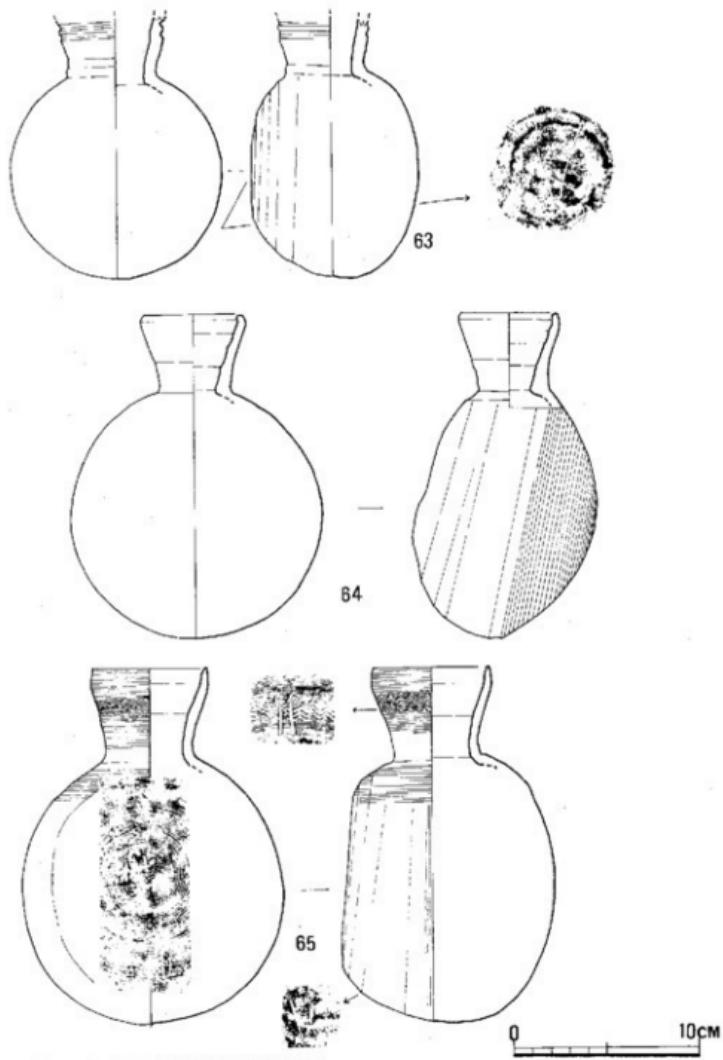


Fig. 19 I-1号墳遺物実測図Ⅷ(36)

面・背面の各部分に同じヘラ記号を付す。

#### 大型提瓶 (Fig.20~22-66~71)

I類 (66) 口頸部が直線的に外反し、そのまま口縁部を丸く作り出す。体部前面は丸く膨み、背面は肩部が張るが、ヘラ削りが弱いこともあって中ほどが深む。横断面は全体的に丸い。体部にはカキ目を施す。

II類 (67・68・69) 口頸部が外反し、口縁部が内傾して立つもの。肩部には実用性のないつまみ状の突起を一対貼りつける。67は体部背面のヘラ削りが弱く、扁平ながらも丸みをもつ。肩部の突起は小型の鈎手状をなす。68は体部背面の肩部の張りが大きく、横断面は厚みがある。肩部の突起は円筒状である。69は頸部が肩部より短く立ち屈曲して外反する。体部は前面が丸く張り、背面はヘラ削りにより垂直になる。肩部の突起は円盤状をなし、頸部に2ヶ所同じヘラ記号を付す。67・68・69のいずれも体部はカキ目の器面調整によって仕上げるが、69の背面のみはヘラ削りのままである。

III類 (70・71) 口頸部が肩部から立ち、ゆるやかに屈曲して外反し、その端が段をなして立ち上るものである。70は口唇部が外に突出し、一条の細い凹線をめぐらす。体部前面はゆるやかな丸みをみせ、背面は垂直に下る。体部前面はナデによる器面調整である。頸部にはヘラ記号をもつ。71は体部背面のヘラ削りが弱く、さらにその上に細かいカキ目調整を加えるため、横断面は卵状を呈する。口頸部の外反は15に比べ小さく、その端部の作りにも複雑さはない。

平瓶 (Fig.23-72・73) 肩部に乳状突起をもつものと、ないものの2個体が出土した。71は口頸部がわずかに外反し、端部は外側が内傾し、尖るようにして立つ。肩部は平坦に近く、左右対称に2個の乳状突起を付ける。体部の最大径はほぼ中位にある。底部はあげ底ぎみで、ヘラ記号を付す。体部上半部にはカキ目、体部下半部と底部にはヘラ削りによって調整を行う。

73は口縁部を欠く。体部の最大径は上位にあり、ゆるやかな丸みをもってやや上げ底の底部へと続く。残存する器表全体に細いカキ目調整を行う。また体部と底部の境付近にはヘラナデらしい調整痕が窺われる。

壺 (Fig.23・24-74~81・87) 8個体を出土したが、その器形形態はバリエーションに富むためここでは1個体ごとに説明を加えた。

74は口径9.35cm、器高13.3cmを計る。口頸部はほぼ直線的に外反し、その口縁端部が内側に下る。肩部には2本の凹線を入れ、その間に櫛状工具による斜線の文様帶をめぐらす。体部は最大径を上位にもったタマネギ状を呈し、ゆるやかな丸みをおびた底部へ続く。底部にはヘラ削りを行う。

75は口縁の一部を欠くが、復原口径9.1cm、器高11.3cmを計る。口頸部は朝顔状に外反し、端部は単純に丸くおさまる。肩部は張りがなく、体部最大径は中位にある。底部は上げ底で、ヘラ削りを行った後ヘラ記号を付す。肩部には荒いカキ目がみられる。

I-1号埴

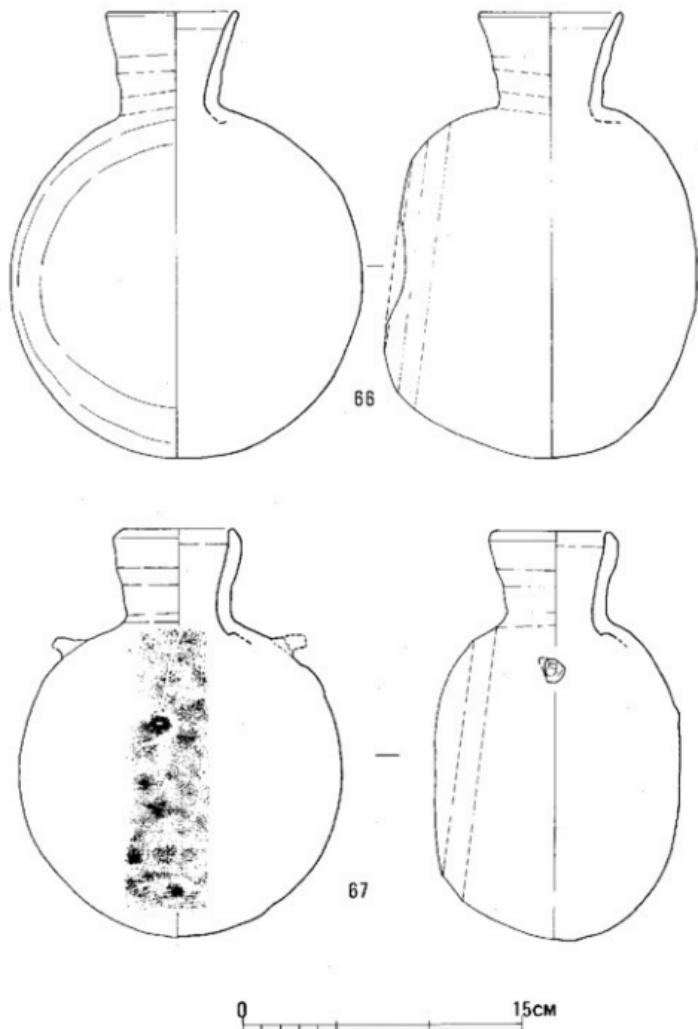


Fig. 20 I-1号埴遺物実測図Ⅳ(右)

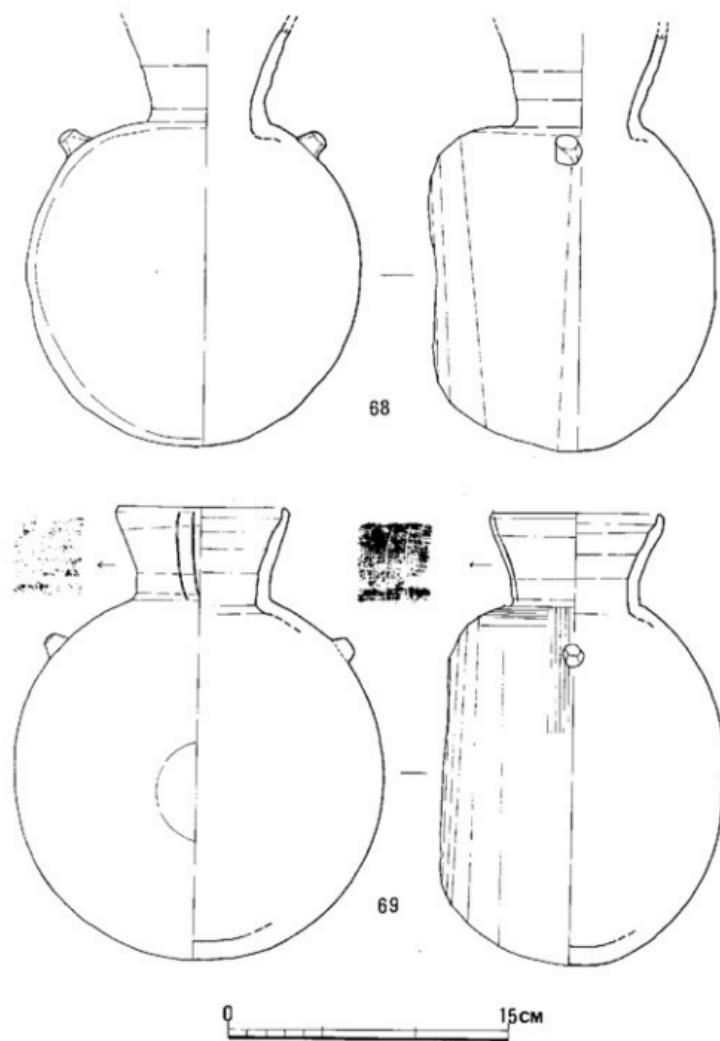


Fig. 21 I-1号埋遺物実測図 X (1/6)

I - 1 号墳

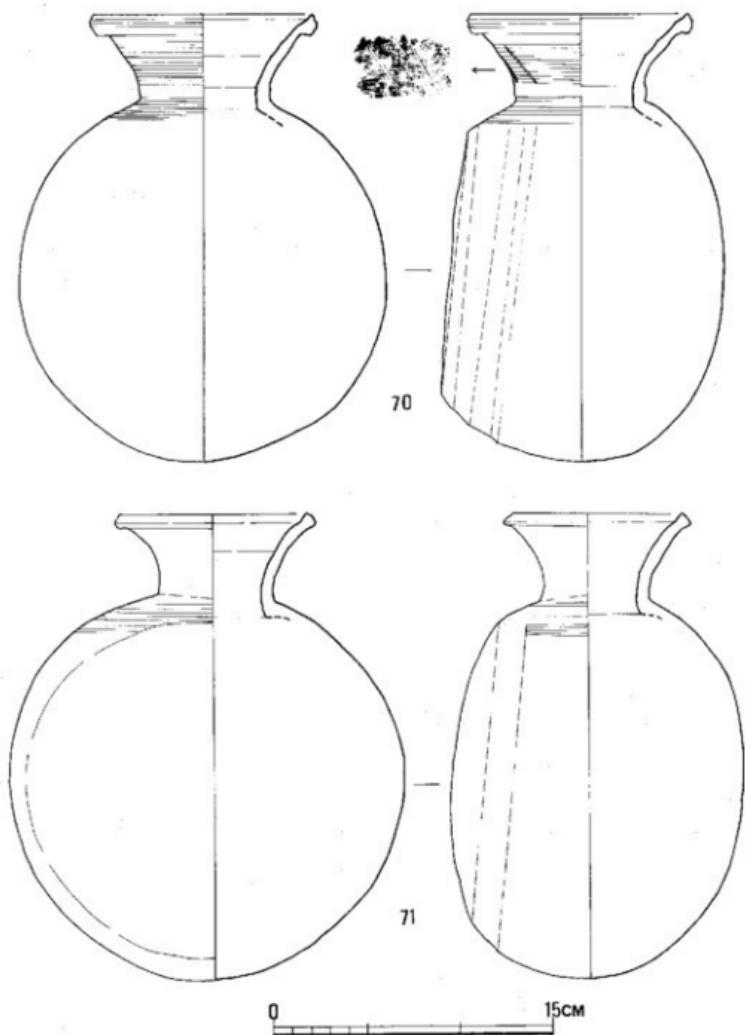


Fig. 22 I - 1 号墳遺物実測図 XI (%)

76は口径10.5cm、高さ13.2cmで、口頭部がわずかに外傾して立ち、その端部が外側に丸く肥厚する。肩部は、2本の凹線間にヘラ状工具によって押捺された楕円形の文様帯をもって飾る。底部は中心部が肥厚するが、全体的に丸みをもつ。頸部以下の外面には文様帯の上および底部のヘラ削りの上まで、すべて細いカキ目を施す。

77は口径7.85cm、器高13.35cmの長頸壺である。長い口頭部が直線的に外反し、端部は丸みをもって内傾し立つ。端部は尖る。体部は上下に扁平な丸みをもち、底部は平底に近い。体部のやや上位に凹線を2本めぐらす。口頭部外面はカキ目調整を行うが、内面は横ナデによる凹凸がみられる。体部下半から底部にかけてはヘラ削りを行う。

78・79は小型の有蓋短頸壺のセットである。79の壺は径6.3cm、器高6.0cmを計る。体部は左右に張り、上下に扁平な丸みをもつ。最大径は中位にあり、肩部と胴部の境付近に一条の凹線をめぐらす。体部の一部はカキ目、底部は荒いヘラ削りによる成形・調整を行う。78はその蓋で、口径9.15cm、高さ3.3cmを計る。天井部は丸く、その下位に一条の凹線を入れ、体部はそこよりほぼ垂直に立つ。端部は内側より外に削り出す。天井部にヘラ削りを施す。蓋に蓋をして焼いた痕跡が明瞭である。

80・81は有蓋の三把手付短頸壺である。口頭部は肩部から直立に高く立ち、端は丸くおさめる。体部は左右に丸く張り、最大径はほぼ中位にある。底部は丸底。肩部には中央に孔を穿った台形状の扁平な把手を等間隔で3ヶ所に配する。体部中位から底部にかけヘラ削りを行い、その上にタッチの荒いカキ目調整を施す。把手はこれらの調整が行われた後に付けられたものである。80はその蓋で、中窪みのつまみをもつ。天井部は丸く、下方に直線的に外傾する体部と細い凹線で分かつ。口端部はわずかに窪む。色調等をみると合せ焼きをした痕跡が明瞭に窺われる。

87は口径5.5cm、器高6.15cmの小型の丸底壺で、ミニチュアの可能性もある。口頭部は短く立ち、端がわずかに外反する。口唇は角ばかり、外側に下る。体部は明確な肩部をもち、全体的に丸みをもって底部へと統く。底部は静止ヘラ削りを施し、その上から体部最大径以下にヘラナデを行い最終的な調整としている。

**台付壺** (Fig.24-83-85) 3個体出土した。その形態より2類に細分した。

I類(83) 有蓋台付短頸壺で、口径7.8cm、器高17.0cmを計る。壺部は口頭部が短く立ち、また体部が左右に張る。肩部と胴部の境に2条、胴部と底部の境に1条の凹線をめぐらす。台部は、壺底部から筒部がゆるやかに開くが、途中で反転して立ち上って広い凹線状の窪みをつくり、さらに浅い段を設けて裾部へと外反する2層の構造を示す。裾端部は内傾し、いくぶんか垂む。壺底部にヘラ削りを行う。82はその蓋で、扁平な丸みをもつ天井部に宝珠状つまみをつける。口縁部はやや下り気味に横へ1.8cm引き出す。反りは1.3cmの長さで、ゆるやかに内傾する。天井部から口縁部上面にヘラ削りを行なうが、その境付近はヘラ削りが行きとどかず、

I-1号墳

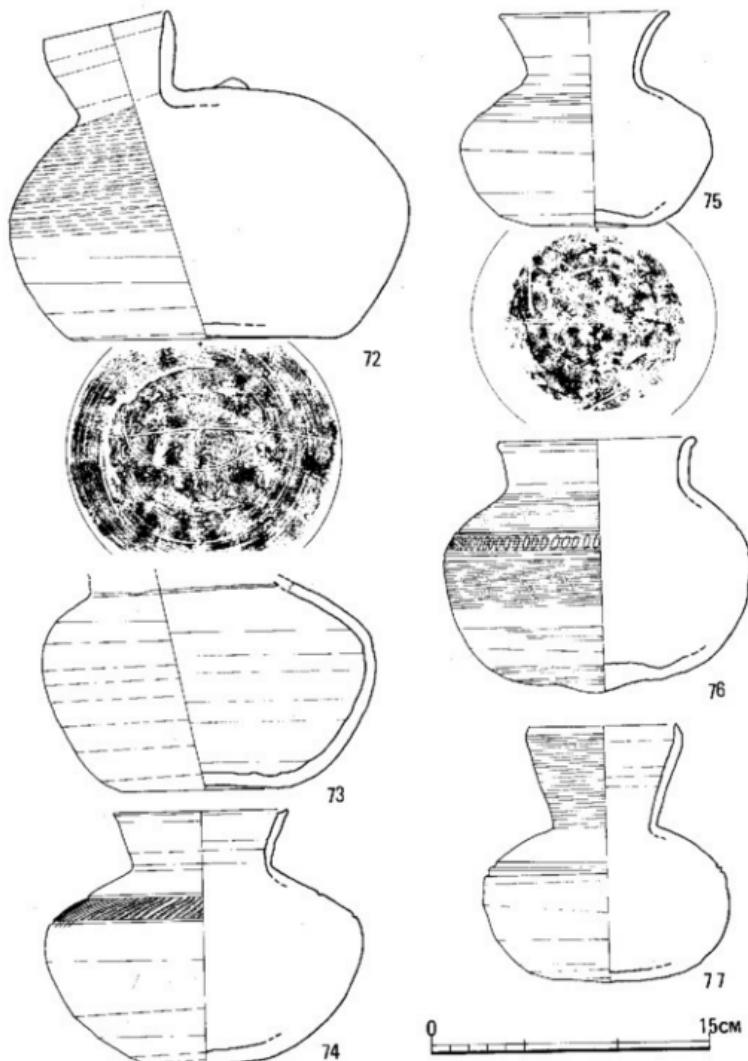


Fig. 23 I-1号墳遺物実測図 (1)

器表は荒れている。

**II類（84・85）** 口頭部がゆるやかに外反し、端部がわずかに内傾して立つ長頸壺に台を付けたものである。84は口頭部の器壁が薄く、その中央に2条の浅い凹線をめぐらす。肩部の張りはなく、胴部から底部にかけて丸みをもつ。最大径は中位に存在する。肩部には2条の凹線を入れ、その間にヘラによる刻み目文を施し、胴部と分かつ。さらに胴部と底部の境にも1条の凹線をめぐらす。台は3.5cmの高さで、下向きに外反し、端部はやや窪む。壺の頭部上半、肩部上半および底部にカキ目調整を行う。口径8.4cm、器高19.0cmを計る。

85は台部を失うが、壺の形態は84と基本的に変わらない。ただ口径9.65cm、壺部高19.5cmとやや大型であり、体部最大径が上位にある。肩部と胴部の境に2条の凹線にはさまたて横状工具による斜線の施文がある。台残存部は底部に占める割り合いが小さく、84のような低い台ではなく、細長い脚をもつ可能性が強い。底部にヘラ削りを行い、さらにその上から文様帶を除いた外表すべてに細いカキ目調整を施す。

#### 陶質土器 (Fig.24-86, Fig.25-88)

2個体の出上をみた。うち86は丸底の壺で、口径8.7cm、器高11.0cmを計る。口頭部はゆるやかに外反し、その端部は外側が肥厚し、内側が垂直に立ち上る。口唇上面は削られて平坦になる。頭部は横ナデで繋り、肩部には小さな棱ができる。体部の成形・調整は非常に特殊で、まず器面を叩きで整え、その上に底部では回転によるヘラ削りを行う。さらに体部全体に回転を利用しない横ナデで仕上げる。類例を見ず、陶質土器と断定するには問題が残る。

これに対し87は推定口径6.9cm、器高17.3cmを計る平底の壺で、朝鮮系の陶質土器としてよいものであろう。口頭部はゆるく外反し、端部がほぼ直角に屈曲して外側に延びる。口唇には鈍い凹線をめぐらし、上面は内側に下る。頭部にはしづりの痕が明瞭である。肩部は張りを見せ、最大径は体部上位にある。体部の成形・調整はきわめて特殊であり、まず全体に叩きを行う。底部はその上に上から下へのヘラ削りを行って形を整える。さらに、体部最大径より上位は横ナデ、下位はヘラ削りによって最終的な仕上げを行う。底部のヘラ削りはタッチが荒い。灰黒色の堅緻な土器である。

#### 土器 (Fig.25)

**杯壺（89）** ゆるやかな丸みをもつ天井部をもち、体部はわずかに内傾する。端は丸くおさめる。ナデおよび横ナデの器面調整を行うが、天井部のナデは荒く、粘土巻き上げの痕跡が明瞭である。

**椀（90）** 丸くおさめた口端から、ほとんど屈曲しないまま内傾し、丸底の底部へと続く。内面には器面調整による棱がみられる。外面体部には横のヘラ研磨、底部には方向のまちまちなヘラ研磨を行う。内面に器表の剥落が著しい。

#### 高杯（91～94）

完形のもの2個体に脚部が2片出土した。完形の2個体は杯部中ほどから

I-1号墳

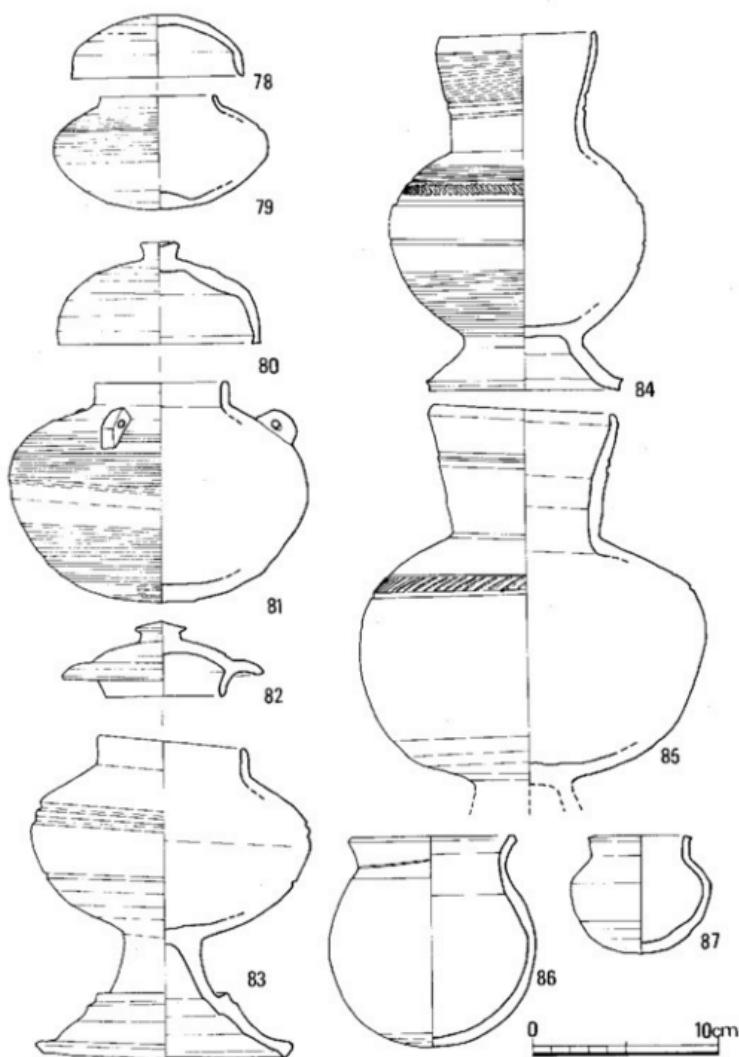


Fig. 24 I-1号墳遺物実測図III (3)

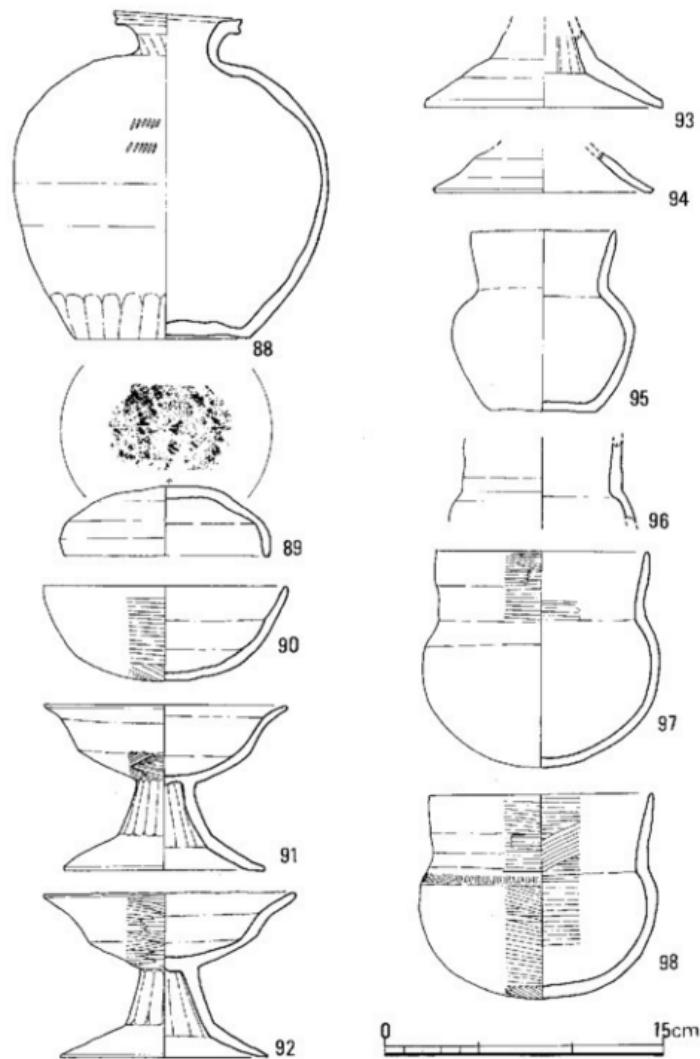


Fig. 25 I-1 壺填遺物実測図 IX

## I-1号墳

口縁が外反し、端は丸くおさめる。筒部は下方に外傾して立ち、屈曲してほぼ直線的に裾部が開く。端部は丸くおさめる。2点の脚部片は裾部の開きがわずかに大きい。杯部の外面はヘラ研磨、内面は摩滅が著しい。脚筒部はヘラ削り、裾部は外面へラ研磨、内面を横ナデで調整する。

**壺(75)** 口径7.8cm、器高9.6cmの小型壺である。口頸部は直線的に外傾し、端は尖るようにしておさめる。体部はゆるやかな膨みをもち、最大径9.3cm。底部は平底である。外面は体部上位に黒変がある以外は、摩滅が著しく調整痕は不明瞭である。内面は口頸部が横ナデ、胴部から底部にかけてはナデによる器面調整を行っている。類例を見ない特殊な土師器壺である。

**壺(96-98)** 頸部のくびれ部より口縁部が外反し、中途で立ち上る。胴部は丸みが少なく、底部は丸底をなす。97は口径が器高より大きくなり、また33は口径・器高が同じである。96は頸部を中心とした破片で、完形の97・98に比べひとまわり小型である。いずれも内外面ともにヘラ研磨を行うが、器表の摩滅がかなり進んでいる。  
(浜石)

Tab. 1 I-1号墳出土玉類計測表

(単位:mm)

No.	種類	長径	短径	高さ	孔 径	色 調	材質	備 考
5	勾玉	—	—	40.0	1.9	淡赤色～淡黄褐色	メノウ	陶側穿孔
6	切子玉	22.9	20.7	40.0	2.0～4.7	(透 明)	水晶	片側穿孔
7	*	29.2	21.6	31.7	1.4～2.3	(透 明)	*	*
8	管玉	(5)8.2	(7)7.7	22.8	0.9～2.1	濃緑色	碧玉	*
9	丸玉	14.2	14.0	11.2	2.9	淡赤色	メノウ	*
10	*	14.6	13.7	12.1	2.3	淡赤色	*	*
11	*	12.0	11.8	8.8	2.9	明緑色	ガラス	
12	*	12.3	12.1	8.2	3.0	明緑色	*	
13	*	10.9	10.5	7.6	2.9	暗緑色	*	
14	*	10.6	9.7	6.7	4.2	濃緑色	*	
15	*		11.2	8.3	?	(白 色)	*	
16	*	?	?	8.2	?	(白 色)	*	
17	練玉	6.9	6.7	6.1	1.7	黒 色	土	
18	臼玉	7.1	6.9	1.5	3.1	白 色	滑 石	

## 第3章 調査の記録

Tab. 2 1-1号墳出土土器調査表

(単位: cm)

類	No.	口径	器高	受部径	胎 土	焼成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘ ブ 配分	出土地点	
I	1	14.5	4.7		微砂粒混	良好	灰 色	時計	○	櫛石間左壁側	
	2	13.2	4.0		砂 粒 混	良好	黑 灰 色	?	○	櫛石間左壁側	
II	3	13.1	3.9		微砂粒混	良好	青灰色・黒色	時計	○	櫛石間左壁側	
	4	12.8	3.8		砂 粒 混	良好	青灰色・黒色	時計	○	櫛石間左壁側	
II b	5	13.3	4.1		砂 粒 多	良好	黑 色	-	○	櫛石間左壁側	
	6	13.1	4.0		砂 粒 多	良好	黑 色	-	○	櫛石間左壁側	
II c	7	13.0	3.8		砂 粒 多	良好	黑色・黄灰色	-	○	玄門右袖右側	
	8	12.9	3.7		砂 粒 多	良好	灰 ~ 黑色	-	○	櫛石間左壁側	
II d	9	12.7	3.8		微砂粒混	良好	灰 黑 色	時計	○	櫛石間左壁側	
	10	13.0	3.6		微砂粒混	良好	黑 色	時計	○	櫛石間左壁側	
II e	11	12.7	3.3		砂 粒 多	良好	灰 黑 色	時計	○	櫛石間左壁側	
	12	13.1	3.6		粗砂 混	良好	黄 灰 色	時計	○	櫛石間左壁側	
杯蓋	13	13.0	3.8		砂 粒 混	良好	灰白色・黒色	時計	-	櫛石間左壁側	
	14	12.9	3.8		微砂粒混	普通	灰 黑 色	時計	○	櫛石間左壁側	
III a	15	13.1	3.5		砂 粒 混	普通	灰 ~ 黑色	時計	○	櫛石間左壁側	
	16	13.0	3.9		砂 粒 混	普通	灰 色	逆時計	○	櫛石間左壁側	
III b	17	12.2	3.9		砂 粒 混	普通	黄 灰 色	?	○	櫛石間左壁側	
	18	12.4	3.8		砂 粒 多	普通	黄 灰 色	時計	○	櫛石間左壁側	
III c	19	11.9	3.9		砂 粒 混	良好	黑 色	?	○	櫛石間左壁側	
	20	12.4	4.1		砂 粒 混	良好	灰 ~ 黑色	時計	-	櫛石間左壁側	
III d	21	12.6	4.1		砂 粒 多	良好	黑 色	時計	?	櫛石間左壁側	
	22	12.5	4.0		砂 粒 混	良好	灰 黑 色	?	○	櫛石間左壁側	
III e	23	12.4	3.7		微砂粒混	普通	セ ピ ア	時計	-	玄門右袖右側	
	24	11.9	3.8		微砂粒混	普通	セ ピ ア	時計	-	玄門右袖右側	
III f	25	11.2	3.9		微砂粒混	普通	セ ピ ア	時計	-	玄門右袖右側	
	26	12.6	4.5		良 質	普通	黄 灰 色	?	-	櫛石間左壁側	
III g	27	12.0	4.1		砂 粒 混	普通	黄 灰 色	時計	?	櫛石間左壁側	
	28	12.4	4.6		砂 粒 混	普通	黄 灰 色	時計	○	櫛石間左壁側	
杯身	類 No.	口径	器高	受部径 立ち上り 高	胎 土	焼成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘ ブ 配分	出土地点	
	I 29	13.6	4.4	14.9	1.0	微砂粒混	良好	灰 色	時計	○	櫛石間左壁側
	II a 30	11.4	4.1	13.4	0.8	砂 粒 混	良好	青 灰 色	?	○	櫛石間左壁側
	31	11.6	4.0	13.9	0.7	微砂粒混	良好	灰 色	時計	○	櫛石間左壁側

## I-1号頃

		32	12.0	4.1	14.2	0.8	微砂粒混	良好	灰色・黑色	時計	○	櫛石間左壁側
	II a	33	11.1	4.2	13.7	0.9	砂粒混	良好	青灰色	時計	○	櫛石間左壁側
		34	11.6	3.7	13.6	0.8	微砂粒混	良好	青灰色	時計	○	櫛石間左壁側
	II b	35	11.2	3.9	13.4	0.8	砂粒多	良好	黄灰色	—	?	櫛石間左壁側
		36	10.8	3.5	13.1	0.7	砂粒多	良好	灰黑色	—	○	櫛石間左壁側
		37	11.6	3.5	13.9	0.8	砂粒多	良好	黑色・黃灰色	—	○	玄門右袖石側
		38	10.8	4.0	13.1	0.6	砂粒多	良好	灰黑色	—	○	櫛石間左壁側
	II c	39	11.2	3.8	13.7	0.6	砂粒混	良好	灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
		40	11.2	3.5	13.5	0.6	砂粒混	良好	灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
	II d	41	11.1	3.2	13.3	0.8	砂粒多	良好	灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
		42	11.1	2.9	13.1	0.8	粗砂混	良好	灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
	II e	43	11.5	4.3	13.7	0.9	微砂粒混	普通	青灰色	時計	○	櫛石間左壁側
杯身		44	11.8	3.7	13.6	0.8	砂粒多	良好	黑色・黃灰色	時計	○	櫛石間左壁側
		45	11.2	3.9	13.2	0.8	砂粒多	良好	黑色	?	○	櫛石間左壁側
	III a	46	11.2	4.1	13.3	0.8	砂粒混	普通	セビア	時計	○	櫛石間左壁側
		47	11.2	4.0	13.2	0.8	砂粒混	良好	灰黑色	時計	—	櫛石間左壁側
		48	11.2	3.8	13.2	0.8	砂粒多	良好	灰黑色	時計	○	玄門右袖石側
		49	11.3	3.7	12.9	0.7	砂粒混	良好	灰黑色	時計	—	櫛石間左壁側
		50	11.1	4.5	13.2	0.8	砂粒混	良好	灰黑色	時計	—	櫛石間左壁側
		51	10.9	4.0	12.9	1.0	砂粒混	良好	黑褐色	時計	—	櫛石間左壁側
		52	10.5	3.8	12.1	0.7	砂粒混	良好	灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
		53	10.2	3.6	12.4	0.8	砂粒混	良好	青灰色	?	—	櫛石間左壁側
	III b	54	10.7	3.6	12.7	0.7	良質	普通	セビア	時計	—	玄門右袖石側
		55	10.9	3.8	12.9	1.0	良質	普通	セビア	時計	—	玄室玄門寄り
		56	10.6	3.6	12.7	0.8	微砂粒混	普通	灰黑色	時計	—	玄門右袖石側
	III c	57	11.1	3.2	13.3	0.8	砂粒混	普通	黄灰色	時計	○	櫛石間左壁側
		58	10.5	3.9	12.9	0.9	砂粒混	普通	黄灰色	時計	○	櫛石間左壁側
無蓋		No	口径	器高	脚底径		胎土	燒成	色調	ロクヨウ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点
高杯		59	11.6	15.0	9.4		砂粒混	良好	黑色・灰色	—	—	櫛石間左壁側
小型	類	No	L口径	器高	脚底径	胎土	燒成	色調	ロクヨウ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
提瓶	I	60	6.5	14.6	11.3	5.1	微砂粒混	良好	黑色・黃灰色	—	—	櫛石間左壁側
	II	61	5.7	16.7	14.2	11.8	砂粒混	不均	青灰色	?	—	櫛石間左壁側
	III	62	7.0	17.3	13.3	8.4	砂粒混	良好	暗セビア	?	○	櫛石間左壁側

## 第3章 調査の記録

小型 提瓶	III	63	?	?	11.3	9.0	砂 粒 混	やや不良	灰 黑 色	?	○	櫛石間左壁側
		64	5.3	17.0	13.4	9.5	砂 粒 多	良好	灰 ~ 黑色	?	-	櫛石間左壁側
		65	6.2	18.5	14.0	11.1	砂 粒 混	やや不良	灰 楊 色	時計	○	櫛石間左壁側
大型 提瓶	I	66	7.6	23.5	18.7	16.3	砂 粒 混	やや不良	黄灰~黄褐色	時計	-	櫛石間左壁側
	II	67	6.1	21.5	17.2	13.1	砂 粒 混	良好	灰色~灰色	時計	-	櫛石間左壁側
		68	?	?	17.2	15.0	粗 砂 多	やや不良	灰 黑 色	時計	-	櫛石間左壁側
	III	69	8.8	23.7	20.5	14.9	微砂粒混	やや不良	灰 白 色	時計	○	櫛石間左壁側
		70	11.6	23.5	19.5	14.8	砂 粒 多	良好	黄灰~灰黑色	時計	○	櫛石間左壁側
	平瓶	71 (10.0)	24.5	21.1	15.6		砂 粒 多	良好	暗セビア	?	-	櫛石間左壁側
		No	口径 器高 体積 大き				胎 土 燃成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘラ 記号		出土地点
		72	6.9	17.2	21.4		砂 粒 混	良好	灰 色	時計	○	櫛石間左壁側
壺	有蓋	73	?	?	17.8		粗 砂 多	やや不良	黑~黃灰色	-	-	櫛石間左壁側
		74	9.35	13.3	17.0		粗 砂 多	良好	灰 色	時計	-	櫛石間左壁側
		75	9.1	11.3	13.4		粗 砂 多	良好	黑色~黃灰色	逆時計	○	櫛石間右壁側
		76	10.5	13.2	16.4		砂 粒 多	良好	黑 色	時計	-	櫛石間左壁側
		77	7.85	13.3	13.2		砂 粒 多	良好	黑 色	時計	-	櫛石間左壁側
	無蓋	78	6.3	6.0	7.5		微砂粒混	良好	灰 色	?	-	櫛石間左壁側
台付 蓋蓋	79	6.2	6.0	11.5			砂 粒 多	良好	灰~灰黑色	時計	-	櫛石間左壁側
	80	5.5	6615	15.9			粗 砂 多	良好	灰白色~黑色	時計	-	櫛石間左壁側
	No	口径 器高 かえり 高					胎 土 燃成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘラ 記号		出土地点
台付 壺	82	6.2	4.0	1.3			砂 粒 混	良好	灰 黑 色	?	-	櫛石間左壁側
	No	口径 器高 体積 大き	台底径				胎 土 燃成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘラ 記号		出土地点
	I	83	7.9	17.0	14.9	12.8	砂 粒 混	良好	黑~灰黑色	?	-	櫛石間左壁側
	II	84	8.3	18.8	13.7	10.1	砂 粒 多	良好	黑~灰黑色	-	-	櫛石間左壁側
陶質 土器	85	9.65	?	18.6	?		砂 粒 流	良好	黃灰色~灰黑色	-	-	櫛石間左壁側
	No	口径 器高 体積 大き					胎 土 燃成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘラ 記号		出土地点
	86	8.7	11.0	11.1			微 砂 粒	良好	暗セビア	?	-	櫛石間右壁側
	88 (4.9)	17.3	16.8				良 質	良好	灰 黑 色	?	-	櫛石間右壁側
杯	No	口径 器高 体積 大き					胎 土 燃成	色 調	ロ ク ロ 回転方向	ヘラ 記号		出土地点
	89	10.9	3.8				砂 粒 混	やや不良	淡赤褐色	-	○	玄門左袖右側
楕	90	13.0	4.9				砂 粒 多	やや不良	赤 楊 色	-	-	櫛石間左壁側

## 1-1号墳

		No.	口径	器高	剝底径		胎 土	燒成	色 調	ロクロ 回転方向	ルガ 記号	出土地点
							微砂粒混	やや 不真	赤	褐 色	—	—
高杯		91	12.8	8.7	10.6							陶石間左壁側
		92	13.3	8.6	11.0		精 良	やや 不良	赤	褐 色	—	—
		93	?	?	12.8		精 良	やや 不良	赤	褐 色	—	陶石間左壁側
		94	?	?	11.6		精 良	良好	赤	褐 色	—	陶石間左壁側
盞		No.	口径	器高	体 最大径		胎 土	燒成	色 調	ロクロ 回転方向	ルガ 記号	出土地点
		95	7.8	9.6	9.8		砂 粒 多	普通	黄	褐 色	—	陶石間左壁側
皿		96	?	?	?		砂 粒 混	良好	黄	褐 色	—	陶石間左壁側
		97	11.4	11.4	12.7		精 良	やや 不良	赤	褐 色	—	陶石間左壁側
		98	11.9	10.6	12.7		砂 粒 混	やや 不良	赤	褐 色	—	陶石間左壁側

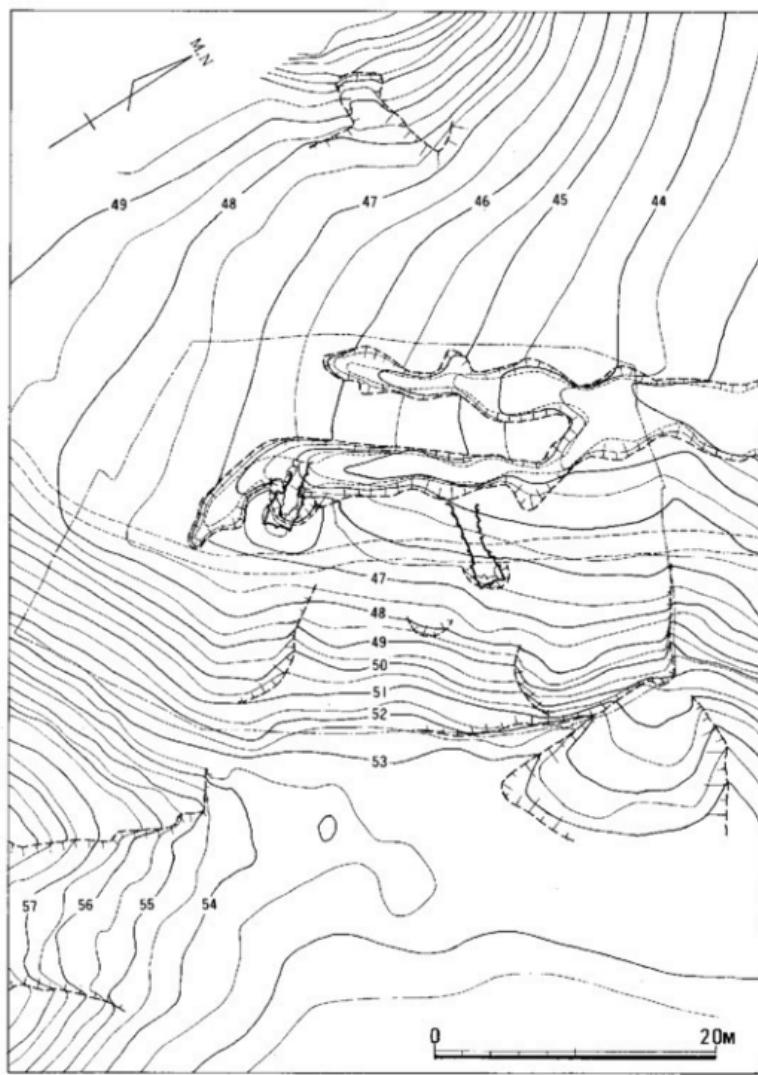


Fig. 26 II群全体測量図 (Yan)

## 2 II群の概要

本群は I・II群のあいだにあって、西南から北東に開く小さな谷地形内南端に位置する2基からなる。古墳番号は谷の入口から奥に向って1・2号墳とし、それに群番号を冠してII-1号墳、II-2号墳と呼ぶ。

1・2号墳とも発見時においては谷上方と斜面上部からの流土の堆積によって深く埋没し、明確な墳丘を認めることはできなかった。わずかに開口した石室と、斜面と墳丘を画する凹地によって識別しうる程度であった。現在の谷の流路は南側斜面端にあって、2号墳の西側で北に屈曲し漢道部を貫き、1号墳石室北側を通って広石第1池に流入している。

調査は1・2号墳を中心に、南側は斜面上端まで、北側は谷中央までの範囲を行った。概略を記すと、まず古墳築造時の谷水の流路は谷のほぼ中央にあったことが知られた。流路がどのように変化したか知るすべもないが、古墳築造時から今日までのあいだに谷中央部では2~4mの砂が堆積したことになる。石室は1・2号墳とも斜面に直交して北~北西に開口し、漢道前面に連接する墓道が5~6m伸びて谷中央の流路に接続している。

古墳築造法からみると、斜面に立地する古墳に通有の地山整形が認められた。本群のはあい、斜面が平坦地に移行する変換線上に構築されているため、地山整形は斜面にのみ行われており、平面形は馬蹄形を呈する。また古墳の周囲から用途不明の土塹が検出された。2号墳の西側に第1号土塹、1・2号墳の溝のあいだに第2号土塹、1号墳の北東8mほどのところに第3号土塹がある。同様な事例はIII群においても検出されている。その他古墳関係以外の遺物としては古式土師器の甕が数片採集されたにすぎない。



Fig. 27 II群発掘風景写真

## 3 II-1号墳

## 1) 位置と現状 (Fig.28)

丘陵斜面の谷との境界、傾斜変更線上に位置し、2号墳より谷の出口に近く、2号墳との距離は墳壙で約5.5mである。墳丘の前面（北側）に幅2~4mの谷の流路が流れ、墳丘の前面が削られている。墳丘は斜面からの花崗岩風化土の流土によって埋り識別ができないが周囲の斜面

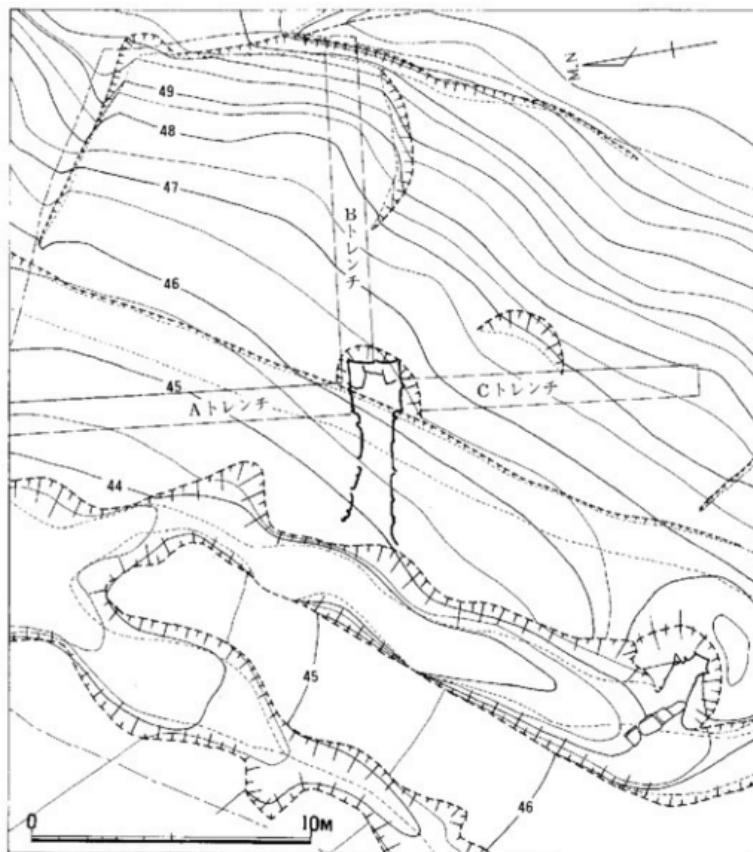


Fig.28 II-1号墳墳丘測量図 (5‰)

面とことなりやや平坦面を有し、石室天井部の崩落によりわずかに玄室奥壁がのぞき古墳として識別できる。

## 2) 墳丘

**地山整形 (Fig.29)** 古墳は丘陵斜面変換線上に斜面等高線に約45度の角度で交わる方向で石室を構築したものである。したがって、古墳構築のための地山整形は丘陵斜面を半周する馬蹄形溝の掘削と溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という二つの作業からなる。

馬蹄形溝は約35度の傾斜面の標高48mほどを上端として傾斜面にそって削り出している。その範囲はII~IV区にわたってみられるが、墳丘基底面を全周するものではなく、地形の関係上南側にその掘削範囲がかかる。溝上端部での東西径は13mを計る。溝は非常に浅く掘削され、Cトレントンにみられるような幅46cm、深さ20cmの浅い皿状の溝以外は明らかにしがたい。基底面は全体にテラス状に削り出す手法がとられ、溝はわずかにその痕跡を残すのみであるが、墳丘の築造によって墳丘面と斜面削面との間に結果的には馬蹄形状の溝が生みだされる。

溝の内側は南（標高45.75m）から北（標高42.6m）に向って徐々に傾斜するが、東西方向ではほぼ水平に整形され、石室とは約45度の角度を有する。墳丘基底面には墳丘築造前の地表面の痕跡は認められない。

**墳丘** 墳丘は溝内側の整地面を基底面として盛土を行っている。しかし、墳丘端部は、Cトレントンでは溝よりやや内側に、Bトレントンでは削り出し面がテラス状に張り出す端部に墳端を求め、Aトレントンではテラス状に整形された面が傾斜をもって落ちる変換点に墳端をもとめていて、必ずしも溝・地山整形面とのプランが一致するものではない。

墳丘の形成過程は大きく2段階に分けることができる。第1段階は石室構築の壁石の裏込ごめ的なもの、第2段階は天井部の被覆と墳形を整えるものである。

第1段階は墓塚内の腰石の安置後、壁石の積み上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら盛り上げているが、II-2号墳ほど強く叩きしめられていない。石と石との間隙には、小石・粘土等を充填して固定している。この段階の盛土は溝より内側、墓塚よりさほど広がることなく、周壁上端部まで行っている。

第2段階の盛土は、第1段階盛土に比べてあまり硬くしめられてなく、層も茶褐色土層一枚である。天井石を架構した後に第1段階盛土を厚く覆い、更に墳丘平面形を整えたものと思われる。この第2段階の盛土は本墳が丘陵斜面に対し約45度の傾斜をもつているために、Aトレントンではほとんど流失してしまっている。

墳丘遺存高は丘陵側（東側）で約0.5m、西側では見かけの高さ約2.4mとなる。墳丘平面形はI区では不明瞭で、II~IV区では各隅が丸くカーブし、その規模はおよそ南北径7m、東西径8mの隅丸方形に近いプランを有している。

第3章 漢文の記録

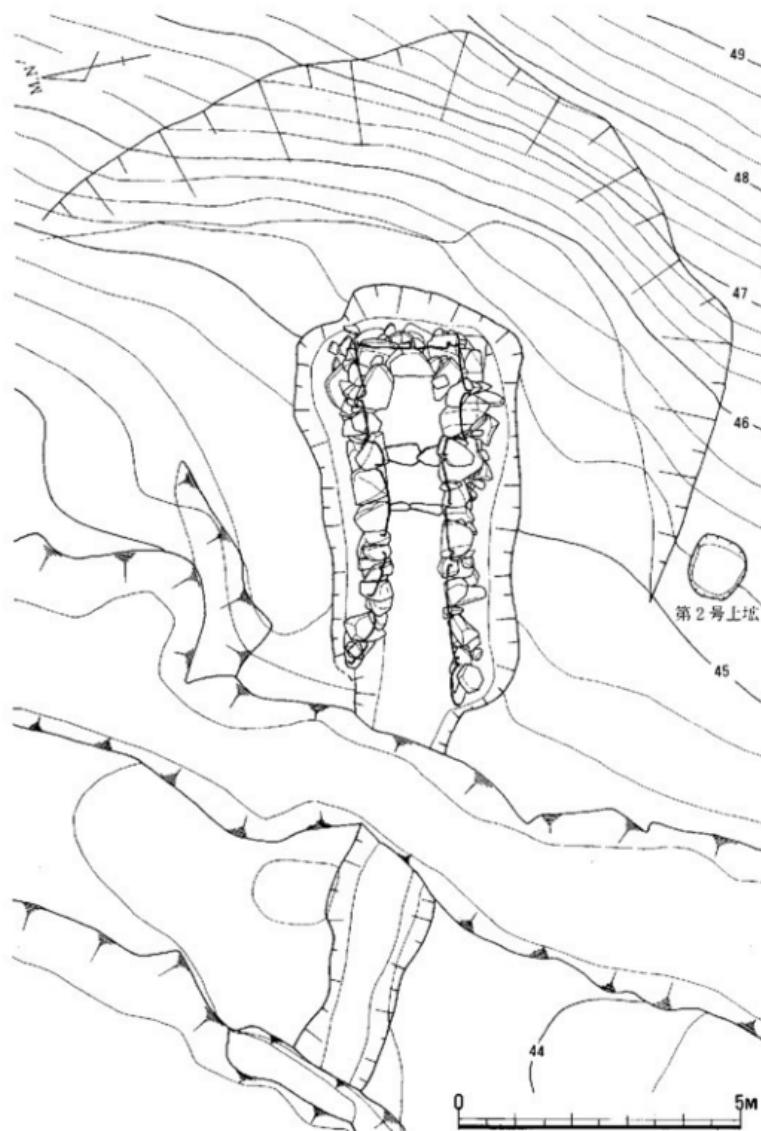


Fig. 29 I-1号墳の掘り方および地山整形(分)

**墓塙と墓道** 墓塙・墓道は墳丘を除去し完全に観察することができた。墓道は渢道前面で一坦谷の流路によって切断され、さらに墓道先端部の他の流路によって切断され消滅している。

墓塙は地山整形された部分のやや西側にかたよりほぼ垂直に掘り込まれたもので、平面形は隅丸の不整長方形をなすが、玄室部の墓塙がやや幅広く、渢道部に順次狭くなり、渢道端で屈曲し墓道に続く。墓塙は長さ7.5m、玄室部幅4m、渢道部幅3.2m、深さは地山整形面が傾斜しているために玄室部の東・南側は1.3m、北側で1mを計る。渢道部は玄室側から順次浅くなり端部で10cmを計る。

墓道は渢道部よりゆるやかに東に曲がりながら約7m確認した。断面形は浅い皿状をなし、幅1.2~1.9m、深さ約10cmである。

### 3) 横穴式石室 (Fig.5)

本墳の埋葬施設は主軸をN-31°-Wにとり西側(谷)に向って開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井部および壁体の上半部を失っている。石室内は側壁の崩落や流土によって深く埋没し、玄室内はすでに盗掘を受け、床面の敷石は原位置にあるものの数個を残して大部分は攢乱散在した状態であった。なお、盗掘は玄室内にとどまり、渢道部後半部にはおよばずその部位には副葬品が原位置を保った状態で出土した。

石室はほぼ方形プランを有する玄室に細長いやや開き気味の渢道を接続する。渢道部中央よりやや玄室よりに第1櫛石を根石として閉塞施設がみられる。石室全長は左壁で5.65m、右壁で6.50mを計り、左右壁において石室全長に大きな差がある。石室を構築する石材はすべてが花崗岩で、転石あるいは割石が使用されている。

**閉塞施設 (Fig.30)** 渢道部中央からやや玄室寄りに第1櫛石を根石とした閉塞施設が存在する。転石・剝石を積み上げて閉塞するもので現存高0.8mであるが、元来は天井石との間が完全に密封されていたものであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から3.8m、渢道内側では第1櫛石を根石として奥壁中央部から2.75mで、その間約1mである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、内側では整然とした石積みの状態で組み上げられている。下部に大きめの石を、上部に行くにしたがい小さい石が使用されるのは通常の通りである。

**玄室** 奥幅1.80m、前幅1.63m、右壁長1.60m、左壁長1.60mを計り、奥幅の広い台形に近いプランを示す。壁体の構築法は各壁体ともに共通している。奥壁および左右壁には0.8m×0.8m程度の大ぶりの割石もしくは面を整えた転石各2個を配し腰石をしている。腰石から上方はやや大ぶりの割石、転石を水平方向に目路が通るように横積みしている。奥壁、左右壁の腰石は内傾し、その上部の石積みも腰石の傾斜に沿って持ち送られている。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁を挟み込むように配置されているが、腰石の上からは互いに重なる三角持込み手法を用いる。天井部はすぐではないが、通常の例よりして奥壁の現存部最上部か、も

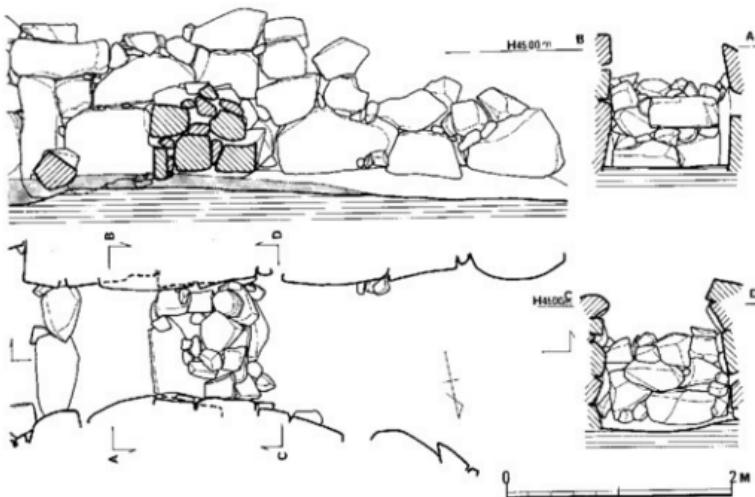


Fig.30 II-1号墳閉塞部実測図(%)

しくはさらに数段横積みにした上に天井石を架構したものと考えられ、床面からの高さは2~2.4m程度であったと考える。

玄門部は素型の両袖で特別な施設はない。袖幅は右袖が0.3m、左袖0.2mを計り、左袖が若干狭い。袖石には未加工の転石を縦位に立てている。

床面は径20~30cmの扁平な割石・転石で敷石が施されていたと考えるが、周壁に沿って数個が原位置を占めているのみで、敷石の範囲については正確を期すことができない。玄室前面の須恵器の出土状態からすれば、玄室前面はII-2号墳同様に敷石は行われていなかったとみるとことができよう。

**羨道** 天井部が欠落しているが左右壁共に比較的良好な状態で残っている。羨道長は左壁で3.95m、右壁で4.8mを計り、左右壁長に大きな差異をみせる。奥幅は第2樋石の部分で1.10m、羨道側で1.7mを計る口がかなり聞く羨道である。壁体の構成は玄室と同様で、大ぶりの転石を立てて腰石とし、その上にやや大きめの割石・転石を横積みにしている。右壁は左壁に比較して、石材が大きめで整然としているが、左壁は石材が不揃いで石積みの状態も雑然としている。

床面には2ヶ所に樋石が配される。第1樋石は2個の割石を組み合せて閉塞石の根石として

いる。第2樋石は2個のやや幅広い転石を配している。奥壁中央部から、その前面までの距離はそれぞれ2.9mと2.1mを計る。羨道部床面にはわずかに埋土が認められるが、前半部では直接地山となり、石室よりゆるやかに傾斜をもって羨道に移行する。

### 3) 遺 物

#### 出土状況 (Fig.32)

石室内はすでに盜掘を受けていて、玄室後半部にはみるべき遺物の出土はみられなかつたが、玄室前半部（特に右袖付近）から羨道後半部は盜掘から免がれていて、須恵器・土師器を主体とする副葬品が当初の姿をとどめていた。その出土状態は大きく次の3群に分けることが可能である。I群は羨道後半部左壁に集中する1群で須恵器（杯身3個 杯蓋1個 異形甌1個 平瓶1個）、土師器（碗1個）よりなる。甌は須恵器破片で蓋ができる。II群は羨道後半部右壁に集中する1群で須恵器（杯身7個 杯蓋5個 高杯1個 平瓶2個 長頸壺1個）土師器（壺1個）鐵鉢2本よりなる。III群は玄室前半部、特に右袖付近の1群で須恵器（杯身3個 杯蓋6個）刀子2本よりなる。以上、各群における須恵器のあり方は後述する須恵器の杯・杯蓋の分類に置き換えると、I群には杯のI類が3個かたまり、第2樋石に近く杯蓋1b類1個が存在する。II群には成形技法・焼成が類似した杯身IV類と杯蓋のII類と高杯が一括し、第2樋石と左壁の角に杯身のIII類1個が存在する。III群には杯身II類、杯蓋1a・b類、III類がみられ、その群においての大体の時間差を示していると考えるが、その出土状態からは少くともII群の須恵器類が本墳における最終的な副葬品と考

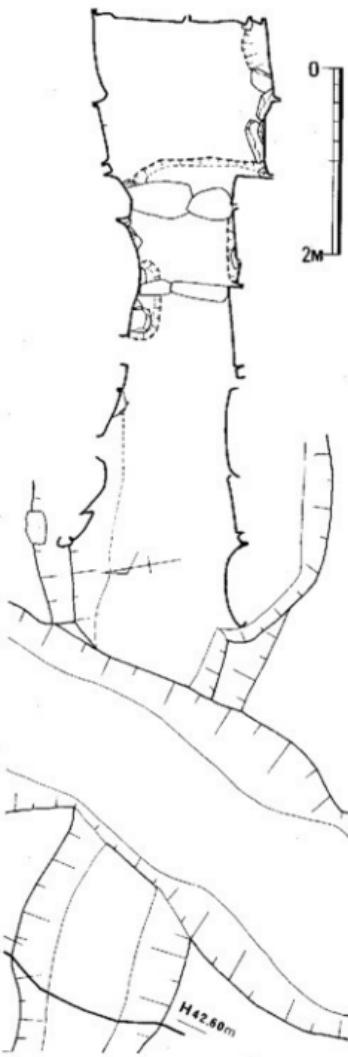


Fig. 31 II-1号墳石室基底面実測図 (%)

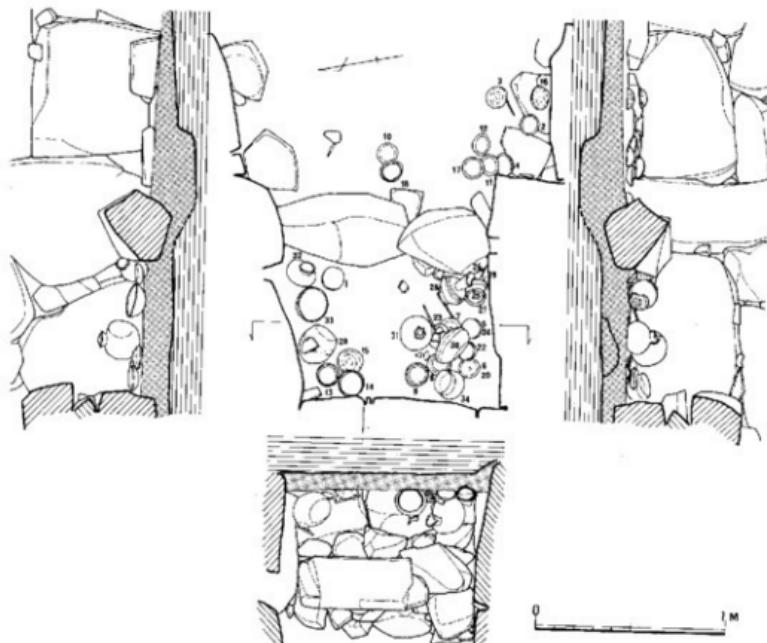


Fig. 32 II-1 号墳出土状況図(1)

る。なお、羨道部開塞石の外に平瓶1個が存在した。他に擾乱された玄室後半部、羨道前半部からは須恵器・土師器片が若干出土している。

本墳から出土した遺物は次の通りである。

容器 須恵器

土師器

武器 鉄鉢3本以上

工具 刀子2本

#### 遺物

須恵器

**杯壺** (Fig.33) 12個体出土した。すべてが完形で、玄室前半部、羨道後半部よりの出土である。成形技法・形状により次の3類に大別する。

I類は天井部と体部の境が不明瞭で、口縁部内面には段がなく、丸くおさめられるもの。II類は擬宝珠形のつまみを有し、内面のかえりは口縁部よりも突出するもの。III類は宝珠形のつまみを有し、内面のかえりは低く内傾し、口縁端とほぼ同じ高さを有するもの。

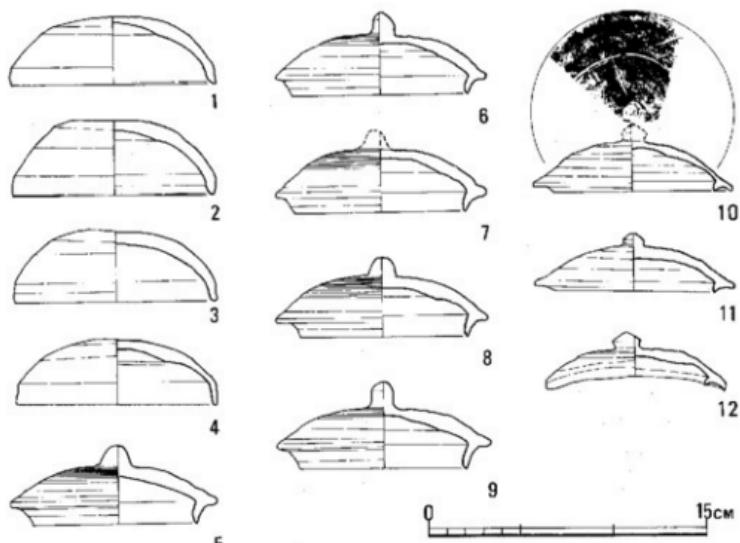


Fig.33 II-1号墳遺物実測図 I (%)

I a類 (Fig.33-4) 天井部は丸く、体部との境は不明瞭であるが、口縁部が屈曲し下方に伸びる。口縁部には段ではなく丸くおさめられる。天井部へラ削りの範囲は1/2程度で、口径10.8cm、器高3.4cm。表面の遺存状態が悪く詳細不明。

I b類 (Fig.33-1～3) 天井部は荒っぽいへラ起こしにより平坦で、へラ削りは丁寧でなく部分的に天井部の1/3の範囲にみられる。体部と天井部の境は不明瞭で口縁部はやや外に開き端部は丸くおさめられる。口径10.8～11.0cm、器高3.6～4.0cmでやや高さがある。胎土には砂粒が多く含まれ焼成は良くない。色調は黄灰色をなす。表面の遺存状態が悪く詳細については不明、へラ記号があるが識別が困難である。杯II類とセットをなすものであろう。

II類 (Fig.33-5～9) 淡道後半部のII群に一括出土した杯蓋である。天井部に擬宝珠形のつまみを有する。天井部の2/3の範囲にへラ削りを行い、その上からカキ目を施す。へラ削りの方向は逆時計回りである。内面のかえりは口端部より突出し、端部は丸くおさめられる。天井部内面は多方向のナデによって調整される。口径11.1～11.4cm、かえり径8.8～9.5cm、かえり高0.8～1.1cm、器高4.2～4.6cmである。7はつまみを欠失する。胎土には砂粒を多く含み良くない。焼成は生焼け、黄褐色をなす。杯IV類とセットをなす。出土状態では、9-12、8-21、6-20、5-24、7-23の組み合せを有した。

第3次 調査の記録

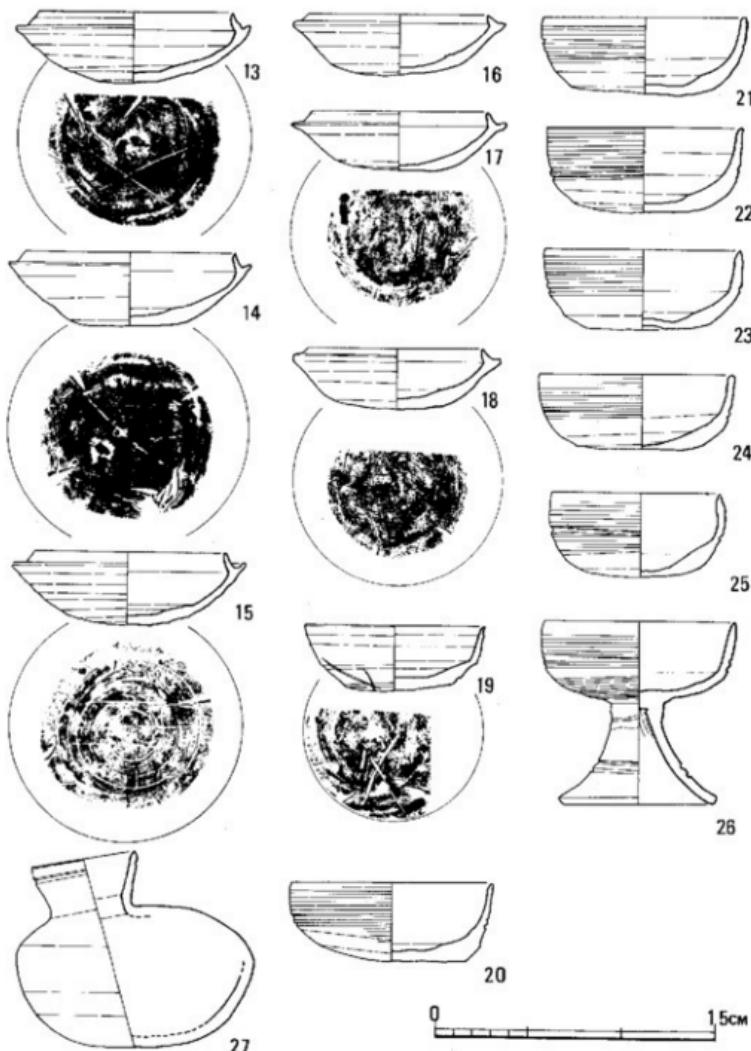


Fig. 34 II-1号墳遺物実測図 II (1/6)

**III類 (Fig.33-10~11)** 宝珠形つまみをつけ、大井部はゆるやかな丸みをもつが高くならず扁平な器形である。内面のかえりは低く内傾し口端部と同じかやや突出する程度である。大井部の1/2の範囲にヘラ削りを行う。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。口径10.6~10.7cm、かえり径8.6cm、高さ3.1cm程度であるが12は歪みが激しく、平均値で口径9.6cm、かえり径7.4cm、高さ2.4cm、10はつまみを欠失する。つまみの接合面にはうず巻き状のカキ目が認められる。杯皿類とセットであろう。

**杯** 13個体出土した。立ち上がりの端部に段をもつものはない。立ち上がり高0.7~0.8cmでやや内傾するもの（I類）。立ち上がり高0.4~0.6cmと低く著しく内傾するもの（II類）。立ち上がりがなく、体部に沈線をめぐらし口縁部から体部にかけてカキ目調整を行うもの（IV類）。立ち上がりのないその他のもの（III類）に大別する。

**I類 (Fig.34-13~15)** 口径10.2~11.1cm、受部径12.5~13.0cm、立ち上がり高0.7~0.8cm、器高3.8~3.9cm。13・15は底部は丸く、受部端は丸くおさめられる。14は底部に狭い平坦面をもち、受部端は尖る。13・14は受部に凹線をめぐらす。立ち上がりはやや内傾し端部は尖る。底部は1/2の範囲にヘラ削りがみられ、その方向は13・15は逆時計回りであるが、14は表面の遺存状態が悪く判別できない。体部の立ち上がりは横ナデ調整、内底部は多方向のナデ調整がみられる。胎土には砂粒を含む。焼成は13・15は良好、14はややもろい。3個共底部にヘラ記号を有する。

**II類 (Fig.34-16~18)** I類に比較し立ち上がりは低く内傾する。口径9.4~9.6cm、受部径11.1~11.5cm、立ち上がり高0.4~0.6cm、器高3.1~3.2cm、底部は狭い平坦面をもち、受部は水平方向に引き出され端部は丸くおさめられる。底部はヘラ起こしの上に荒いヘラ削りが1/2の範囲に行われる。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。立ち上がりは基部が太く、端部は尖る。底部には同種のヘラ記号が認められるが、16は遺存状態が悪く判別が困難である。蓋I b類とはヘラ記号も一致しセットをなすものと考える。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良くない。

**III類 (Fig.34-19)** わずか1点の出土である。口径9.7cm、器高3.5cm、底部は荒いヘラ起こしのまで、狭い平坦面を有し、指による調整がみられる。体部は外向きに立ち上がり、口縁部は丸くおさめられる。体部は横ナデ、内底部は多方向のナデ調整がみられる。底部から体部にかけてヘラ記号が施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好、黒灰色をなす。

**IV類 (Fig.34-20~25)** 狹い平坦な底部より丸みをもって立ち上がり椀状をなす杯で、底部の厚さは器壁に比べて極端に薄い。23のようにやや上げ底をなすものもある。口端部は丸くおさめられる。体部には凹線（連続した2条）がめぐり、口縁部から体部にかけてカキ目調整が施される。底部はヘラ削りで調整され、その方向は逆時計回りである。内面は丁寧な横ナデ調整で内底部は多方向のナデ調整である。口径9.1~10.8cm、器高4.0~4.5cm、胎土には砂粒

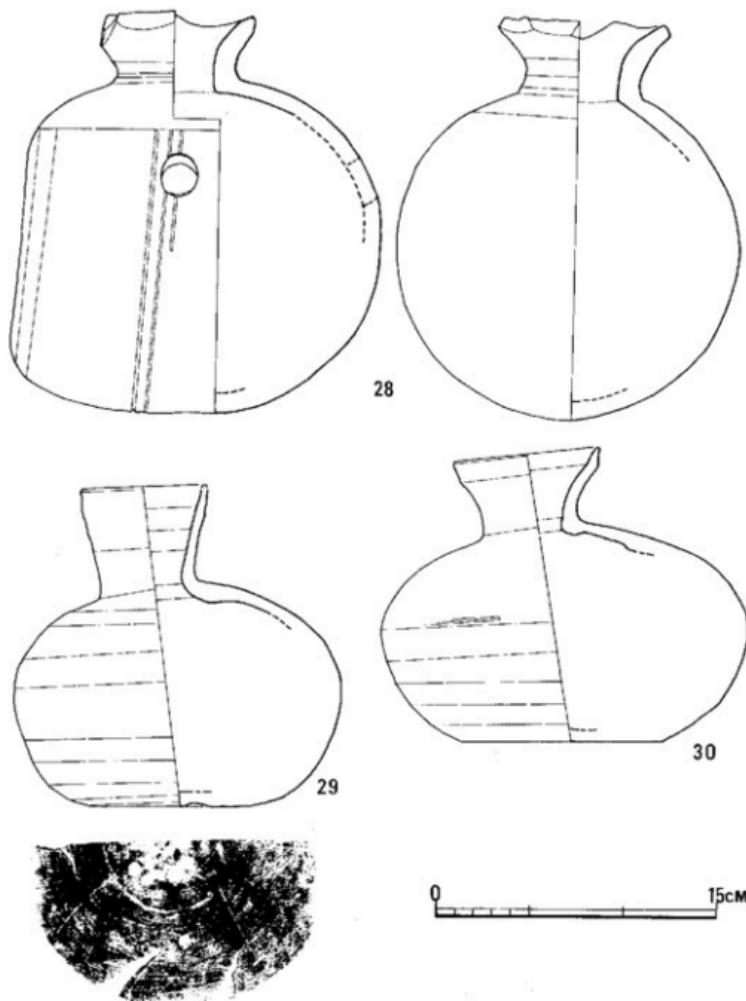


Fig. 35 II-1号墳遺物実測図 III (3)

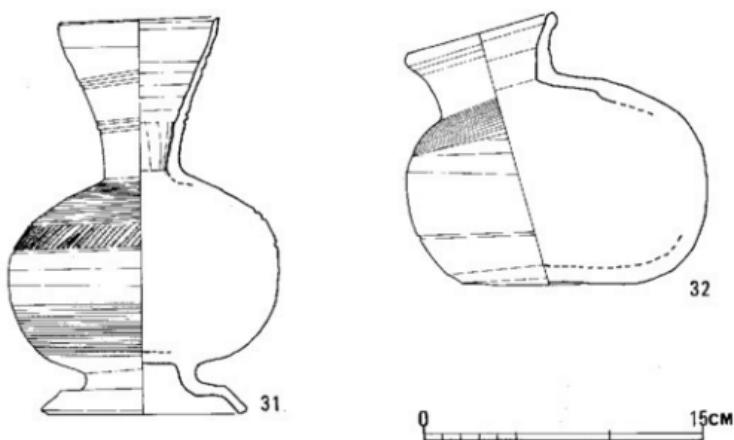


Fig. 36 II-1号墳遺物実測図 IV (36)

を多く含む。焼成はあまく、いわゆる生焼けの須恵器である。蓋のII類とセットである。26の高杯も含めて、この一群は成形技法・胎土・焼成は非常に類似する。

**高杯 (Fig. 34-26)** 1個体出土した。杯IV類に外開きになる脚部を付したもので、整形・胎土・焼成は前述の通りである。口径10.2cm、器高9.7cm、脚端径8.0cm、杯部体部と脚部下半にラセン状の凹線が2条の凹線の如くめぐる。杯部の体部から底部にかけてカキ目調整が施される。脚の基部にはシボリの痕跡を残す。

**翫 (Fig. 35-28)** 異形の翫である。器形は提瓶形をとる。体部前面のふくらみは大きい。背面は平坦である。側面の上半に一孔が穿たれる。口頭部は強く外反するが口縁部を欠失する。頸部にはシボリの痕跡が認められる。体部前面、中央部を中心として同心円状にカキ目調整が行われる。孔に近く三本の凹線が複位にめぐる。背面は切り離し後カキ目調整が行われるが指による調整の凹凸が残る。背面中央にヘラ記号が認められる。体部上面および頸部は横ナデによって整えられる。

**長頸壺 (Fig. 36-31)** 球形の体部に脚台・細長い口頭部を付したもので1個の出土がある。口頭部は細長く上方に次第に外反しながら伸びる。口縁部はやや立ち上がり口端部は内傾させておさめる。脚台は二段につくられ、脚端部は外反し安定感がある。頭部には上下2ヶ所に2条を単位とする凹線がめぐる。体部の肩部は2本の凹線をめぐらして区画し、その間は横目の刺突文によって埋める。頭部の基部にはシボリの痕跡が明瞭に残る。頭部から肩部の上の凹線まではカキ目調整、胴部下半も同様のカキ目調整が施される。他はナデによる調整であ

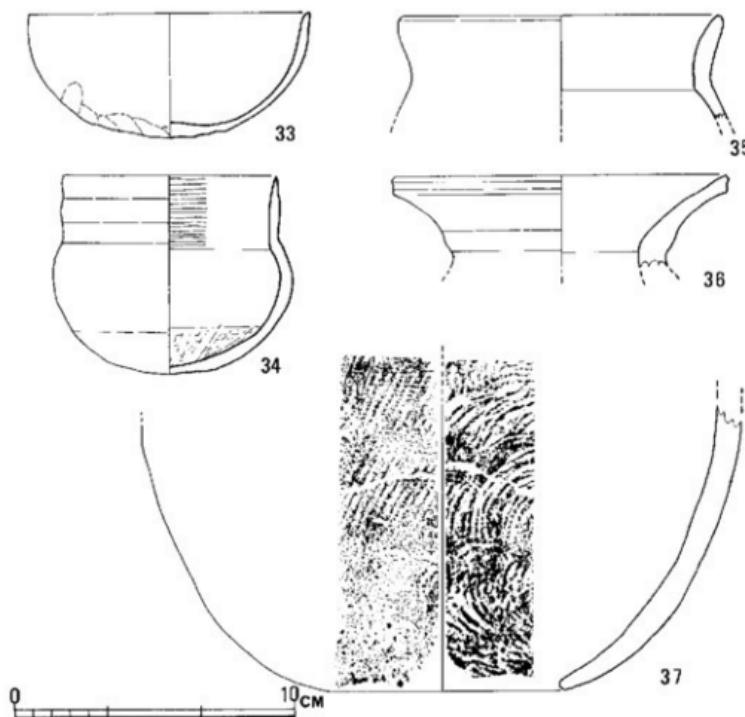


Fig. 37 II-1号墳遺物実測図 V (%)

る。口径8.6cm、器高21.1cmである。

**平瓶** (Fig.34-27 Fig.35-29・30 Fig.36-32) 4個体の出土がある。

27・口頸部は漏斗状をなし体部上面の中心から外れて接合される。口縁部直下の外面に1条の凹線をめぐらす。体部上面は扁平で底部は丸くなる。頸部および内面は横ナテ調整で体部はカキ目調査である。口径5.6cm、器高10.4cmの小形品である。

29・口径6.8cm、器高17.1cm。口頸部は漏斗状をなし体部の中心をやや外れて接合される。体部は上面からゆるやかに湾曲し底部に至り扁平である。体部下半はヘラ削り、体部上半は横ナテによって調整する。底部は荒い切り離して、指による調整が凹凸になって残る。底部2ヶ所にヘラ記号が存在する。

30・口径7.8cm、器高15.8cm、口縁部に段がつく。頸部は体部の中心をやや外されて接合され

る。体部はゆるやかに湾曲し底部に至る。底部は平底をなし体部は扁平である。体部下半はヘラ削り、体部上半はカキ目調整痕がわずかに残る。

32・口頭部は外反し、口縁部は肥厚し段がつく。体部の中心を外れて接合される。体部上面は扁平でゆるやかに湾曲し底部に至る。体部の下半に1条の凹線をめぐらし底部は手持ちヘラ削りによって調整される。体部上半から頭部にかけてはカキ目調整が施され、他はナデによつて調整される。口径5.2cm、器高14.9cm。

**大甕** (Fig.37-36・37) 石室および周辺より破片として出土した。数個体ありそうであるが接合不可能のため不明。36の口縁部破片は復原口径18cmを計る。口縁部は頭部より強く外反し段をもっておさめる。37は器壁が厚く、胎土には多量の荒い砂粒を含み粗悪である。外面には格子目、内面は同心円文の叩きがみられる。胴径32cmを計る。底部は2次的に穿孔される。焼成不良。

#### 土 器 器

4個体の出土がある。1個体分は小破片となり復原不可能であるが短頸壺と思われる。

**椀** (Fig.37-33) 口径15cm、器高6.6cm。手づくねの土器で、口縁部は歪む。底部は手持ちのヘラ削りで、平行に荒っぽく施される。胎土は精良であるが焼成はあまり。色調は赤黄色をなす。

**壺** (Fig.37-34) 口径11.4cm、器高10.6cm、体部最大径12.8cm、口縁部と体部の境は強く屈曲せず不明瞭であるが、内面は屈曲し段をなす。内底部は放射状にヘラ削りが行われる。口縁部内側は荒い刷毛目調整、外は横方向のヘラ研磨が行われる。口縁部と一部に黒斑がみられる。

**甕** (Fig.37-35) 破片である。復原口径17.0cm。頭部と体部の境は強く屈曲せず不明瞭であるが、内側には段が明瞭で口縁部はやや肥厚する。

#### 武 器 器

**鉄鎌** (Fig.38) 3本の出土があるが共に完形を保っていない。1～3は鋒部破片、4は茎部破片である。すべてが尖根式のもので、1は片刃式の鋒部をもつ。4は1と同一個体と考えられ、棒状部と茎部の境に棘がみられる。2は鋒部が柳葉形をなす。3は鋒部は斧形である。

**刀子** (Fig.38) 2本の出土がある。共に一部を欠失する。共に平造りである。(山崎)

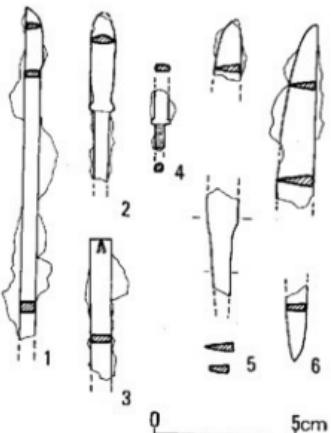


Fig.38 II-1号墳遺物実測図 VI (3/2)

## 第3章 調査の記録

Tab.3 II-1号墳出土土器計測表

(単位:cm)

類	No.	口径	器高	かえり 高	つまみ 高	胎土	焼成	色調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
杯蓋	I a 4	10.8	3.4	—	—	砂粒混	不良	黄灰	色	?	玄室右袖石付近	
	I b 1	11.0	3.6	—	—	砂粒多	不良	灰	白色	?	漢道後半部	
	I b 2	10.8	4.0	—	—	砂粒多	不良	黄	灰色	?	玄室右袖石付近	
	I b 3	10.9	3.7	—	—	砂粒多	不良	灰	黄色	?	玄室右袖石付近	
	II 5	11.1	4.2	8.8	1.1	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	II 6	11.3	4.5	9.5	1.2	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	II 7	11.3	(3.3)	9.2	欠失	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	II 8	11.4	4.2	9.0	0.9	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	II 9	11.4	4.6	9.0	1.3	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
III	III 10	10.6	(2.7)	8.6	?	砂粒混	良好	条	褐色	時計	○ 玄室前面	
	III 11	10.7	3.1	8.6	0.7	砂粒混	良好	白	黄色	時計	玄室右袖石付近	
	III 12	9.6	2.4	7.4	1.0	砂粒混	良好	黄	灰色	時計	玄室前面右壁付近	
杯身	I 13	10.4	3.8	12.5	0.8	砂粒混	良好	黑	灰色	時計	○ 漢道後半部	
	I 14	11.1	3.9	13.0	0.7	砂粒混	不良	白	黄色	?	○ 漢道後半部	
	I 15	10.2	3.9	12.5	0.7	砂粒多	良好	灰	色	時計	○ 漢道後半部	
	I 16	9.6	3.2	11.4	0.4	砂粒少	不良	黄	灰色	?	玄室右袖石付近	
	II 17	9.4	3.1	11.5	0.6	砂粒混	不良	黑色~	灰色	?	○ 玄室袖石付近	
	II 18	9.4	3.2	11.1	0.5	砂粒混	不良	灰	色	?	○ 玄室前面部	
	III 19	9.7	3.5			砂粒混	良好	黑	灰色	?	○ 漱道後半部	
	IV 20	10.8	4.2	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	IV 21	10.8	4.0	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
N	IV 22	10.5	4.5	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	IV 23	10.5	4.2	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	IV 24	10.5	4.0	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	IV 25	9.1	4.4	—	—	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
	IV 26	10.2	9.7	脚部径 8.0	脚高 5.6	砂粒混	不良	黄	褐色	時計	漢道後半部	
脚	IV 27	口徑	器高	体 最大径	—	胎土	焼成	色	調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点
	IV 28	?	21.2 + a	19.2	—	砂粒混	良好	灰	色	時計	○ 漱道後半部	
長頭 壺	IV 29	口徑	器高	体 最大径	脚底径	胎土	焼成	色	調	ロクロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点
	IV 30	8.6	21.1	14.5	11.0	砂粒混	良好	青	灰色	時計	○ 漱道後半部	

## II-1号墳

	No	口径	器高	体 容 大 径		胎 土	燒成	色 調	日 暮 回 転 方 向	火 記 号	出土地点
平瓶	27	5.6	10.4			砂粒混	良好	黑灰色	時計		溝道前半部
	29	6.8	17.1	17.4		砂粒混	良好	黑灰色	時計	○	溝道後半部
	30	7.8	15.8	19.5		砂粒混	不良	灰 色	時計		溝道後半部
	32	8.3	14.4	16.0		砂粒混	良好	青灰色~褐色	時計		溝道後半部
大形 甕	36	(16.0)	?	?		砂粒混	不良	青 褐 色			石室埋土
	37	?	?	(32.0)		砂粒多	不良	黃 褐 色			石室埋土
土師 甕	Ka	口径	器高	体 容 大 径		胎 土	燒成	色 調	-		出土地点
桶	33	15.0	6.6	-		精 良	不良	赤 黃 色	-		溝道後半部
土師 缸	34	11.4	10.6	12.8		砂粒混	良好	白青色~白灰色	-		溝道後半部
人形 甕	35	(17.0)							-		石室埋土

## 4 II-2号墳

## 1) 位置と現状

丘陵斜面と谷との境の傾斜変換線上に位置する。1号墳との距離は現状墳裾で5mほどであ

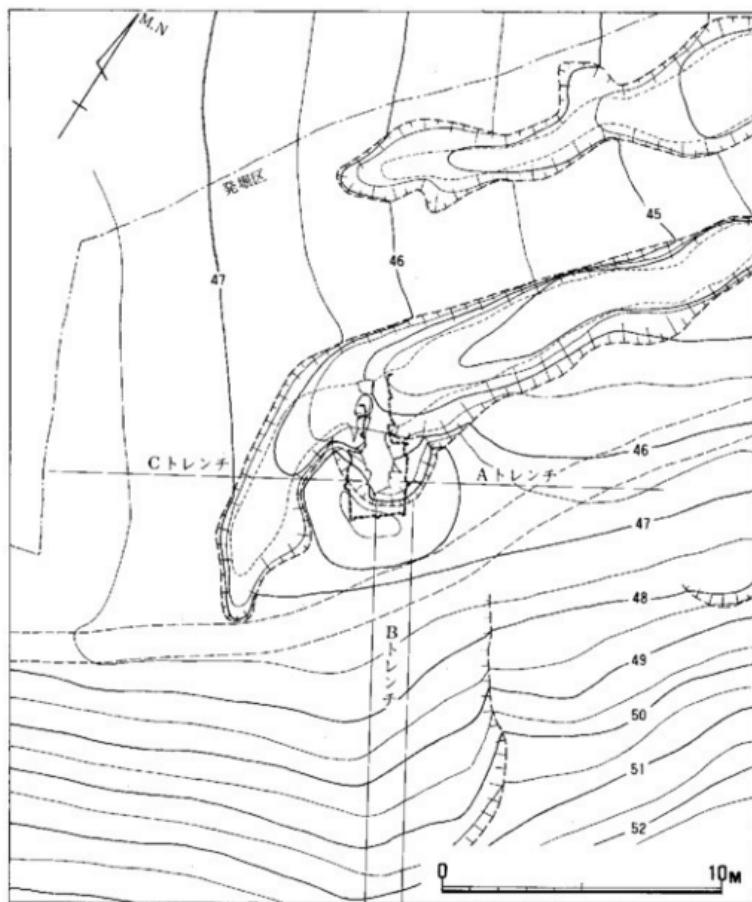


Fig. 39 II-2号墳墳丘測量図 (1‰)

る。墳丘の西側から北側を迂回する巾2~4mの谷水の流路によって、墳丘のかなりの部分が削除されている。墳丘は丘陵斜面からの流土と、谷上方からの多量の砂の堆積によって、ほとんど識別しえないほど深く埋没している。わずかに斜面上方と墳丘頂部との間に半周する凹地によって高まりを見せる程度である。墳丘上面は47.2m、西側幅で46.1mを計り、1mほどの墳丘頂部を露出しているにすぎない。

石室は天井部を欠失し、すでに大きく開口していた。また前述したように谷水の流路が石室前面を貫流し、羨道部壁石があらわれていた。

## 2) 墳丘 (Fig.40)

**地山整形** 石室は斜面等高線にはば直交して構築している。したがって古墳構築に伴う地山整形は、丘陵斜面の高い側を馬蹄形に半周する溝の掘削と、溝の内側つまり墳丘基底面の整地の二つの造作が行われている。

馬蹄形溝は約20°の傾斜で下る斜面の標高47mほどを上端として、傾斜に沿って削り出している。その範囲はI・IV区が流路によって欠失しているため不明だが、通例のように墳丘基底面を全周するものではなかろう。溝外端の東西巾12.7m、内端巾はほぼ8mほどである。

溝は傾斜に沿って掘られており底面のレベル差が著しい。最も高い部分で45.95m、I区の最も低い所で44.5mを計り、約1.5mの差がある。溝の断面形も高低差によって異なり、最も高いBトレンチでは溝と溝内側部とのレベル差がほとんどなくテラス状になる。溝内側の墳丘基底面と溝外側の地山面がほぼ一致する部分では、浅皿状断面形に掘削している。Aトレンチでは巾2.9m、深さ0.6mである。溝の内側は前述したように平坦に整地されている。傾斜に沿って南から北に徐々に下るが東西方向は水平であり、したがって墳丘基底面には墳丘築造前の地表の痕跡は認められない。

**墳丘** 墳丘は溝内側の整地面を基底にして盛土を行っている。しかし一部において、墳丘盛土端部が溝内にある所がみられ、必ずしも溝内側から盛土を行ったものとはいえないが、人情の一致は認められる。Bトレンチでは墳端と溝端は一致し、Aトレンチでは溝内には中央に墳端がある。

墳丘の盛土過程は大きく二段階に分けることができる。第1段階は石室構築における壁石の裏込め的なもの、第2段階は天井石の被覆と墳形を整えるものである。まず第1段階は石室掘り方内の裏込め後、壁石の積み上げに平行して、一段ずつ強く叩きしめながら盛り上げている。その際壁石の間隙には小石・粘土をもって充填し、安定を図っている。この段階の盛土は、石室の長軸に沿って裏込め的に行われるために、溝内側端から0.5~1mほど内側に強い傾斜で側壁の上端まで行っている。第2段階の盛土は、第1段階のそれに比してあまり硬くしまっていない。層位的にも複雑でなく一氣に行われた感をうける。おそらくは天井石架構後に第1段階

第3章 調査の記録

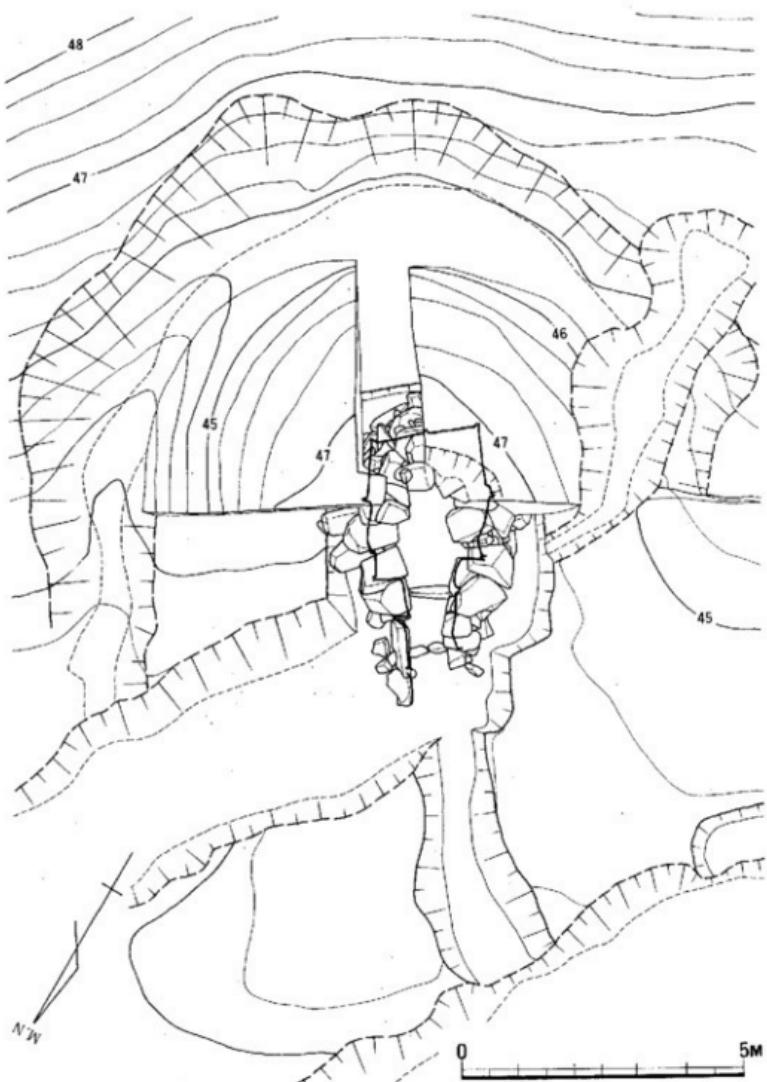


Fig. 40 II-2号墳掘り方および地山整形 (3)

盛土を厚く覆い、更に墳丘平面形を整えたと思われる。墳丘の遺存高は石室奥壁部で基底面から1.2mであるが、石室正面からの見かけの高さは2.5mほどになる。

墳丘平面形は、I・II区は不明だがIII・IV区では縦線は直線に近く、各隅が丸くカーブしている。その規模は東西8.5m、流路で流失した北側の墳堀部を墓道と墓塚の境界における南北約8.5mになって、径約8.5mの隅丸方形に近い平面形と推測される。

### 3) 横穴式石室 (Fig.⑦)

本墳の埋葬施設は主軸をN-16°-Wにとり、北東に開口する单室の両袖型横穴式石室である。天井部はすでに失われ側壁上部の崩壊による流土によって石室下半部は埋没していた。また前述したように、谷水の流路が墓道部を貫いていたため墓道部前半部の崩壊が著しい。

石室は深い掘り方内に構築され、墓道前面には更に墓道が連接される。石室の平面形は矩形の玄室に狭長な墓道を連接する通有なものである。玄室の前・後壁の壁線が主軸にやや歪みをみるが、シンメトリカルな構成を示す。現存する石室長は右壁4.00m、左壁で4.72mを計る。墓道入口部先端を右室掘り方と墓道の境界にあてると、石室長は5.30~5.40mと推定される。石室を構成する各部の石材はすべて花崗岩を使用する。

**石室掘り方** 本墳はII・III区の墳丘を除去することによって石室が崩壊する危険があったため全面除去を行わなかった。よって石室掘り方の観察はI・IV区とBトレンチに限られる。

石室掘り方は馬蹄形溝に区画された整地面のはば中央部にある。東西巾4.25m、南北長6.05mの長方形をなし、墓道との境界で一段にくびれて巾をせばめている。壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは玄室部では1.5mであるが、整地面の傾斜に沿ってしだいに浅くなり墓道との境界では0.6mになっている。石室腰石はほぼ掘り方内いっぱいに配置されている。腰石および樋石の配置にあたっては、掘り方底部を更に一段掘り下げ安定を図っている。

**玄室** 奥巾1.95m、前巾1.90m、右壁長2.40m、左壁長2.45mを計る。左右壁面は多小凹凸があり、中央部がやや広がりぎみであるがほぼ直線に近い。前・後壁ともに左壁が前方に突出している。

壁体の構成法は各壁面に類似した手法を用いる。奥壁2石、右壁3石、左壁2石の大ぶりの割石、もしくは内側のみを整えた転石を立て腰石としている。腰石から上方はやや大きめの割石を水平方向に目路が通るように横積みしている。左右側壁の腰石は垂直に立てその上から強く内傾させる。奥壁では腰石から内傾をもたせ、上位に至って強く内弯させている。奥壁と両側壁の隅角は、腰石部では奥壁を側壁が挟み込むように接合し、腰石上からは互いに重なる三角持ち送り的な手法（力石）が用いられている。天井石はすでにならないが、周壁の持ち送りの傾斜からみて、奥壁の現存最上部の上に架構されたと思われる。床面からの高さは2.4~2.5mほどであろう。

玄門部は素型の両袖を配するだけで特別な造作はない。袖石には未加工の転石を垂直に立て、左右袖巾は各0.5mを計る。前壁もすでに失われ、その構造は不明である。袖石上の壁石は、奥壁と側壁の隅角と同様に力石の使用が認められる。

床面は相当に攪乱を受け、調査時には床面を構成する敷石が中央部と周囲に残存するにすぎなかった。敷石は径20~30cmの扁平な転石を主に使用し、一部に割石を含むものであるが、石室全面に及んでいないようである。袖石から奥に0.5m位の間からは多量の土器類が出土し、この部分には敷石は行っていない。したがって床面敷石は当初から石室の3/4ほどにかぎって行われ、その前端部を整えたような痕跡は認められない。

**羨道** 前半部は流路にあたるためすでに崩壊流失し、奥部も腰石と1~2段の壁石をとどめるにすぎず、閉塞石もその痕跡を残していない。奥巾は樋石の部分で0.93mを計り、前面に向ってややせばまる感を与える。羨体の構成は、玄室と同じく大ぶりの転石を立てて腰石とし、その上にやや大きめの割石・転石を横積みにしている。床面は石室掘り方底面に埋土を行うだけで敷石は行わず、2箇所に樋石を配置している。第1樋石はほぼ羨道中央部に2石横列で、第2樋石は羨道奥部に1石で構成する。各樋石の配置にあたっては、石室掘り方底面を溝状に掘り下げ、その中に据えており、樋石の位置が一定の企画に基いた可能性を示唆する。なお羨道の床面は第2樋石を境にして玄室より0.3m低くなり墓道に連接している。

**墓道** 先端が谷の流路に接続しており、築造当初の長さを示すものか不明であるが、現長約5m、巾1.3~1.6mである。平面形は石室主軸よりだいに西にゆるくカーブしている。逆梯形

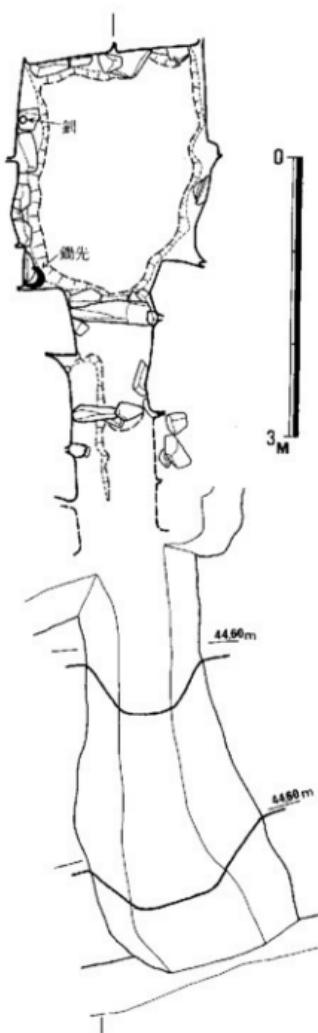


Fig. 41 II-2号墳石室基底面実測図(36)

の断面を呈し、深さは0.4~0.6mで先端にゆるく傾斜する。墓道には黒色粘質土が堆積し、その中から多量の土器が出上したが層位的に区分しうる状況ではなかった。

#### 4) 遺 物

##### 出土状況

遺物は石室内・墓道・IV区埴丘裾から出土した。玄室はすでに盜掘をうけ、中央敷石上から

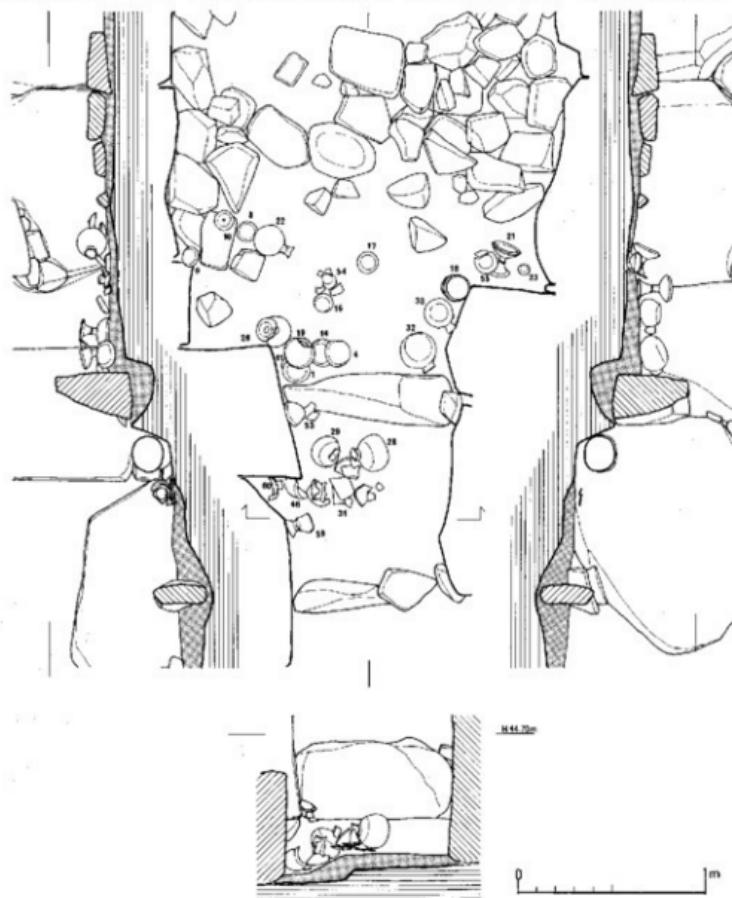


Fig.42 II-2号墳遺物出土状況図(%)

出土したものはなく、前・後壁あるいは側壁に沿って残存していたにすぎない。武器としては奥壁に沿って直刀の一部が、また左壁に沿って鉄鏃が10点ほど出土した。装身具は左壁寄りに散乱して管玉・小玉が数点、また擾乱土中から鉄訓・耳環が出土している。玄室袖石から奥に0.5mの間は敷石を行わず、一段低くして遺物の配置にあてたようである。この部分からは須恵器・土師器が原位置をとどめた状態で出土している。右袖石のまわりには高杯（18・22）、提瓶（32・33）および土師器高杯（55）が、また左袖石付近には高杯（19・20）が並び、その周囲に杯蓋の2組のセットがある。蓋（4）と杯（13）、蓋（1）と杯（11）である。袖石の間には杯（16・17）と土師器高杯（54）があり、その左側には蓋（8・9・10）と長頸壺（22）がおかれていった。その他に注意されることは大形U字形鉗先の出土状態である。これは左袖石と側壁の隅角部の床面の埋土内にあり、意図的な埋納状態であった。

葬道では掘石の間の後半部から、須恵器・土師器がまとまって出土した。中央から左側壁にかけて平瓶（28・29）、提瓶（31）が、土師器高杯（59・60）と堆（46）が出土した。

墓道内は黒色土が堆積し、その中に多量の上器片が混入していた。須恵器18個体、土師器12個体分を数える。IV区の墳丘裾と推測される所から須恵器甕の破片が多量に出土した。中型甕（40・41）、大型甕（42・43）があり、墳丘外表に配置したか、あるいは墓前祭祀に供した土器であろう。

本墳から出土した遺物は次のとおりである。

#### 装身具

鉄

耳環

玉類

#### 武 器

直刀

鉄鏃

#### 農 工 具

鉗先

#### 容 器

須恵器

土師器

#### 遺 物

装身具 (Fig.43)

鉄 (1) 錬造鉄製である。外径5.4×5.3cm、内径4.9×4.8cmの円形を呈し、断面は橢円形を示す。太

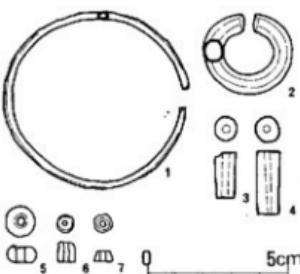


Fig.43 I-2号墳出土物実測図 I

II-2号墳

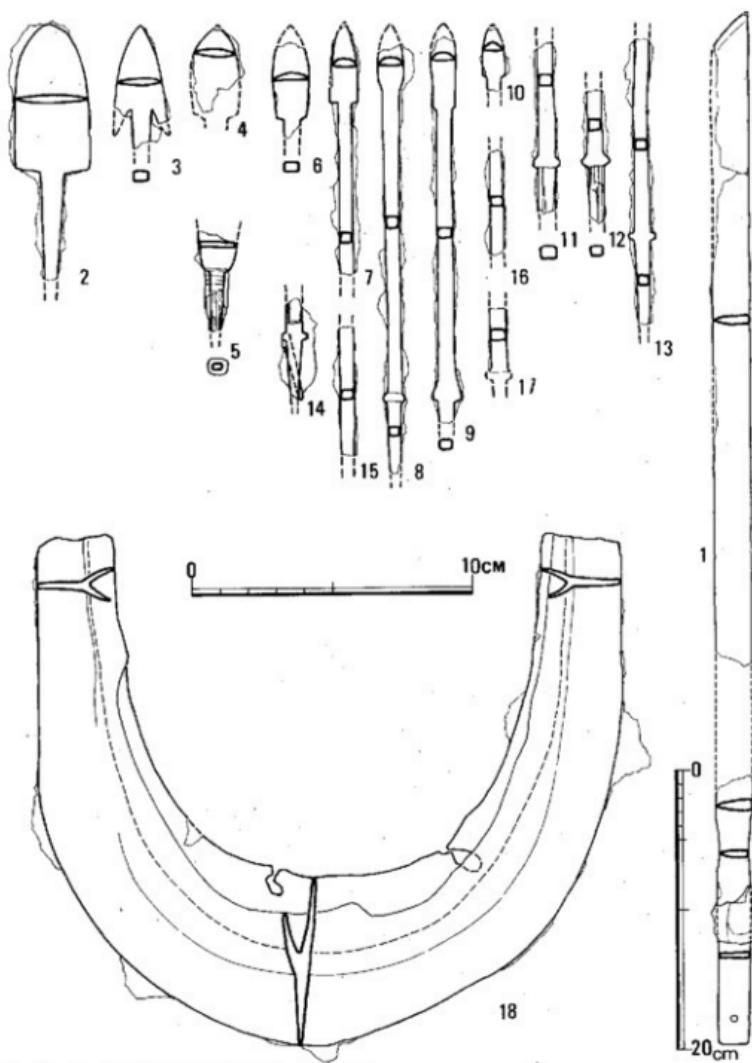


Fig.44 II-2号墳遺物実測図II (2/2, 1のみ34)

めの鉄線を弯曲させたものであろうか、鋤体は全周せず、突合させの間隙部をもつ。

**耳環（2）** 外径3.2×2.9cm、内径1.8×1.5cmの楕円形を呈し、断面形も楕円である。中央の鋼胎に銀箔をおいたもの。

**管玉（3・4）** 4は碧玉製で濃緑色を呈する。

3はやや短かめで石材は不明、色調は淡緑色である。ともに片側穿孔である。

**丸玉・小玉（5～7）** すべてガラス製である。丸玉4は胴部が球形に張り出し、扁平である。小玉は胴部上下に平滑面をもち、横断面形は方形、台形を示す。孔は中央にあって、ほぼ垂直に貫通している。

#### 武器 (Fig.44)

**直刀（1）** 奥壁に沿って鋒を東に向けて出土した。刀身の中央下部を欠失し、全長は不明、背は平造りである。茎から背に短い闊がつくが、刃部にはゆるくカーブし闊を形づくらない。茎端近くに目釘孔がある。

**鉄鎌（2～17）** ほとんど床面敷石上から遊離して検出された。破片となっており全形を知るものはない。鎌身の形態から広根式と尖根式に分ける。

**広根式（2～5）** 1は三角形式に属する。茎から直角に闊部を形づくる。2は逆棘りをもつ。3は鎌身下部を欠失し、器形を知ることはできない。これらの鎌身は鎌がなく、扁平な両丸造りである。4は鎌身上部を失うが、闊部から上方に外開するカーブ、また横断面から矛頭式に属することが知られる。この茎には矢柄材が残る。

**尖根式（6～10）** 鎌身は若干の差異をみせるが、剣先に似た形態である。方5～6mmの範被部から張り出した小さな闊をもつ。6は三角形式に、8・9は柳葉形式に類似する。8・9は茎端を失うだけで比較的全体を知ることができる。すべて片丸造りである。

他に範被部から茎部にかけての破片が8点あるが、いずれも尖根式に属するものであろう。

#### 農工具 (Fig.44)

**鋤先（18）** 刃部中央のやや尖る大型のU字形鋤先である。向耳端まで完存し、刃部巾20.8cm、全長18.1cmを計る。刃は中央から両耳部の境まで付され、耳部外側には認められない。木質部を挿入する部分は前・背二面に分かれる。背面には不整形の小孔が2個穿たれている。

#### 須恵器 (Fig.45～49)

**杯蓋（Fig.45）** 10個体出土した。口縁内面に段を付するもの（I類）、ないもの（II類）、かえりのあるもの（III類）に大別する。

**Ia類（1）** 口径14.5cm。器全体が丸みをもつ。天井部と体部の境界に凹線をめぐらす。口縁内面に弱い段を付す。天井部のヘラ削りの範囲は3/4ほどで、削り方向は時計回り。

Tab.4 卡計測表 (単位: cm)

No.	器種	長径	短径	器高	孔径	色調
3	管玉	7.5	6.7	16.0	1.2 1.5	深緑
4	"	8.0	8.4	22.4	1.4 1.6	淡緑
5	丸玉	10.1	10.0	5.6	2.6	緑
6	小玉	6.7	6.3	6.9	1.8	*
7	"	6.7	6.3	4.3	2.2	*

II-2号墳

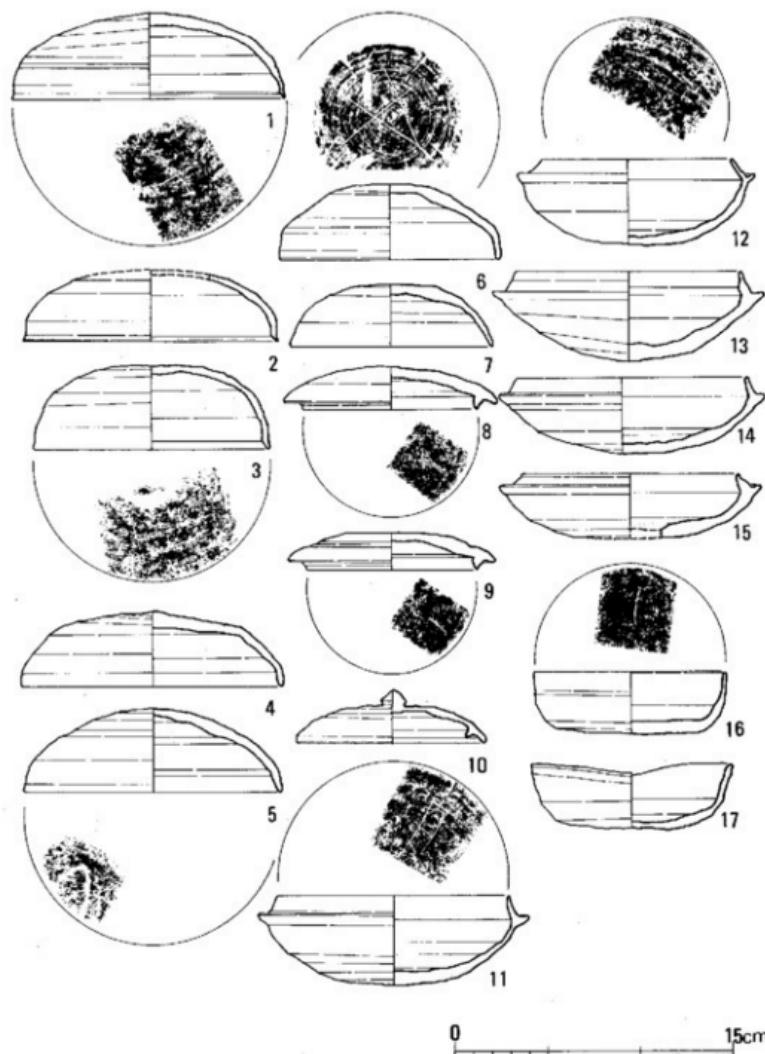


Fig. 45 II-2号墳遺物実測図 III (3/6)

I b類(2・3) 口径12.6~13.5cm。天井部と体部の境界は不明瞭で、ゆるく屈曲して下に伸びる。口縁部はともに下方に引き出し、内面に弱い段を付す。天井部へラ削りの範囲は2/3ほどで、削り方向は時計回りである。

II a類(4・5) 口径13.7~14.0cm。天井部と体部の境界はゆるく屈曲して、体部は下方に伸びる。口縁部はいずれも丸くおさめる。4の天井部中央は尖りぎみである。ヘラ削りの範囲は天井部の1/2ほどに施す。5の大井部外表にヘラ記号がある。

II b類(6・7) 口径11~11.9cm。a類に比し口径が小さく、器全体が丸みをもつ。7の天井部は中央が平坦である。天井部へラ削りは粗雑で1/2ほど範囲に施す。

III a類(8・9) 口径9.1~9.3cm。口端部径11.0~11.5cm。内面のかえりは口端部より下方に突出する。天井部はゆるやかな丸みをもつが高くなく、中央につまみをもたない。天井部調整は丁寧な静止へラ削りを全面に施す。9は天井部と口端部の境界に巾広い凹部がめぐる。かえりは基部が太く、端部は鋭くおさめる。8・9とも天井部内面に同一ヘラ記号をもつ。

III b類(10) 口径8.0cm。内面のかえりは口端より上方にある。天井部はa類に比して高く平坦面をなし、中央に擬宝珠形のつまみを付す。天井部のヘラ削りの範囲は1/2程度である。

**杯身(Fig.45)** 7個体出土した。口径・立ち上がり高によってI・II類に、また立ち上がりのないものをIII類に大別する。

I類(11・12) 口径11.0~12.4cm。12は焼き歪みのため立ち上がりが強く内傾するが、11と同一手法である。11の立ち上がりはあまり内傾せずに鋭く伸びる。受部は外方に強く伸びる。11・12とも器壁は薄い。底部のヘラ削りは2/3ほどの範囲に行なうが、削り方向は、11は時計回り、12は逆時計回りである。ともに底内面にヘラ記号を付す。12は蓋I b類の3に等しく、胎土・焼成とも類似する。

II a類(13・14) 口径12~12.2cm。立ち上がりはI類よりもさらに内傾し、受部は水平に伸びる。底部中央はふくらみがなく尖りぎみで、13はそれが顕著である。底部のヘラ削りは粗雑で1/2~2/3程度の範囲に行なわれている。

II b類(15) 口径11.6cm。立ち上がりは0.7cmと最も低い。立ち上がり基部は太く、強く内傾した後、中央で屈曲して上方に引き出す。底部は扁平で中央に狭い平坦面をつくる。底部へラ削りは2/3ほどの範囲に施すが粗雑である。

III類(16・17) 口径10.2~10.3cm。底・体部の境界はゆるく屈曲し、体部は内湾ぎみに上方に伸びる。16は体部中央に1条の凹線を、17は口縁部下に凹線をめぐらす。底部はヘラ切り離し後に粗雑なナデ調整を加える。

II-2号墳

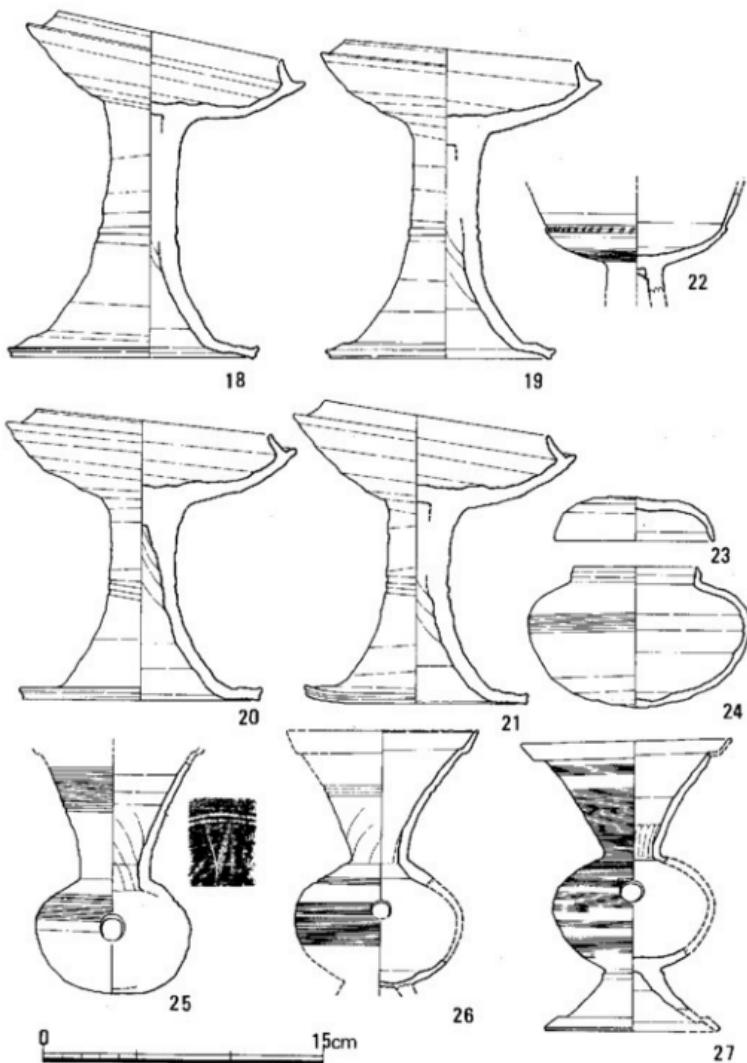


Fig. 46 II-2号墳遺物実測図 IV (1/2)

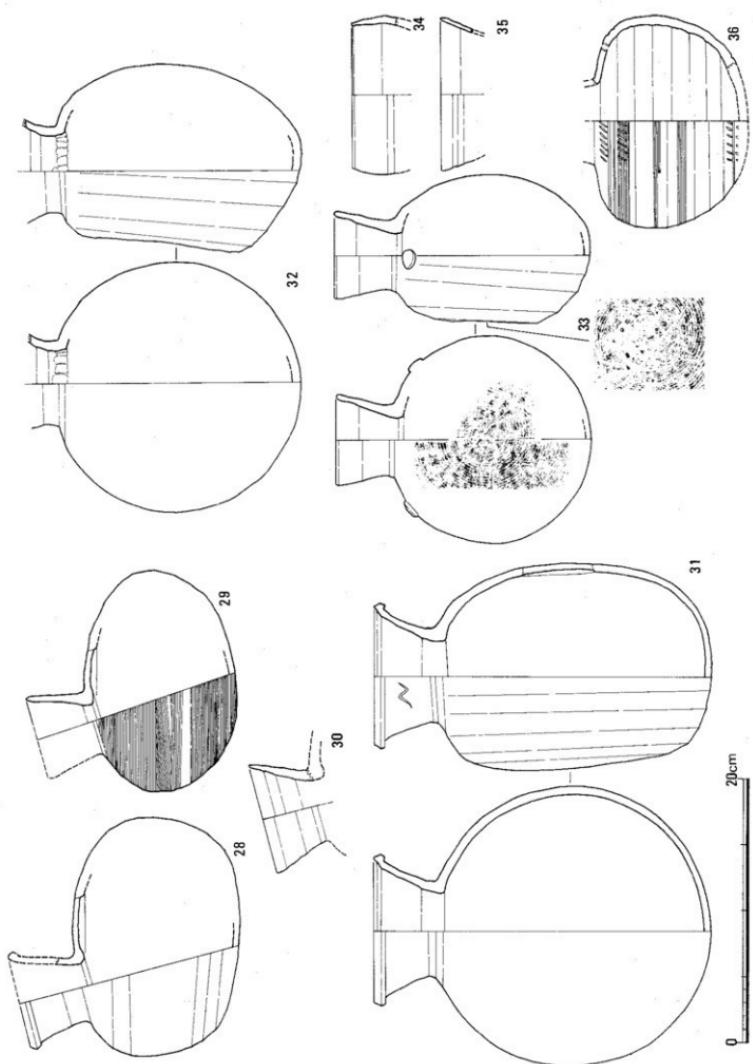


Fig. 4-17 II-2 号墳出土測図 V (1/5)

の体内面にヘラ記号があり、これは蓋IIIa類の8・9に等しく、焼成・胎土も同一である。

**有蓋高杯 (Fig.46-18~21)** 4個体出土した。いずれも同一の器形・法量・手法を示す。また胎土・焼成も等しく同一窯の製作といえる。4個体の法量は、口径12.1~12.6cm、器高15~17cmを計る。杯部の立ち上がりは0.8~1.0cmと低く内傾し、端部は丸くおさめる。受け部は外上方に短く伸びる。20・21は受部上面に凹線をめぐらす。底部ヘラ削りは1/2程度の範囲であるが、脚部接合後に回転ナデ調整を行う。脚部は筒中央に2条の凹線をめぐらす。裾部から大きく外開し、端を上下に引き出し、端面には鈍い凹線をめぐらす。脚筒内面にはシボリ痕が残る。

**無蓋高杯 (Fig.46-22)** 杯部口縁部、脚部を欠失する。底部と体部の境界に凹線をめぐらし、その上位に櫛描き列点文を加える。体部は外反する。底部は全面にヘラ削りを行った後、下半にカキ目を加える。脚筒内面にシボリ痕跡をとどめる。

**翫 (Fig.46)** 脚台の付かないもの (I) と付くもの (II) がある。

I類 (25) 口縁部を欠失する。体部上位に2条の凹線をめぐらし、その下方にはカキ目を加える。体部下半以下は不定方向のヘラ削りを施す。頭基部はII類より太めで、外反ぎみに伸びる。頭中央部に2条の凹線をめぐらす。頭全体にカキ目を加える。頭下半部にヘラ記号がある。内面のシボリ痕は顕著である。

II類 (26・27) 体部下に短い脚台を付す。26は脚台を欠失するが27と同一手法である。口径11.3cm、高さ15.3cm。26は体部肩と頭部中央に2条の凹線をめぐらす。体部中央から下方にはカキ目を加える。27は頭部から体部全面にわたってカキ目を加える。口頭基部は細く、外反して伸びる。頭部は屈曲して口縁部に統く。脚台基部には弱い段を付すが、筒部から端部にかけての形態は、口頭部に等しい。口頭部の内外面にシボリ痕が顕著である。

**有蓋直口壺 (Fig.46-23・24)** 蓋 (23) と壺 (24) はセットではない。壺は体部肩が張るやや扁平な体部に、短い口頭部を付す。口頭部は中央から内上方に引き出し、端部は丸くおさめる。体部中央にはカキ目を加える。体部下半以下には丁寧なヘラ削りを施す。蓋は、口径8.5cm、口縁内面はゆるく内傾する。天井部は全面ヘラ削りを施す。体部内面にヘラ記号がある。

**壺 (Fig.47-36)** 体底部・口頭部を欠失する。きわめて加飾された土器である。肩と下半部は張った扁平な体部に、基部の細い口頭部が続く。35の口頭部がこれに付くかもしれない。体肩部と底部近くに2条と1条の凹線をめぐらし、そこに櫛描き列点文を加える。体中央部には、間を開けてカキ目を数段加える。

**平瓶 (Fig.47)** 2個体出土した。口縁部の形態によって2類に分ける。

I類 (28) 口縁外面が肥厚して段をなすもの。口径7cm、器高17.2cm。体部は丸みをもち、ゆるく弯曲する。口頭部は体中央部をはずして付ける。体部下半以下はヘラ削り、上半は丁寧なナデ調整を施す。

II類 (29・30) 口頭部が漏斗状をなすもの。口径6.2cm、器高15.8cm。体部は上位からゆる

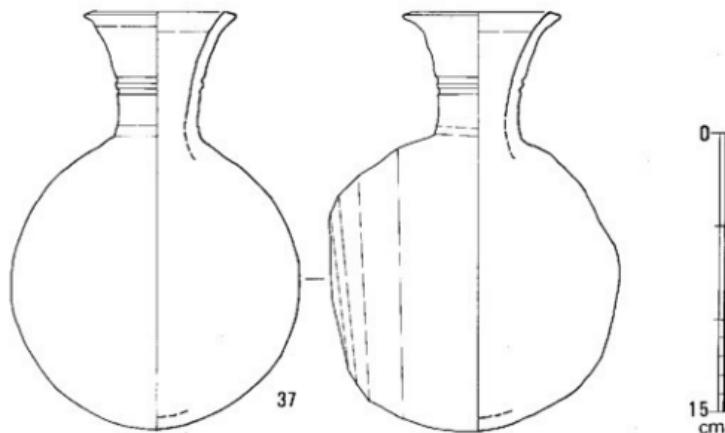


Fig. 48 II-2号墳遺物実測図 VI (3分)

く弯曲し、底部がやや尖りぎみになって算盤玉形をなす。口頸部は体部中央をはずして付し、内弯ぎみに外反して、端部は丸くおさめる。体部全面にカキ目を加える。30は、体部を欠失する破片である。口径8.4cm、29よりは直線的に外反する。

**提瓶 (Fig.47, Fig.48)** 4個体出土した。3個体は通有なものであるが、1点フラスコ型提瓶と呼ばれるものがある。器形・口縁部の形態から3類に大別する。

**I類 (31・32)** 通有のタイプで口縁外面が肥厚し段をなすもの。32は口縁部を欠失する。31は体部前・背面とも弱い膨みをもつ。口頸部は外反して口縁部凹面が肥厚する。32は中型品である。体部前面の膨みは大きく、背面は平坦で中央が外む。口縁部の形態は不明であるが、頸部の外反度からみて本類に含むものとしてよい。口頸部と体部の接合部には指頭押圧痕が顕著である。調整手法は、31は体部前面はナデ、背面にはカキ目を、32は体部全面にカキ目を加える。31の頸部中央にヘラ記号がある。

**II類 (33)** 口径6.7cm、器高19.2cmの小型品である。体部前面の膨みは少ない。口頸部は外反するが中央で弱い稜線を付した後、内弯ぎみに伸びる漏斗状を呈し端部は丸くおさめる。体部側面肩にボタン状貼付けがある。体部全面にカキ目を加え、背・前面の中央に同一のヘラ記号を付す。

**III類 (37)** いわゆるフラスコ型提瓶と称されるタイプである。口径8.2cm、器高21.8cm。I・II類に比して、体部前面の膨みが極端に大きい。口頸部も長く、ゆるく外反して端部は下外方に引き出し、端面は凹む。頸部中央に2条の凹線をめぐらす。体部背面から側面にかけてヘラ

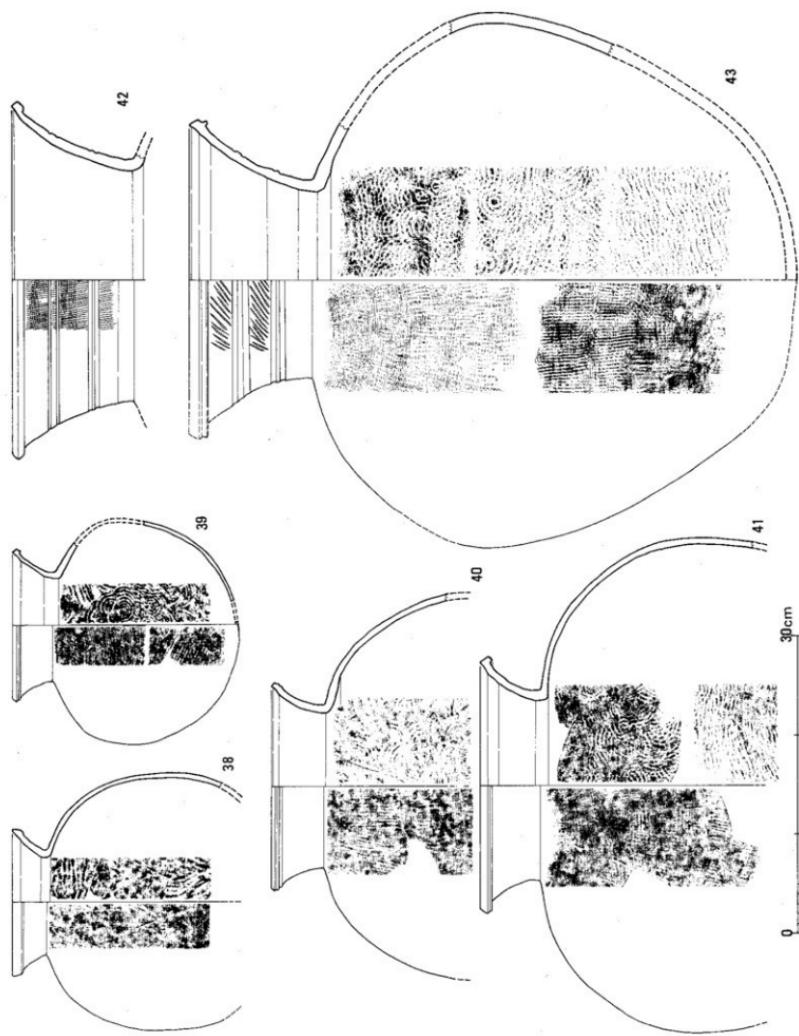


Fig. 49 II-2号墓出土物大部圖Ⅲ(3)

削りを、前面には丁寧な横ナデ調整を施す。

**小型甌 (Fig.49-38・39)** 38は体部下半を欠失する。口径14.9cm。体部の肩はあまり張らず、最大径は中央にあって、口頸部は短く外反する。口縁部外面は肥厚して、頸部との境界はゆるい段をなす。体部外面上半は平行叩き目の上を更にカキ目を加え、内面には同心円文が残る。39は、口径15cmを測る。体部は肩がやや張ってゆるくすばまる。口頸部は短く強く外反する。口縁端面下に鈍い凹線を付す。体部外面は平行叩き目文の上をカキ目を加え、内面には同心円文が残る。口頸部中央にカキ目を加える。

**中型甌 (Fig.49-40・41)** 口径20.5~24.7cm。40は体部下半を欠失する。口頸部は短く外反し、外面に肥厚した口縁端面に2条の凹線をめぐらす。体部外面は平行叩き目文の上にカキ目を加える。内面の同心円文の上に不定方向のナデを加えるが、同心円文を消却するものではない。41も、40同様体部下半部を欠失する。口頸部は短く強く外反する。口縁端部は外下方に鈍く引き出され、端面下に凹線をめぐらす。体部外面の調整は40に等しく、内面には同心円文が残る。

**大型甌 (Fig.49-42・43)** 42は体部の破片があるが接続しない。口径35cm、口頸部高12.2cm。口頸部はやや高く、基部から直線的に外開し、上位で更に外反する。口縁部は外方に肥厚し段をなす。頸部に2条の凹線を上下二段にめぐらし、その間にカキ目調整の後、縦位の描き直線文を加える。体部は肩が張った後、底部にゆるくすばまる形態で外面は平行叩き目文、内面には同心円文が残る。43は体部下半を欠失する。口径31cm、口頸部高12.2cm。口頸部は高く外反する。口縁端部は上に引き出し、下端には鈍い凸線をめぐらす。頸部には2条の凹線を上下二段にめぐらし、その間に横描き列点文を加える。体外面は平行叩き目文の上を更にカキ目調整し、内面には同心円文が残る。

**土師器 (Fig.50)**

**壺 (44)** 口頸部・底部を欠失する。肩はなめらかに下降して球形の体部をなす。体内面は上・下半部を指頭押圧、中央を横位のヘラ削りによって整える。

**壺 (45・46)** ほぼ同形・同大である。口径12~13.1cm、器高10~10.3cm。口径と体部最大径はほとんど同じか、やや口径が上まわる。口頸部と体部の境界は不明瞭だが、内面では強く屈曲して稜をなす。口頸部はゆるく内湾ぎみに外反する。体外面は丁寧な不定方向ヘラ削り、内面はナデ調整を施す。口頸部は内外面ともヘラ磨きを加える。

**甌 (47)** 体下半部を欠失する。口頸部は短く外反し、口縁端部を上方に引き出す。口頸部は内外面とも横ナデを施す。

**椀 (48・49)** 底部を欠失する。体部中央に巾広い凹部をめぐらせ、それに対応して内面はゆるく彎曲する。口縁部は内湾ぎみに外反し、縁部は翫い。口縁部および体外面は横位のヘラ磨きを施し、体内面は丁寧なナデ仕上げの後、放射状暗文を加える。49は体部下半を欠失し、

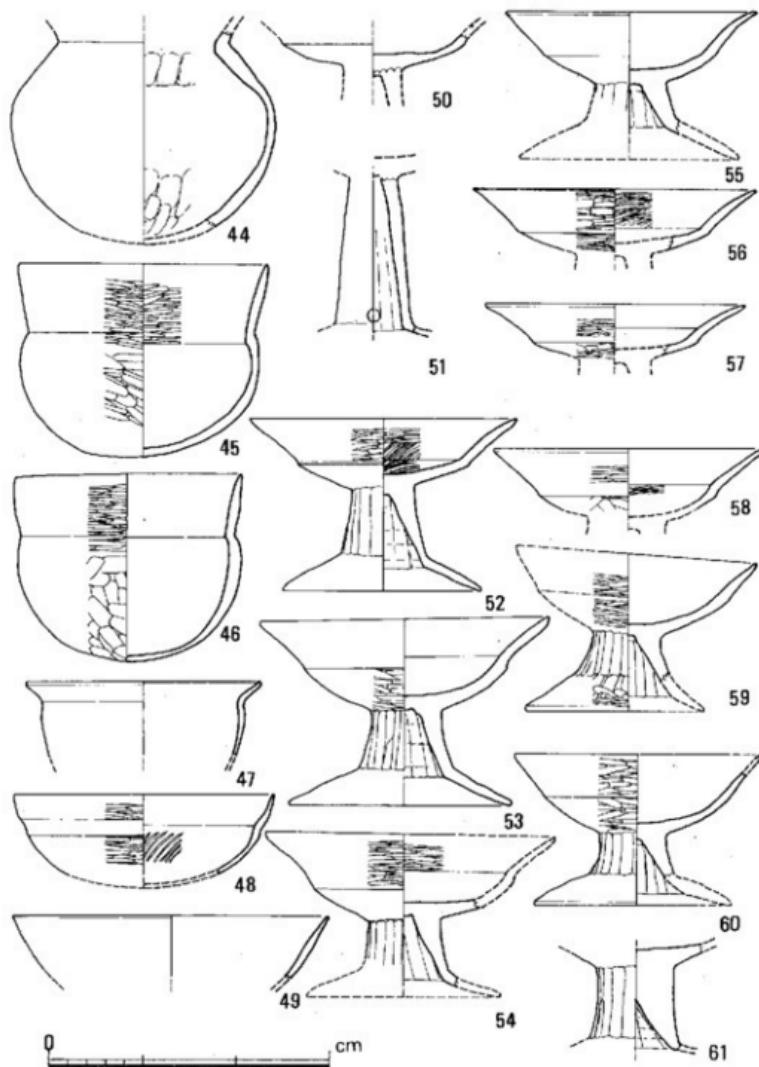


Fig. 50 II-2 号墳遺物実測図 Ⅲ (3)

楕か高杯か明らかにしえない。口径17cmを計り、口縁部端を外上方につまみ出す。

**高杯（50～61）** 土師器のなかで最も多く11個体出土した。杯および脚部の形態から4類に大別する。

**I類（50・51）** 50は杯底部のみの、51は脚筒部のみの破片である。杯底部は浅いが、II類より広く、体部との境界は強く屈曲して段をなす。脚筒部は狭長で、強く屈曲して裾部に続く。境界に近く2個の円形透しを開ける。杯と脚との接合は、杯底部中央に浅い溝をめぐらし、そこに脚基部を差し込む。脚筒外面は縦位のヘラ磨き、内面は横位のヘラ削りを施す。

**II類（52～58）** 杯部は底・体部の境界が強く屈曲し、段もしくは棱をなし、体部は大きく外反する。脚部は全体に低く、作りが雑である。口径13.3～15.5cm、器高9～9.8cm。杯部の底・体部の境界は段をなすもの（52・57・58）と棱線を付すもの（53～56）がある。脚裾は大きく外開し、雄部は丸くおさめる。55のように極端に脚筒部の短いものもある。脚部の成形・調整手法はすべて共通する。脚筒外面は縦位（上→下）のヘラ削り、内面は横位のヘラ削りである。杯底部はヘラ削りとヘラ研ぎのものがある。体外面は、器表の剥離して不明なものを除いて、すべて横位のヘラ研ぎである。内面はヘラ研ぎ（52・54・56）と横ナデによるものがある。52は底内面に放射状暗文を加えるが、他は丁寧なナデ仕上げである。

**III類（59・60）** 杯部は底・体部の境界が不明瞭で深いつくりをなし、脚部も同様に筒・裾部も不明瞭である。60は脚筒・裾部の境界はわずかに屈曲するが、59は脚基部から大きく外開する。調整手法はII類に等しく、本類の場合、脚筒外面にも横位のヘラ研ぎを施す。

**IV類（61）** 杯体部と脚裾部を欠失する。脚筒はIII類に似るが、ほぼ直立して裾部との境界は屈曲する。脚基部の器壁が厚く、裾部に向って薄くなる。脚筒外面は縦位のヘラ削り、内面は横位のヘラ削りである。中実の脚筒を作り、内部をヘラ削りで整えたようである。

Tab. 5 II-2号墳出土土器計測表(須恵器)

(単位:cm)

類	No	口径	器高	一	胎 土	焼成	色 調	口アラ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
杯蓋	1	14.5	4.6		砂粒混	良好	ねずみ色	逆時計	○	玄室	
	2	13.5	3.5		*	不良	*	*		墓道	
	3	12.6	4.4		*	良好	*	時計	○	*	
	4	14.0	4.0		*	*	灰色	*		玄室	
	5	13.7	4.5		*	*	ねずみ色	*		墓道	
	6	11.9	4.0		*	不良	灰褐色	*	○	*	
	7	11.0	3.4		*	良好	ねずみ色	*		*	
	8	9.3	2.3		*	*	黒褐色	*	○	玄室	
	9	9.1	2.0		*	*	*	*	○	*	
	10	8.1	2.6		*	*	ねずみ色	*		*	
杯身	11	12.4	4.7	14.5	1.1	砂粒混	不良	灰褐色	逆時計	○	玄室
	12	10.0	4.5	12.6	0.9	*	良好	黒褐色	時計	○	墓道
	13	12.0	4.8	14.5	1.2	*	*	ねずみ色	*	玄室	
	14	12.2	4.0	14.2	0.8	*	*	*		墓道	
	15	11.6	?	14.0	0.7	*	*	*	*	○	
	16	10.2	3.3	-	-	*	黒褐色	*	○	玄室	
	17	10.6	3.4	-	-	砂粒多	不良	淡灰色	*	*	
	18	12.3	17.0	13.3	1.0	砂粒混	良好	淡青灰色	時計	玄室	
	19	12.4	16.2	11.7	0.9	*	*	*		*	
有蓋高杯	20	12.6	15.0	13.0	0.7	*	*	*		*	
	21	12.1	15.3	12.0	0.9	*	*	*		*	
	22	?	?	?	-	*	*	灰色	?	墓道	
有蓋直口壺	No	口径	器高	底盤直径	胎 土	焼成	色 調	口アラ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
	23	8.5	2.3	-	砂粒混	良好	灰色	時計		墓道	
	34	6.6	7.5	11.8	-	*	不良	淡灰色	*	*	
壺	36	?	?	15.7	-	*	良好	淡セピア	*	*	
	I	25	?	?	8.3	-	*	灰色	*	*	
	II	26	10.2	?	9.0	-	*	灰黑色	*	*	
平瓶	I	28	7.0	17.3	18.0	12.6	*	*	ねずみ色	*	
										後半部	

## II群の土器

平瓶	I	29	6.2	15.8	16.8	12.9	*	*	*	*	*	*
	II	30	8.4	?	?	?	*	不良	浅灰色	*		墓道
提瓶	I	31	10.8	25.0	19.5	16.7	*	良好	灰褐色	*	○	漢道後半部
		32	?	?	19.0	13.7	*	*	灰色	*		*
	II	33	6.8	19.2	14.7	11.0	*	不良	灰褐色	*	○	玄室
	III	37	8.2	21.8	16.0	15.5	*	良好	深灰褐色	*		*
	小型 甕	38	14.9	?	19.5	—	*	不良	*	*		墓道
	中型 甕	39	15.0	22.8	17.1	—	*	*	淡茶褐色	*		*
大型 甕	40	20.5	?	?	—	*	*	良好	深青灰色	*	N区填埋	
	41	24.7	?	?	37.0	—	*	*	灰黑色	*		*
大型 甕	42	35.0	?	?	—	*	*	*	深灰色	*		*
	43	31.0	?	?	40.2	—	*	*	*	*		*

(土器類)

	No.	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	口フロ	底フロ	記号	出土地点
壺	44	?	?		砂粒多	良好	赤褐色				玄室
壺	45	13.1	10.3		良質	*	*				墓道
	46	12.0	10.0		*	*	茶褐色				漢道後半部
甕	47	12.5			砂粒多	*	*				玄室
	48	15.8			良質	*	赤褐色				墓道
甕	49	17.0			*	不良	灰褐色				*
	50	?	?	?	砂粒多	不良	茶褐色				墓道
高杯	51	?	?	?	*	良好	*				*
	52	14.2	9.0	11.8	*	*	*				*
	53	15.5	9.8	12.0	*	*	*				漢道後半部
	54	15.4	?	?	良質	*	赤褐色				玄室
	55	13.3	?	?	*	*	*				*
	56	15.0	?	?	*	*	*				墓道
	57	13.9	?	?	砂粒多	*	暗褐色				*
	58	14.4	?	?	良質	*	*				*
III	59	12.7	8.7	10.9	*	*	赤褐色				漢道後半部
	60	13.0	9.9	14.0	*	*	*				*
IV	61	?	?	?	砂粒多	*	暗褐色				墓道

## 5 II群の土塙

**1号土塙** II-2号墳第3区の馬蹄状溝の外にあり、長さ1.10m、幅0.80mの長方形をなす。深さは0.45m前後で、中には炭化物が充満しており壁面は赤変していた。

**2号土塙** II-1号墳第4区の馬蹄状溝外の緩い斜面にあり、長さ1.10m、幅1.02mのほぼ隅丸方形を呈する。床面はほぼフラットであるが、土壠上端は傾斜面に沿って東から西へと低くなる。最深部は0.32mである。

**3号土塙** II-1号墳の前面の中洲にあり、墓道の北側6mに位置する。長さ1.18m、幅0.66m（一部は崩れて括がる）の長方形をなす。深さは0.43m前後で、中には黒色土が充満しており、壁面は赤変して堅くなっていた。南壁上端には扁平な石が見られる。

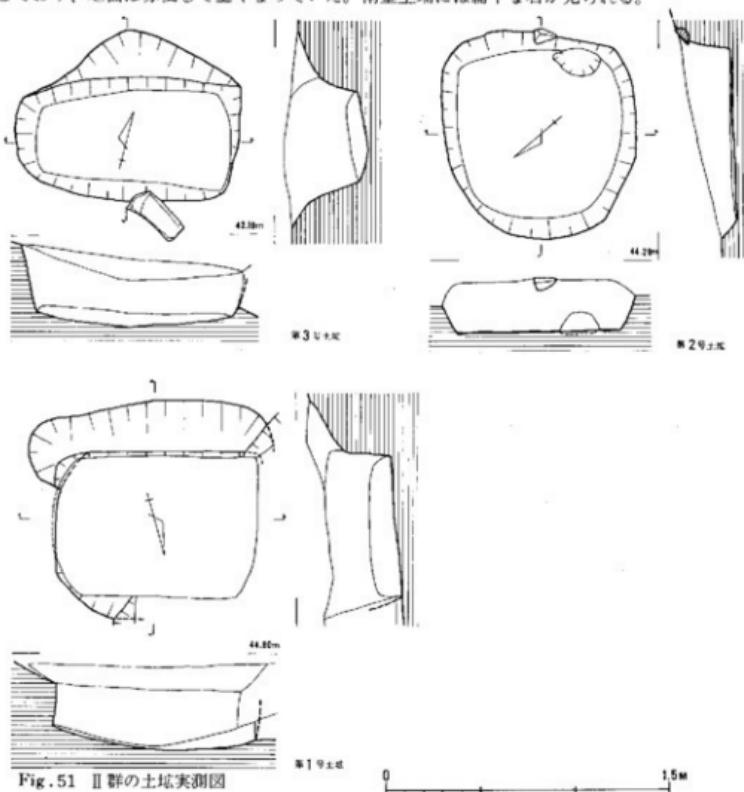


Fig. 51 II群の土塙実測図

## 6 III群の概要

本群は広石第2池に開く小さな谷の奥部から中央にかけて存在する3基によって構成される。古墳番号は検出順に、奥（西）から2・1・3号墳とし、それにIII群を冠して各々III-1号墳、III-2号墳、III-3号墳と呼ぶ。

1～3号墳は谷の中央よりやや北側に偏した微高地上に位置する。その微高地の南は一段低い平坦面があって、南端を現在の谷水が流れ、北側は低くくびれて斜面に接続している。南側の平坦面については谷流路の移動の跡であり、一部1・2号墳の削除が考えられた。したがって1・2号墳は北側斜面の傾斜変換線上に3号墳は微高地先端に築造されたと想定した。

ところが調査を進める過程で、3号墳石室と推定した花崗岩露出部は石室でなく、一定の範囲をもつ露頭であることが判明した。そして微高地先端の斜面から小型の石室が検出されたので、これを3号墳とした。また1～3号墳と北側斜面との間に深い流路が検出され古墳の立地する微高地は、南北の流路によって形成されたものであることが知られた。この微高地は砂層上に粘質土が堆積したもので前述の花崗岩露頭も、母岩の露頭ではなく谷上方から流出したものと解される。また微高地南辺は古墳築造後の流路の移動によって1・2号墳の石室・墳丘の一部が浸食によって失われていた。問題はこの微高地の形成と古墳の関係であるが、各古墳の位置、また微高地北辺の浸食などからみて、古墳築造時にはすでに形成されていたと思われる。

注意すべきものとして、II群でも認められた土塙が本群においても2基検出された。一つは2号墳の溝の西側に、もう一つは1号墳の墳丘基底面である。また2号墳の西には夜白式土器を出土した溝状の遺構も検出されている。



Fig.52 III群中における花崗岩露頭部

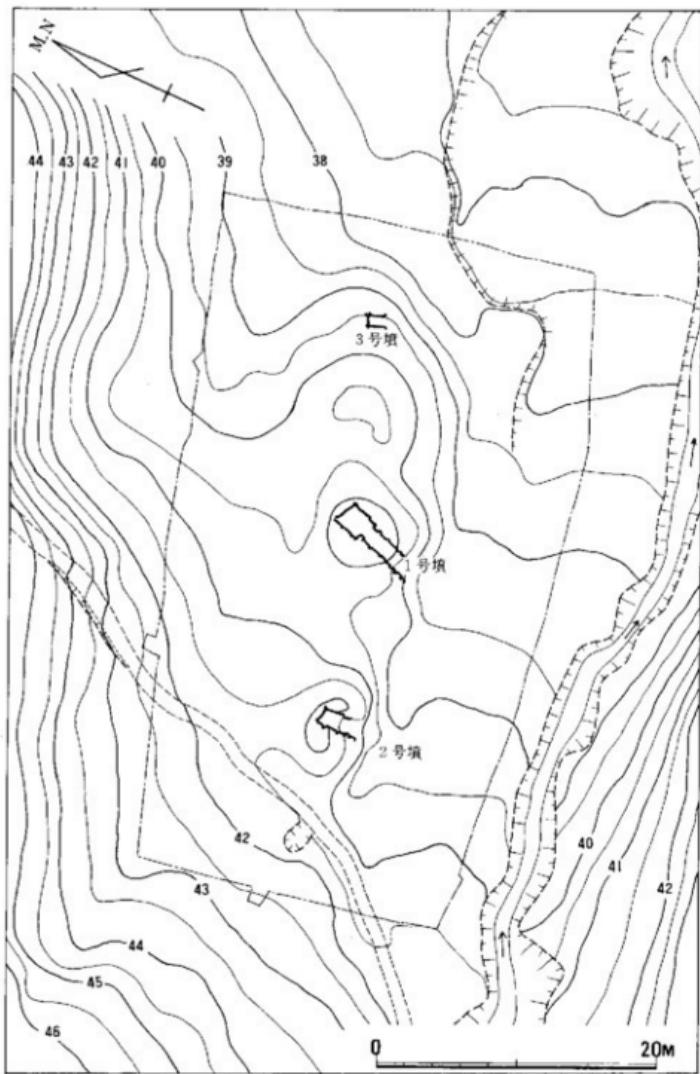


Fig. 53 Ⅲ群全体測量図(%)

## 7 III-1号墳

### 1) 位置と現状

IV群とIII群をのせる丘陵にはさまれた谷の中央部に、谷の流路によって細長く取り残されたたかまりが存在する。本墳はそのたかまりの中央部に位置する。東に花崗岩露頭を介し、約9

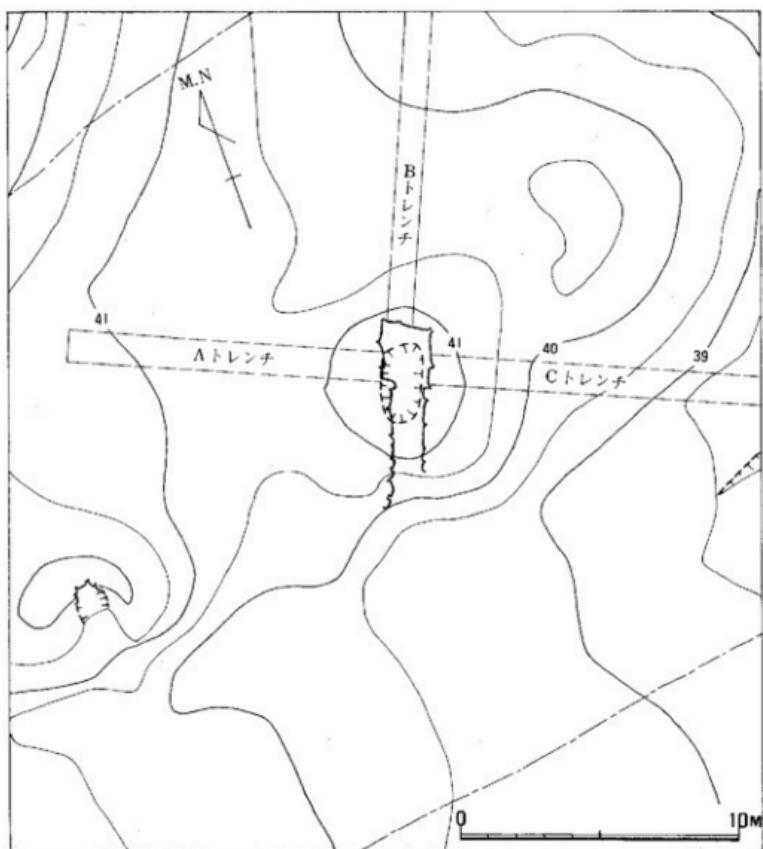


Fig. 54 III-1号墳墳丘測量図 (1/50)

m離れてIII-3号墳が、西に2m離れてIII-2号墳が位置している。古墳の前後には谷の流路が流れ墳丘の一部はそれによって削られている。谷の中央部に位置しているために丘陵上からの流土はII群のように墳丘覆うことなく円墳状のマウンドを有していた。マウンドは高さ約1.5m、径8mを有し、その頂部には石室天井の崩落により石室がのぞき、中は土砂によって埋っていた。

## 2) 墳丘

**地山整形** 本墳は谷の中央部の細長い高まりの平坦面中央に位置し、高まりの伸びに直交して構築される。東側には花崗岩の露頭が南北に横たわり、築造条件はかならずしも良くない。墳丘構築以前の地山整形にはI区からII区にかけて伸びる溝の掘削と溝と花崗岩露頭に囲まれた内側の整地がある。溝はI区からII区にかけて直線的に伸びるが、I区では墳丘の前面では浅くなり消滅し、II区に行くにしたがい溝の深さを増し、北側を流れる谷の流路によって断ち切られている。溝幅は2.85m、深さ0.45mで断面は皿状をなしている。長さ7mを確認した。III・IV区には花崗岩露頭があり、溝の掘削はみられない。溝と花崗岩露頭の内側はほぼ水平に整形されるが、IV区では東側に若干傾斜している。墳丘基底面には墳丘築造前の地表面の痕跡はとどめていない。

**墳丘** 墳丘は溝・花崗岩露頭の内側を基底面として盛土を行っている。本墳は谷の中央部に位置しているため、前述したようにII群のように流土に覆われることはないが、逆に墳丘の流失は著しかったと考えることができる。墳丘裾は、東は花崗岩露頭に限られ、西側は溝の肩と裾部としている。南・北側は谷の流路によって一部破壊される。墳丘の形成過程は大きく二段階に分けることができる。第1段階は石室構築の壁石の裏込め的なもの、第2段階は天井部の被覆と墳形を整えるものである。第1段階は墓塙内に腰石安定後、壁石の積み上げに平行して一段ずつ叩きしめながら盛り上げているが、叩きしめが強くなく周くしまってない。石と石との間隙には礫等を充填している。この段階の盛土は墓塙端より約1.5mの範囲内で墓塙上端部まで行っている。第2段階の盛土は墳丘の盛土の流失が著しく墳丘は現存高で約1.3mを有するに過ぎない。

墳丘平面形はIII・IV区では花崗岩露頭等により墳裾を明らかにするのは困難であるが、I・II区では南北の墳丘裾線は直線に近く、溝肩を裾部としている。各隅は丸くカーブする。南北の各隅は谷の流路によって破壊されるが、およそその平面形は知られる。その規模は東西8.5m、南北9mの隅丸方形に近い平面形を有している。

**墓塙と墓道** 墓塙は墳丘盛土を完全に除去し全体を観察することができた。墓道は前面を流れる谷の流路によって完全に消失している。

墓塙は地山整形されたほぼ中央に、60度の傾斜をもって掘り込まれたもので、平面形は隅丸の不整長方形をなすが、玄室部の掘り方がやや幅広く羨道部へ順次狭くなる。玄室部で幅約3.5m、

III-1号墳

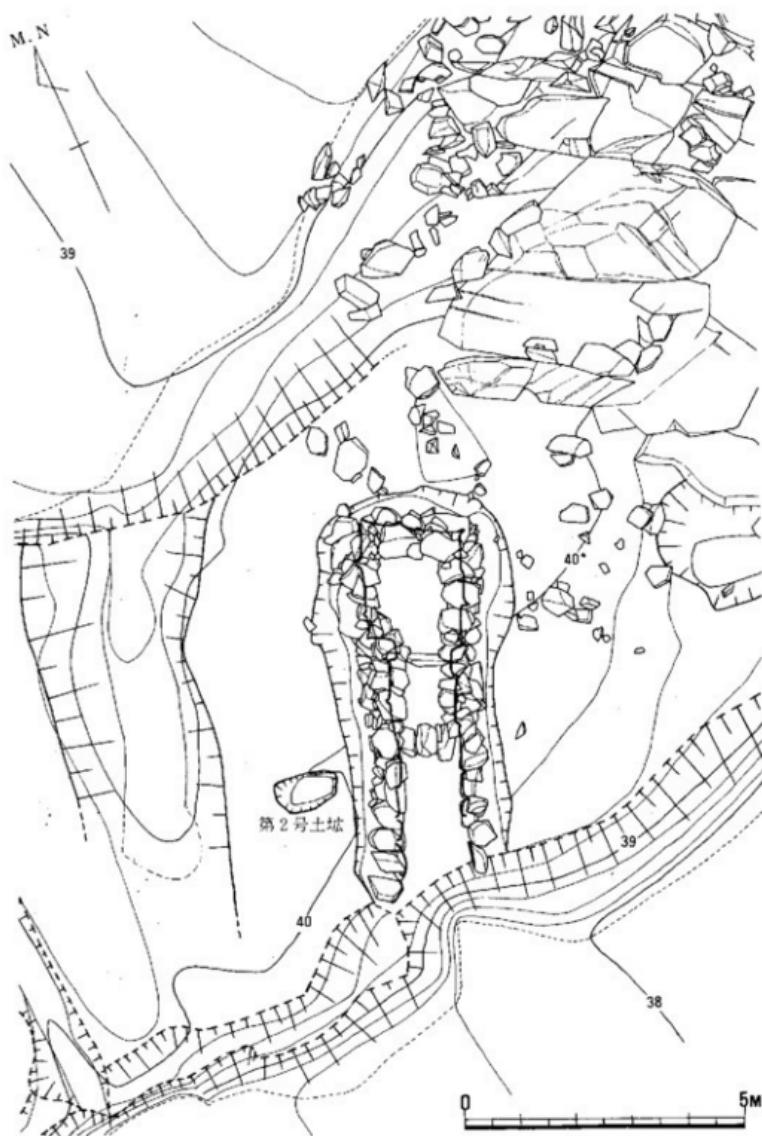


Fig. 55 III-1号墳の掘り方および地山整形

羨道部で幅約2.7m、長さ7.3m、深さは玄室部で約0.5m、羨道端では整形面と同じになる。

### 3) 横穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸方向をS- $22^{\circ}$ -Wにとり南側に向って開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井部および壁体の上半部を失っている。石室内は壁体の崩落・流失によって埋っているが、玄室内はすでに盜掘を受け、床面の敷石は数個が原位置を保つのみで、大部分は散在していた。また副葬された土器類もわずかに原位置を保つものはあるが、大部分は攪乱された埋土中に散乱していた。

石室はほぼ方形の玄室を有し、玄室の南壁の右壁にかたよった部分に細長い羨道を接続するものである。羨道部中央からやや玄室寄りに第1櫛石を根石として閉塞施設がある。石室全長は左壁で6.9m、右壁で6.1mを計るが、右壁側は流路によって羨道部の壁体が破壊されている。石室を構築する石材はすべて花崗岩で軽石あるいは胡石が使用されている。

**閉塞施設 (Fig.56)** 羨道部中央からやや玄室寄りに第1櫛石を根石とした閉塞施設が存在する。現存高で0.8mを残すのみであるが、元来は羨道部天井石と完全に密封していたものであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央部から4.6m、羨道内側で奥壁中央部から3.5mでその間約1.1mである。閉塞の石積みは通常のもので、墓道側からみると雑然とした状態の石積みであるが、内側では面をそろえ、整然とした状態に組み上げられている。下部には大きめの石

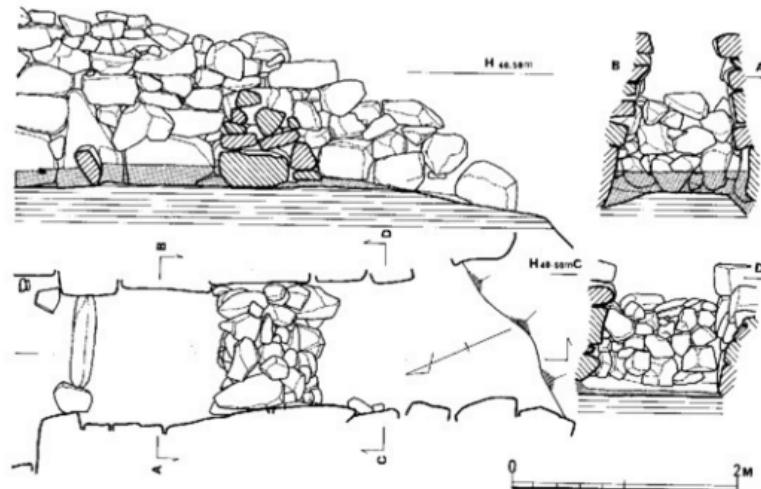


Fig.56 I-1号墳閉塞部実測図(1/2)

を用い、上部に行くにしたがい小さい石が使用される。なお第1樋石は通常のものと異なり、3個の大きさをそろえた石を並列させ前後の面をそろえたものである。

**玄室** 奥壁幅2.1m、前幅1.6m、右壁長2.1m、左壁長2.1mを計り、奥壁幅の広い台形に近いプランを示す。壁体の構築法は各壁体共に共通している。平均1×0.5m程度の大ぶりの割石もしくは面を整えた転石を、奥壁2石、右壁2石、左壁3石を横位に立てて配置し腰石としている。腰石から上方はやや大きめの転石・割石を水平方向に目路が通るように横積みをしている。奥壁・左右壁共に腰石を内傾させ、その上部も腰石の傾斜に沿って持ち送られる。奥壁と左右壁の隅角は腰石部で奥壁をはさみ込むように配置するが、腰石の上は部分的に互いに重なる三角持ち送り手法を用いている。天井部はすでに失われているが、通常の例からすれば壁体はさらに高いもので、あと数段は横積みにされていたものであろう。

玄門部は素型の両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖が0.4m、右袖0.17mと右袖幅が極端に狭く片袖に近い。袖石には未加工の転石を縦位に立てている。

床面には径20~30cmの扁平な割石・転石で敷石が施されたと考えられるが、盗掘によってほとんど破壊され痕跡を残すにとどまり、敷石の配置等については正確を期することはできない。

**羨道** 天井部・壁体上半部・羨道右壁の先端部を失うが比較的良好な状態で残っている。羨道長は左壁で4.75m、右壁で4.05mを計るが、右壁の先端が谷の流路によって破壊されているので、元来は左右長はほぼ同じであったと考える。幅は第2樋石の部分で1m、墓道側で1.4mでわずかに聞く羨道である。壁体の構成は玄室と同様で、大ぶりの転石を横位に立てて腰石として、その上に大きめの割石・転石を横積みしている。羨道部の石材は玄室部の石材に比較しやや小ぶりである。

床面には2ヶ所に樋石が配される。第1樋石は3個の割石を組み合せ閉塞石の根石として利用され、第2樋石は細長い転石と20×30cmの扁平な石材を配している。奥壁中央部からその前面までの距離はそれぞれ3.5mと2.2mを計る。

羨道部床面にはわずかに埋土が認められる。羨道部前半部では直接地山となり傾斜をもつて

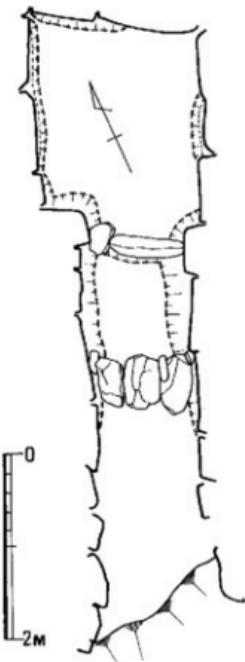


Fig. 57 III-1号墳石室基底面実測図

墓道へ移行するが、墓道は流路によって消失している。

#### 4) 遺 物

##### 遺物出土状況 (Fig.58)

石室内はすでに盗掘を受けていて、原位置を保って出土した遺物はわずかで、大部分は攪乱されていた。原位置を保つ遺物は、玄室内では左壁の中央部に密着して須恵器杯と土師器のみである。羨道後半部・第2樋石と左壁の角に、紡錘車1個と須恵器杯蓋が5個土師器1個が出土したが、発掘中に一部は盗難にあって紛失した。なお、原位置は保っていないが、羨道後半部中央に須恵器・土師器が存在し、刀子、鉄鎌があつたがこれも盗難によって紛失した。羨道前半部には、床面に密着して須恵器・土師器・

スラッグが出土した。スラッグは石室内においても2個出土している。

本墳から出土した遺物は次の通りである。

容器 須恵器

土師器

武器 鉄鎌

農工具 刀子

その他 紡錘車

鉄滓

#### 遺 物

##### 須恵器

**杯蓋** (Fig.59) 17個体出土した。天井部・体部の境が不明瞭でそのまま口縁部にいたるもの (I類)。天井部が荒いへら切り離しのままか、またはわずかにへら削りが行われ天井部に平坦面を有するもの (II類)。内面にかえりをもつもの (III類)。口縁部端が下方に短く屈曲するもの (IV類) に大別する。

I a類 (8) 口径13cm、器高5.0cm (?) で天井部が丸みをもち、天井部・体部の境は不明瞭である。口縁部はやや厚みをもち、端部は丸くおさめる。へら削りは天井部の1/2の範囲に

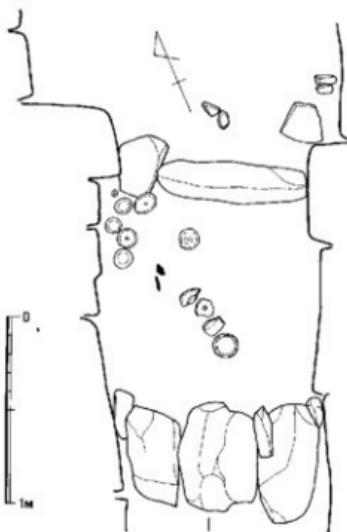


Fig.58 III-1号墳遺物出土状況図

III-2号墳

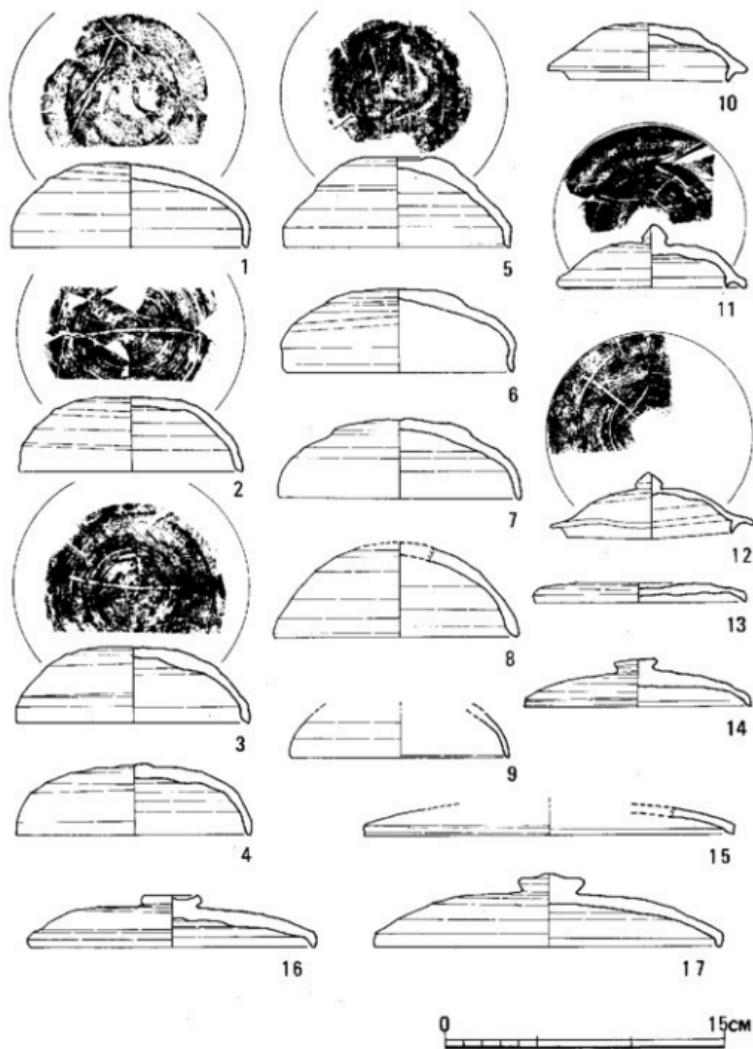


Fig. 59 III-1号墳遺物実測図 T

施される。胎土は精良であるが、焼成はもろい。

I b類（1～4） 口径12.0～12.7cm、器高3.8～4.4cm、天井部と体部の境は不明瞭、やや平坦な天井部から丸みをもちらながら体部へ移行する。口縁部はゆるやかに屈曲し下方に伸び、端部は丸くおさめる。天井部のヘラ削りは1/2の範囲に施され、ヘラ削り方向は逆時計回りである。口縁部は横ナデ、天井部内面は多方向のナデによって調整される。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好、色調は黒灰色をなす。1～3の天井部にはヘラ記号が認められる。

I c類（9） 小破片である。復原径10.7cmとやや小形である。天井部から丸みをもって口縁部に移行し、端部は丸くおさめる。胎土には砂粒を混入し焼成は良好、青灰色をなす。

II類（5～7） 天井部は荒いヘラ切り離しのままか、わずかにヘラ削りが施されるものである。天井部は平坦で、平坦面から段をもって移行し体部となるが、天井部と体部の境は不明瞭である。口縁部は屈曲し下方へ伸び、端部の内面は内傾する。口径12.1～13.0cm、器高4.3～4.8cm、5の天井部にはヘラ記号が認められる。胎土には砂粒を混入しているが精良である。焼成はもろく黄褐色をなす。

III a類（10） 内面のかえりは口端部より下方に伸びる。口縁部とかえりの間に凹線がめぐる。天井部はヘラ切り離し後わずかにヘラ削りが施される。焼きひずみがある。胎土に粗い砂を混入する。焼成は良好で青灰色をなす。口径10.6cm、かえり径8.5cm、器高3.0cm、天井部にヘラ記号が認められる。

III b類（11・12） 天井部の中央に宝珠形のつまみを有する。内面のかえりは、11が口端部と同じ、12は口端部よりやや下方に伸びる。ヘラ削りは天井部の1/2の範囲に施され、ヘラ削りの方向は逆時計回りである。共に天井部にヘラ記号が認められる。11は口径10.1cm、かえり径8.1cm、器高3.3cm。12は口径10.9cm、かえり径8.8cm、器高3.5cm、共に胎土は精良である。焼成は良好で、11は白灰色、12は黒灰色をなす。

IV a類（16） 天井部中央に扁平な宝珠形つまみを有する。つまみは中窪みになるが、中心がわずかに尖り、まだに宝珠形つまみのおもかげを残している。天井部は1/2の範囲にヘラ削りが施され、その方向は逆時計回りである。天井部、口端部の境には幅広い凹線がめぐる。口端部は短く屈曲し天井部内面には粘土紐のつぎ目がうず巻き状に残る。口径15.2cm、器高2.7cm。胎土には粗い砂粒を含む。焼成は良好で黒灰色をなす。

IV b類（13） つまみを有せず扁平な器形をなす。天井部は中窪みで、1/2の範囲にヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。口端部は短く屈曲する。内面はナデによって調整される。口径11.3cm、器高1.0cm、胎土・焼成は良好で青灰色をなす。

杯（Fig.60） 11個体の出土がある。蓋受けの立ち上がりのあるもの（I類）、高台をもつものの（III類）、その他のもの（II類）の三類に大別する。

I類（18～20） 立ち上がりは低く内傾し、19・20は端部が尖り、18は丸くおさめる。受部

## III-1号墳

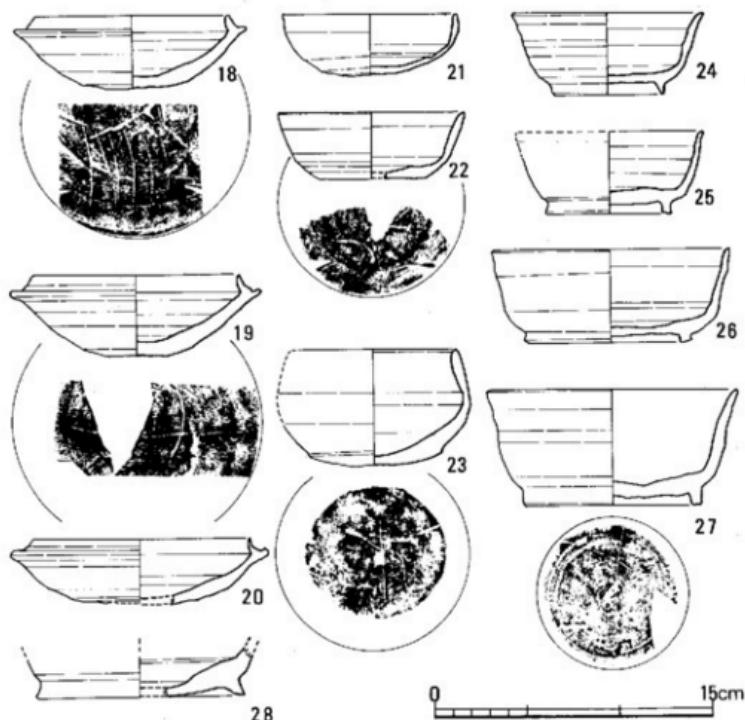


Fig. 60 III-1号墳遺物実測図 II (分)

は端部が丸くおさめられ、円線がめぐる。底部は狭い平坦面を有し、底部と体部の境は不明瞭でヘラ削りは1/2の範囲に施され、ヘラ削りの方向は逆時計回りである。18・19は底部にヘラ記号が認められる。口径10.4~11.5cm、受部径12.3~13.8cm、立ち上がり高0.6~0.9cm、器高3.4~4.3cm、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で青灰色をなす。

II a類(21) 蓋受けの立ち上がりではなく、底部は丸く、体部との境は不明瞭、口端部は丸くおさめられる。底部のヘラ削りは2/3の範囲に施され、ヘラ削り方向は逆時計回りである。焼きひずみがある。口径9.5cm、器高3.2cm。胎土には砂粒を含む。焼成は良好で黒灰色をなす。

II b類(22) 底部と体部の境が丸みをもち、体部・口縁部の外傾度が大きい。口縁端部は丸くおさめられる。底部は切り離し後、わずかにヘラ削りを行う。内外面は横ナデ調整が行わ

れる。底部にヘラ記号が認められる。胎土には粗い砂粒を含む。焼成は良好である。色調は外面が灰色、内面は赤褐色をなす。口径10.0cm、器高3.5cm。

II c 類 (23) 口径9.0cm、器高6.1cmで深みのあるものである。底部は荒い切り離しのままの未調整で段がつく。体部が張り出し、口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。全体に粗雑な横ナデ調整が施される。底部にヘラ記号が認められる。胎土には粗い砂粒を含む。焼成は不良、色調は赤褐色をなす。

III a 類 (26) 底部と体部の境は丸みをもち、体部・口縁部は外傾し立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。高台はあまり高くなく、わずかに外方へふんばる。脚端面は外方に向く。内外底に粘土のつなぎ目がうず巻き状に残る。体部・口縁部は横ナデ、内底部は多方向のナデによる調整が施される。口径12.6cm、器高5.0cm、高台径9.0cm、胎土・焼成は良好で青灰色をなす。

III b 類 (24・25・27・28) 底部と体部の境は丸みをもち、体部・口縁部は外傾し立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。高台は垂直か、またはわずかに外方へ張る短いものがつく。高台の内側はヘラ削りが施される。27には底部にヘラ記号が認められる。体部・口縁部は横ナデ、内底部は多方向のナデによって調整される。大・小があり、24は口径10.2cm、器高4.4cm、高台径6.7cm、25は口径10.0cm、器高4.4cm、高台径5.8cm、27は口径13.4cm、器高6.1cm、高台径9.5cmである。28は底部破片で詳細不明。

**高杯 (Fig.61-31)** 1個体の出土がある。口径9.8cm、器高9.5cm、脚端径7.7cm、杯部は底部と体部の境が強く屈曲し段がつき、体部・口縁部の外傾度は大きい。口縁端は尖る。脚部は杯部との接合面付近は細く、裾部はラッパ状に広がり、端部にわずかに段がつく。横ナデによって調整される。胎土は精良で焼成はあるいは。黒灰色をなす。

**甌 (Fig.61-30)** 1個体の出土がある。口縁部を欠失する。口頭部はラッパ状に開き、頭部にシボリの痕跡が認められる。体部は球状をなし、上半に一孔が穿たれる。孔より半にはヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。底部にヘラ記号が認められる。体部最大径9.5cm、現存高11.0cm。

**長頸壺 (Fig.61-32)** 1個体の出土がある。口頭部はラッパ状に開くが口縁部は欠失する。頭部にシボリの痕跡が認められる。体部は上半で強く屈曲し稜ができる。底部は垂直に短い高台がつく。全体に横ナデによって調整される。頭部・体部の上半に自然釉がみられる。体部最大径17.1cm、高台径10.9cm、復原器高21.8cm、胎土に多量の砂粒を含む。焼成良好、黒灰色～白灰色をなす。

**提瓶 (Fig.61-29・34)** 2個体の出土がある。29は口頭部を欠失する。34は口縁部破片である。29は体部の前面はあまり張らず、背面は平らである。体部前面の中央部は粘土円盤でふさいだものである。前面中央部を中心として同心円状にカキ目が施される。背面はヘラ削りに

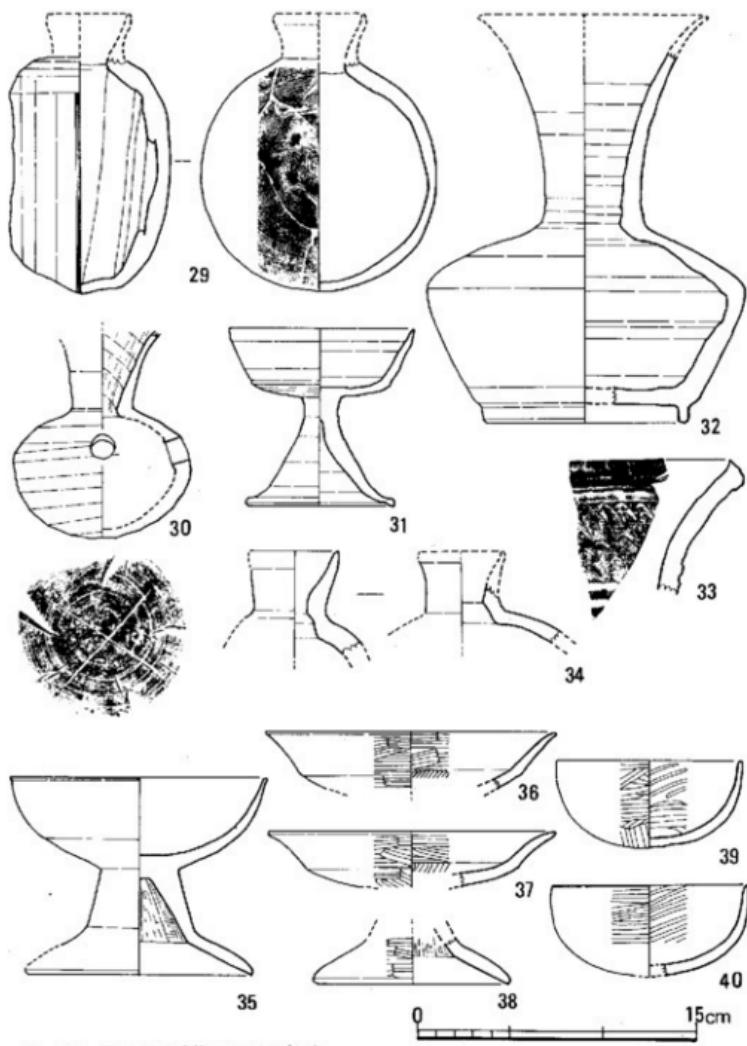


Fig. 61 III-1号墳遺物実測図III (1/3)

よって調整する。体部内面には粘土紐の痕跡がみられる。指による調整・ナデ調整がみられる。34は漏斗状になる短い口縁部で端部は尖る。胎土・焼成は良好で黒灰色をなす。

**大甕** (Fig.61-33) 口縁部の小破片で頸部に2条の凹線をめぐらし、口縁部は肥厚し段をなし、端部ははね上がり尖る。口縁下に櫛目波状文がみられる。胎土・焼成は良好で灰色をなす。

#### 土師器

**杯蓋** (Fig.61-14・15・17) 3個体あり天井部中央に扁平な宝珠形つまみを有する。大・小があり、14は口径12.1cm、器高2.5cm、15は口径19.8cm、17は口径18.5cm、器高3.8cmである。天井部は平坦で扁平な器形を呈している。口端部は短く屈曲し、端部は丸くおさめられる。14は天井部全面にヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。天井部内面は丁寧なヘラ研磨によって調整される。15・17は天井部内外面共に丁寧なヘラ研磨によって仕上げられる。胎土・焼成は良好、色調は赤黄色をなす。

**椀** (Fig.61-39・40) ほぼ同形同大で半球形をなす椀である。口端部は丸くおさめる。39・40共に外面が横位および斜位の、内面は斜位、内底部は横位のヘラ研磨が施される。39は口径9.9cm、器高4.6cm、40は口径10.5cm、器高4.8cmを計る。胎土・焼成は良好で色調は共に黄褐色をなす。

#### 高杯 (Fig.61-35~38)

4個体の出土がある。杯部の形態によって二類に分類する。

I類 (35) 杯部は底部と体部の境が不明瞭で椀形をなす。脚部は筒部が短く裾との境が強く屈曲し大きく外へ開く。端部は丸くおさめる。口径13.7cm、器高10.4cm、脚端径11.9cm、杯部・体部外面は横位、底部は斜位、内部は斜位、筒部外面は横位、裾部は横位のヘラ研磨、筒部内面はヘラ削り、裾内面はナデによって調整される。胎土は精良、焼成はややもろく、色調は赤褐色をなす。

II類 (36~38) 杯部は底部と体部の境が屈曲し稜をなし、I類に比較し杯部は浅い。脚部は筒部と裾部の境が屈曲し外へ開き縫部を丸くおさめるものでI類とは大差ない。杯部の体部は横位、底部は斜位、脚部は横位のヘラ研磨が施される。口径は36が10.5cm、37が10.3cm、脚端径は38が7.0cmをなす。胎土は精良で、焼成は良好、色調は赤褐色をなす。

#### その他の遺物

**紡錘車** (Fig.62) 2点の出土がある。

1は漢道後半部、2は玄室攪乱部の出土である。共に滑石製で2は破片である。

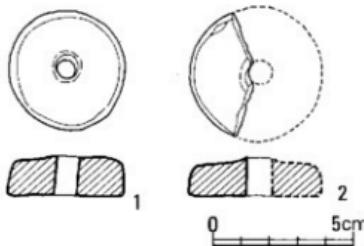


Fig. 62 III-1号墳出土物実測図 IV (3/4)

## III-1号墳

1は径4.2cm、孔径0.9cm、厚さ1.4cm。2は復原径4.8cm、孔径0.9cm、厚さ1.0cmを計る。(山崎)

Tab. 6 III-1号墳出土土器計測表

(単位: cm)

類	No.	口径	器高	かきり 種	フタ 高	胎 土	焼成	色 調	ロ ブ ロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
I a	8	13.0	1.58	—	—	良質	不良	白灰 色	時計	○	石室 墓土	
	1	12.7	4.4	—	—	砂粒混	良好	黑褐 色	時計	○	石室 墓土	
	2	12.0	3.9			砂粒混	良好	黑灰 色	時計	○	石室 墓土	
	3	12.5	4	—	—	砂粒多	良好	黑灰色~青灰色	時計	○	玄室	
	4	12.6	3.8	—	—	砂粒混	良好	黑灰 色	時計	○	石室	
	9	(9.5)				砂粒混	良好	青灰 色	?		I 区溝	
杯蓋	5	12.1	4.8	—	—	良質	不良	白黄 色	時計	○	玄室	
	6	12.2	4.5	—	—	良質	良好	赤褐色~黃褐色	?		石室	
	7	13.0	4.3	—	—	良質	不良	黄褐 色	逆時計		石室 墓土	
III a	10	10.6	3.0	8.5	—	砂粒混	良好	青灰 色	逆時計	○	浅道部埋土	
	11	10.1	3.3	8.1	—	良質	良好	白灰 色	時計	○	石室 墓上	
III b	12	10.9	3.5	8.8	0.9	良質	良好	黑灰 色	時計	○	玄室	
	16	15.2	2.7		0.6	砂粒混	良好	黑灰 色	時計		浅道閉塞石上	
II	13	11.3	1.0	—	—	良質	良好	青灰 色	時計		石室	
	No.	口径	器高	受部徑	ぎわいか り高	胎 土	焼成	色 調	ロ ブ ロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
	18	10.4	3.9	12.3	0.6	砂粒多	良好	黄灰 色	時計	○	石室	
	19	11.0	4.3	13.3	0.9	砂粒多	良好	青灰 色	時計	○	石室	
	20	11.5	3.4	13.8	0.6	砂粒混	良好	黑灰 色	時計		石室	
	H a	21	9.5	3.2	—	砂粒混	良好	黑灰 色	時計	○	玄室	
II b	22	10.0	3.5	—		砂粒混	良好	灰色~赤褐色	時計	○	石室	
	H c	23	9.0	6.1	—	砂粒混	不良	赤褐色	時計	○	石室 墓土	
杯身	類	No.	口径	器高	高台様	高台高	胎 土	焼成	色 調	ロ ブ ロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点
	III a	26	12.6	5.0	9.0	0.4	良質	良好	灰 色	?		石室
		24	10.2	4.4	6.7	0.7	砂粒混	良好	灰 色	?		石室
		25	10.0	4.4	5.8	0.7	砂粒混	良好	黑灰 色	時計		石室
	III b	27	13.4	6.1	9.5	1.0	砂粒多	良好	青灰 色	?	○	石室
		28	?	?	11.1	0.9	良質	良好	白灰 色	?		前庭部
高杯	No.	口径	器高	脚端径	脚 高	胎 土	焼成	色 調	ロ ブ ロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
	31	9.8	9.5	7.7	—	良質	不良	黑灰 色	?		II 区溝付近	
鉢	No.	口径	器高	底最大径	—	胎 土	焼成	色 調	ロ ブ ロ 回転方向	ヘラ 記号	出土地点	
	30	?	11 "	9.5	—	砂粒混	良好	黄灰 色	時計	○	浅道前半部	

## 第3章 調査の記録

長類	類	No	口径	器高	受部径	脚底径	胎土	焼成	色調	ロクロ	回転方向	ヘラ	出土地点
壺		32	?	21.6	17.1	10.9	砂粒混	良好	黒灰色~白灰色	?			石室
提瓶		29	?	12.5	12.6	—	砂粒混	良好	黒灰色	時計			石室埋土
		34	14.8	?	?	—	良質	良好	灰色~白灰色	?			石室埋土
大型 瓶		33	?	?	?	?	良質	良好	黑色	?			漢道前半部
	類	No	口径	器高	つまみ 高	—	胎土	焼成	色調	ロクロ	ヘラ 回転方向	記号	出土地点
土師		14	12.1	2.5	0.6	—	良質	良好	赤黄色	時計			玄室
杯蓋		15	19.8	?	?	—	良質	良好	赤黄色	—			石室
		17	18.5	3.8	1.0	—	良質	良好	赤黄色	—			石室埋土
土師		39	9.9	4.6	—	—	良質	良好	黃褐色	—			玄室埋土
楕		40	10.5	4.8	—	—	良質	良好	黃褐色	—			玄室埋土
	類	No	口径	器高	脚底径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ	ヘラ 回転方向	記号	出土地点
土師 高杯	I	35	13.1	10.4	11.9	5.5	良質	良好	赤褐色	—			玄室埋土
		36	15.6	?	?	?	良質	良好	赤褐色	—			漢道前半部
	II	37	15.4	?	?	?	良質	良好	赤褐色	—			漢道前半部
		38	?	?	10.6	—	良質	良好	赤褐色	—			漢道前半部

Tab.7 III-1号墳東側土坑出土土器計測表

(単位:cm)

		No	口径	器高	受部径		胎土	焼成	色調	ロクロ	回転方向	ヘラ	出土地点
杯蓋		1	14.3	3.4	—		砂粒混	良好	暗褐色	時計	○		土 坑 内
		2	14.8	4.5	—		良	良好	青灰色	逆時計			土 坑 内
杯身		3	13.0	4.1	14.9		良	良好	青灰色	逆時計			土 坑 内
		4	10.4	3.7	12.6		砂粒混	良好	青灰色	—			北側流路

## 8 III-1号墳東側の土塙と出土遺物

## 1) 遺構

III-1号墳東側埴籠より約2m離れて不整形の土塙が存在した。その保存状態は悪く、隣接する花崗岩の露頭からの転石等によって上縁は著しく破壊されていたが、底がかろうじて原形を保っていた。それによってこの土塙を復原すると幅約80cm、長さ130cmの長方形で底は舟底状をなす土塙であったことが知られる。内部より須恵器杯1個体、蓋2個体が完形で出土していて土塙墓であった可能性が強い遺構である。

## 2) 遺物 (Fig.63)

須恵器3個体がある。蓋が2個、杯1個がある。

1は蓋で丸味をもった天井部からゆるやかに口縁部にいたり、天井部と体部の境は不明瞭である。器高は高くならず扁平である。口縁端部は丸くおさめる。ヘラ削りは天井部の2/3の範囲に施され、ヘラ削りの方向は逆時計回りである。内面にヘラ記号が認められる。口径14.3cm、器高3.4cmで、胎土には砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗褐色をなす。

2も1と同様の器形をなすが、やや器高が高く口径14.8cm、器高4.5cmを計る。ヘラ削りは天井部の1/3の範囲に施し、ヘラ削りの方向は時計回りである。口端部はへうて面取りがなされる。胎土・焼成は良好で色調は青灰色をなす。

3は2とセットになるもので、胎土・焼成・色調は2と同様である。蓋受けの立ち上がりは高くない。受部端は丸くおさめる。ヘラ削りは1/2の範囲に行われ、ヘラ削りの方向は時計回りである。口径13cm、受部径14.9cm、器高4.1cmを計る。

4はIII-1号墳北側の流路より出土したもので所属古墳は不明。口径10.4cm、受部径12.6cm、器高3.7cmを計る。底部はヘラ起こしのままで、内底部に叩きがみられる。立ち上がりは低く内傾する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好、色調は青灰色をなす。

(山崎)

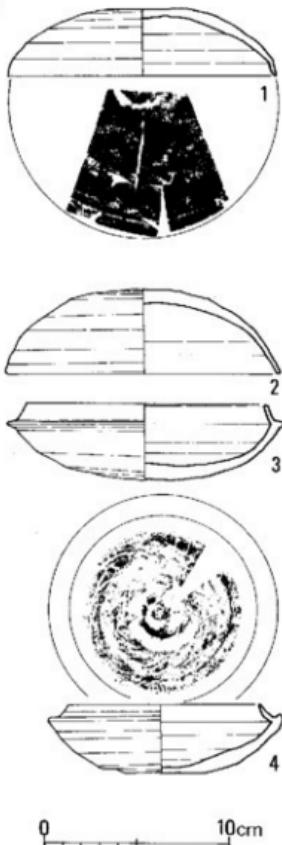


Fig. 63 III-1号墳東側土塙遺物実測図

## 9 III-2号墳

## 1) 位置と現状

本墳は田群の立地する谷間の微高地の一番奥（西）に位置し、西側の墳丘基底面で標高39.5

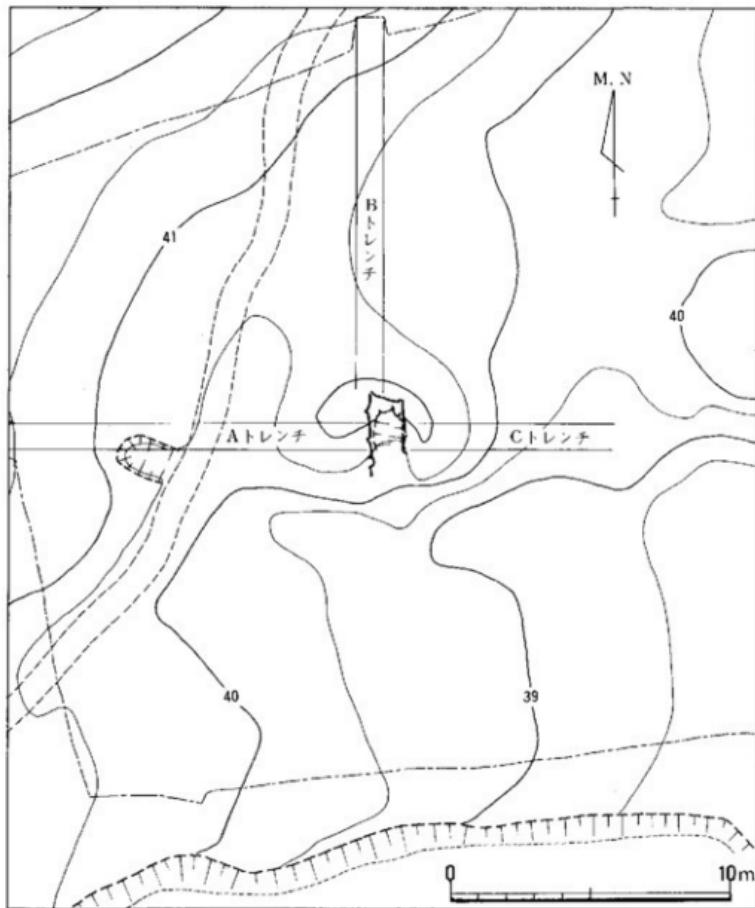


Fig. 64 III-2号墳墳丘測量図 (1/200)

mを計る。古墳の西側から北側にかけては、山稜の裾部が延びて、小道を境としてその傾斜が緩くなる。南側は段落ちがあり、花崗岩の転石が多く見受けられた。

古墳は発見時にはすでに石室が陥没しており、玄室の一部が見えていた。またその陥没部を中心として、墳丘と想定される円形状の高まりが明瞭であった。発掘の結果、谷水の流路により矢道部をすでに流失し、玄室のみを残した横穴式石室を埋葬施設とする円墳を検出した。

## 2) 墳丘

**地山整形** 石室は山稜から延びる傾斜面の等高線にはば平行に構築している。このため古墳西側の高まりを、幅2.5~3.0m、深さ0.5mの「U」字状の溝を等高線に平行に開削して切り離す。溝の底は中央部が高く、南北がそれぞれ低くなる。南側では溝が前庭部までまわると考えられるが、谷水の流路によって失われている。北側でもやはり谷水の流路で断ち切られる。さらに古墳東側には、幅1.0m弱、深さ0.25mの浅い溝を南北に通し、区切りをつける。この溝は南側が深く、北側に行くにつれ幅・深さとも小さくなり、消滅する。やはり南側では前庭部にまわると想定される。

この東西の溝に挟まれた幅7.5mの墳丘基底面にあたる部分は、削平し整地され中央部がやや高く、南北にわずかに傾斜するものの、ほとんど平坦面をなす。したがって墳丘築造前の地表の痕跡は認められない。

**墳丘** 墳丘は東西の溝に挟まれた整地面を基底として盛土を行っている。西側では一部墳丘盛土の裾が溝の中に入り込むが、東側では盛土は溝端とほぼ一致する所より行われ、溝が古墳築造の企画の際より盛土を行うためのひとつの基準となっていたことを窺わせる。

墳丘形成のための盛土は、石室が小型のためか複雑ではない。まず石室構築の際の砾石の裏込め・固定を行う。砾石裏面の間隙には、小石・粘土を充填し、それに併行して石室掘り方を埋める。しかし石室掘り方が浅いこともあって、余り細い層序は見せず、また埋土もそれほどしまりをもたない。石室掘り方がほぼ埋った段階から盛土は一気に行われるようで、層の幅・厚みも増す。しかし本米的にはBトレンチに見られるように、石室上段部の裏込めを兼ねたかなりの傾斜をもった盛土が行われたと考えられる。以上、石室を裏込めし・固定することも兼ねた盛土が行われた後、墳丘の形態を整える最終的な仕上げの盛土を行う。これは全体的に一気に行われ、層位的に単純であり、各トレンチでほぼ一定の厚みをもって見受けられる。石室奥壁の床面からの現存墳丘最高部は1.5mである。

墳丘平面形はI・IV区が明瞭さを欠くが、II・III区で見る限りは、裾線が直線的である所もあるが、ほぼ半円形をなす。その規模は東西幅で8.0mである。よって元来は径約8.0mの不整円墳であったと推測される。



Fig. 65 Ⅲ-2号墳 堀り方および地山整形 (Kofun)

### 3) 横穴式石室

本墳は主軸を S - 7° - E にとる両袖の単式横穴式石室をその埋葬施設とする。石室は南に開口するが、羨道部が谷水の流路により左袖右部付近を残し他はほとんど流出しているため、天井部を失った玄室が主として現存するのみである。現存する石室は左壁3.00m、右壁1.85mである。石室の石材はすべて花崗岩を用いる。

**石室掘り方** 東西の両溝に挟まれ、削平・整地された墳丘基底面の南寄りに、基底面の等

高線と直交して石室掘り方を設ける。すでに南側を欠くが、その規模は主軸方向で現存4.2m、東西幅は2.7~3.0mである。掘り込みは上端から北側で0.7~0.8m、南側に行くにつれ浅くなり、また傾斜も緩くなる。平面形は北側すなわち奥壁背面が半円状になり、左右両線ともほぼ直線的に南側に延びるようである。石室は掘り方の内側に造られており、掘り方斜面との間にかなりの空間をみせる。掘り方内面の石室床基底面は、玄室と羨道部の境で段をもたせ、羨道部が約15cmほど低くなる。腰石の部分は安定を図るために、一段深く掘り込む。

**横穴式石室** 奥幅1.09m、左壁長2.20m、右壁残存長1.85mを計る。左右壁線はかなりの重みをみせる。

壁面の構成は、奥壁でまず大ぶりの腰石を1石置き、その上にやや小ぶりの割石を載せる。残存するのは6段目までで、腰石の間隙には小石を充填し固定する。左右両壁面の造りはほぼ同じで、0.6~1.0mの腰石を3石配置し、その上に腰石の1/2ほどの割石を積む。間隙にはやはり小石を詰め、左壁部が4段目まで、右壁部3段目まで残存する。奥壁と側壁の間には力石の使用が認められる。また、いずれの壁面も腰石から上段へ行くにしたがって、玄室内にせり出す。現存する最高所は、奥壁で床基底面から1.5mを計る。

袖石は左壁にしか残らないが、細長い割石を用いている。原位置から動いており、正確とはいえないが、約10cmほど内側にせり出る。袖石に続く羨道の石もやはり縦に細長い割石を腰石として用いている。樋石は残存しなかった。

玄室床面には、かなり扁平な小石が散乱しており、敷石が行われていた可能性が高い。

#### 4) 遺 物

**遺物出土状況** 石室の天井石がすでに取り去られ盗掘を受けた可能性があり、また羨道部が流出していることもある。石室内からの出土遺物は少なかった。わずかに玄室左袖石付近から、杯のセットおよび玉・鉄鏃を検出したにとどまった。それらが原位置を保つものであるかは明確にしがたい。

III区の南北に延びる浅い溝状遺構からは、須恵器および土師器を10個体以上検出した。須恵器は杯、土師器は高杯に限られる。この他、石室前方部の流路中より須恵器の大甕・杯、土師器などが若干出土したが、縞片のため個体数は明確でなく、図示もしえなかった。本墳から出土した遺物は次の通りである。

装身具 小玉 1

武器 鉄鏃 5

容器 须恵器 7個体以上

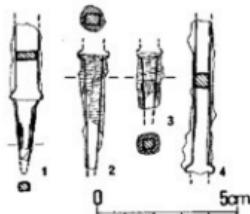


Fig. 66 III-2号墳遺物実測図 I

土師器 6個体以上

以下、出土遺物を詳述する。

#### 装身具

コバルトブルーのガラス製の小玉が玄室より1個出土したが、現物は発掘中盗難に会い、その詳細な計測値などはわからない。

武具 (Fig.66)

鉄鎌 (1~4) 図示したのはいずれも尖根式鉄鎌の籠被部から茎部である。2・3のように茎部に樹皮を巻き付けたものが残存している。この他に広根式に属する脇抜三角形式鎌が玄室より出土したが、盗難にあった。

#### 須恵器

杯蓋 (Fig.67-1~5) 実測できたのは5個体である。その形態・法量によりIa・Ib・IIに分類した。

Ia類 (1~3) 口縁部内面に明瞭な段を作るもので、口径13.2~14.0cm、器高4.1~4.3cmを計る。3は1・2に比べ口径・器高とも小形化する。1は丸い天井部からゆるい弧を描くようにして体部につながる。2は天井部がやや平坦で体部が立ち上がる。しかし、1・2とも天井部と体部の境は明瞭でない。3は凹線をもってそれを分かつ。ヘラ削りは1が天井部の2/3、2が1/2ほどの範囲に施す。1は内面にヘラ記号をもち、杯身6とセット関係をなす。

Ib類 (5) 復原口径15.1cmと杯蓋中最大であるが、天井部が平坦なため器高は4.0cmと他のものと変りがない。口縁部内面には段を持たず、口縁部を丸くおさめる。ヘラ削りは天井部の1/2強で、ヘラ削りのすぐ下には太めの凹線をめぐらす。

II類 (4) 口径13.0cm、器高4.0cmでIa・Ib類に比べやや小型になるとともに口縁部内面に段を持たない。全体的に丸みをおび、口縁端は丸くおさめる。天井部の1/2強にヘラ削りを行う。

杯身 (Fig.67-6・7) 2個体のみだが、その法量により2類に区分する。

I類 (6) 口径12.1cm、器高4.6cm、立ち上がりは受部から直線的に内傾する。受部はわずかに上方へ引き出され、体部から底部にかけて丸みをもって続く。ヘラ削りは底部の2/3ほどに施す。内面にヘラ記号を付し、杯蓋の1とセット関係にある。

II類 (7) 口径10.6cm、器高3.2cmとI類に比べ小形である。立ち上がりは内傾し、途中でつまみ上げられたように立つ。受部はやや垂れ気味で、体部との境には明瞭な段をもつ。底部は上げ底で、ヘラ記号を付す。杯蓋II類に対応するものと考えられる。

#### 土師器

高杯 (Fig.67-8~16) 図示できる土師器は高杯のみで、その形態によりI~III類に大別した。

III—2号填

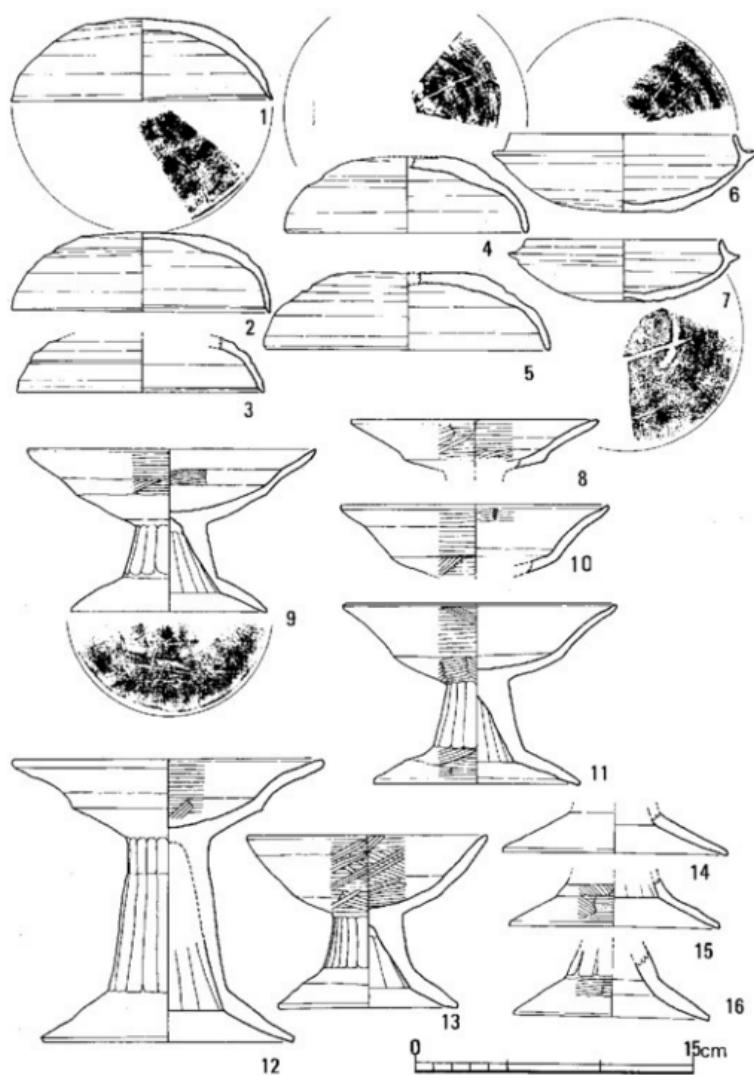


Fig.67 III—2号填遗物实测图Ⅱ(另)

## III-2号墳

I類(8~11) 杯部の底部と口縁部の境に明瞭な棱を作り、口縁部が丸く内側に入るようにして外反するもの。Ia・Id類の2類に細別する。

Ia類(8) 杯部が浅く、また口縁部が直線的に延び、口を丸くおさめる。器面は内外面ともヘラ研磨を行う。脚部は欠損する。

IB類(9~11) 口径14.3cm~15.4cm、器高8.1~9.4cmを計り、Iaに比べ口径が広くなるとともに、杯部の深さも増す。口縁部は丸く内側に入るようにして外反する。10・11は口縁端がつまみ上げられたように跳ね上がる。脚部は短く、その裾部はやや外側に向って張りをみせる。脚筒部の外面は下から上へ、内面は右から左へのヘラ削りを行う。剥落等で不明なところもあるが、いずれの高杯も杯部内外面および脚部外面にヘラ研磨による器面調整を施している。9は脚部内面にヘラ記号をもつ。

II類(12) 口径16.5cm、器高14.7cm。脚部が1'・III類の2倍以上と長くなるとともに、全体的に大型化する。杯部は形態的にはIB類とはほとんど変わらない。脚筒部は、その長さのためか二段に分けて縦のヘラ削りを行っている。脚部の広がりは余り大きくなり、直線的に脚端部に統一。杯部内外面および脚部外面はヘラ研磨を行う。器壁が厚いこともあって重量感を与える。

III類(13) 杯部が口縁部から底部に向けて丸く内傾するいわゆる椀形をなすものである。脚部は短く、脚部の開きも小さい。脚筒部の縦のヘラ削りは他の類のものに比べ細かい。杯部内外面および脚部外面にはヘラ研磨の器面調整を行う。口径13.8cm、器高9.0cm。

8~13の他に脚底径10.4~12.1cmの脚部破片の出土をみた(14~16)。I類もしくはIII類の脚部に属するものと思われるが、その対応は明確にしがたかった。(浜石)

Tab. 8 III-2号墳出土土器調査表

(単位: cm)

類	No.	口径	器高	受部様	胎	土成	色	調	方	形	面	出土地点	
杯	1	14.0	4.3		砂	粘	混	良好	灰	色	逆時計	○ 宝室 内	
	2	13.8	4.1		砂	粘	多	良好	灰	黑	色	逆時計	
	3	13.2	?		砂	粘	混	良好	淡	灰	色	?	
	II	5	15.1	(4.0)	砂	粘	多	良好	灰	黑	色	時計	
杯身	4	13.0	(4.0)		砂	粘	多	普通	灰	色	色	田 区 满	
	6	12.1	4.6	4.1	胎	土	成	色	調	方	形	出土地点	
	II	7	10.6	3.2	12.4	0.75	砂	粘	混	良好	灰	白	?
	III	8	13.2	?	?	?	?	?	?	?	?	○ 田 区 满	
脚	1	11.1	?	脚底径	胎	土	成	色	調	方	形	山土地点	
	8	13.2	?	?	微	砂	粘	混	良好	灰	黑	色	
	9	15.4	8.1	10.4	砂	粘	多	良好	赤	褐	色	○ 田 区 满	
	10	14.3	?		砂	粘	多	普通	赤	褐	色	田 区 满	
	11	14.4	9.4	11.0	微	砂	粘	混	良好	赤	褐	色	
	12	16.5	14.7	13.4	微	砂	粘	混	良好	赤	褐	色	
	13	13.8	9.0	9.6	微	砂	粘	混	普通	赤	褐	色	
	14	?	?	12.1	微	砂	粘	混	良好	赤	褐	色	
	15	?	?	10.4	砂	粘	多	良好	赤	褐	色	田 区 满	
	16	?	?	11.3	微	砂	粘	多	良好	暗	赤	褐	

## 10 III-3号墳

## 1) 位置と現状

本墳はⅢ群の所在する微高地の東端斜面に位置する。調査前は微高地東端の高まりを墳丘と推定し、北側に散乱する花崗岩を石室石材と考えたが、そこが石室でなく露頭であることが判明した。結局、花崗岩露頭部を露出する過程で当初予想もしなかった東斜面に石室を検出した。

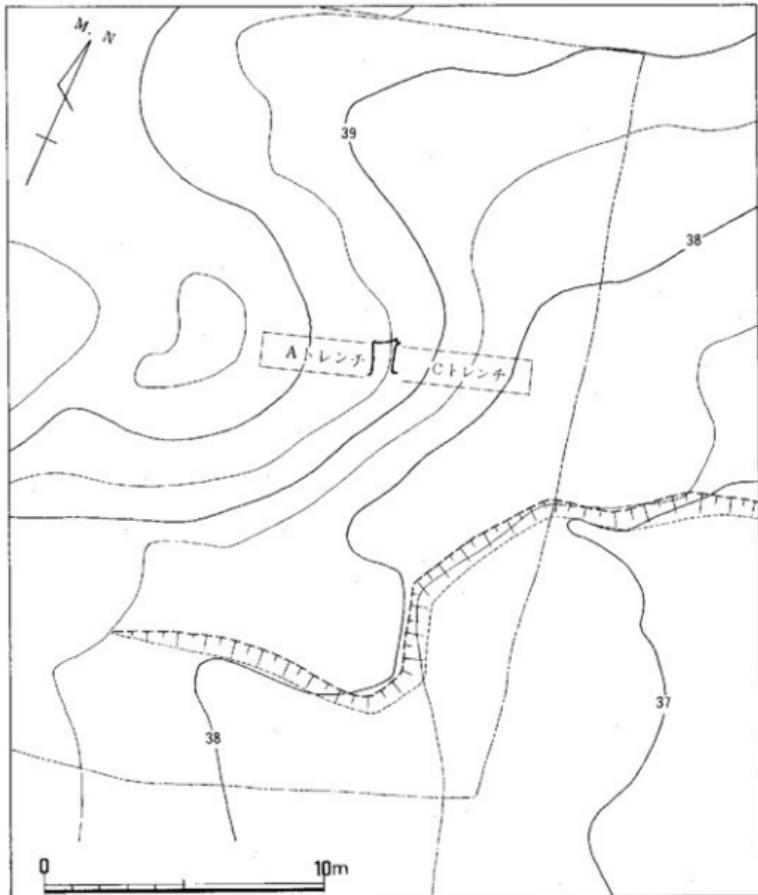


Fig. 68 III-3号墳墳丘測量図 (X20)

## 2) 墳丘

**地山整形** 微高地東端の高まりが約16°の傾斜で下降する変換線のやや下方に位置する。石室は東斜面等高線に沿って両側に開口する。したがって墳丘構築前の地山整形は、II区からIV区にかけて墳丘を区画する溝の掘削と、その溝内側の整地が認められる。

溝はII区の花崗岩露頭を西端として、石室の外縁1~2mを不整形にはば2/5周し、IV区南半で地山面まで至る削平のため消滅している。溝巾は一定せずII・III区では1.2~1.5m、IV区では若干狭くなり1mである。深さは統じて0.2~0.3mと浅く、浅皿状の断面形を示す。I・II区には花崗岩の露頭が南北に延びており、何等整形の痕跡を認めることはできなかった。

溝内側の整形も顕著ではないが、墳丘基底面に造築前の地表痕をとどめないことから、その造作を推測することができる。

**墳丘** 古墳南半は深く地山面に達する削平をうけ、墳丘も残存しない。本墳の場合、石室・墳丘規模がきわめて小さく、墳丘盛土はわずかに石室を覆う程度に行われたのであろう。A-Cトレーニチの観察によると、I区では掘り方端から1mほどで花崗岩露頭に達する。ま

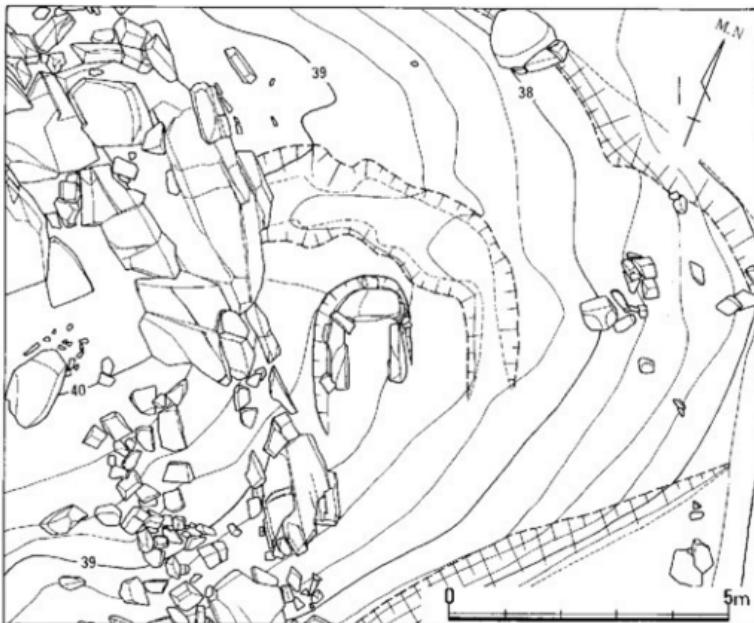


Fig. 69 III-3号墳掘り方および地山整形 (3m)

### III-3号墳

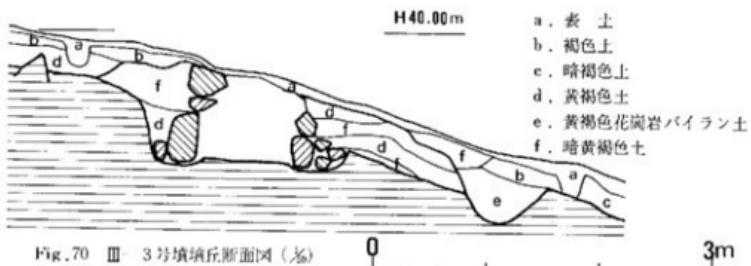


Fig. 70 III-3号墳墳丘断面図 (縦)

た東側は同じく掘り方溝から1.2mで溝端に至り、その間の整地面を墳丘基底として盛土を行っていることがわかる。盛土は数層に分かれるが、際立った特徴はない。全体的に盛土はあまり堅く突き固められた感はなかった。

墳丘平面形を知ることはできなかったが、A-Cトレーナーでは墳丘盛土巾3.1mを計り、大略3~4mの不整円形を推定せしめる。現存する墳丘上端は掘り方底面から0.85mを計る。天井石を被覆する程度の盛土であれば、現高に1~2mを加えれば充分であったと思われる。

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は、S-19°-Eに主軸をとる小形の石室である。南半分が削除されており、奥壁と左右側壁の各一石ずつと奥壁よりの床面を残すにすぎない。

石室は掘り方の中から構築されている。溝と花崗岩露頭との間の整地面から掘り込まれた掘り方は、東西巾2.3m、南北現長2.8mを計るが、南壁がどのような形状をとったか明らかにしえない。石室の規模からすれば、石室前壁に羨道を接続する横穴式石室の可能性はほとんどないようである。とすれば、掘り方南壁は羨道が開かなかったといえよう。残存する石室腰石は、掘り方底部を更に一段低く掘って、その中に据えはば底面いっぱいに配置している。その間隙には人頭大の転石を充填した部分もある。

石室の周壁は大ぶりの花崗岩割石・転石を立て腰石としている。現存の石室長は、左壁1.25m、右壁1.30mにすぎず、巾は奥で0.8m、現存前巾で0.75mである。南側の構造は不明だが、叙上ののように羨道を接続する横穴式石室とはみなしがたく、小形の竪穴式石室的な構造としておきたい。床面は石室掘り方底面の上に10cmほどの埋土（マサ土と粘質土を混ぜたもの）を行い、その上面に挙人の届半な転石を敷き詰めている。調査時には奥壁寄りにわずかに残すにすぎなかった。

### 4) 遺物

#### 出土状況

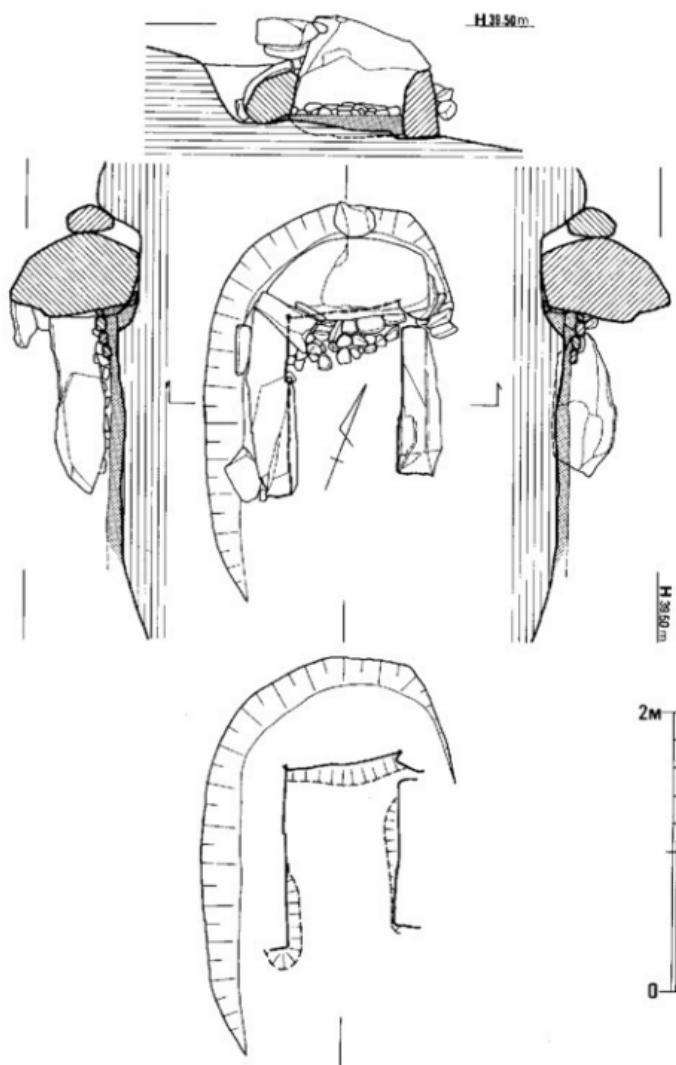


Fig. 71 III—3号填石室実測図 (%)

石室内からの遺物の出土は、耳環1点のみであるが、それも流入土中の採集であって原位置をとどめたものではない。

容器として墳丘周辺から27個体分の須恵器が出土した。I・IV区の削平部から花崗岩露頭部にかけてと、III区墳丘裾および溝内である。前者は散在的であるが、後者では比較的まとまった状態での出土をみている。なお出土した遺物は次のとおりである。

	石室	墳丘外部
装身具		
耳環	1	
容器		
須恵器		{ I・IV区 9 III区 18
遺物		

#### 装身具

耳環 (Fig.72) 1点のみである。外径2.2×2.1cmの円形を呈し、突き合せ部は広めである。断面円形の中実鋼胎に金箔をおいたもので保存状態は良好ではない。

#### 須恵器

杯蓋 (Fig.73~75) 4個体出土した。口径によって2類に大別する。

I類 (1・2) 口径12.8~12.9cm。ともに天井頂部を欠失する。1は口縁内面がやや肥厚する。2は口縁内面の上方に巾広い凹部を付し、口端は尖り氣味におさめる。ともに天井部と体部の境界は不明瞭で、わずかに屈曲し弱い稜線をもつ。

II類 (3・4) 4の口径10.8cm、3は口縁部を欠失するが、4より大きめである。器形は同一である。天井部は丸みをおび、体部との境界は屈曲して、下外方に伸びる。天井部はヘラで切り離した後、回転利用のヘラ削りを行わず、頂部に荒い静止ヘラ削りを加えている。

#### 杯身 (Fig.73)

8個体出土した。口径・立ち上がり高によって2類に大別する。

1類 (5・6) 口径12~12.5cm、立ち上がり高1.0~1.1cm。ともに底部中央部を欠失する。立ち上がりは短く内傾するが、6は中央で屈曲して口端部を上方に引き出す。受け部は水平に短く伸びる。ヘラ削りは底部1/2の範囲に行われる。

IIa類 (7~10) 口径9.8~10.5cm、立ち上がり高0.7~0.8cm。立ち上がりは短く、外寄氣味に内傾する。受け部は水平もしくは外上方に短く伸びる。底部は扁平で、2/3ほどの範囲に荒いヘラ削りを施す。

IIb類 (11~13) 口径9.3~11cm、立ち上がり高0.2~0.5cm。立ち上がりはきわめて低く内傾し、いずれもその中央で屈曲して上方に伸び、端部は観くおさめる。受け部は内寄氣味に

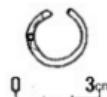


Fig. 72 耳環

外上方に大きく伸び、端上面は立ち上がりとほぼ同じ高さになるものもある(13)。受部上面は複雑で、凹線をめぐらす。浅く扁平な底部は、ヘラで切り離しのまま未調整である。11~13とも同一のヘラ記号があり、蓋II類の4とセットをなすものである。

**有蓋高杯** (Fig.73-14・15) 2個体出土した。口径12.4~12.6cm、立ち上がり高1.1~1.2cm、15の器高は16.5cmを計る。14は杯底部以下を欠失する。杯部の手法はともに類似する。15は杯底部にカキ目を加えている。脚部は高くななく、筒中央よりやや下位に2条の鈍い凹線をめぐらし、その上下に三方の長方形透孔を穿つが、上段のそれはいずれも内面まで貫通していない。脚端部は単純である。脚筒内面にシボリ痕が顕著に残る。

**無蓋高杯** (Fig.73-16~18) 形態から2類に大別する。

I類(16) 脚筒中央を欠失する。杯部は底・体部の境界と、体部中央に、各1条の凹線をめぐらし、その間にヘラ描列点文を加える。脚筒部は二段の透孔を付するものであろう。脚端部は上下に引き出され、端面に鈍い凹線をめぐらす。脚筒内面にシボリ痕が残る。

II類(17・18) 小形の高杯。各杯部と脚部のみであるが、別個体である。16は杯部で、底・体部の境界は不明瞭で、ゆるく屈曲して外傾する。18は脚部で、端部に向って大きく外開する。端面に鈍い凹線をめぐらす。

高杯としては、他に脚部のみの破片が2個体分ある。19は、脚筒部中央よりやや下位に2条の凹線をめぐらし、その下方にカキ目を加える。20は、脚筒下位に凹線をめぐらしたもので17に類するものである。脚端面に凹線をめぐらす。

**短頸壺** (Fig.74-20) 口径・器高とも7.8cmの小形品である。口頭部は短く外反し、端部を外下方に短く引き出す。体部は肩が張り、やや扁平な感がある。体下半から底部をヘラ削り調整する。

**壺** (Fig.74-21) 口頭部を欠失する。頭基部は太なく、ゆるく外反するようだ。体部は中央が強く膨る。体上部から中央に3条の凹線をめぐらし、その上にカキ目を加える。体下半から底部にかけてヘラ削りを施す。体肩部にヘラ記号を付す。

**翫** (Fig.74-22・23) 22は体部を、23は頭上半を欠失する。22は頭中央よりやや上位に2条の凹線をめぐらし、外上方に外開する。口縁下部はゆるく屈曲する単純な形態である。23は体底部が平坦面をなす。体中央の凹線の間にクシ描列点文をめぐらす。頭部は細めて大きく外開する。体下半以下にヘラ削りを施す。底部にヘラ記号を付す。

**提瓶** (Fig.74-24・25) ともに頭上部を欠失する。24は、体部前面の膨みが大きく、側面肩部に環状把手の痕跡が残る。頭中央に凹線をめぐらす。体前面の孔の充填は円盤状粘土の貼付けではなく、厚く肥厚させている。25は、体側面を欠失するが、背面の膨みが大きい。体側面肩部に短い鉤状把手が付く。頭部は直線的に外傾する。体部調整は、24は背面にカキ目、前面にナデ、25は前面にカキ目、側面から背面にかけてヘラ削りをそれぞれ施す。

III—3号墳

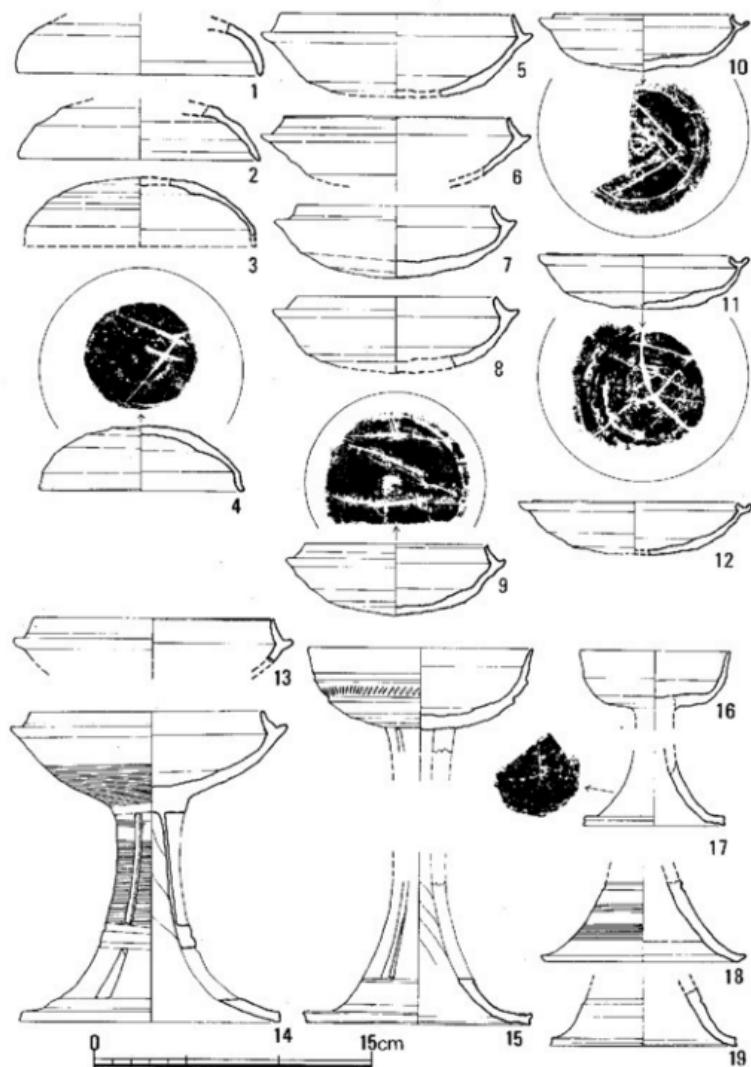


Fig. 73 III—3号墳遺物実測図 II (35)

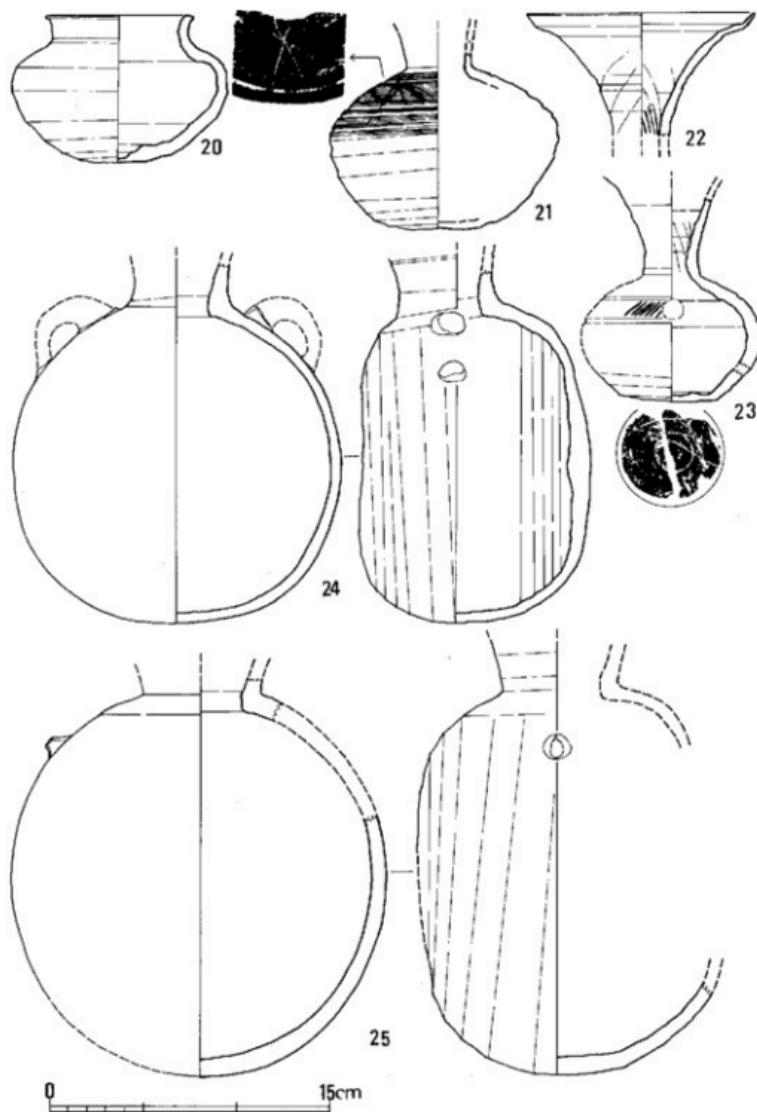


Fig.74 III-3号墳遺物実測図III (分)

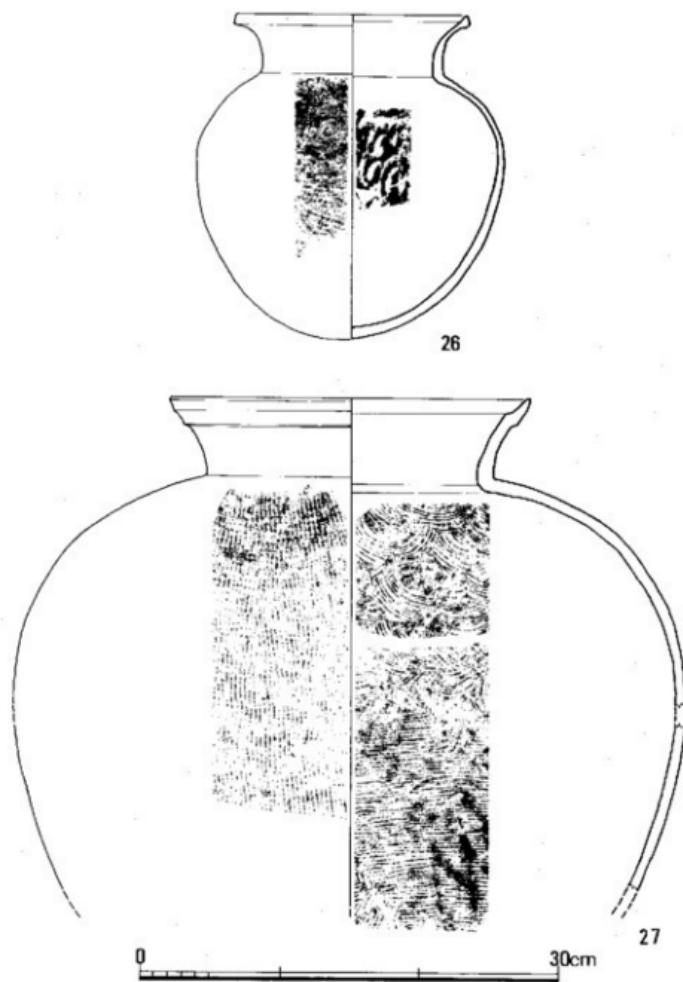


Fig. 75 III—3号墳遺物実測図IV (34)

**小型壺** (Fig.75-26) 口径16.5cm。口頸部は短く外反し、口縁部は単純で外側に肥厚するだけである。体部は尖り気味の球形で、外面は平行叩き目文の上にカキ目を加え、内面には粗い同心円文が残る。

**中型壺** (Fig.75-27) 口径25.8cmで体下半部を欠失する。口頸部は短く外反し、口縁下部が肥厚する。体部は肩が強く張る。体外面は格子目風叩き目文の上面を間隙をおいてカキ目を加えたもので、内面には同心円文が残る。

(柳沢)

Tab.9 III-3号墳出土土器計測表

(単位 cm)

種類	No.	口径	器高	受部種類	胎土	焼成	色調	口部回転方向	ヘラ記号	出土地点	
										III 区溝	
杯蓋	1	12.9	?		砂粒混	良好	ねずみ色	時計			
	2	12.8	?		x	x	x	x	x		
II	3	?	?		砂粒多	不良	暗褐色	x		I 区	
	4	10.8	3.4		x	x	灰褐色	x	○	IV 区	
杯身	No.	口径	器高	受部種類	胎土	焼成	色調	口部回転方向	ヘラ記号	出土地点	
	5	12.5	?	14.5	1.1	砂粒混	空窓	灰褐色	時計	III 区溝	
	6	12	?	14.4	1.0	x	良好	淡青灰色	x		x
	7	10.5	3.8	13.0	0.8	x	x	ねずみ色	x		x
	8	10.5	?	13.2	0.7	x	x	x		IV 区	
	9	9.8	3.8	11.8	0.8	x	x	x		○ I 区	
	10	9.5	2.9	11.3	0.5	x	x	灰褐色	x	○ 田区溝	
	11	9.3	2.7	11.3	0.3	x	空窓	灰褐色	x	○	x
	12	11.0	2.6	12.4	0.2	x	x	淡褐色	x	○ 田区溝	
	No.	口径	器高	脚端跡	胎土	焼成	色調	口部回転方向	ヘラ記号	出土地点	
	13	12.6	?	?	1.2	砂粒混	良好	灰褐色	時計	III 区溝	
無蓋高杯	14	12.4	16.4	13.8	1.1	x	不良	灰褐色	x		
	15	12.0	?	12.0	-	x	x	x	x		x
	16	8.0	?	?	-	x	良好	ねずみ色	x		x
	17	?	?	7.4	-	x	x	x	x	IV 区	
	18	?	?	10.9	-	x	x	灰褐色	x	田区溝	
短頸壺	19	?	?	9.3	-	x	x	x	x		x
	No.	口径	器高	脚端跡	胎土	焼成	色調	口部回転方向	ヘラ記号	出土地点	
	20	7.8	7.8	11.4	-	砂粒混	空窓	淡灰色	時計	III 区溝	
壺	21	?	12.2	12.1	-	x	良好	セピア	x		x
	22	12.0	?	?	-	x	x	淡青灰色	x		x
甕	23	?	?	?	-	x	空窓	淡灰色	x		x
	24	?	?	17.2	12.1	x	x	ねずみ色	x		IV 区
	25	?	?	20.5	?	x	x	不良	灰褐色	x	x
甕	26	16.5	23.3	16.5	-	x	空窓	x	x		x
	27	25.8	?	36.0	-	x	x	不良	x	I 区	

## 11 III群土塙と溝状遺構

### 1) III群土塙

III群の古墳に伴う2基の土塙を検出した。谷奥より入口に向って1号、2号と呼ぶ。

**1号土塙** III-2号墳の西側溝の外2.5mにあり、主軸をN-88°-E.にとる。長さ0.96m、幅0.64mの長方形を呈し、深さは0.38mを計る。底面の南側には径20cm、深さ20cmの小ビットを穿つ。この長方形の土塙のまわりには、不整橢円形の掘り込みがある。塙内には黒色土が充満していた。

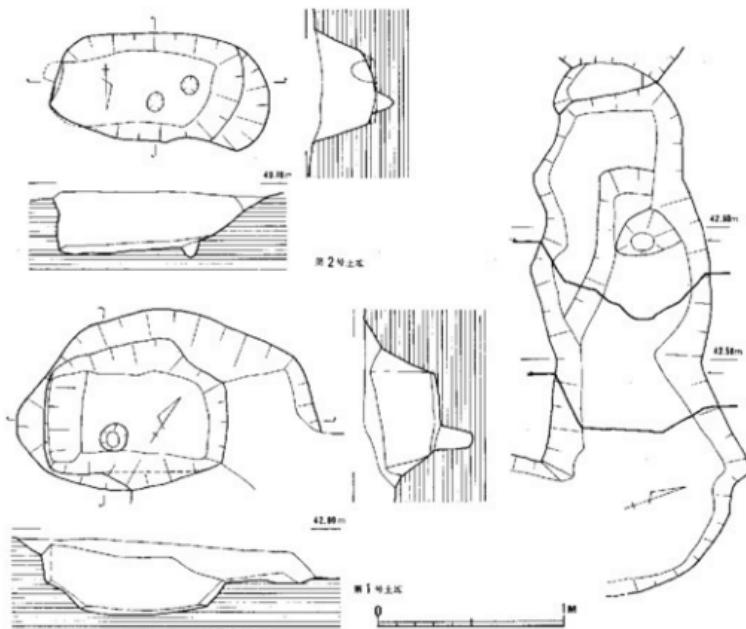


Fig. 76 III群土塙及び溝状遺構実測図

**2号土塙** III-1号墳の墳丘下の基底面に掘り込まれ、長さ1.03m、幅0.57mの不整長方形を呈する。深さは0.33mで、底面西側に径10cm、深さ10cmの小ビットを二つ穿っている。塙内には黒色土が充満し、壁面が一部赤変していた。主軸はN-57°-Wにとる。

## 2) 溝状遺構

III-2号墳の西側、1号土塙の東南部から東に向う溝状遺構を検出した。東端はIII-2号墳西側の溝で断たれる。この溝状遺構は最大幅1.10mを計るが、上端の線はかなりの歪みをみせる。また南壁が高く、北壁は低い。底面には段やビットがあり、東へ向うにつれ低くなる。溝内は黒色土が充満していた。

この遺構から夜白式土器・須恵器片を検出した。夜白式土器は底面に近い所からの出土であるが、摩滅の度が著しい。須恵器片は上面に近い所からの出土であった。遺構の性格・時期は明確にし難い。

(浜石)

## 12 IV群の概要

本群はIII群の南側の山稜上にある2基の古墳より成る。この山稜は叶岳の山塊より分岐して西から東へ延び、広石第二池に没入する。山稜の先端部、および鞍部をはさんで西側にはゆるやかな高まりがあり、それぞれを古墳と想定し、東側をIV-1号墳、西側をIV-2号墳と命名した。

IV群のある山稜上からは、北側でIII群のある谷間を見下し、南側で早良平野を眺望する。また谷をひとつはさんだ南側の山稜には花崗岩の露頭がある。

2号墳は南側斜面への墳丘の流出が大きく、古墳であると明確にし難かったが、わずかに露出した石室によって識別することができた。1号墳は墳丘とみられる円形状の高まりをもつが、石材などの露出等ではなく、また工事区域の外でもあったので、現状のまま残した。したがって、調査の対象となったのはIV-2号墳のみである。

## 13 IV-2号墳

### 1) 位置と現状

本墳はIII群のすぐ南の山稜上にあり、南側の墳丘基底面で標高50.60mを計る。古墳の北側はIII群の古墳が所在する谷へ下る傾斜面であり、また南側も谷へ下る傾斜面である。南側の傾斜面には地盤が露出していた。東側はやや張り出しを見せたのち下り、尾根先端にあるIV-1号墳の高まりに突き当る。西側はいったん下り、そこから次第に高みを増す。すなわち、南北では斜面、東西には鞍部であり、古墳の所在する所はまさに突出する。この自然地形を有効に利用して本墳は構築されたものと考えられる。

本墳の墳丘は識別が困難であったが、石室の袖石がわずかに露出していたことによって発見・調査に至った。発掘の結果、西側の鞍部に向って開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳を検出した。南側墳丘の墳裾は流出が著しく、石室の天井石とともに原形をとどめなかった。

### 2) 墳丘

**地山整形** 前述したように本墳は尾根上の突出した自然地形にあるため、地山整形はいたって簡単に行われている。すなわち、突出した尾根の頂部を削平して墳丘基底面を作り、その中心に東西方向の等高線に平行して石室を構築しているのである。

削平面は古墳の南側では崩壊して明確でないが、東西では等高線と直交し、北側では平行して作られ、平面的には隅丸方形に近い形を呈する。その規模は東西巾約10.60m、南北現存巾

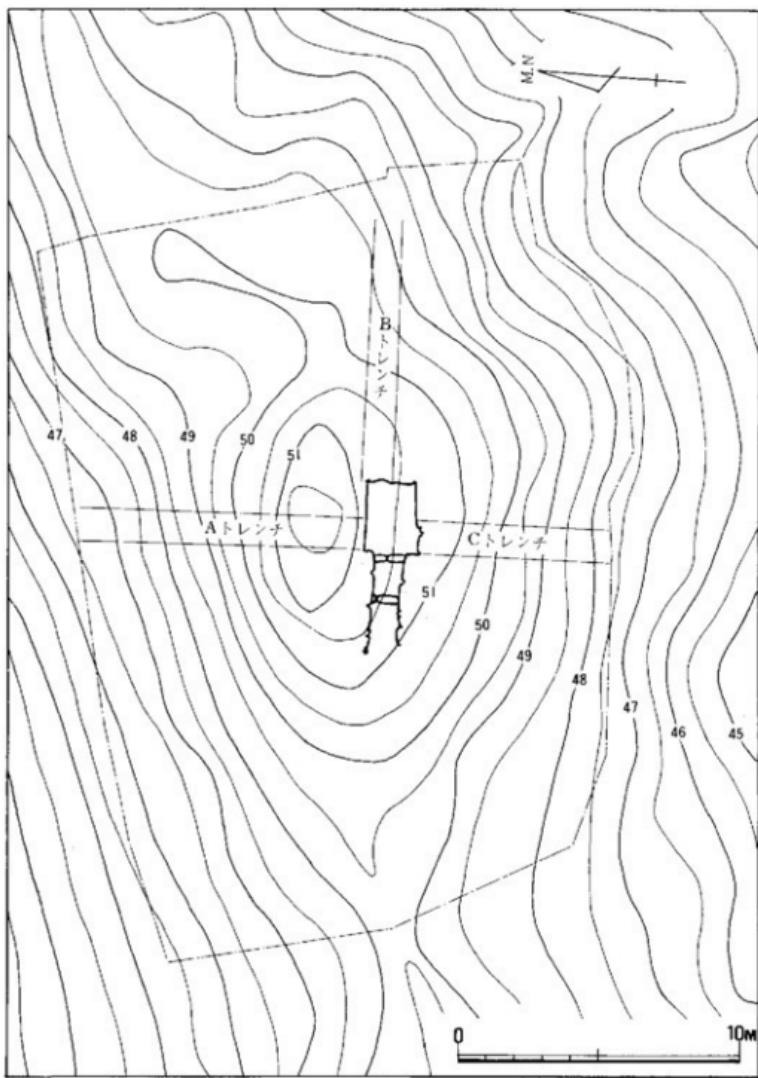


Fig. 77 N-2号墳測量図 (Kofun)

IV—2号墳

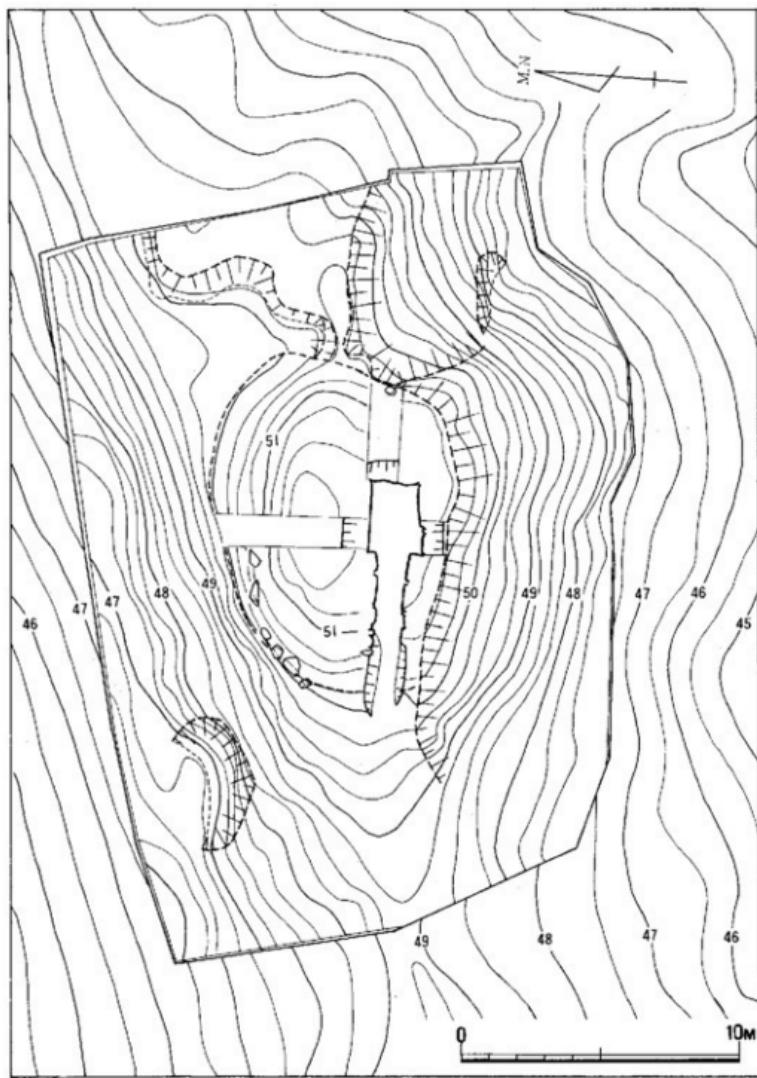


Fig. 78 IV—2号墳埴丘遺存図 ( $\times 20$ )

9.0mを計る。この削平して造った墳丘基底面は、石室の東側が一番高く、西に向って緩く傾斜する。東側では一部旧地表が残っている。

**墳丘** 墳丘は南北分がすでに流出しており、I区・II区に残るのみであった。I・II区でみると、墳丘は削平面を基本的に基底となし、I区では削平面端ぎりぎりの所から、II区では削平面端の外側より盛土を行う。

Aトレンチで墳丘形成過程をみると、数段階に分かれる。まず、石室の掘り方を造ることによって出たと思われる花崗岩のバイラン土を用いて、北側に傾斜する削平面を埋め、ほぼ平坦にする。これは削平面をさらに整地したものであり、実質的には墳丘の基底的な役割をもった盛土といえよう。これと前後して、やはり同じ土を用いて、石室掘り方を埋める。Bトレンチでは黄褐色土の間層があるが、ほとんど同一のバイラン土で繋りよく埋められている。次の段階では、石室の石材を積み重ねると併行して、その裏込めを行う。ただ石材が大きいせいか、粘土や小石を用いて石材を固定することは余りみられず、またそれによって生じる層の複雑さもない。その次の段階では、第一段階におけるバイラン土の盛土を基底にするようにして、ほぼ水平に層を幾重にも積む。この盛土は、石室に近い方が比較的厚く長い層をなすのに対し、墳丘の外側近くは層が小さくなるとともにその盛り方も複雑である。この段階で墳丘の丸みはほぼでき上がる。最終段階では墳丘の外形を整える。これも一気に行われた痕跡はみられず、低い方から順に上へ向って盛土を行っている。Aトレンチにおける墳丘の遺存高は、石室内基底面より2.3mを計る。

墳丘の平面形は、III・IV区は不明だが、I・II区においてはゆるいカーブをもつ円形に近いものとなる。石室を中心として左右対称的な墳丘をもつとすれば、I・II区の墳丘幅より算出して、径約12.0mの円墳ともいえる。ただI区の墳丘の方がII区に比べやや小さくなっているので不整円形状になる可能性が強い。I区の墳丘幅には、大小差のある礫石がめぐる。

### 3) 横穴式石室

本墳の埋葬施設は、主軸をS-87°-Wにとり、西に開口する単室の両袖型横穴式石室である。大井部はすでになく、また左壁はほとんど腰石のみという状態であった。しかし、平面的には玄室—羨道（閉塞石）—墓道とすべて検出すに至った。

石室は深い掘り方の内側に構築され、羨道部の先に短い墓道が連結する。石室平面は長方形の玄室に細長い羨道をつけた通育のもので、その全長は左壁で6.18m、右壁で5.90mを計る。さらに墓道の先端までは左壁で9.38m、右壁で8.60mになる。石室の各部を構成する石材はすべて花崗岩である。

**石室掘り方** 削平した面は前述したように西側に向って傾斜している。この傾斜面の等高線にはほぼ平行して（部分的には直交する）石室掘り方を設ける。掘り方は玄室のまわりでは

IV-2号墳

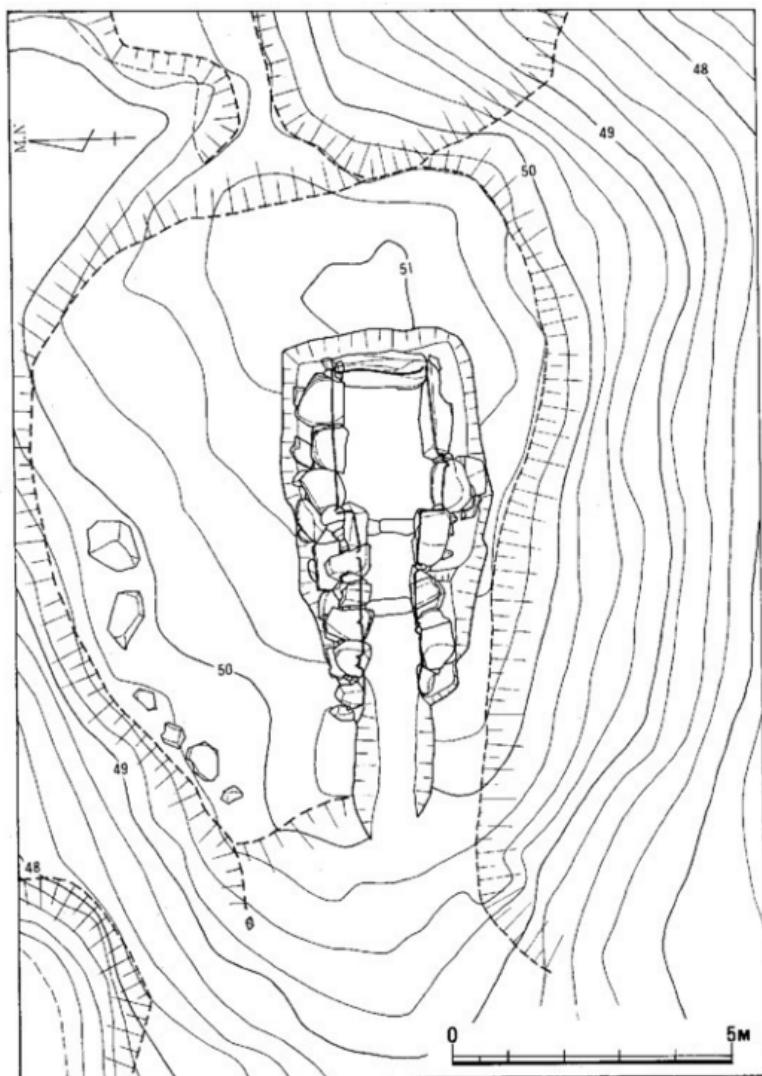


Fig. 79 IV-2号墳掘り方および地山整形 (1/50)

方形になり、直線的で隅も角ばる。それが袖石付近から羨道端へ向って次第に狭くなる。その規模は東西方向で約7.0m、玄室部の南北最大幅で3.7mを計る。石室はこの掘り方内に構築されているが、右壁が掘り方の間に余裕をもつて対し、左壁では壁石が掘り方上端近くまで接近する。断面形をみると、ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは奥壁部で上端より1.5m、玄室左右両壁面付近で1.0m前後である。ただ西へ向うにしたがってゆるやかな傾斜をもつとともに深さもなくなる。

石室内の床基底面は、玄室部が羨道部に比べいくらか低くなる。また腰石・樋石の配置にあたっては、その安定を図るために、床基底面をさらに一段深く掘り下げている。

**玄室** 奥幅1.70m、前幅1.90m、左壁長2.50m、右壁長2.45mを計る。腰石には巨大な割石を用いているため、左壁が一部歪むものの、全体的には直線に近い壁線をなす。

壁面の構成はまちまちであり、奥壁が幅1.6m、高さ1.4mの腰石を1石置く。左壁は幅2.4m、高さ1.0mの腰石を縫せ、その上に腰石の1/3弱の割石を3石載せて2段目とする。腰石との間隙には小石を填める。石の腰石を配置し、その大きさは奥壁寄りのもので幅1.7m、高さ1.4m、もう1石が幅0.9m、高さ1.3mを計る。2石の腰石間隙には転石を填める。いずれの壁面の現存高もほぼ同じで、床基底面より1.3~1.4mである。また腰石はどの壁面も下端より上端に行

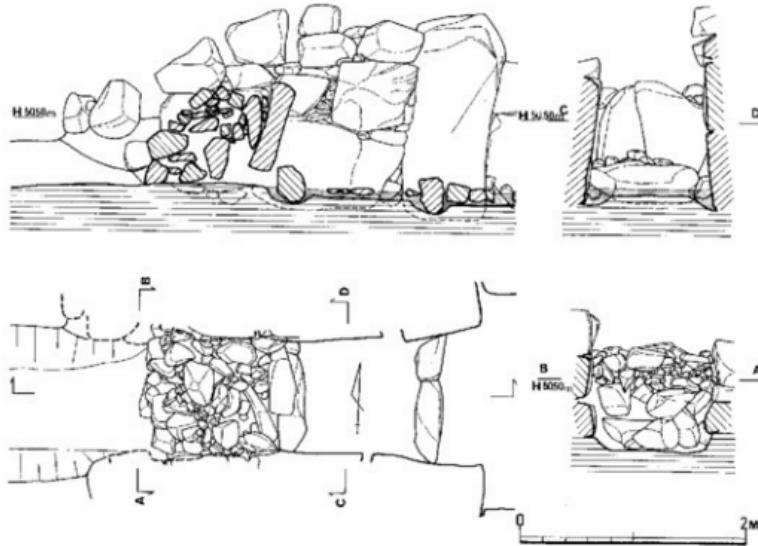


Fig. 80 N—2号墳塞部実測図

くにしたがって石室内面にせり出す。壁面間に力石などの使用はみられない。

玄門部には単純な両袖を設ける。袖石にも巨大な割石を用い、垂直に立てる。その高さは左右とも床基底面より1.7mである。袖幅は左で0.3m、右で0.4mを計る。側壁との間に力石などの使用は認められない。

第2樋石から玄室にかけての床面には全面敷石があつたと考えられるが、相当の擾乱を受け、わずかに玄門付近を中心には残存するだけであった。敷石には20~30cmの扁平な転石を主に用い、その石の間は5cmに満たない小石を充填している。奥壁付近にもまばらではあるが敷石の残りが窺われる。

**羨道** 前幅1.13m、奥幅1.25mで、入口から玄室に向ってわずかに開く。壁面の構成は玄室と異なるとともに左右両壁でも相違をみせる。左壁は腰石に2石を用いる。袖石に隣接する石が大ぶりである。この腰石の上にやや小ぶりの転石・割石を積み上げる。現存するのは3~4段目までである。右壁も2石の腰石を用いるが、袖石に連接するものは巨大な割石を用いる。腰石の上には小ぶりの転石を積む。左右両壁とも石の間際には小石を填めて固定する。また左壁には3石、右壁には1石の貼石がみられる。

平面的にみると、羨道端から1.0mで第1樋石、2.2mで第2樋石を配置する。第1樋石は細長い転石を置き、幅の足りない左壁部との間に小石を挟む。第2樋石は2石を横列に置く。樋石間の床面には10~30cmの比較的扁平な転石を敷き詰めた痕跡があるが、擾乱のためかなり不明瞭になっている。

**墓道** 羨道端に連接して、左側で3.20m、右側で2.70mの長さの墓道を西へ向ってほぼ直線的に付設する。墓道は地山を削って造られており、下端幅が0.8~1.0m、上端幅が1.4m前後である。墓道に連接する部分が0.5m前後で一番深く、西へ行くにしたがって浅くなる。断面は「U」字状を呈する。

**閉塞施設** 閉塞は羨道端から第1樋石を覆う長さ2.3mほどに、羨道幅いっぱいに造られ

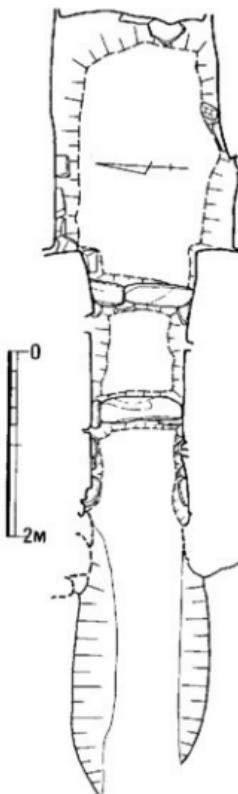


Fig. 81 IV-2号墳石室基底面実測図

ていた。構造的には第1樋石に幅1.0m、高さ1.4mほどの板状の削石を2石重ねてもたせかけ、その後(入口側)に10~50cmほどの転石を積み重ねている。この小転石の積み方は非常に無造作であるが、羨道部端の床基底面に40~50cmの転石を何石か羨道幅いっぱいに配置することにより、積み重ねられた小石の固定を図っている。

#### 4) 遺 物

**遺物出土状況** 石室は天井石が取り去られ、また玄室床面の敷石が荒されているところか

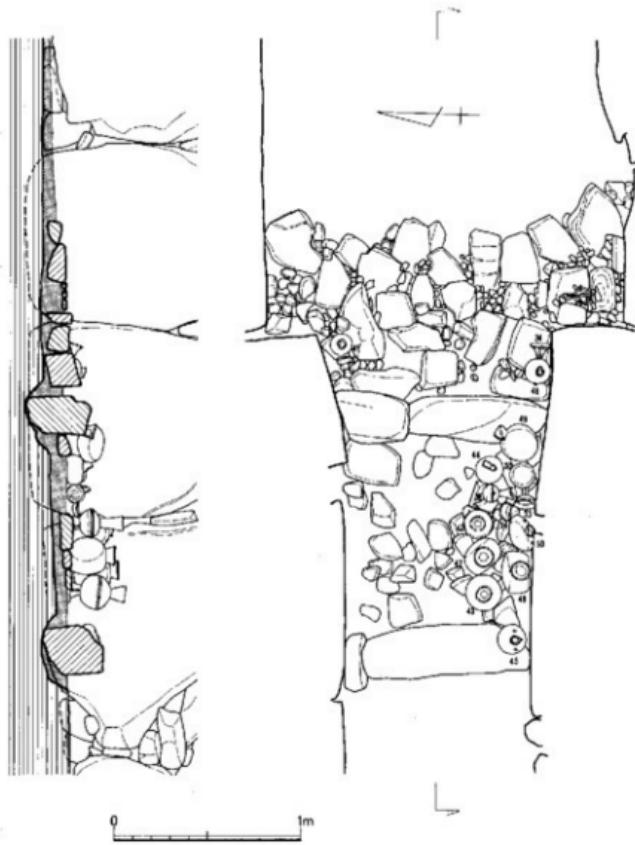


Fig. 82 Iw-2号遺物出土状況図

ら盗掘を受けたものと思われる。事実、玄室内はかなり擾乱されその中より青刀・耳環・玉類・鉄鎌等が出土した。しかし、玄室の袖石部から狭道部にかけての床面の保存状態は良く、須恵器・土師器・鉄鎌・馬具等の遺物が多数出土した。特に狭道後半部からは、右壁に沿うようにして須恵器11個体、土師器1個体、および鉄鎌を検出した。また玄門部付近には左右両壁にそれぞれ2~3個体の須恵器が置かれていた。そのうち鈴・小形壺等2~3個体が発掘中盗難に遭った。

I区墳丘裾の不定形の落ち込みからは、石室以上の遺物の出土をみた。これらは元来墳丘裾に置かれていたものが流出したと考えられる。須恵器と土師器がその主体をなすが、紡錘車の破片もここでの検出である。また石室内に見られない須恵器の有蓋高杯・大甕、土師器の高杯もここから出土した。

以上出土したものを石室と、I区墳丘裾部に分けて列記すると以下の通りである（盗掘されたものは含まない）。

	〈石室〉	〈I区墳丘裾部〉
装身具		
耳環	9	—
小玉	1	—
武器		
鉄鎌	9以上	—
直刀	1	—
鍔	1	—
馬具		
轡	1	—
工具		
刀子	1	—
紡錘車		1
容器		
須恵器	14	29以上
土師器	1	6以上

以下、出土地点に關係なく個別出土遺物の分類および考察を加える。

#### 装身具 (Fig.83-1~9)

**耳環 (1~8)** 9個体が玄室擾乱層より出土した。5以外は断面円形の中央の鋼芯に金箔を置いたものであるが、金箔の残りは余り良くない。1は全体の保存状態が良く、長径3.3cm、短径3.0cm、断面径0.7cmを計り、出土した耳環中一番大きい。2と3は長径2.8~3.0cm、短径2.6~2.8cm、断面径0.7cm前後で一对になる可能性が強い。4は長径2.6cm、短径2.4cm、断面径

0.7cm前後で、1~3に比べ、ひとまわり小形である。突き合せ部は接する。6~8はさらに小さいもので、長径2.2~2.3cm、短径2.0~2.2cm。7は残りが非常に良好で、突き合せ部は接する。6と7はその大きさ・器形等からみて一対になる可能性がある。5は断面楕円形の中空の銅胎に金箔を置いたもので、やはり同じ形態をもつ図示しえなかつた耳環片と一対になる。

長径2.3cm、短径2.2cm、断面径は0.5×0.7cmである。

**小玉（9）** 玄室擾乱層より1個出土した。コバルト・ブルーのガラス製で、径0.9cm前後、高さ1.2cm、孔径0.2cmを計る。

#### 武具 (Fig.83-11~24・26~28)

**鉄鎌** 玄室擾乱層および漢道後半部より9個体以上出土した。その形態より2類に大別できる。

I類 (11・12) 平根式に属するものである。11は三角形式で残存長11.9cmを計る。身は断面向九作りの広鎌で、関は丸みをもち範被ぎに統く。茎は断面方形をなし、表面には樹皮が巻きつく。12は身下半を中心とした小片であるが、斧箭式と考えられる。身は薄い凸レンズ状の断面をもち、直角な関から断面方形の茎へと統く。

II類 (13~24) 尖根式に属するものである。13は撃箭式にあたり、身の断面は片丸作りで、残長7.0cmを計る。他は範被部および茎部を残した破片で、棘状突起を境にして範被部は断面方形（長方形）、茎部は方形をなすものと円形をなすものがある。茎部には樹皮や細い糸が巻きついた痕が残る。20は残長16.9cmで、茎部は範被部近くが断面長方形で、末端に行くにしたがい円形の断面になり細まる。

**直刀（26・27）** 玄室の擾乱層より7片の直刀小片を検出した。1振り分と思われるが、銚とひび割れがひどく、一部分を図示するにとどまった。26は刃部で幅2.9cm、断面は元米二等辺三角形をなすと考えられるが、ひび割れのため現在は肥厚する。27は断面長方形の茎部で、径0.4cmの目釘孔をもつ。

**鎧（28）** 玄室擾乱層よりの出土で、高さ6.6cm、幅5.7cmの倒卵形を呈する。刀身を通す中央の孔は、高さ2.8cm、幅2.0cmを計る。厚さは0.7cmで、孔の周辺が傾斜して低くなる。孔のまわりには一部木質が残る。

#### 馬具 (Fig.84)

**轡（1・2）** 1は長径8.0cm、短径7.5cmの扁円形の鏡板に引手と衝の一部が付着したものである。鏡板は断面が楕円形に近く、その側面に幅3.3cmほどの立耳がついていたと考えられる。引手は15.8cmの長さを計り、端部に手綱を結びつけるための径2.6cm、孔径1.3cmの環がある。衝は鏡板と引手を通す環の部分だけが残る。2は衝の合せ部片で、二連式であることを窺わせる。

#### 工具 (Fig.83)

**刀子（25）** 玄室擾乱層より出土した、切先あたりの破片で、断面は二等辺三角形を呈する。

**坊鎌車（10）** 墳丘鏡部からの出土である。全体の1/2弱の黒褐色を呈する破片で、復原径

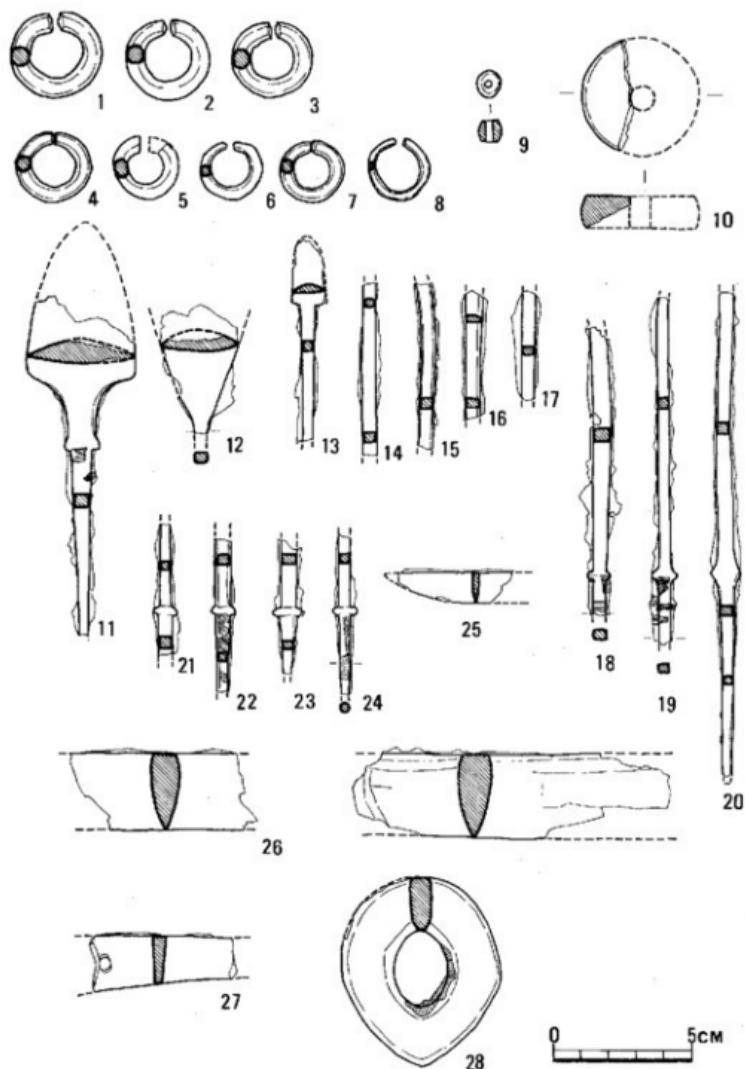


Fig.83 N—2号填遺物実測図 I (3/4)

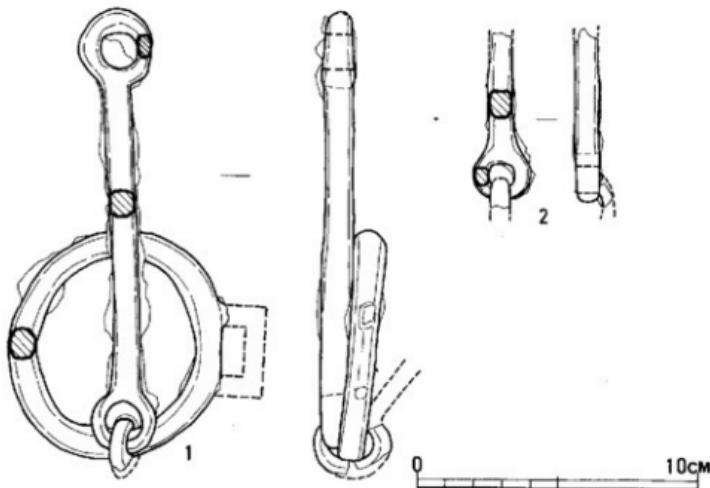


Fig. 84 N-2号墳遺物実測図II (3%)

4.3cm、厚さ1.2cmを計る。わずかに孔も残り、その径は0.9cm内外と推定される。材質は滑石に似るが、硬度が高く、明瞭にし難い。

#### 須恵器

**杯蓋** (Fig.85) 11個体以上出土したが、うち図示したのは9個体である。これらの杯蓋はその形態・法量よりI～IV類に大別する。この各類は杯身の同じ類と対応する。

I類（1～2） 杯蓋の中でも口径が広く、また天井部が高くドーム状をなすもの。ヘラ削りのロクロ回転は逆時計回りで他の類と異なる。細部でa・bに分けた。

I a類（1） 口径14.1cm、器高約4.1cmを計る。体部と天井部の境は不明瞭である。口縁部は体部から急に立ち、尖るようにして端をおさめる。器表は指の横ナデによる調整で凹凸が激しい。ヘラ削りは天井部の約1/2に施す。杯身3とセットをなすと考えられる。

I b類（2） 口径13.4cm、器高約4.4cm。口縁はわずかに立つが、端は丸くおさめられ、器形全体は半円形状になる。体部と天井部の境は不明瞭で、天井部の1/2ほどにヘラ削りを行う。指の横ナデによる凹凸が著しい。

II類（6～8） 口径・器高とも1類より小さくなり、口縁内面に段をもつもの。a・bに細分した。

II a類（6・8） 口径12.5～13.1cm、器高3.4～3.6cm。内面にわずかに段をなして口縁が立ち、端はほとんど丸くおさめる。体部と天井部との境は明瞭でないが、天井部そのものはへ

IV-2号墳

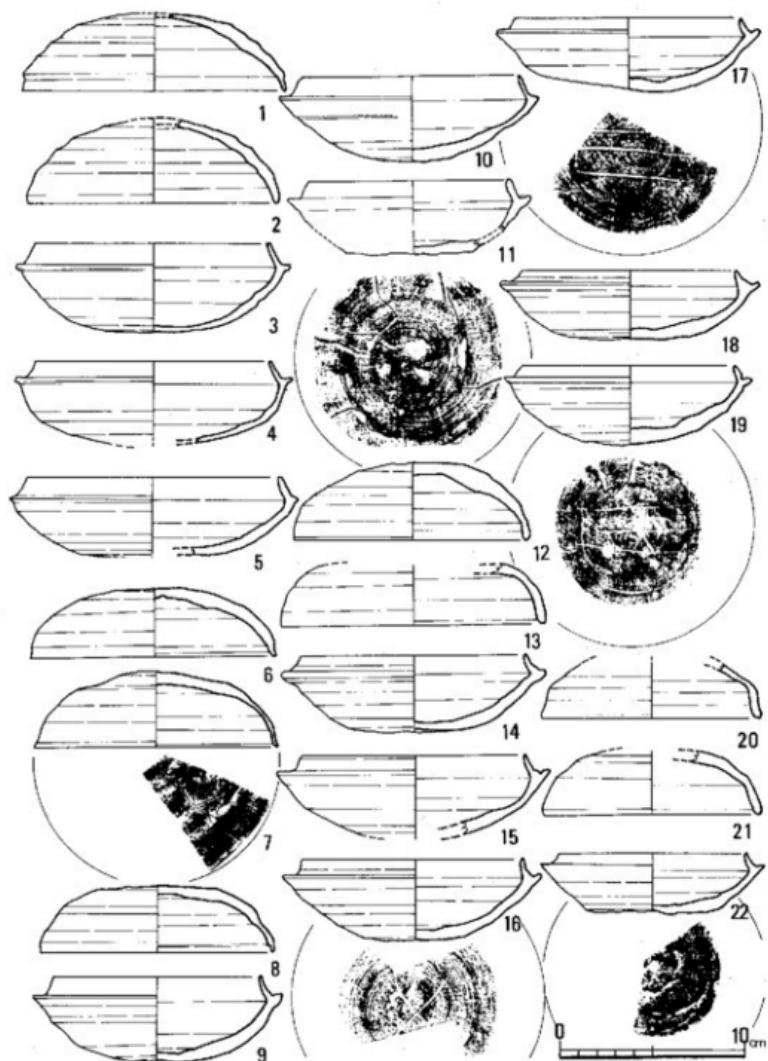


Fig. 85 IV-2号墳遺物実測図 III(3)

ラ削りにより、I類に比べ丸みがなくなる。8の天井部内面に一の形のヘラ記号をもつ（図示できず）。6は杯蓋9と、8は11とセットをなす。

II b類（7） 口径13.0cm、器高4.0cm。天井部はわずかにヘラナデが残るだけで、ヘラ削りは見られず、ヘラによる粘土の切り離し痕が窺われる。丸みをもった体部は器壁が薄く、やや立ち気味の口縁端を覗く外へ引き出している。内面にヘラ記号をもち、杯身10とセットをなす可能性がある。

III類（12・13） II類と口径・器高は変わらないが、口縁内面に段を設けないものである。12は天井部が丸く、その3/4ほどにヘラ削りを行う。体部もゆるやかなカーブを描き、口縁端は丸くおさまる。13は口径が大きくこの類とするのは多少問題も残るが、蓋身13とセット関係をなすと思われるので、敢えてこの類に入れた。天井部は平坦になるようである。12は天井部にヘラ記号を付す。

IV類（20・21） 口径11.5～11.7cm、器高3.5cm前後で、I～III類に比べさらに小形化する。天井部からゆるい屈曲をなして体部が立ち、口縁端は丸くおさめる。ヘラ削りは21にしか見られず、天井部の約1/3に施す。

**杯身** (Fig.85) 13個体以上出土した。杯蓋に対応してI～IV類に大別できる（同類の細別は対応するとは限らない）。

I a類（3・4） 口径12.7cm、器高4.6cm前後。立ち上がりは高さが0.9～1.0cmを計り、受部から直線的に内傾し、その端は角ばる。受部はほぼ真横に引き出され、立ち上がり・体部との境は明瞭である。体部から底部にかけてはゆるやかに内傾するカーブを描く。ヘラ削りは底部の1/2～3/4ほどに行われ、器壁は薄い。杯蓋1とともに調整法・胎土・焼成・色調などが非常に類似し、同一一人により、同一窯で焼かれた可能性が強い。

I b類（5） 口径13.6cm、器高4.1cmとI a類に比べ口径がやや広がり、深みがなくなる。受部は下向きに短く引き出され、先端は尖る。底部はやや上げ底氣味になると考えられる。ヘラ削りは底部の約1/2に行う。

II a類（9・10） 口径11.0～11.7cm、器高4.4～4.7cm。I類に比べ口径が小さくなる。立ち上がりはほぼ直線的に内傾し、端は丸くおさめる。受部は厚みをもち、横もしくはやや下向きに引き出され、体部との境は不明瞭である。底部は丸く、その1/2ほどにヘラ削りを行う。

II b類（10） 口径11.0cm、高さ約3.8cm。立ち上がりは直線的に内傾するが、端付近で丸く肥厚して垂直に立つ。受部は上向きに引き出され、体部との境は明瞭になる。底は平底をなし、丁寧なヘラ削りを行う。器壁は薄い。底部内面に一のヘラ記号を付すが、図示しえなかった。

III a類（14～18） 口径11.9～12.4cm、器高3.7～4.2cm。立ち上がりは受部から内傾し、その途中で屈曲し、垂直もしくはそれに近い角度で立つ。端は丸くおさめるものと、尖り気味になるものがある。14・18は立ち上がりの基底部が肥厚する。受部は上向きに引き出されるもの

IV—2号填

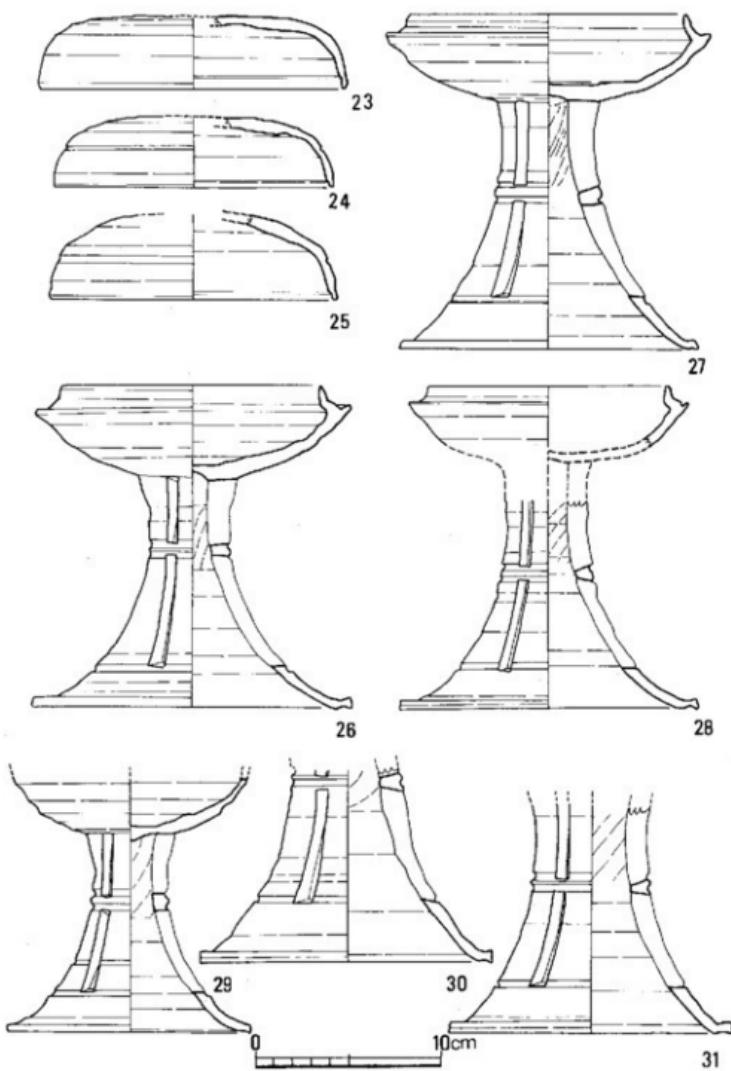


Fig. 86 IV—2号填遺物実測図IV (3g)

がほとんどであるが、14は横に丸く受部を作る。15・18は立ち上がりと受部の境に凹線を設ける。受部と体部の境は明瞭さを欠き、底部は丸みをもちながらも平底に近づいている。底部の1/2~3/4にヘラ削りを行う。

III b 類 (19) 口径11.4cm、器高4.2cmを計り、全体に丸みをおびる。立ち上がりは受部より外に張るように内傾し、尖った端へとおさまる。受部は直横に細く引き出され、立ち上がりとは凹線、体部とは段をもって区別される。体部から底部にかけて丸みをもち、底部のほとんど全体にヘラ削りを行う。

IV 類 (22) 口径10.0cm、器高3.2cmとI~III類に比べ小型である。立ち上がりは内傾し、途中で屈曲してわずかに立つものの、その高さは0.6cmと低い。受部はやや上向きに引き出され、明瞭な境をもたないまま体部へと続く。底部は平底で、ヘラ削りを行っているが粗く、ヘラ切りの痕が残るとともに器面の凹凸も著しい。

#### 有蓋高杯 (Fig.86-23~31)

**高杯蓋** (23~25) 前述した杯蓋より口径が14.8~16.3cmとひとまわり大きく、成形法および胎土・焼成・色調等にも差異がみられ、高杯の蓋であると考えられる。23・24は口径に比べ器高が低く、天井部が丁寧なヘラ削りによって平坦であるため、断面は長方形の箱形に近い。25は天井部が丸みをもつ。23は体部と天井部の境は、不明瞭であるが、24・25は1条の凹線でそれを区別している。口縁内面にはいずれも明確な段をもつ。焼成は非常に良く堅敏である。

**高杯** (26~31) 高杯は個体差を若干もつものの、全体的にみてその形態はほとんど変わらないといってよい。杯部の残る26~28は、口径が13.0~15.0cmと幅をもつが、いずれも同様の形態をもつ。すなわち、立ち上がりはまず内傾し、途中ではば垂直に立ち、端を尖らせるようにしておさめる。立ち上がりの基部は肥厚し、上向きに短く受部を引き出す。28は立ち上がりと受部を凹線で分かつ。いずれの受部も体部との境を不明瞭にしたまま、ゆるやかな丸みをもって底部へと続く。26・27は底部に部分的に凹線をめぐらす。

脚部は筒部の中央部付近に2条の凹線をめぐらし、その上下に2段の長方形透孔を三方に配する。上段の透孔は杯底部まで届き、下段透孔はその下に1条の凹線をめぐらすことによって脚根部との境をなす。29は下段透孔の中央付近にさらに1条の凹線を入れ脚部に都合4本の凹線をめぐらす。いずれも筒部中央の凹線部あたりから外反の度合が次第に大きくなつて脚部に続き、脚端部はやや上方に跳ね上がり、端唇はほぼ垂直に立つ。また脚端部内面は上方に浅い窪みをもつ。脚部の断面は、杯部との接合部が一番厚みをもち、次第に厚みを失いて脚端部に続く。脚底径は10.8~17.2cmと差異がある。器体の法量からみれば、29・31が他のものに比べひとまわり小形である。

成形法も概ね変わらないが、細部に若干の相違がみられる。器体は横ナデによって仕上げられるものがほとんどで、26・29の杯底部にヘラ削りが施されるにすぎない。脚部内面には粘土

IV—2号墳

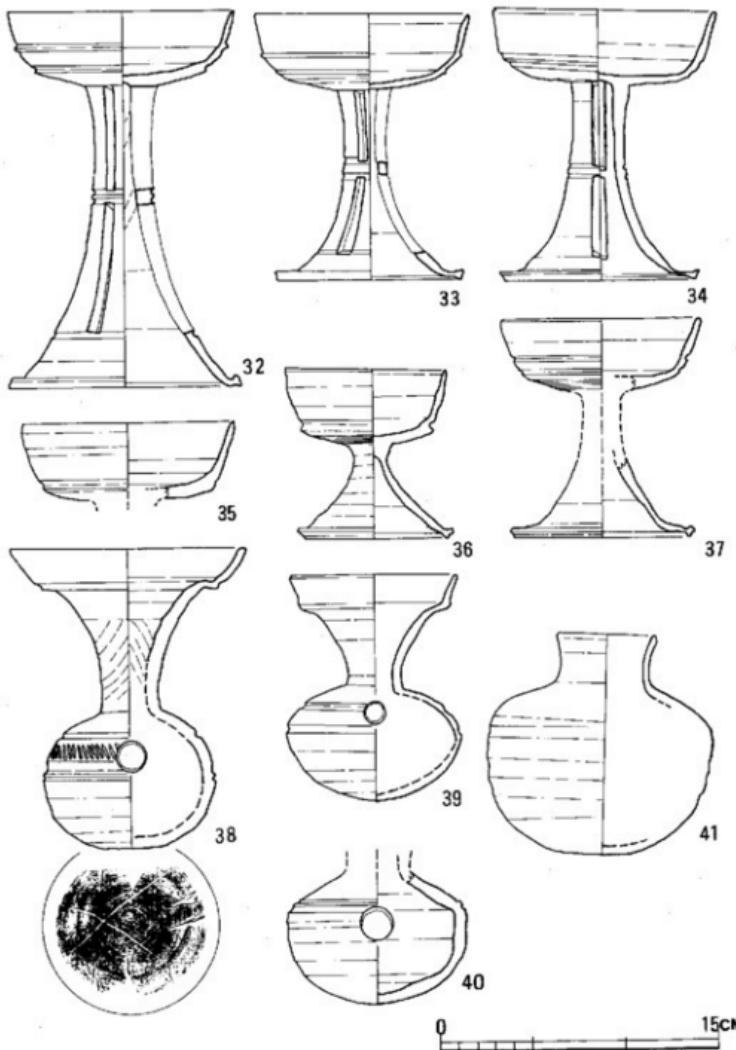


Fig.87 IV—2号墳遺物実測図 V (3/4)

の巻き上げ痕が残り、また脚筒上部にはシボリ痕が残る。精良な胎土を用い、焼成も非常に良く、器面に光沢をもつものさえある。28だけは胎土に砂粒を多量に混じえ、焼成も堅緻さを欠く。

**無蓋高杯 (Fig. -32~37)** 脚部に透孔のあるもの I類と、ないもの II類に大別する。I類はその形態により 3類に細別する。

I a類 (32) 口径12.2cm、器高20.0cmを計り、杯部に比較して細長い脚部をもつ。杯部はゆるやかな丸みをもつ底部から口縁が直線的に外反し、中央部に三角の稜線、下半部に凹線をそれぞれめぐらす。脚部は筒部中央に 2条の凹線を施し、その上下 2段に長方形透孔を作り、三方に配する。下段透孔の下にはさらに、凹線をめぐらし、筒部と脚部を分ける。脚部の開きは大きくなり、脚端部は上端に跳ね上がり肥厚する。脚端部内面はわずかに上方に盛む。

I b類 (33) 口径11.5cm、器高14.0cmで、I a類に比べ脚部の長さが減じたもので、他は大きな差異がない。杯部は I a類の下半部にめぐっていた凹線が小さな三角稜線に変わる。脚部は 2段の長方形透孔を三方に配する。脚端部は拡張され稜を作る。

I c類 (34) 法量的には I b類と変わるものはない。杯部は下半部に凹線 2条をめぐらす。脚部は筒部中央の 2条の凹線をはさんだ 2段の長方形透孔を二方に配するのみである。下段透孔の下の凹線はないが、脚端部は I b類と同じく拡張され稜を作る。

35は杯部のみであるが、その形態・法量などからみて、I類に属するものと考えられる。

II類 (36~37) I類より小形であるとともに、脚部に透孔をもたないものである。杯部はゆるやかな丸みをもつ底部から口縁が直線的に外傾し、36は下半部に、37は中央部と下半部にそれぞれ凹線をめぐらす。底部には細かいカキ目調整を行う。脚部は杯部との接合部付近が最も緊り、脚端に向って開いて行き、筒部が不明瞭になる。脚端部はともに内面にかえりをもつが、37の端部はかなり拡張されている。

**壺 (Fig. 87~38~40)** 3個体の出土をみた。38は口頭部が体部との接合部から長めに外反した後、段を作り外上方にやや内窓気味に伸び、端を丸くおさめる。口縁部下の段に 1条の凹線をめぐらす。体部は球形に近く、その上半部に 3条の凹線を入れ、1段目と 2段目の凹線間に櫛状工具の押圧による斜文を施す。底部はヘラ削りを行い、その上にヘラ記号を付す。頭部にはシボリ痕が窺われる。

39は口頭部が外反した後、段を作り外上方に直線的に伸びるが、38に比べ頭部・口縁部とも短い。体部は断面横円形を呈し、底部は尖り気味である。体部上半に 2条の凹線をめぐらせ、2段目の凹線下はヘラ削りを行う。40は体部のみで、肩部と胴部の境に 2条の凹線を入れる。胴部は丸みがなく、立ち気味である。底部は手持ちのヘラナデで丸みをおびる。

**直口壺 (Fig. 87~41)** 口径5.2cm、器高9.1cm。口頭部は体部より外反し、端がわずかに立ち丸くおさめる。体部上半に最大径をもち、胴部は指ナデによる凹凸をみせながらも、ほぼ直線的に内傾して九底の底部へと続く。底部は手持ちのヘラ削りを行う。

IV-2号墳

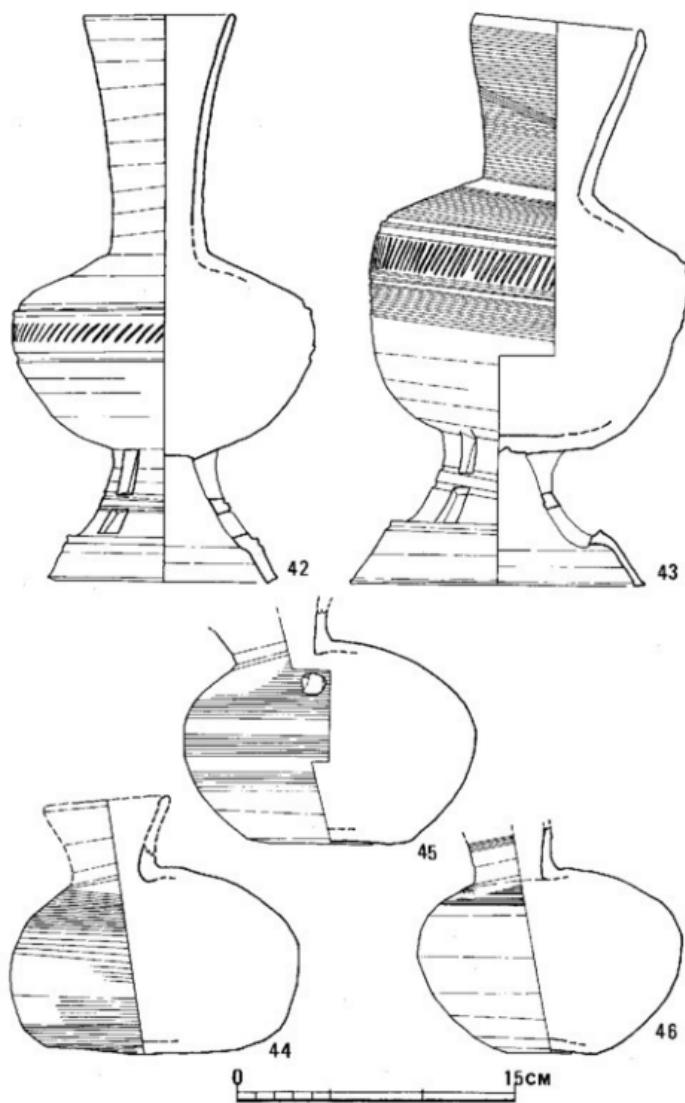


Fig.88 IV-2号墳遺物実測図VI(3)

**台付長頸壺 (Fig.88-42・43)** いずれも器高30cm前後を計る。42は口頸部が細長く直線的に外反し、端は丸くおさめる。器面には横ナデによるわずかな凹凸をみせる。体部は肩部の張りが大きく、体部から底部にかけては丸みをもつ。体部中央に櫛状工具による斜文帯をめぐらし、その上下に沈線を入れる。底部はヘラ削りを丁寧なナデで消している。脚部は外反して下り、途中で段を作つてさらに外反する。段の上部にあたる筒部には、2条の凹線をはさんで上下に2段の透孔を三ヶ所に配する。段のすぐ下には凹線がめぐり、脚端は内傾する。体部に二ヶ所同じヘラ記号をもつ。非常に端正な器形である。

43は口頸部が直線的に外反し、端部が短く立つ。体部は丸みがなく、断面が方形に近い。上半部に2条の凹線を入れ、その下に櫛状工具による長めの斜文をめぐらす。底部にはヘラ削り、口頸部から体部中央にかけては細いカキ目を入れる。脚部は外反して下り、下半部で立ち上がって稜を作り、さらに開いて脚端に続く。筒部には2条の凹線をはさんで2段の透孔を三方に入れる。42・43とも口頸部から体部にかけ、部分的に灰釉がかかっている。

**平瓶 (Fig.88-44~46)** 肩部に一对の耳をもつもの (45) ともたないもの (44・46) があるが、法量的にはほとんど変わらない。44は口頸部がくびれから外反し、端は丸くおさまる。体部前面の張りは大きいが、底部が平底に近く、また面積が広いため安定感がある。45・46はいずれも口縁を欠く。胴最大径が体部上位にあり、やや上げ底気味の底部面積が狭いため、体部前面の張りが大きくみえる。45の耳は乎こねで、肩部との接合部の調整は粗い。いずれも底部はヘラ削りで整え、44はさらにその上をカキ目で調整している。45はくびれから口縁にかけて同じヘラ記号を二ヶ所につける。

#### 提瓶 (Fig.89・90-47~50)

**I類 (47~49)** 口径10cm前後、器高22.8~24.5cmを計る。口頸部は外反し、口端部に鈍い凸帯をめぐらせ、さらにその上に1条の細い凹線をめぐらす。体部前面の張り出しあまり大きくなく、また体部背面もヘラ削りの上にカキ目で調整を行つてあるため、48がわずかに直線的である以外は、ゆるやかな丸みをもつて底部に続いている。いずれも外表面全面に細いカキ目を施している。47と49にはヘラ記号がみられる。

**II類 (50)** 口縁を欠くが、I類に比べひとまわり大きく、肩部に鉤手状の把手をもつ。体部剖面は張りがなく、背面もヘラ削りの上をカキ目で調整してゆるやかな丸みをもつため、横断面は扁平な楕円形を呈する。体部外面はすべてカキ目による調整、内面は同心円状のナデを施す。器面の一部に黄褐色の灰釉がかかる。

#### 大形壺 (Fig.91-51~54)

いずれもI区墳丘掘からの出土で、その形態より3類に分ける。

**I類 (51)** 復原口径37.8cmを計る大形壺である。ゆるやかに外反し、段を作つてほぼ垂直に立ち上がる口頸部をもつ。口唇には2条の凹線を入れる。頸部にも2条の凹線を施し、それと交互に櫛描きによる細長い斜線状の文様が2段にわたってめぐる。体部は細片のため復元で

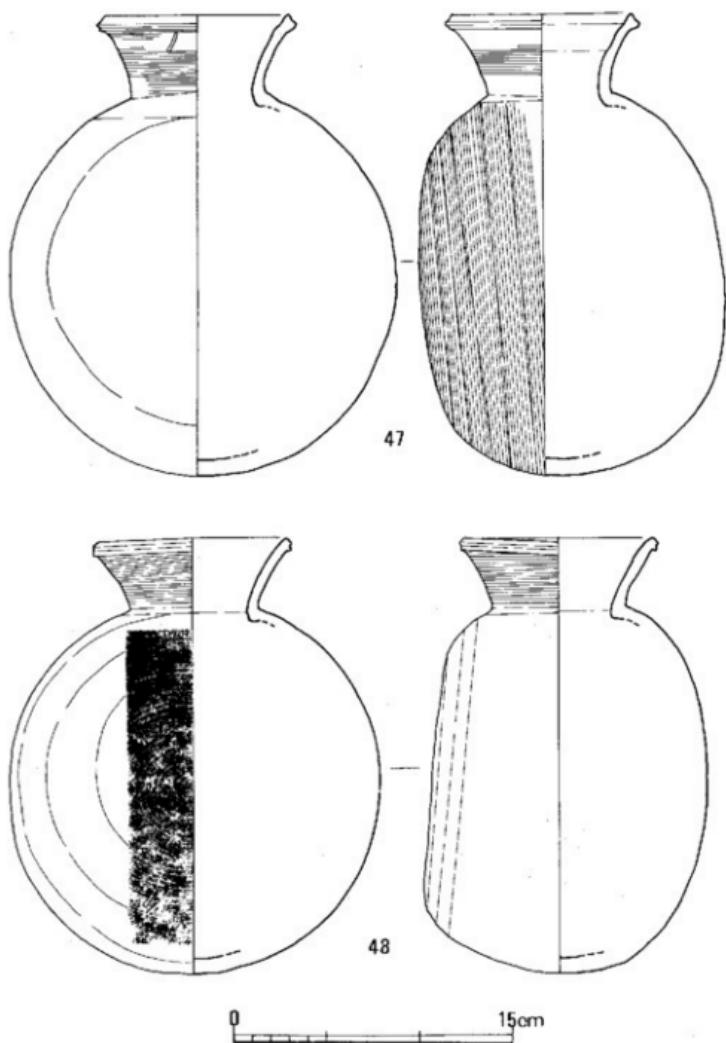


Fig.89 IV—2号墳遺物実測図版(3)

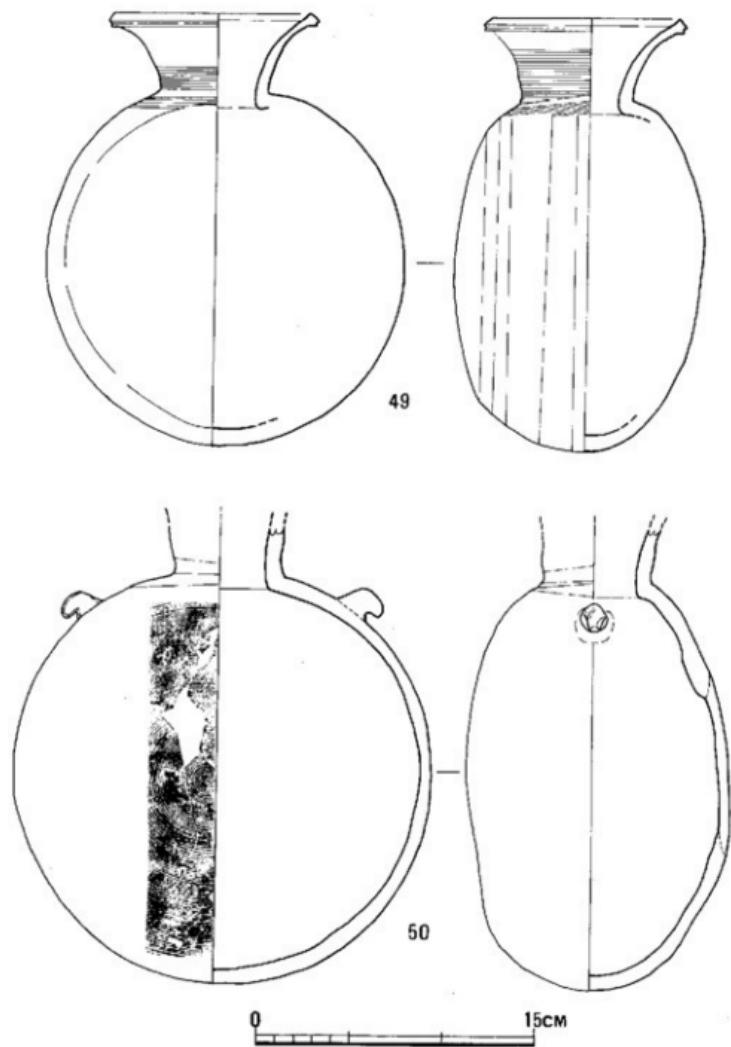
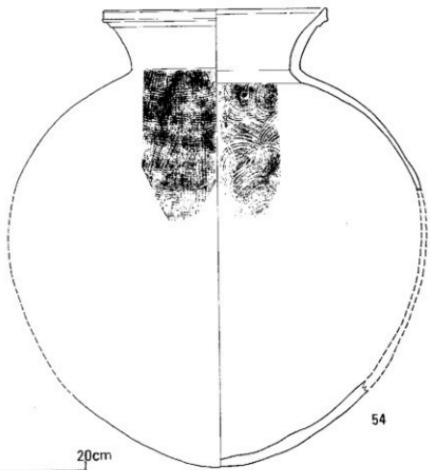
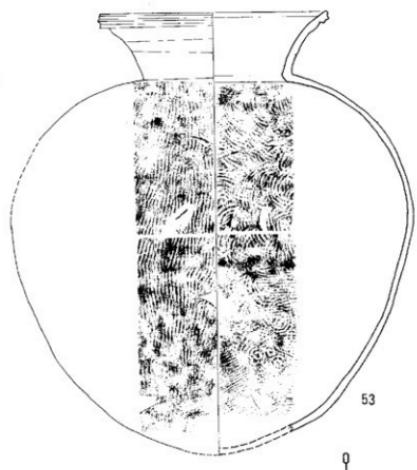
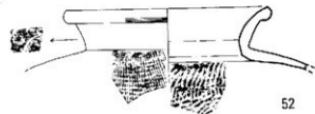
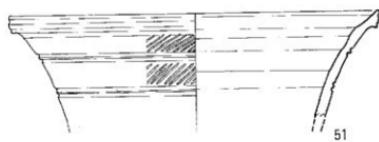


Fig.90 IV-2号墳出土実測図面(3分)

IV-2号墳



0 20cm

Fig. 91 IV-2号墳遺物実面図 IX (34)

きなかつたが、叩きがあり、外面はそれを櫛状工具によって消している。

II類(52) 復元口径20.2cm、口頸高4.0cmを計る。口縁は外反し、端が丸く肥厚して外に突出する。肩部は張りをもつように思われる。外面には平行叩き目文、内面には同心円文がみられる。

III類(53・54) 復元口径22.5cm前後、復元器高43.8~45.0cm。口縁部が外反し、段を作つてほぼ垂直に立つ。膨んだ胴部の最大径は上位にあり、次第に内傾して丸底の底部をなす。53は胴部外面に平行叩き目文を主として施すが、底部近くには細いカキ目による調整を行っている。54の胴部外面は格子風叩き目文である。内面にはいずれも同心円文がみられるが、53の底部付近にはその上に平行叩き目文のようなものが施されている。

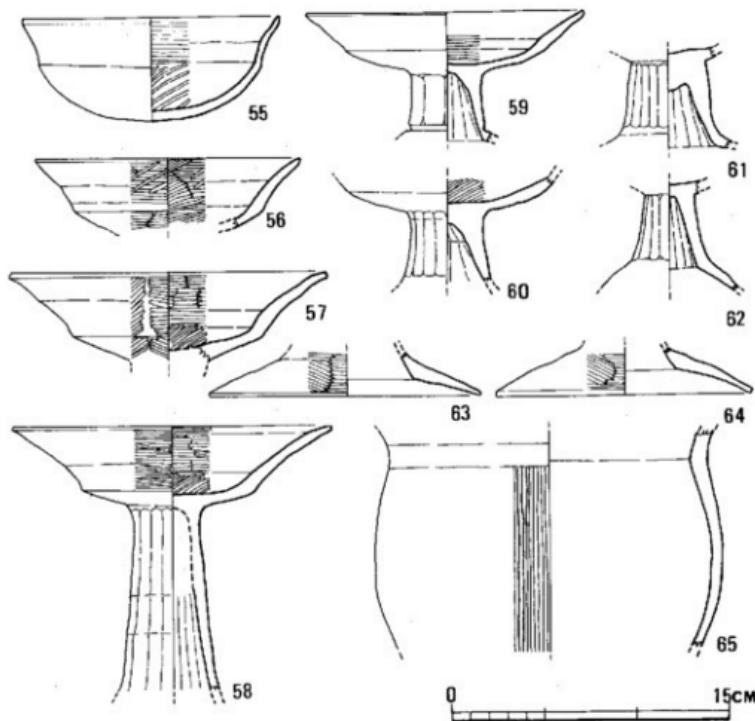


Fig.92 N-2号墳遺物実測図 IX (3)

## 土師器 (Fig.92-55~65)

**椀** (55) 口径13.6cm、器高5.4cm。器体の中位で丸底の底部から口縁部が内弯するようにして外反する。端は尖り気味である。内外面ともヘラ研磨を行っていると考えられるが、外面は摩滅が著しく明確にしがたい。

**高杯** (56~64) 器体全体を識別できるものではなく、個体数は杯・脚部から最低5個体分と考えられる。杯部はその下位から口縁部が内弯気味に外反する。内外面ともヘラ研磨による調整を行う。脚部には短脚と長脚がある。59~62は短脚で、筒部外面に縦のヘラ削りを行う。59は縦のヘラ削りの幅が広く、また脚部との境を1条の凹線で分かつ。58は長脚で、杯部そのものも他に比べ大型である。筒部には短脚同様縦のヘラ削りを行うが、一気に下まで削るのではなく、3段に分けて削っている。63・64は脚部で、筒部との境からかなり大きい角度をもってほぼ直線的に開く。外面はヘラ研磨を行っている。

**甕** (65) くびれ部を中心とした破片である。胴部はほとんど丸みをもたず、口縁はゆるやかに外反するようである。外面には縦の刷毛目、内面は横ナデによる調整を施す。

(浜石)

Tab.10 IV-2号墳出土土器計測表

(単位:cm)

類	No.	口径	器高	—	—	胎 土	焼成	色 調	ロ ク ロ 刈取方向	ヘ ラ 記号	出土地点
杯蓋	1	14.1	4.1			微砂粒混	良好	暗セビア	逆時計		I区墳丘裾
	2	13.4	4.0			砂 粒 混	良好	灰 黑 色	逆時計		I区墳丘裾
	6	13.1	3.6			砂 粒 多	良好	灰 色	時計		差道後半部
	7	13.0	4.0			砂 粒 混	良好	暗褐 色	—	○	I区墳丘裾
	8	12.5	3.4			微砂粒混	普通	黑 棕 色	時計	○	I区墳丘裾
	12	12.7	4.0			砂 粒 多	良好	灰 黑 色	時計		I区墳丘裾
杯蓋	13	14.0	?			良 質	不良	淡灰 黑 色	?		I区墳丘裾
	20	口径	?			砂 粒 混	良好	灰 黑 色	?		I区墳丘裾
	21	11.5	?			砂 粒 混	良好	灰 黑 色	?		I区墳丘裾
類	No.	口径	器高	受部徑	立ち上がり 位置	胎 土	焼成	色 調	ロ ク ロ 刈取方向	ヘ ラ 記号	出土地点
杯身	3	1.7	4.6	14.8	1.1	微砂粒混	良好	暗セビア	逆時計		I区墳丘裾
	4	12.6	4.3	14.9	0.9	微砂粒混	良好	暗セビア	逆時計		I区墳丘裾
	5	12.6	4.2	15.4	1.0	微砂粒混	良好	灰 黑 色	逆時計		I区墳丘裾
	9	13.0	4.4	13.3	1.0	砂 粒 多	良好	灰 黑 色	時計		差道後半部
	10	11.7	4.7	13.8	1.0	砂 粒 混	良好	暗褐 色	時計		I区墳丘裾
	11	11.9	3.7	13.1	0.9	微砂粒混	普通	黑 褐 色	時計	○	I区墳丘裾

	14	10.0	4.0	14.1	0.8	不良	淡灰黑色	時計	I区埴丘裾
	15	12.9	?	14.5	0.9		灰色	?	I区埴丘裾
	16	11.9	4.2	14.0	0.9		青灰色	時計	○ I区埴丘裾
	17	11.2	3.9	14.1	0.8		淡青灰色	?	○ I区埴丘裾
	18	12.4	3.7	14.0	0.7		灰黑色	時計	I区埴丘裾
	19	12.4	4.2	13.3	0.7		灰黑色	時計	○ I区埴丘裾
	IV	22	11.0	3.2	12.0	0.6	粗砂混良好	灰黑色	時計
	類	No	口徑	器高	—	胎土	燒成	色調	出土地点
高杯 蓋	23	1.0	(3.8)			砂粒混良好	灰	逆時計	I区埴丘裾
	24	16.8	(1.5)			砂粒混良好	青灰	逆時計	I区埴丘裾
	25	14.4	(4.6)			砂粒混良好	灰	逆時計	I区埴丘裾
	類	No	口徑	器高	脚底径	泥上火印	胎土	燒成	色調
有蓋 高杯	26	1.0	17.7	16.1	1.1	精良	良好	青灰色	逆時計
	27	15.9	17.0	17.2	1.2	良質	良好	青灰色	—
	28	13.0	?	15.3	1.0	砂粒多	普通	青灰色	—
	29	?	?	12.9	?	砂粒少	良好	青灰色	?
	30	?	?	15.7	?	良質	良好	灰黑色	?
	31	?	?	10.8	?	良質	良好	灰黑色	?
無蓋 高杯	32	12.2	20.0	12.5		砂粒多	良好	青灰色	—
	33	11.5	14.0	10.0		砂粒少	良好	灰黑色	時計
	34	11.9	14.4	10.1		砂粒少	良好	灰黑色	時計
瓶	35	11.4	?	1?		砂粒多	良好	黑	?
	36	8.6	8.9	8.0		砂粒多	良好	黑	—
	37	10.5	?	9.4		砂粒多	普通	灰黑色	—
	38	12.1	15.9	9.1		砂粒少	良好	青灰色	時計
直口 壺	39	8.8	12.0	9.3		砂粒混良好	灰黑色	時計	I区埴丘裾
	40	?	?	9.7		良質	良好	灰	—
	41	5.2	11.2	12.1		砂粒多	良好	灰黑色	—
凸付 長頸 壺	No	口徑	器高	脚底径	胎上	燒成	色調	出土地点	
	42	8.1	30.0	16.3	6.9	砂粒混良好	灰黑色	—	○ 淹道後半部
	43	9.1	30.2	17.1	8.0	砂粒多良好	灰白色	時計	淹道後半部
平底	44	6.6	13.6	15.4		砂粒多良好	灰黑色	時計	淹道後半部
	45	?	?	15.6		砂粒多良好	灰黑色	—	○ 淹道後半部

## 第3章 調査の記録

		46	?	?	14.2		砂粒多	良好	灰 黑 色	-		玄門部
	類	No.	口径	器高	底 盤大徑	底 盤小徑	胎土	燒成	色調	ヘラ 記分		出土地点
擗瓶	I	47	9.8	24.5	20.7	15.4	砂粒混	普通	黃褐色			赤道後半部
		48	10.1	22.8	19.8	14.8	砂粒混	良好	暗セビア			赤道後半部
		49	10.5	22.8	19.2	13.3	砂粒混	良好	暗セビア			赤道後半部
	II	50	?	?	22.4	14.0	良質	良好	青灰色			赤道後半部
大型 甕	類	No.	口径	器高	底 盤大徑	底 盤小徑	胎土	燒成	色調			出土地点
	I	51	37.8	?	?		砂粒混	良好	黑色			I区埴丘櫛
	II	52	20.2	?	?		砂粒多	良好	灰褐色			I区埴丘櫛
	III	53	22.8	43.8	40.6		良質	良好	暗セビア			I区埴丘櫛
		54	22.5	45.0	?		良質	良好	暗セビア			I区埴丘櫛
土師 瓶		55	13.6	5.4			良質	良好	赤褐色			赤道後半部
		No.	口径	器高	底盤徑		胎土	燒成	色調			出土地点
		56	14.2	?	?		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		57	16.8	?	?		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		58	17.0	?	?		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		59	14.6	?	?		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		60	?	?	?		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		61	?	?	?		砂粒混	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
		62	?	?	?		砂粒多	不良	淡黃褐色			I区埴丘櫛
		63	?	?	14.6		良質	良好	暗赤褐色			I区埴丘櫛
		64	?	?	13.6		良質	良好	赤褐色			I区埴丘櫛
土 瓶 廣		65					粗砂混	不良	赤褐色			I区埴丘櫛

## 14 その他の遺物

### 1) 繩文式土器 (Fig.93・94)

II - 1号墳、III群の墳丘およびその周辺部より約30片の出土をみたが、いずれも明確な包含層・造構に伴うものでない。ただし、15~17の夜白式土器はIII - 2号墳西側の溝状造構よりの出土である。

1~7は押型文土器である。1の山形押型文を除いて他はすべて楕円押型文である。1・4・5・7は口縁部破片で、1・4・5は口縁部が肥厚する。1は内外面に横位の山形押型文を施文する。山形押型文は口縁部外面に施文された山形文と、口縁部下半および内面に施文された山形文は原体が異なり山形押型文に二種類みられる。外面上には無文帯があり3のようにベルト状に施文されたものであろうか。4も内外面に楕円押型文を横位に施文したものである。肥厚した口縁部端部は平坦にされ、その上にも楕円押型文が施文される。内面は一面に横位の楕円押型文が施文されるが、外面は口縁下1.5cmの間は無文帯として残し、その下に横位の楕円押型文を施文している。5は摩滅が著しいが、肥厚した口縁直下に横位の楕円押型文を施文する。内面には押型文が施文された痕跡はない。7は直口する口縁部で、外面に粗大な楕円押型文が施文されるが遺存状態が悪い。2・3・6は胴部破片である。2は外面にやや粗大な楕円押型文を施文する。3は器面の遺存状態が良好でないが、外面に横位の楕円押型文がベルト状に3条施文される。6は横位の楕円押型文が内外面に施文される。1~7はいずれも胎土に少量の砂粒を混入し、焼成は良くない。黄褐色~赤褐色をなす。8は無文の上器であるが、内外面に荒い擦痕が認められる。押型文土器に伴う無文土器と考えられる。胎土・焼成・色調は上記押型文土器と同様である。

9~14は前期に比定される土器群である。文様の差異によって次の三群に分類できる。外面面が貝殻条痕によって器面調整されるもの(9・13)、ミミズ膨れ状の隆起線を貼り付けたもの(10・11)、内面は貝殻条痕によって器面調整され、外面は貝殻腹縁を押圧したものや、刺突文で文様構成をなすもの(12・14)。

9は内面が横位ないしは斜位の条痕で器面調整され、外面は横位の条痕を素地として、縦位、斜位の条痕で文様効果をあらわしている。スヌの付着がみられる。13は内外面共横位、斜位の条痕で器面調整を行う。9・13は共に胴部破片で、胎土に少量の砂粒を混入する。焼成は良好で赤褐色をなす。10・11は共に細い粘土紐をミミズ膨れ状に貼り付けたもので10に2条、11に1条認められる。10は口縁部破片で、11も口縁部に近い所の破片である。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。いわゆる轟B式と呼ばれている上器である。12は内面が横位の条痕で器面調整が行われ、外面はヘラによる浅い沈線が半円状に描かれ、それ

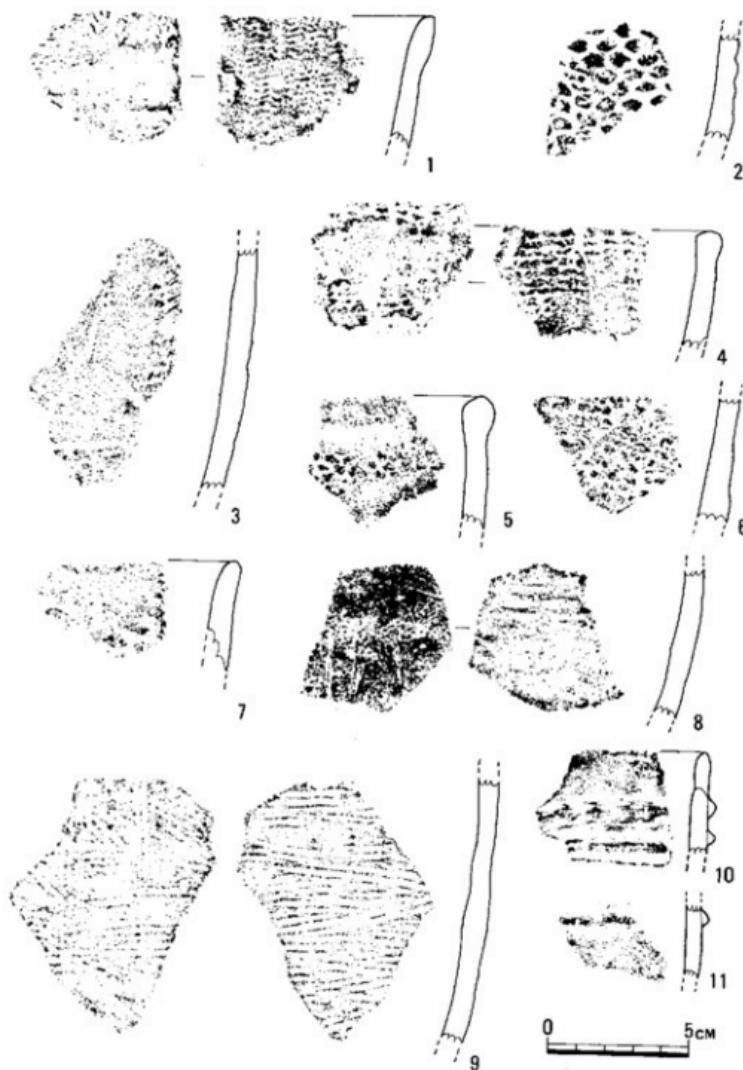


Fig. 93 縄文式土器実測図 I (1)

その他の遺物

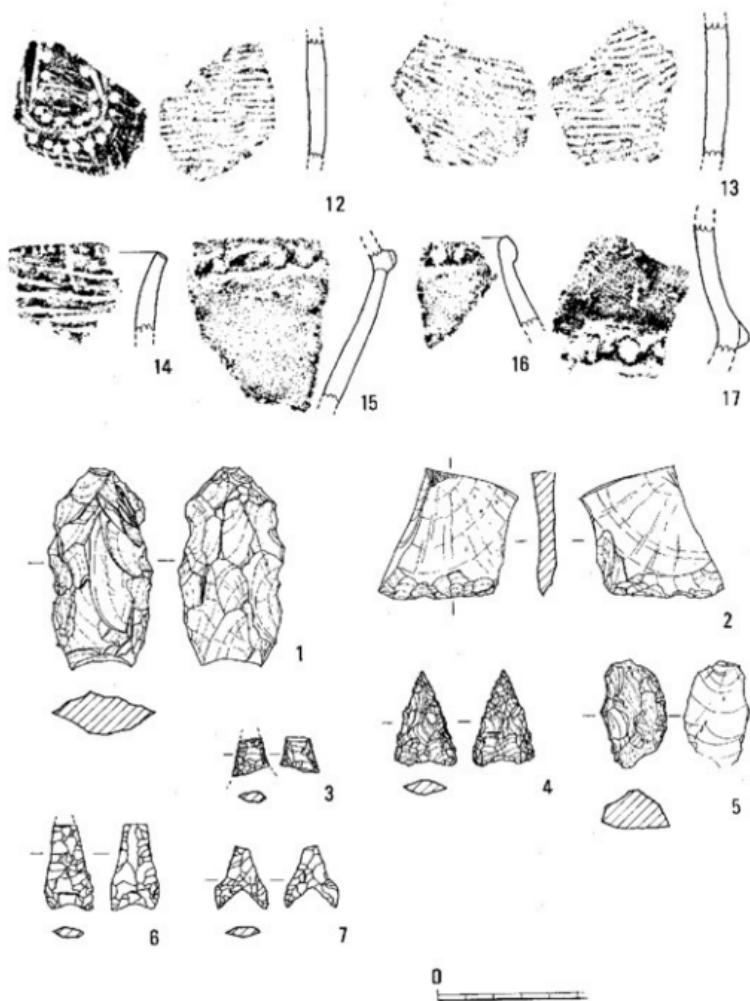


Fig. 94 縄文式土器窯内出土図 II、石器実測図 (分)

をはさんで刺突文が半円状にめぐる文様構成をもつ。14は口縁部破片で口唇部に刻目が施される。小破片であるが口縁部は外反するものであろう。内面は横位の条痕で器面調整され、外面はアナグラガイ科の貝殻腹縫を交互に押出し文様としている。12・14共に胎土には砂粒を含み、焼成は良好、色調は12が赤褐色、14が黄褐色をなす。

15~17はいわゆる夜白式土器である。3片共摩滅が著しく器面の観察はできない。16は口縁部破片、15・17は胴部破片で共に貼り付けの刻目突帯を有する。不整形の溝からの出土であるが、遺存土器からすれば本来溝に伴うものでなく、他所よりの流れ込みと考える。1・6・8・13はIII-1号墳盛土中、2はII-1号墳1区、3・4・9~11・14はIII-2号墳盛土中、12はIII-2号墳IV区溝中、5・7は広石第2池畔、15~17はIII-2号墳西側の不整形溝中よりの出土である。

## 2) 石 器 (Fig.94)

7点の出土があり、他に黒曜石のフレイク・チップが若干ある。1・2・4・5はIII群の花崗岩露頭の周辺部、3はIV-2号墳石室埋土中、6はII-1号墳Cトレンチ第一層、7はII-1号墳IV区の出土である。

1はサヌカイト製の石槍である。両面より粗い剝離形を整えている。先端部はやや細かい剝離で尖頭部をつくり出しが鋭くない。長さ7.1cm、幅3.2cm、厚さ1.5cm。

2はサヌカイト製のスクレイバーである。自然面を打面とした横剥ぎのフレイクを素材として、打面とは反対の一辺に両面より細かい剝離を加えて刃部をつくり出したものである。

5は黒曜石製のスクレイバーである。打面と主要剝離面以外の面は自然面を多く残している。綫長の一側に主要剝離面側より刃溝を加え、他の一辺にチッピングによって鋭い刃部をつくり出している。

3・4・6・7は石鎌で3・4は黒曜石、6・7はサヌカイトを原材として利用している。3は先端部と基部を欠いているが、周辺を丁寧なチッピングによって形を整えている。主要剝離面を残す。4は大型の石鎌で周囲より丁寧な剝離で整形している。基部のくり込みは浅く二等辺三角形をなす。6は先端部を欠く。基部の抉り込みは浅く、細長い鎌である。基部に近い両側で張り出し肩部をつくり、細長い五角形を呈している。7も先端部を欠損する。抉り込みは三角形に深く、脚部が大きく外に開く形である。

## 3) 弥生式土器・石器 (Fig.95)

弥生式土器も少數の出土をみたが、その大部分は甕の胴部破片で図示できるものは4点のみである。また弥生式土器に伴うと考えられるものに磨製石斧1点がある。

1は磨製石斧で、基部を欠失する。硬砂岩(?)を利用したものである。刃部は船刀をなす

その他の遺物

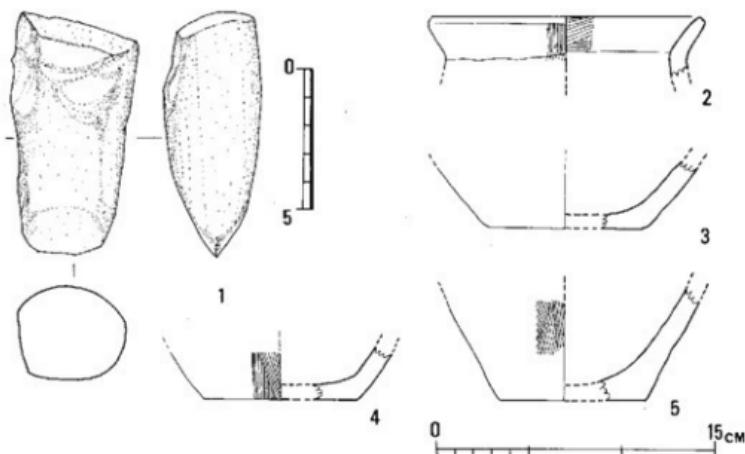


Fig. 95 弥生式土器 石器実測図

が刃部幅3.0cmと狭い。全体に風化摩滅が著しい。断面形は梢円形をなす。現存長8.6cm、幅4.5cm、厚さ3.4cmである。

2は口縁部破片である。くの字に彫曲した口縁をもつ變形土器である。復原口径14.2cm、口縁部内面は斜位の刷毛目調整、外面の口縁から頭部にかけては縱位の刷毛目調整痕がみられる。頭部にススが付着する。

3～5は底部破片である。共に平底で、底径は3が8.5cm、4が8.2cm、5が8.0cm、外面は縱位の刷毛目調整痕がみられる。弥生式土器は、いずれも胎土中に多量の砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は赤褐色をなす。



## 第4章 広石古墳群をめぐる諸問題

### 1. 墳丘基底面および墳丘外土塙について

広石古墳群のII・III群発掘区より5基の土塙を検出した。うち4基は墳丘外に位置していたが、残りの1基（III群2号土塙）は墳丘基底面に掘り込まれており、墳丘を除去した後、発見に至った。これらの土塙は平面が長方形もしくは方形に近く、長さ1m前後、幅0.5~1.0mほどの小型のものである。いずれも塙内には木炭を混えた黒色土が充満しており、壁面が焼けて赤変するものもあった。II群1号土塙から須恵器片が出土しており、また検出時の状況からみても、5基の土塙が各々の群の古墳に伴う遺構であるのはまちがいない。この遺構の性格について断定すべき資料は少ないが、以下類例をみてゆくことで検討を加えたい。目につく限りのこの種の土塙例は以下の4ヶ所である。

- (1) 福岡市西区 高崎2号墳
- (2) 同上 高崎5号墳
- (3) 同上 大谷古墳群
- (4) 甘木市安川町 持丸2号墳

このうち高崎5号墳、持丸2号墳は墳丘基底面に土塙をもつ。高崎5号墳の場合、これに関する叙述はないが、図面で見る限りにおいて、墳丘左側基底面に幅1.15m、最深部100mを計る隅丸方形の土塙が存在する。遺物の出土は明確でないが、広石III群2号土塙に類似した性格をもつと考えられる。これに対し持丸2号墳では、奥壁内側から4.0mの墳丘背部基底面に、最大幅1.0m、長さ2.6mの不整な土塙を掘り、3個体分の須恵器大形表を外面を上に積み重ねて埋蔵する。これは明らかに墳丘盛土以前、何らかの祭祀が行われたことを示している。

こういった墳丘基底面での祭祀は、土塙を伴わない形でも行われている。筑紫郡郡河川町観音山6号墳では、方形台状の墳丘基底面で手捏土器、滑石製の勾玉、菅玉、白玉を用い、火をたいて祭りを行った痕が見られる。また、八女郡広川町山の前2号墳では、石室東南方向の印地表面（基底面）で蓋をした須恵器杯が3組並置されており、盛上前の儀礼か古墳造営過程における儀礼に使用されたものであるとされる。この他、上述した高崎2号墳でも須恵器大形表が墳丘下の地山面より出土しており、土塙と相まって祭祀が行なわれたことを窺わせる。

墳丘基底面における土塙、土器などの存在は類例がまだ少なく断定的な性格づけはできないが、古墳に対するひとつの祭祀形態と想定してよいであろう。それも墳丘造営以前の祭祀であり、墳丘裾部によく見られる土器群における祭祀とはまた別な意味をもつと考えられる。土塙の有無、遺物の有無はその祭祀におけるバリエーションを表わしたものかもしれない。

墳丘基底面の土塙に対し、広石第II群1、2、3号土塙、III群1号塙のように墳丘外に位置する土塙は高崎2号墳、および大谷古墳群に見られる。高崎2号墳の土塙は、墳丘南側の溝南斜面にあり、長さ1.1m、最大幅0.86mを計り、上部で角ばかり、下部で丸味をもった形を呈する。深さは0.47mから0.13mと中部に向かって浅くなり、底面には灰層がある。壁面は非常に硬く焼けている。上部に煙道状のピットがあり窓状遺構と呼んでいるが、その性格は不詳とされる。上部のピットを除けば、その形態はII群2号土塙と類似する。大谷古墳群では、標高122mの山陵斜面から近接した1号炉址、2戸炉址と呼ぶ2基の土塙を検出している。1号は径0.4~0.5mの楕円形を呈し、2号は長さ1.2m、現存幅0.38mを計る楕円形のもので、ともに壁面は焼けて赤変する。1号炉址と呼ぶ小型の土塙床面から、鉄滓が1点出土したことより、製鉄炉の可能性をも示唆している。これら墳丘外の土塙が、どのような性格をもつのか明確にし難いが、広石II群1号土塙のように塙内から須恵器片が出土することなどから、墳丘基底面の土塙とその意味は異なるにしろ、火を使用した何らかの祭祀遺構ではないかと考えられる。すれば大谷古墳群における土塙から出土した鉄滓も、これが単なる炉址でなく祭祀に利用したという裏付けの一資料となりえるであろう。墳丘外における祭祀とすれば、それは直接的に葬送に関わるものとするより、別の意味を想定した方がよいであろう。特に大谷古墳群の2基の土塙は明確に伴う古墳がなく、より広範囲な場所における祭祀を窺わせる。

墳丘基底面および墳丘外の上述した遺構は、従来のトレンチ方式の発掘調査方法では、まれに当たることはあっても、ほとんど検出できる見込みがない。墳丘を除去し、さらには古墳周囲にまで発掘調査を拡げて初めて検出できるのである。先にあげた類例の多くが、広範囲な発掘調査によるものである。古墳における企画・地山整形・造築形態を検討する上でも広範囲な発掘調査は必要である。この種の祭祀形態の多くの類例を持ちたい。 (浜石)

註1 浜田信也(編)『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1970 P.67

2 萩原和彦・上野精志『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 1973 附図4図

3 緒方勉(編)『大谷古墳群1』1970 P.42,43

4 廿木市教育委員会『持丸古墳群』(1974) P.8、P.19

5 井上裕弘(編)『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973 P.36

6 西谷正(編)『九州縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』III 1972 P.108

## 2. 広石古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討

本古墳群の発掘調査を実施した7基の古墳からは盗掘を受けていたにもかかわらず後半部より多量の須恵器が出土した。特にI-1号墳、II-2号墳、IV-2号墳において盗掘は葬道後半部におよばず、追葬のたびに重ね置かれたような状態で数段に重なり合った、個体数にして30~100個の須恵器が一括出土した。須恵器は杯、蓋を主体として高杯、甌、平瓶、提瓶、短頸壺、台付長頸壺、直口壺、榠、甕等多彩な器種がそろっている。そしてこれらの須恵器にはヘラ記号を有しているものが多く認められる。須恵器のヘラ記号についてはその意味等について様々な議論がおこなわれてきたが今だその決着はみていない。本古墳群出土の須恵器は前述したように夥しい量で、使用場所（住居址、古墳等）出土須恵器のヘラ記号のあり方を追求する上には良好な資料を提供してくれた。今後の基礎資料として若干の整理と分析をおこなってみたいと思う。

### 1) 広石古墳群出土須恵器のヘラ記号

#### a. I-1号墳

ヘラ記号は出土須恵器91個体中の48個体（52.7%）に認められ、器種としては杯、蓋、平瓶、提瓶、壺がある。中でもその主体を占めるのは杯と蓋で、杯は30個体中の20個体（66.7%）に、蓋は28個体中の20個体（71.4%）にヘラ記号を有する。杯、蓋に記されるヘラ記号は10種類でその大部分は直線数本を組み合せた簡単なものが多い。

杯、蓋で最も多いヘラ記号は木で12個体がみられる。須恵器の胎土、焼成、色調、製作技術、器形等より3類に分類する。（Fig.96）

A類としたものは蓋が27、28、17で、杯が57、58の計5個体である。このうち27と57・28と58はセット関係あったものと考えられ出土状態でもそのことを示していた。セット関係にある蓋と杯に認められるヘラ記号はその描き方、記号の構成において完全に一致するが、27、57と28、58のセット関係にある両者間のヘラ記号には差があり別個の工人によったものと考えられる。A類に分類したものは胎土、焼成等の諸要素は極めて類似していて同一窯産である可能性が高い。

B類としたものは蓋で18の1個体のみである。ヘラ記号はA類としたものより確である。

C類としたものは蓋が5~7の3個体、杯が37~38の3個体である。杯37の受部には蓋の口唇部がゆきして残存し、蓋5の口唇部の欠損部と完全に合致し5と37がセット関係にあることが実証できた。杯と蓋を合致させた場合ヘラ記号の位置は一致せず全く逆の位置関係を示している。また、ヘラ記号はセット関係にある場合はA類と同様に極めて類似していることが指摘できる。このグループは焼成方法についても興味ある問題を提起している。すなわち、37~38

の杯は外底部全面に灰かぶりがあるのに対し、5～7の蓋に全く灰かぶりがみられず、また、杯、蓋には重ね焼きの痕跡はなく、焼成にあたっては杯と蓋を合せ蓋を下にし、1個1個のセットを並べて焼いたことを示していることである。このことはこれらの須恵器を焼いた窯の生産性とも関連していて注目されるところである。成形技法にも特徴を指摘することができる。他の杯、蓋のすべてが底部（天井部）の調整に回転ヘラ削りの手法をとっているのに対し、このグループの杯、蓋は静止ヘラ削りの手法を用いている。同様の手法を用いるものに35と8がある。35は杯でC類の杯と同様のものである。ヘラ記号もC類と同様のものがついていると思われるが底部の灰かぶりが激しく、明確にしがたい。8は蓋で付のヘラ記号を有している。ヘラ記号の差異を除けば、胎土、焼成、色調、器形、成形技法等の諸要素は同じでC類と変わることはない。また、杯、蓋以外でその特徴が類似するものに提瓶62がある。ヘラ記号は8と同様で、体部背面は静止ヘラ削り調整で、他の諸要素も8と同様にC類と同じである。以上のことより、C類の5～7、37～38と8、35、62の須恵器は同一窯産であることが指摘できる。

次に多いヘラ記号は1条の沈線を刻んだもので8個体ある。胎土、焼成、色調、器形、製作技法より2類に分類する。

A類としたものは蓋が3、4の2個体、杯が30～34の5個体である。セット関係は明らかにできないが、3と30、4と31は杯と蓋が組み合って出土した。ヘラ記号が単純なためそれらの差異の判別は困難である。胎土、焼成、色調、器形、製作技法等の諸要素は同じでA類の須恵器は同一窯産であることは疑いない。

B類としたものは蓋2の1個体のみである。製作技法、焼成、色調にA類との差異がみられる。ヘラ記号はA類と比較し彫りが深い。このヘラ記号が記された時点は大井外面頂部のヘラ記号の一部がつぶれて不鮮明になっていることからすれば、成形後から乾燥期の間に求めることができる。

次に多いのは直線3本を並列させたヘラ記号で5個体ある。胎土、焼成、色調、成形技法、器形より4類に分類した。

A類としたものは蓋11と杯44の各1個体でセット関係を有する。出土状態もセットであることを示していた。杯の外底部に灰かぶりがみられ、△～C類と同様に焼成時には杯と蓋が逆転していたことが知られる。杯の外底部には重ね焼きの痕跡がみられる。

B類は蓋16の1個体のみである。焼成が不良でヘラ記号は鋭いが浅い。

C類は杯44の1個体のみである。外底部に灰がぶりがみられ、この須恵器も焼成時には杯と蓋との逆転現象がみられる。

D類としたのは杯45の1個体でC類とは類似している。外底部には多量の灰がぶりがみられ、焼成時の杯と蓋との逆転はD類と同様である。

×印のヘラ記号をもつものは3個体あり胎土、焼成、色調、成形技法、器形、記号の形より

広石古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討

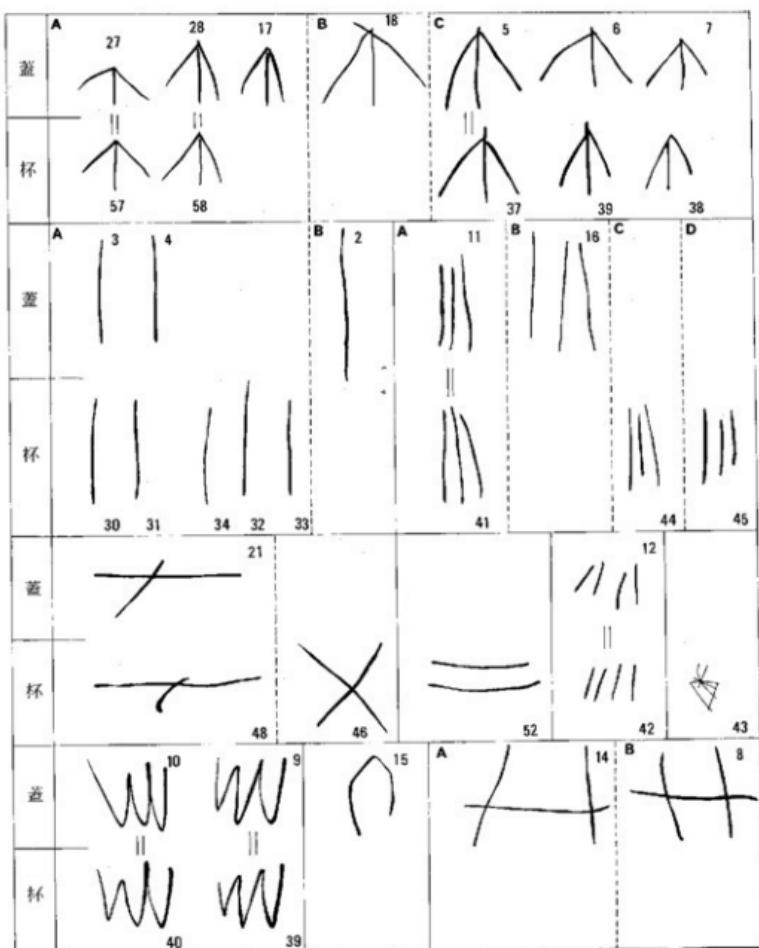


Fig. 96 広石I-1号墳出土須恵器のヘラ記号(%)

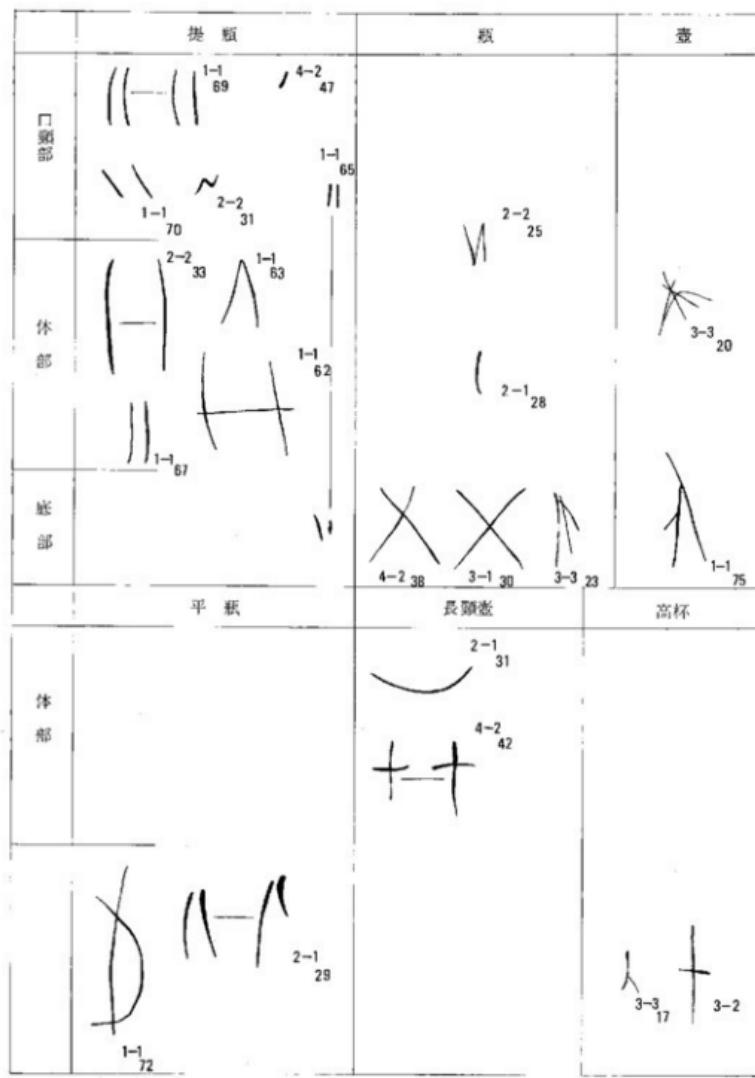


Fig.97 広石古墳群の杯、蓋以外の須恵器のヘラ記号 (%)

2類に分類した。

A類は蓋21と杯48の各1個体で、×印の一方の直線が他方より著しく長い特徴を有している。杯、蓋共に重ね施きの痕跡がみられる。

B類は杯4の1個体でヘラ記号はいわゆる×印で外底部中央に深く刻まれる。

以上の他に直線を2本、3本並列させたものや曲線によるヘラ記号が認められるが、セット関係を有するものに12と42、10と40、9と39がある。12と42は綺い4本沈線のヘラ記号を有し出土状態でもセットであることが裏づけられる。10と40、9と29は共に同一ヘラ記号を有し、他の諸要素からもこれらのが同一窯産であることが推測される。一方8と14のように同一ヘラ記号をもつが、整作技法等に大差があり同一窯産とは考えられないものもある。43は綺い浅い沈線で特異なヘラ記号が施されている。

杯、蓋以外では提瓶の16個体中の6個体(37.5%) 平瓶の2個体中の1個体、壺3個体中の1個体にヘラ記号が認められる。

提瓶では2本直線のヘラ記号が多く65、67、69、70の4個体に認められる。ヘラ記号の付される部位は69が口頸部に2ヶ所、70は口頸部、42は口頸部と底部付近の2ヶ所、67は体部上半であり、同一個体で2ヶ所にわたるヘラ記号をもつものは65と69で、ヘラ記号は同一のものが付される。他のヘラ記号をもつ62、63は体部背面に施され、62については前述したとおりである。壺75と平瓶72は底部にヘラ記号がみられるが、いずれも杯、蓋に同一の記号はみいだせない。

#### b. II-1号墳

ヘラ記号は出土須恵器34個体中の10個体(29.4%)に認められる。器種としては杯、蓋、越台付長颈壺があるが、主体を占めるのは杯である。杯は13個体中の6個体(46.2%) 蓋は12個体中の1個体(8.3%)にみられる。杯、蓋にみられるヘラ記号は5種類すべてが直線の組み合せによるものである。杯17、18は同一のヘラ記号が付され、胎土、焼成、色調、成形技法、器形等の諸要素は類似し同一窯産であることを示している。この手の須恵器は焼成不良で、保存状態が悪くヘラ記号が消失したものがあり、他に杯16、蓋1~3がある。同一ヘラ記号が付されていたと考えるが判然としない。杯14、19は×印の同一ヘラ記号を有するが、記号自体の差異や器形、年代差より分類されるものである。平瓶29には底部に2ヶ所同一のヘラ記号がみられる。

#### c. II-2号墳

ヘラ記号は出土須恵器42個体中の13個体(31.0%)に認められる。器種としては杯、蓋、越台付直口壺、蓋があるが、主体を占めるのは杯、蓋である。蓋は10個体中の5個体(5.0%) 杯は7個体中の4個体(57.1%)と高率を示している。杯、蓋のヘラ記号は6種類で、蓋5の曲線の記号を除いて他は直線の組み合せによるヘラ記号である。また蓋6を除いた8個体は内面にヘラ記号があるという特徴がある。蓋3と杯12はヘラ記号が同一で、胎土、焼成、色調、

成形技法、器形からして同一窯産と考えられる。また蓋8、9と杯10についても同様のことがいえる。杯、蓋以外では提瓶31の口頸部に、33の体部前面と背面の2ヶ所に同一ヘラ記号が、趣31の口頸部、直口壺蓋にヘラ記号が認められる。

## d. III-1号墳

ヘラ記号は出土須恵器31個体中の14個体(45.2%)に認められる。器種には杯、蓋、趣があり、主体を占めるのは杯と蓋である。杯は11個体中の5個体(45.5%) 蓋は14個体中の8個体(57.1%)に認められる。杯、蓋のヘラ記号は9種類で、大部分は直線の組み合せによるものである。本墳の場合盜掘が著しく出土須恵器のセット関係については把握が困難である。

## e. III-1号墳東側土塙

土塙中より出土した3個体の須恵器の1個体(33.3%)の蓋内面に三角形のヘラ記号が認められる。

## f. III-2号墳

ヘラ記号は出土須恵器7個体中の4個体(57.1%)に認められる。蓋は5個体中の2個体(40.0%)に、杯は2個体中の2個体にみられる。蓋1と杯6はセット関係にあり出土状態も組み合っていた。内面に同一のヘラ記号を有する。他に土師器高杯9の脚端部内面にヘラ記号が認められる。

## g. III-3号墳

ヘラ記号は出土須恵器27個体中の8

	II-1号墳	II-2号墳
蓋	10	1
杯		11
蓋		3
杯	15	12
蓋		5
杯	17 18	
蓋		6
杯	16	
蓋		8 9
杯	14 19	16

Fig. 98 広石II-1.2号墳出土須恵器のヘラ記号(3)

広右古墳群出土の須恵器にみられるヘラ記号の検討

	III-1号墳	III-2号墳	III-3号墳	IV-2号墳
蓋	2 3	5	4	7
杯	19	7	10 11	
蓋	1	1		
杯	23	6	9	22
蓋	5			
杯	18			12
蓋	11		A	B
杯	22			
蓋	12	1		
杯	27			18
		III-1号墳東側土塁		
			19	17

Fig.99 広右III-1.2.3 IV-2号墳出土須恵器のヘラ記号 (%)

個体（29.6%）に認められる。器種としては、杯・蓋・高杯・匙・壺があるが、主体を占めるのは杯である。蓋は4個体中の1個体（25.0%）、杯は8個体中の4個体（50.0%）にヘラ記号を有する。ヘラ記号は直線の組み合せでやや幅広いものもある。蓋3、杯8・11はヘラ記号、その他の要素も極めて類似し同一窯産と考えられる。杯9は内面にヘラ記号を有する。壺・越・高杯の記号は細い沈線によるものである。

#### h. IV-2号墳

ヘラ記号は、出土須恵器54個体中の10個体（18.5%）に認められる。器種には杯・蓋・匙・台付長頸壺・提瓶があり、主体を占めるのは杯と蓋である。杯は13個体中の5個体（38.5%）、蓋は9個体中の2個体（22.2%）に認められ、直線の組み合せによる5種類のヘラ記号がみられる。蓋の7は内面に記されたものである。台付長頸壺は体部の上下2ヶ所に同一のヘラ記号がみられる。

以上、広石古墳群の各古墳出土の須恵器におけるヘラ記号についてみてきたが、その結果判明したことを整理しておくと次のようになる。

- ① ヘラ記号を有するものは杯・蓋が主体を占める。他の器種にも若干認められるが、その数は少ない。
- ② 杯・蓋ではセット関係にある須恵器は同一のヘラ記号を有する。しかし、杯・蓋の組み合せの時にヘラ記号の部位を合せるような特別の配慮はない。
- ③ 杯・蓋のヘラ記号の施される部位は、底部（大井部）中央か体部にかたよる部位の二つに大別され、同一窯産と考えられるものはその部位は一致する。
- ④ 同一窯の製品と考えられ同一のヘラ記号を有するものも、記号の形状・手法が異なり、ヘラ記号の刻印において工人差を示すと考えられるものがある。
- ⑤ 同一のヘラ記号でも数ヶ所にのばる窯の製品が存在する。また逆に、同一窯の製品でも数種類のヘラ記号が存在する。（このことは窯においてすでに指摘されている。）
- ⑥ ヘラ記号が刻印される時期は須恵器成形後であり、乾燥時期より前である。（一般的であるかどうかは不明）須恵器にその間の事情を示すものがある。
- ⑦ 提瓶・平瓶・台付長頸壺には同一個体の2ヶ所に同一のヘラ記号を記したものがある。
- ⑧ 広石古墳群中では、各古墳間のヘラ記号は簡単な直線の組み合せをなすものは重複してみられるが、大部分は各古墳間において差異が著しい。同一窯と考えられる須恵器の重複関係は明確にしがたい。

#### 2) 古墳とその出土須恵器におけるヘラ記号のあり方

前節において、広石古墳群出土の須恵器とそのヘラ記号について詳述した。本節では広石古墳群を含めて、周辺古墳群の中で比較的須恵器が多量に出土している古墳について、ヘラ記号

## 広石古墳群出土須恵器にみられるヘラ記号の検討

Tab.11 広石古墳群における須恵器とヘラ記号の割合

	I - 1	II - 1	II - 2	III - 1	III - 2	III - 3	IV - 2	計
杯 蓋	28 (1) 71.4	12 (1) 8.3	10 (5) 50.0	11 (4) 57.1	5 (2) 40.0	4 (1) 25.0	9 (2) 22.2	82 (9) 48.7
身	30 (4) 66.7	13 (6) 46.2	7 (4) 57.1	11 (5) 45.5	2 (2) 100.0	8 (4) 50.0	13 (5) 38.5	84 (9) 54.8
高 杯 蓋							3	3
有 蓋 高 杯			4			2	6	12
高 杯	1 (1)	1		1		5 (1)	6	14 (1) 7.1
疊	1 (3) 100.0	3 (1)		1 (1) 100.0		2 (1)	3 (1) 33.3	10 (5) 40.0
有 蓋 直 口 蓋			2 (1) 50.0				2 (1) 50.0	
直 口 蓋	4						1	5
疊	3 (1) 33.3		1			1		5 (2) 40.0
台付長頸瓶		1 (1) 100.0		1			2 (1) 50.0	4 (2) 50.0
柄			1					1
半 瓶	2 (1) 50.0	4 (1) 25.0	3				3 (1) 33.3	12 (2) 16.7
提 扱	16 (6) 37.5		4 (2) 50.0	2		2	4 (1)	28 (9) 32.1
大 襷		2	6	1		2	4	15
短 頸 瓶	2							2
蓋	2					1		3
台付直口壺	2							2
台付有蓋長頸瓶	1							1
蓋	1							1
計	91 (5) 52.7	34 (6) 29.4	42 (4) 31.0	31 (6) 45.2	7 (4) 57.1	27 (6) 29.6	54 (8) 18.5	286 (107) 37.4

(数字は最初が出土数( )内がヘラ記号を有する数、最後が%である。)

の須恵器全体における割り合をながめていきたいと思う。

広石古墳群に最も近接して多量の須恵器(約160個体)を出土した古墳に高崎2号墳があるが、報文中には須恵器とヘラ記号との関係についてはふれてなく、また筆者自身の怠慢も加わり高崎2号墳出土須恵器を実査していないので、本稿では触れることができなかった。

#### a. 広石古墳群

広石古墳群についてヘラ記号と須恵器の関係をまとめたのがTab.11である。ヘラ記号を有する須恵器の器種は杯・蓋・商杯・瓦・有蓋直口壺・壺・台付長頸壺・平瓶・提瓶があり、主体となるのは蓋・杯である。蓋・杯は各古墳間で程度の差はあるが、発掘した7基の古墳で平均値をもとめると、ヘラ記号を有するものは蓋が出土須恵器82個体中の40個体(48.7%)、杯が84個体中の46個体(54.8%)を占め、杯・蓋の約1/2にヘラ記号を認めることができる。次いで、瓦・長頸壺・提瓶は30~50%の割り合でヘラ記号が認められるが、絶対量が少く、古墳によりその傾向はまちまちである。7基の古墳の出土の須恵器全体としてながめた場合、286個体中の107個(37.4%)にヘラ記号がみられ、4割弱の高率を示している。

#### b. 片江6~8号墳<sup>42</sup>

須恵器とそのヘラ記号の割合についてまとめたのがTab.12である。

本古墳群においてもヘラ記号が最も多く認められるのは杯と蓋であることはいうまでもない。各古墳間で程度の差はあるが、蓋は30個体中の10個体(33.3%)に、杯は38個体中の13個体(34.2%)にヘラ記号が認められ、杯・蓋の3割強を占める。3基の古墳出土の須恵器全体としてながめた場合、91個体中の27個体(29.7%)にヘラ記号がみられ、約3割弱の割合を示している。

#### c. 相原3・4・6号墳<sup>43</sup>

本古墳群出土の須恵器とヘラ記号の割合をまとめたのがTab.12である。ヘラ記号の大部分は杯・蓋にみられることは例外でない。各古墳間の差はあるが、杯は31個体中の12個体(38.7%)に、蓋は27個体中の10個体(37.0%)にヘラ記号が認められ、杯・蓋の約4割弱を占める。3基の古墳出土須恵器全体についてみると、103個体中の25個体(24.3%)にヘラ記号が認められ、約2.5割の割合を示している。

以上、例示した3ヶ所の古墳群はそれぞれ、早良西部・油山山麓・今宿(高祖山山麓)に位置し、早良平野およびそれに隣接する地域で、3古墳群にみられるヘラ記号の割合は、早良地域の古墳に副葬された須恵器にみられるヘラ記号の占める割合の傾向を表示しているとみて大過ない。

古墳に副葬された須恵器におけるヘラ記号の割合をみてきたが、須恵器の生産地である窯址、あるいは生活の場である集落地出土の須恵器におけるヘラ記号のあり方はどのようなものであろうか。

Tab.12 周辺古墳における須恵器とヘラ記号の割合

	片 江 6 号 墓	片 江 7 号 墓	片 江 8 号 墓	計	相 原 3 号 墓	相 原 4 号 墓	相 原 6 号 墓	計
杯	蓋 10 (3) 30	14 (3) 21.4	6 (4) 66.7	30 (6) 33.3	14 (7) 50		13 (3) 23.1	27 (6) 37.0
	身 15 (7) 46.7	12 (5) 16.7	11 (6) 36.4	38 (9) 34.2	16 (9) 50	1	14 (4) 28.6	31 (5) 38.7
盤					1			1
	高 杯 2		1	3	9		3	12
鏡	2		1	3	2		5	7
	無 鏡 壺 2 (2)				1	2 (1)	3 (1) 33.3	
提 瓶					1			1
					1			1
平 瓶		1 (1)		1 (1) 100.0	1			1
					1			1
長 鏡 壺	2 (1) 50.0			2 (1) 50.0				
					2			2
甕	2	4	6	12	7 (2) 28.6		3	10 (2) 20.0
							3	3
器 台								
計	31 (9) 35.5	35 (5) 22.9	25 (6) 32.0	91 (6) 29.7	56 (8) 30.1	2	45 (8) 17.8	103 (9) 24.3

(数字は最初が出土数、( )内がヘラ記号を有する数、最後が%である)

窯址の資料として良好なものは周辺地域においてないが、参考資料として陶邑の窯址についてみれば、TK 217号窯では実測可能土器238個をふくむ総数1,576個の杯・蓋破片のうちヘラ記号を有するものは115個で、全体の約7.2%を占めているが、TK 217窯は陶邑の中でもヘラ記号が多いもので、普通は5%以下であるという指摘がある。

集落址でも良好な資料はないが、最近調査された福岡市西区片江辻遺跡でその傾向をみてみたい。同遺跡は互に切り合う4軒の住居址で、出土須恵器とヘラ記号の関係をまとめたのがTab.13である。ヘラ記号がみられる器種は杯・壺である。4軒の住作址では22個体中の1個体(4.5%)に、杯は20個体中の1個体(5.0%)にヘラ記号が認められ、全体として67個体中の3個体(4.5%)で、窯址における割合と類似し、極めて低い割合を示している。百分率はだしていないが、福岡市西区下山門遺跡でも同様の傾向を示す。

以上、古墳副葬須恵器・窯址・集落址出土の須恵器におけるヘラ記号割合を比較すると、集

墓址および窓址ではヘラ記号を有する須恵器の割合は5%前後で、古墳に副葬された須恵器の場合は広石古墳群で4割弱、片江古墳群では3割弱、相原古墳群では2.5割のヘラ記号を有する須恵器が存在し、集落地、窓址との間に大きな差が指摘でき、古墳出土須恵器にヘラ記号を有する須恵器が多いことは、ヘラ記号の意味の一端を示しているとみることができる。

Tab.13 片江辺遺跡における須恵器とヘラ記号の割合

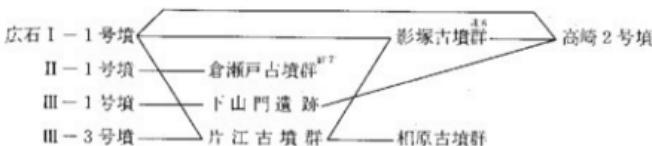
	1号住	2号住	3号住	4号住	計
杯 盖	10	5		7 (1) 14.3	22 (1) 4.5
	身	11 (1) 9.1	1	2	6 20 (1) 5.0
高 杯 盖	1	3		2	6
	8	1		5	14
甌	2			1	3
壺	1 (1) 100				1 (1) 100
壺				1	1
計	33 (2) 6.1	10	2	22 (1) 4.5	67 (3) 5.0

(数字は前記のとおり)

### 3) 広石古墳群のヘラ記号と他との関連

次に広石古墳出土須恵器にみられたヘラ記号と周辺遺跡の須恵器のヘラ記号についてみていくたいと思う。時間的制約において、現物にあたって実査できなかつたが、周辺地域にはヘラ記号について強い類似性を有するものがあり、それらの指摘をして今後の検討材料としたい。なお、それらの比較にあたっては直線による簡単なヘラ記号は除外できるだけ特殊なヘラ記号について検討したがヘラ記号の類似性のみでは不充分であるので須恵器の器形、製作技法、胎土、焼成、色調等の諸要素をも報文によってできるだけの検討を加えた。

以下、それらの関連を記すと次のようになる。



以上の結果、関連性のあると考える須恵器（ヘラ記号）の分布は早良およびその隣接に限られていることが指摘できる。福岡県八女郡広川町に所在する鈴ヶ山古墳群、山の前古墳群の須恵器がそのヘラ記号等の類似性より塚の谷4号窓との関連が深いという指摘や、筑紫野市八隈古墳群と平田窓のヘラ記号の類似点の指摘等からして、早良地区における古墳副葬須恵器にみられるヘラ記号の相互間の関連性は須恵器供給地・生産地をある一定の地域に多くゆだねていた

ことが想定され、今後供給地・生産地と使用場所の関連性が求められた場合の意義はまた大きいものとなろう。

#### 4) ヘラ記号の意味

ここでヘラ記号の意味について若干の考察をしてみよう。従来よりヘラ記号の意味について種々論議されてきた。ヘラ記号が「窯じるし」として銘記されたものでないことは既に先学の立証されたところであるが、石山氏の指摘される如く、結果的には生産地同定の重要な手振りの一つであることは肯定され、今後ヘラ記号の詳細な検討によって生産地とその使用場所（古墳、集落）の関係が有機的に把握されよう。

ヘラ記号の意味については大川清氏は製作したがう工人達の仕訣とか識別に利点が存することからなされたものであろうとし、久永春男氏は使用者—註文者側の必要にもとづいたもので、使用者が自己の占有であることを示すために、または一定の用途に占属する器物であることを示すために、生産者にあらかじめ依頼した記号であろうとしている。田辺昭三氏は陶邑古窯址群にみられるヘラ記号の検討より、大川説に対し、その根拠が1例のみであることを指摘し、また春永説に対しては、その見解が窯跡出土品を対象とした結果であり、その使用場所の出土品の分析でないことから「従いがたい」として、ヘラ記号の意味の解明の今後の方向として「ヘラ記号をしる段階の厳密な限どと、それが生産者の手をはなれたあと、たとえば集落址や古墳でどのようなあり方をしめるかの2点を指摘するにとどめる。」としている。

その後、石山氏は使用場所である福岡県八女郡広川町所在の鈴ヶ山、山ノ前古墳出土須恵器のヘラ記号の分析を行い、その結果から帰納されるヘラ記号の意義として次の3点をあげている。

- ① 有蓋器種の場合、セット関係を明らかにする。
- ② 口部と胴部とを別途製作する大形器種にあっては、接合の際の目印とする。
- ③ 製作者の識別

前述した広石古墳群のヘラ記号の分析はいうまでもなく、石山氏の場合と同様に須恵器の使用場所である古墳で行ったが、その結論は若干石山氏と異なるものとなった。石山氏のあげられたヘラ記号の意義について検討を加える中でヘラ記号の意味について考えてみたい。

石山氏の指摘された①については、セット関係にあるものが同一のヘラ記号を有していることは広石古墳でも同様であったが、それがセット関係を明らかにするものであったという意見には従いがたい。石山氏は①の意義についてさらに「乾燥、焼成時の便を考えてのことと思われるが、結果的には使用者側にとどても役立つ側面がある。」とし、製作時においてセット関係を明らかにしたものとされているが、須恵器のセット関係を有するものの大部分にヘラ記号がないことや同一窯の同一器種において同一のヘラ記号を有するものが多かった場合は、セット関係の識別とい

うよりもむしろセット関係の混乱を生じやすい結果となり、セット関係を識別するためのヘラ記号である場合はセット関係にある二者のみに同一ヘラ記号を用い、他の同一器種には異ったヘラ記号を用いた方がその識別には便利である。しかし、広石I-1号墳では同一窯と考えられる須恵器の杯、蓋に同一のヘラ記号を有するものが多数存在し、それらのセット関係を識別するために詳細な検討を要した。このことはセット関係にあるものが同一のヘラ記号を有するのではなく、その意味は別のところに求めなければならない。

②については、大形品（提瓶、長頸壺、甕）に多い事から背首される。石山氏も指摘されている如く、その性格はメモ的なもので、成形後に消されるもののが多かったと考えている。

③については、その必要性が不明確である。広石I-1号墳では同一窯産の須恵器杯、蓋で同じヘラ記号をもつものが多いが、そのヘラ記号も詳細に検討すれば、形態、その手法から複数の工人が想定され、ヘラ記号が製作者の識別のためとは考えられない。

では、どのような目的をもって須恵器にみられるヘラ記号が記されたのであろうか。

第2節において述べた古墳、集落址、窯跡における、ヘラ記号のあり方が一つの問題の解決となろう。古墳出土の須恵器におけるヘラ記号のあり方はその占める割合が多く、一見して春永説を支持しているかであるが、同一古墳中においてヘラ記号の種類は多く、器種その他による規則性は認められないし、また他の器種にわたって同一窯産で同一ヘラ記号が認められるものが広石I-1号墳に1例（8と62）があるのみであって使用者が自己の占有を示すため、または一定の用途に占属することを示すためとする春永説には従いがたい。石山氏は「セット関係にあるそれぞれは、当然ながら器形、調整、胎土において同傾向にあり、同一工人の手になることを示している。」とし、註において「逆に、器形、調整法、胎土において同傾向にあるもので異なる梵記号を有するものはなく、この事実は消極的に梵記号が使用者側からの要求に基づくものでないことを意味する。」として消極的に春永説を否定しているが広石I-1号墳では、器形、調整法、胎土において同傾向にあり同一窯産（工人については明確にしたがい）であると考えられる。5~7、37~38と8ではヘラ記号が異なり、石山氏のいう意味においては春永説は否定されない。

ヘラ記号が須恵器に記入されるのは須恵器製作過程の中で、器形成形後から乾燥前までの間であることは、広石I-1号墳の蓋2にその痕跡がみいだせる。ヘラ記号の記入が須恵器使用者側からの要請でなされるものでないことは先に否定した通りであり、ヘラ記号の記入が須恵器生産者側の必要性によっていることがわかる。

須恵器の使用場所である集落址、古墳出土須恵器におけるヘラ記号のあり方は第2節において検討したが、それからすれば集落址内においてはヘラ記号を有する須恵器はその占める割合

が古墳に比較し極めて低率で、窯跡出土品と近い数値を示す。このことは逆かえせば古墳出土の須恵器はヘラ記号を有する率が高いということであり、そのことに何らかの意味が存在しているものと考える。

このように考えてくれば、ヘラ記号の意味は須恵器生産者の必要性から記入されたにもかかわらず、ヘラ記号を有する須恵器が古墳に副葬される段階に再度意味をもつことになり、ヘラ記号の意味は両者の共通した事項でなければならないであろう。

窯跡出土の須恵器におけるヘラ記号の占める割合は5%前後かそれ以下であるが、窯跡出土の須恵器の大部分は灰原出土品であり、不良品が大部分であることはいうまでもなく、製作時にヘラ記号が記入されていたものはさらに多くなることが考えられ、少くとも10%前後のものにヘラ記号が存在したと想定される。集落址にみられる須恵器のヘラ記号が5%前後あるいはそれ以下であることが一般化できれば、集落址におけるヘラ記号をもつ須恵器は製作時に記されたヘラ記号の量より少くなり、生産地よりもたらされたヘラ記号のある須恵器の大部分が古墳への副葬品となつたことが想定されよう。

筆者はヘラ記号をもつ須恵器の大部分は製作時における生産量（数量）のある単位を示すために単位毎に記入されたものと推測している。具体的にいうと例は須恵器製作時の10個体中の1個体に記されるようなもので、このことは同時に焼成される須恵器の量とその窯詰の必要性によつたものと考えている。この場合セットとなるものには当然同一のヘラ記号が銘記され、須恵器の大部分にヘラ記号がないことも説明できる。この間の事情を表わすものとして、石山氏の提示された山の前3号墳の有蓋壺で、異ったヘラ記号計3個を有しているものがある。この事例は石山氏の指摘された②の場合と単位毎に記入されたヘラ記号が混在するためではなかろうか。杯、蓋にヘラ記号が多いのは杯、蓋が日常的容器であり、その消耗性より多量に生産されたためあり、他の器種と比較し絶対的というよりはむしろ相対的に多いといふに過ぎない。

また古墳に副葬されたヘラ記号のある須恵器は、生産地におけるヘラ記号の意味をさらに進展させた結果ではなかろうか。すなわち、古墳に副葬された諸副葬品は埋葬施設が石室という限定された狭い範囲であるために、かなりの選択を余儀なくされてきたと想定される。当然副葬される須恵器（内蔵されるものも含めて）も選択されていたことは予想され、その数はかなり限定されたものであったと考えられる。この解決策として須恵器生産地での数量の単位毎に記入されるヘラ記号をもつ須恵器を副葬することによって、そのあらわす単位の数量の須恵器の代用としたのではなかろうか。換言すれば、ヘラ記号を有する須恵器は1個体で10個体前後の須恵器の量を意味していたのではないか。

(山崎)

註1 浜田信也「高崎古墳群」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集所収 福岡市教育委員会 1970年

2 柳田純孝、柳沢一男「片江古墳群発掘調査報告書」(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第24集)1973年

3 柳沢一男、森田和裕「相原古墳群」(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第28集)1974年

#### 第4章 広石古墳群をめぐる諸問題

- 4 田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ 1966年
- 5 塙勝利、方武卓治（福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集）1977年
- 6 山崎純男編『下山門遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第23集）1973年
- 7 小田富士雄編『倉瀬の古墳群』倉瀬の古墳群調査団 1973年
- 8 佐藤伸二他『影塚第1号墳発掘調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第21集）1972年
- 9 石山典一「錦ヶ山、山の前陶古墳群出土須恵器にみられるヘラ記号について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一三一』福岡県教育委員会 1972年
- 10 酒井仁夫「古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一四一』福岡県教育委員会 1976年
- 11 註9書と同一
- 12 註4書と同一
- 13 註9書と同一
- 14 註9書と同一
- 15 数量の単位を具体的に示せば、密跡のヘラ記号が5%前後であり、焼成時の失敗を入れて概略をみれば少くとも10%前後となると想定され、単位の幅は、10個体ごとに1個の割り合でヘラ記号が記入されたと思われる。今後の検討をまちたい。なお、生産性の低い土師器、ハエワにも時としてヘラ記号を有するものがあり、これも須恵器のヘラ記号同様に数量を表わす目印としたものと考える。

付記 本文中に使用した須恵器のNoは広石古墳群の各古墳の須恵器のNoと同一である。

### 3 福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について

#### 1) はじめに

わが列島における古代鉄生産を考えるうえで、福岡平野を中心とした、いわば環博多湾ともいるべき製鉄遺跡の濃密な分布は、鉄生産の構造的解明を目指す今日の研究段階において、一つの指標たりうる地域といつても過言ではあるまい。

しかしながら、本地域における資料の蓄積は未だ充分とはいせず、また良好な製鉄遺構の検出にもめぐまれなかったことから製鉄遺跡のあり方が充分に検討されてきたとはいいがたい。むしろ列島レヴェルで古代製鉄を考える方たちからの指摘があったわけである。<sup>註1</sup> とはいって、福岡市周辺では80ヶ所をこえる鉄滓出土地と、32基の後期古墳から供獻品と考えられる鉄滓が出土している事例は看過しえない多くの問題を孕んでいた。今回調査した広古古墳群においてもIII-1号墳の玄室・羨道から37個の鉄滓が検出され、あらためて上記の問題を考えざるを得なくなつた。

本地域における古代製鉄遺跡の集成は、近年三島格氏の二度にわたる作業によって48遺跡が明らかになった。<sup>註2</sup> 以降、新たな知見は増加しているが、その後の集成は行なわれていない。本稿では上述のような調査所見から、三島氏の集成を下敷きにしつつ、資料の追加と地名表の補訂、および若干の問題点を述べることにしたい。

福岡平野をほぼ中央に置く環博多湾諸地域の古代鉄生産を取りあげたのは中山平次郎であった。当時、弥生時代の位置付けをめぐる論争のなかで、金石併用時代を提唱した中山は、筑前・筑後の弥生土器を出土する遺跡を踏査し、それとともにまず鉄滓が採集されることに注目して、「鉄滓を出す弥生式遺跡」<sup>註3</sup> をまとめた。この論文でしめされた鉄滓出土地は26ヶ所を数え、本地域では7ヶ所が含まれている。のち、中山はその問題に触れることがなかったが、他方、在住の研究者深江嘉和・大場忠郎氏らによる糸島・今宿・早良を中心とした稠密な踏査によつて、数多くの鉄滓出土地が発見された。本地域における古代鉄生産を正面に掘えた研究はここに始まったとしてよい。深江氏はそうした成果をまとめることなく急逝したが、大場氏の手によって、自ら主宰する筑紫古代文化研究会会誌に精緻な報告がなされ、さらに奥野正男氏に引き継がれている。<sup>註4</sup> 以後、奥野氏は古代鉄生産にまつわる一連の神話・地名研究をすすめ、われわれに多くの示唆を与えている。

一方出土鉄滓から鉄生産の段階を追求する試みとしては、有田遺跡13街区住居址出土の球状酸化鉄の分析をはじめとして、池田遺跡・下山門遺跡・門田遺跡出土鉄滓の分析がある。近年では、北九州沿岸出土鉄と各遺跡出土鉄滓のチタン含有率から、製鉄原料产地の比定とさらに鉄滓の稠密な分析を介して、製鉄の技術段階を復元しようとする大沢正巳氏の積極的な研

究がある。<sup>註10</sup>

## 2) 分布

前記したように、本地域における製鉄遺跡の集成は三島氏によって、計48ヶ所が報告されている。三島論文では鉄滓出土遺跡を一括して「製鉄遺跡地名表」を作成しているが、この点については同意しかねる。たしかに多量の鉄滓の散布は、移動したものでないかぎり、そこで製鉄（製錬・鍛冶を含める）作業が行なわれたことを推定せしめるが、古墳の石室内あるいは墓道などからの出土例や、住居址内などからの出土をも「製鉄遺跡」地名表の中に含めることは適当でない。本稿でこの点を勘案して、広く鉄滓出土遺跡の地名表として概括し、後述するように、明らかに供獻例と認められる古墳出土鉄滓については別表として作製した。福岡市周辺における現時点での鉄滓出土地は 110ヶ所、うち古墳供獻例32ヶ所、経塚出土例1ヶ所を除く 87ヶ所については鉄生産に関係する遺跡と考えることができる。三島氏による地名表に62例を追加したことになる。以下、諸地域の分布状況について概観していく。

**糸島・今宿（田代土・志摩郡）** 鉄滓出土地は総30ヶ所、そのうち発掘調査によって確認された遺跡は 2ヶ所にすぎない。鉄滓・轆羽口等の出土からみて製鉄址と考えられる遺跡は28ヶ所、古墳供獻例は 1ヶ所である。

分布状態は、大きく 2群にまとまりをみせる。一つは糸島半島の低丘陵周辺に散在する遺跡群で、志摩丘陵の西麓と東麓にさらに分布が分かれる。他の一つは今宿東部・早良平野とを面する長垂・叶岳丘陵の西麓から高祖山北麓にかけての地域である。この地域での集中度はきわめて高く、高祖山の山麓に11ヶ所、長垂丘陵から叶岳にかけては 3ヶ所に群集する。これらはいずれも丘陵緩斜面、あるいは台地先端部に立地している。採集された鉄滓量も多く、炉壁・轆羽口を含む遺跡もある。上述したように調査を終った 2ヶ所は、徳永西遺跡および相原古墳群である。

徳永西遺跡は、古墳群の調査中に炉の痕跡と若干の鉄滓が出土したこととにとどまる。遺構の内容は明らかでないが、その傍には徳永西 2号墳があって、その先後関係が注目される。

相原古墳群は A・B群あわせて33基からなる群集墳で、そのうち 3基が調査された。その結果、6世紀末頃の造営と考えられる 3号墳の羨道床面から12個の鉄滓がまとまって出土した。近接して製鉄遺跡が存在しないこと、出土状態からみて、それを古墳供獻としてよく、高祖山北麓に分布する製鉄遺跡との関連が想定される。

糸島・今宿地区では未だ調査例も少なく、その実体は今後の調査にその多くを俟たねばならないが、本地域での鉄生産開始は 6世紀以前まで遡る可能性がある。一つは今宿大塚古墳（前方後円墳・主軸長約60m）の後円部盛土中から鉄滓が採集されていることであり、他は鍋先古墳南方の小形堅穴式石室を内部主体とする円墳の墳丘盛土中から、やはり鉄滓が採集されてい

福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について

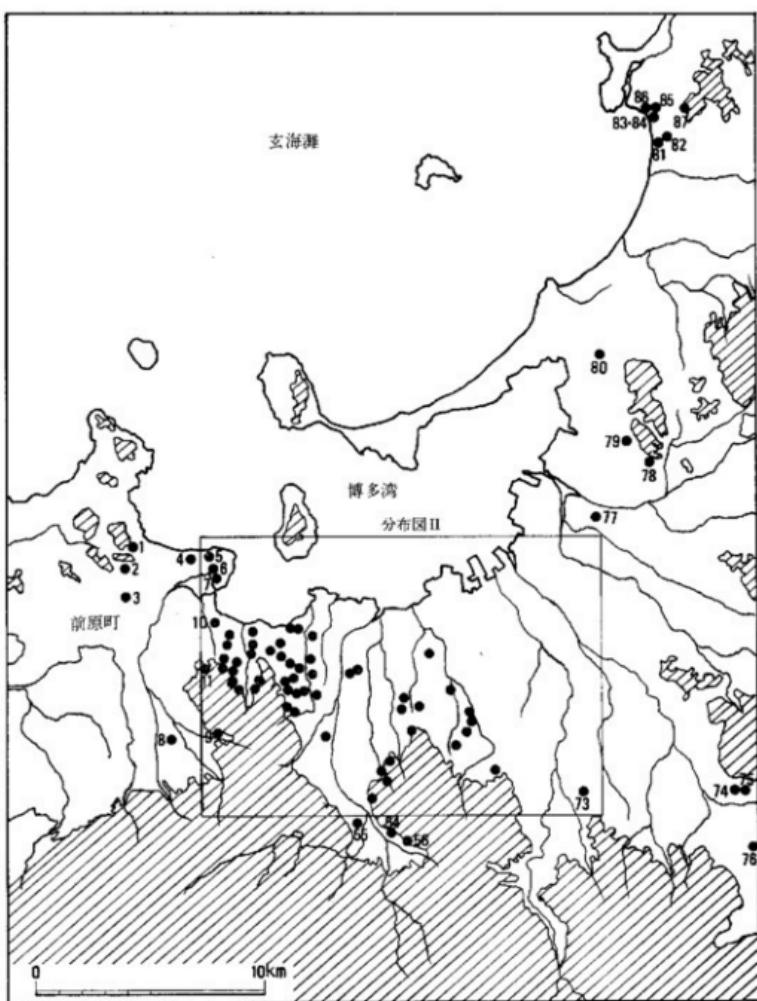


Fig. 100 福岡市周辺鉄津出土遺跡分布図 I (斜線部は 100m 以上の山塊)



## 福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について

Tab.14 福岡山田辺・糸津出土遺跡地名表

No.	地名	所在	立地	遺構	子	出土遺物	発定期	文献	備考
1	小蘿遠跡	福岡市西区大原・小原	山麓面斜面	製鐵址?	S.發生中期～後期 須田地		1		
2	桑原遠跡	西区元岡・桑原	白地	地	S.纏文後期十輪 安土土器		1		
3	瓜尾貝塚	西区元岡・瓜原尾	台地	地	S.織文後・晚期 土器その他の S.須惠器・土師器		1		
4	長浜瀧跡	西区今津・長浜	砂丘	丘	S.須惠器・土師器			深江良輔	
5	野々花芋園前遺跡	西区今津・綠町	砂丘	丘	S.須惠器・瓦器 青磁		1		
6	今瀧(遺跡名不明)	西区今津	丘陵光瀬	製鐵址?	S.			市教委採集	
7	堀脇遺跡	西区今津・堀ノ脇	砂丘	製鐵址	S.甲斐 S.土師器・石鍋		2		
8	新山古墳附近(遺跡名不明)	新原町井原	台地上	地	S.		4		
9	キララ遺跡	相・キララ	丘陵斜面	地	S.		4		奥野正男氏教示
10	上町天神社遺跡	福岡市西区今宿・上町	砂丘丘?	地	S.須惠器				
11	船永西遺跡	西区船永	丘陵上	製鐵址	S.			1975年福岡研究会調査	
12	今宿小学校遺跡	西区今宿	低台地	製鐵址?	S.發生中期～後期			奥野正男氏教示	
13	大冢東遺跡	西区今宿・大冢	台地上	地	S.須惠器		5		
14	大冢古窯	西区今宿・大塚	台地上	後凹部盛土中	S.	6°C前半 2100	0		
15	カナソツ田遺跡	西区今宿・大塚	台地上	氣體址?	S.		1		
16	メストノウマヤ遺跡	西区今宿・新聞	丘陵斜面	地	S.		1		
17	折闊遺跡	西区今宿・新聞	丘陵斜面	地	S.須惠器		1	新開地中	
18	シヤカノマエ遺跡	西区今宿の里・シヤカノマエ	台地上	地	S.		1		
19	イヤソクノ遠跡	西区今宿の里・イヤソクノ	丘陵斜面	地	S.		5		
20	ヨシヌミ遺跡	西区今宿の里・ヨシヌミ	低台地上	地	S.		5		
21	島の前遺跡	西区今宿の里・島の前	低台地上	地	○ S.土師器・滑石片 12~13°C		2		
22	十浦池遺跡	西区今宿の里・十浦	丘陵斜面	地	S.多い		1		

23 ウソノクチ遺跡	福岡市西区今治町ウソノクチ	丘陵斜面	製鍛址	S多い		1 文獻ではウスノクチとあるが字名
24 烈山 遺跡	西区今治上原・焼山	丘 屋根	製鍛址	S多い		1
25 アツマリ遺跡	西区今治上原・アツマリ	山 亂木	製鍛址?	S多い		5
26 山本氏船内遺跡	西区今治青木・船先	丘陵斜面	*	S多い		5
27 4ヶヘタ遺跡	西区今治青木・船先	丘陵斜面	*	S	5	5
28 ノウガ谷遺跡	西区今治青木	丘陵斜面	*	S	1 文獻ではトウガ谷となつてゐるのが誤り	1
29 宮姫神社遺跡	西区下山門牛の松原	砂丘	製鍛址	S多い・少供		1
30 F山門遺跡	西区下山門	砂丘	製鍛址	○ S多い・須恵器 ○ S多量・須恵器	8C後半 8C後半	6
31 下山門帳町遺跡	西区下山門・帳町	自然堤防上	自然堤防上	○ 土師器・須恵器	8C~9C 前半	1974~75大川浦元市教委調査
32 石丸遺跡	西区石丸	自然堤防上	製鍛址?	S		1973年集
33 右丸古川遺跡	西区石丸・古川	自然堤防上	*	S,須恵器・十輪器 和服		1976市教委試掘調査
34 沢ノ瀬遺跡	西区始六町・斜ヶ瀬	丘陵斜面	*	S,前半		7
35 城の口遺跡	西区始六町・城の口	丘陵斜面	*	S,須恵器・土師器		1
36 大又遺跡	西区始六町・大又	低丘地上	1号墳(?)・須恵器・土師器	6C前半~		8
37 芦野北神社遺跡	西区始六町・御野	丘陵斜面	製鍛址?	S		7
38 宮の前遺跡	〔已廃点〕下地点	西区始六町・宮の前	丘陵上	表土厚からS出た	S	9
39 姉尾遺跡	西区始六町・姉ヶ尾	丘陵斜面	製鍛址?	S多い		10
40 コノリ池水道跡	西区始六町・コノリ	台地	*	S	1 文獻では姉中内地とあるが	1
41 7ノリ池水道跡	西区始六町・コノリ	丘陵斜面	製鍛址	S多い		文獻11No.19
42 コノリ遺跡	西区始六町・コノリ	丘陵斜面	*	S多い	6C?	1974~75竹石總氏調査
43 金星遺跡	西区始六町・金星	冲積地	*	S多い		1 文獻No.18
44 高木遺跡	西区始六町・高木	冲積地	*	S多い		7

## 福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について

45. 多 田 遺 跡 於	福岡市西区西方・今多田	自然堤防上	剝離地	○ S.須恵器・土加四 11	1974~75年度調査報告
46. 田 切 遺 跡	西区西方・口切	台地先端	*	○ S.須恵器・土加四 6 C?	1974~75年度調査報告
47. 野 方 墓原 遺 跡	西区西方・冢原	台 地 上	*	○ S.須恵器・土加器 8 C	1975年度調査報告
(48) 野 方 [ウサカ] 墓原 遺 跡	西区西方・新地	丘陵斜面	剝離地	S.須恵器 6 C後半	1974~75年度調査報告
49. 曲 池 遺 跡	西区西方	台 地 上	?	S	墳域、山崎氏所有
50. 金 置 遺 跡	西区都心・金原	台 地 上	?	S	12
51. 大 北 遺 跡	西区都心・大北	台 地 上	*	S	12
52. 金武小学校付遺跡	西区都心	台 地 上	*	S	12
53. 有田池跡13番区	西区有田	台 地 上	住居跡から厚い物質化地 ビブン内からも出土	S.須恵器(瓦) S.須恵器・土加器 骨器	13
54. 有 田 遺 跡	西区有田	台 地 上	剝離地?	○ S.須恵器・土加器 骨器	1975~76年度調査報告
55. 後川原池跡	西区内野・後川原	台 地 上	*	S	14
56. 城 の 里 遺 跡	西区龜山・城の里	台 地 上	*	S.須恵器 14	14
57. 佐 伯 遺 跡	西区内野・佐伯	丘陵斜面	剝離地	○ S.須恵器・土加器 14	14
58. 烈 尾 遺 跡	西区東八郎・烈尾	丘陵斜面	剝離地?	S.多い 14	14
59. 重 留 让 遺 跡	西区重留・让	台 地 上	*	S	14
60. 重留山田遺跡	西区重留・山田	丘陵斜面	*	S	14
61. 山 崎 遺 跡	西区龜山・山崎	丘陵斜面	*	○ S.須恵器・土加器 14	山崎氏所有
62. 于 扇 遺 跡	西区千葉	丘陵斜面	*	S.須恵器 1	1
63. 黒ソイモ遺跡	西区千葉	丘陵斜面	*	S.多い 1	1
64. 五 前 村 遺 跡	西区七隈	丘陵斜面	*	S.多い・須恵器 1	1
65. 大 井 遺 跡	西区梅林・大井	丘陵 上	伊能(3)	S 7 C 15	15
66. 京 ノ 限 遺 跡	西区田島・京ノ限	丘陵 上	1号柱基の裏込め中に 混入	S 12 C 16	16

				S.1 頸部器・骨器	S.2 土師器・骨器		1975年度会調査
67 片江 江 渡 路	福岡市西区片江・辻	丘 墓 上	横須造塚 S.2表土・土			7 C初以前	17
68 戸 口 古 墓 阪	西区東油山・瀬戸口	丘 地 上	婧氏窓・中 白	○ S.中壺 ○ S.中壺・土師器	○ S.中壺 ○ S.中壺・土師器	7 C初以前 後半	18
69 集 粧 亂 游 阪	西区後・後栗	台 地 上	鏡面鏡 2 不規				
70 宝 塚 地 道 阪	西区上長尾・宝塔	丘 地 斜 面	板鏡出少?		S.鏡出少		1
71 宝 台 道 阪	西区上長尾	丘 地 上	ヒット内出土	S.鏡出少	B地点平安 D地点 6 C	19	
72 人 事 田 道 阪	南区柏原・人字田	丘 地 上	7号手埴瓦下 鏡面鏡 2	S	7 C初頭 以降	1970~71=局格氏ら調査	
73 円 田 道 阪	春日市上白衣・辻田	台 地 上	製鏡51	S	平安か?	20	
74 太 宅 扇 政 府	筑紫郡太宰府・太宰府	低 台 地 上	鏡面・その他	S	奈良~平安	1968~ 県歴史資料館調査	
75 観 計 収 錄 房	太宰府内観世	低 台 地 上	瓦鏡址?	S	?	1976.9月歴史資料館調査	
76 魚 田 道 阪	太宰府町太宰府・施田	台 地 光 滑	製鏡引 1・不明鏡 4 水波鏡	S.弦生 1器	7 C?	21	
77 多 々 真 道 阪	福岡市東区多々良	冲 橋 地	鏡面址	○ S.鏡出少・土師器 ○ S.骨盆・盲鍋	12 C末~ 13 C	22	
78 馬 ハ 海 游 阪	東区牛井・海ヶ浦	丘 陵 斜 面	聚雲鏡出少!	S		1974年石井一氏調査	
79 不 駒 ハ 海 游 阪	東区	丘 陵 斜 面	鏡鏡址?	S		1	
80 和 白 游 阪	東区和白	低 台 地 上	鏡面址	○ S.鏡出少・土師器	8 C	23	
81 今 川 河 口 北岸遺跡	宗像郡鹿嶋町・ヒタイ	丘 陵 斜 面	製鏡址?	○ S		奥野正男氏教示	
82 田 草 亂 游 阪	津屋崎町・西原	冲 橋 地	#	S多い・強土器		#	
83 新 川 畑 A 游 阪	津屋崎町・新川畠	砂 地	#	S多い、 S.研壁		12	
84 新 川 畑 B 游 阪	津屋崎町・新川畠	砂 地	#			12	
85 新 川 畑 C 游 阪	津屋崎町・新川畠	砂 地	#	S		12	
86 金 町 游 阪	津屋崎町・全町	砂 地	#	S		12	
87 清 田 ハ 海 游 阪	津屋崎町・濱田ヶ浦	丘 陵 斜 面	製鏡址?	○ S		12	
通 納 亂 游 阪	福岡市西区納戸	丘 陵 游	#	○ S 多い		県文化課小池史料氏教示	
通 研 游 阪	西区今宿・新開	丘 陵	#	S 多い		県文化課栗原和彦氏教示	
						1	

出：書物のSは既存のE

<sup>214</sup>これらの古墳はともに6世紀前後の造営にかかるもので、今後の調査課題ではあるが、鉄生産の上限に関わるものだけに重要である。

**早良（旧早良郡）** 鉄滓出土遺跡は計43ヶ所が知られている。本地域は福岡市におけるベッドタウンとして近年の宅地化に伴う緊急調査が継続し、従来予想もされなかった低地での検出例が増加しつつある。

調査によって、炉体あるいは製鉄関連遺構が検出された遺跡は7ヶ所（下山門・下山門敷町<sup>215</sup>・コノリ・野方・大谷・笹栗・有田の諸遺跡）である。他に住居址内から鉄滓が出土した例としては3ヶ所（大又遺跡1・4号住居址・宮の前F地点3号住居址）があり、特殊な例としては、有田遺跡13街区住居址から出土した球状酸化鉄がある。また鉄滓の古墳供献例は、調査古墳数に比例して、8つの古墳群で19基という多さである。例外的ともいいくべきであろうが、田島・京ノ隈遺跡の2号経塚小石室の裏込めには木炭に混って1個の鉄滓が検出されている。

さて早良地区全体の分布をみると、大きく三つの地域に集中している。長垂・叶岳を間にして、今宿群と対応するように、生の松原から都地にかけて分布する一群、油山西麓から東麓にかけて分布する一群、さらには室見川上流域に散在する一群である。各群を仮りに、拾六町群・油山群・奥早良群と呼び、以下各群の様相を見ることにしよう。

**拾六町群** 早良地区のなかで最も密集した分布をしめす地域である。現在分布の南限は都地付近にある。分布の中心は拾六町で、コノリ池から金屋にかけて鉄滓が散布し、十郎川の東岸にあたる低地（十郎川沖積地）での発見も充分予想される。ここでは鉄滓出土24ヶ所のうち、明らかに製鉄址と考えられる遺跡は17、他に鉄滓供獻古墳3基がある。

製鉄遺構の検出例は本群が最も多く4遺跡を数え、その年代は古墳時代2遺跡、奈良時代～平安時代前半1遺跡、平安時代1遺跡である。そのうちコノリ遺跡・野方新池遺跡は古墳時代後期に遡る炉址が合わせて8基ほど検出されている。両遺跡とも報告書近刊と聞いており、その結果が注目される。

立地は緩斜面や台地上が多いが、近年調査された下山門・下山門敷町・右丸古川・戸切遺跡などは、標高2.5～5.0mの砂丘上や自然堤防上に製鍊炉が営まれており、それとともにかなり大規模な防護用の溝などを整えた例（下山門敷町遺跡）もみとめられる。

**油山群** 拾六町群などの集中ではないが、油山山麓から低丘陵上に広く散在する。鉄滓出土地は計26ヶ所、うち製鉄址は8ヶ所、古墳供獻例17基、他は性格不明である。

製鉄遺構の調査としては笹栗・大谷遺跡があげられる。大谷遺跡では3基の炉址が報告されているものの、いずれも製鉄炉とするには確証が乏しく再検討の要がある。笹栗遺跡では2基の鐵治炉が検出され、1号炉は炉体の一部を残すとともに難羽口着装痕をとどめており注目される。

鉄滓を出土しても性格の明らかでない例としては、瀬戸口古墳群1・2号墳埴丘盛土からの

出土例や、片江辻遺跡例あるいは宝台遺跡B・D地点例がある。瀬戸口1・2号墳例では合わせて5個が出土したのみにすぎないし、近くに製鉄遺跡が存在しないことから墳丘形成過程で供獻された可能性もある。かかる例は他にもいくつかあるが類例の増加を俟つとともに遺跡に検討の余地があり、供獻例としては扱わない。宝台例は、周壁の赤変したピットや焼土の詰まったピットから若干数の鉄滓が出土したことであるが、遺構が明確でなく如何ともしがたい。遺跡のすぐ傍には、製鉄址と推定される宝塔池遺跡<sup>207</sup>が存在し、それとの関係で考えることができよう。

**奥早良群** 東西から西山と荒平山がせまって、早良平野は狭隘な谷で一度終結し、その南方で室見川は二つの支流に分岐する。奥早良群とするのは、室見川の二つの支流によって形成された小盆地的な地域に分布する製鉄遺跡群である。現在5ヶ所が知られている。これまで組織的な分布調査は行なわれていないが、地元存在の右津司氏による端念な踏査によって、次第にその姿が明らかにされつつある。一方、都市郊外として、宅地造成などで序々に遺跡の破壊が進行している。製鉄跡跡も例外でなく、仙道遺跡<sup>208</sup>・焼山遺跡<sup>209</sup>など墳滅寸前の状態とされている。なかでも内野に所在する仙道遺跡は、1968年の宅地工事中に多量の鉄滓とともに、20個におよぶ鶴羽口が出土し、さらに重量20kgもある鉄塊なども検出されている。同一層位からは須恵器・上飾器片が出土しており、古墳時代に遡る可能性もある。

**福岡（旧那珂郡・席田郡）** 三島氏による地名表作製時には本地域では、大平田遺跡（7号墳墳丘下炉址）および大牟田古墳群中の鉄滓供獻例が知られるにすぎなかった。現時点でもその他に2個所の鉄滓出土地が加わったにすぎず、本地域での分布はきわめて希薄である。

製鉄遺構としては、上述した大牟田遺跡および門田遺跡例がある。後者は炉体下部遺構として長方形溝があり、その両側に排滓ピットを備えた構造をしめし、北九州市丸ヶ谷遺跡検出炉体下部構造<sup>210</sup>に通じるものである。鉄滓供獻古墳は、大牟田古墳群5基、観音山古墳群4基を数える。その他注目すべきは、門田2号墳石室から金槌が出土<sup>211</sup>しており、周辺地域の鉄生産開始がほぼ6世紀代に推定できる以上、こうした鍛冶具を石室内に収めた被葬者の存在は、鉄生産のあり方を強く示唆するといえよう。

本地域（福岡平野）は、上述諸遺跡を除いては全く他に鉄滓出土地を見いだすことはできない。調査進行状況の差ばかりとはいえないようである。たとえば、平野東部の月隈丘陵から乙金にかけて分布する古墳群の調査は約40基におよぶが、鉄滓供獻例は認められていない。また製鉄遺構もその例がなく、こうした鉄生産の地域的な偏差が何を意味するか、これから課題である。

**太宰府（旧二箇郡）** 現在継続されている政庁および周辺地区的調査では、少なからず鉄滓が検出されている。遺構を伴った例としては、藏司跡西側の台地にあたる米木地区での銅滓・鉄滓を共伴する4基の炉址、また政庁回廊西南部で検出された銅滓を伴なう保土穴群などに

すぎないが、政府周辺の地域に、しても、いわば官房的な施設が置かれ、原料から製品化の段階（大鐵治、小鐵治）を行なったことは充分予想される。

他に注目される遺跡としては池田遺跡がある。バイパス工事に伴う調査だけにその全体は知りえないが、製鉄址と恐らくは木炭窯と思われる特殊な構造をもつ窯址が検出されている。ともに時期を限定する資料はない。ところが製鉄場址の西方20~30mに位置する古墳石室の中から鉄滓が出土しており、出土状況によれば、報文にいうような後の投げ込みというよりも供獻例としての可能性が強い。鉄滓をもって、直接その関係が明らかになるわけではないが、後に述べる鉄滓供獻古墳と製鉄遺跡とのあり方をみれば、池田遺跡における両者がかなり近い年代にあったことは充分認められてよいと思う。

**柏屋（旧稚星郡）** 未発見遺跡が充分予想されるが、今まで知られた鉄滓出土地は5ヶ所、うち製鉄遺跡4ヶ所、不明1、その他に縫羽口出土遺跡1である。

製鉄遺跡の調査例としては和白遺跡<sup>228</sup>・多々良遺跡<sup>229</sup>にとどまる。前者は8世紀に属する大鐵治炉と工房址、後者は12~13世紀に属する同様な遺構が検出されている。

1974年に調査された湯ヶ浦遺跡では巻筒状の遺構が検出され、また丘陵上にある古墳の墳丘盛土中から若干の鉄滓が検出された。詳細は報告書の刊行を俟ちたいが、本地域においても鉄生産の開始は古墳時代まで遡る可能性があるわけである。

**津屋崎（旧宗像郡）** 福岡市からはずれるが、関連する地域で紹介しておきたい。今まで鉄滓出土地は8ヶ所を数え、鉄滓供獻古墳1基の他はすべて製鉄遺跡と考えられる。分布範囲は現西鉄津屋崎駅周辺、および宮地岳神社をのせる丘陵北麓に集中するが、今後の調査によってさらに増加する可能性が強い。

本地域の鉄製品も確実に7世紀代に遡ることが知られる。1976年調査された清田ヶ浦古墳群中の1基から、VI期の須恵器杯に伴って30数個の供獻鉄滓が出土している。古墳群の分布する丘陵下には鉄滓・炉壁などが散布する。直接的な証明は不可能であるとはいえ、早良地区に見られる製鉄遺跡と鉄滓供獻古墳の象徴的な関係は、環博多湾製鉄遺跡群に共通の現象としてあらわれており、鉄生産開始の時代的近似性と、鉄生産に関わる集団の社会的位置の共通性など多くの示唆を与えるものである。なお現在調査の進められている奴山古墳群の1基から、鍛冶工具が検出されている。津屋崎17号墳（前方後円墳、主軸長50m）の石室前面の前庭部床面からで、タガネ2点、鉄鉗1点である。6世紀初頭の築造と考えられており、叙上鉄滓供獻例とともに注目される地域である。

以上各地域における鉄滓出土地の分布状況を概観し、遺跡内容について若干触れてきた。鉄滓・炉壁・縫羽口など、直接製鉄址を明示するものから、鉄滓は出土しても性格不明の遺跡もある。鉄滓出土・即製鉄址といえない所以でもある。また出土鉄滓の形状・分析値のみでは年代を判断しえない以上、地名表に加えた遺跡が近世とりわけ藩政時代の製鉄址を含む可能性も

残されている。地名表では明らかに藩政時代に下降する遺跡は除外したつもりであるが、将來さらに補訂を加え完全を期したい。以下叙述にあたっては、各平野を単位にして製鉄遺跡群を一括し、たとえば福岡群・早良群という呼称法を用いる（このばあい、通時的な分布状況を意味し、共時的な分布を直接反映するものではない。調査された製鉄遺跡の僅少さ、遺跡の特質に由来する年代判定の困難さなどによる、きわめて便宜的なものにすぎない）。各群単位に再度鉄滓出土地を整理すれば次のとおりである。

	鉄滓出土 遺跡	製鍊址 (推定)	性格不明	鉄滓供獻 古墳
糸島・今宿群	28	27	1	1
早良群	43	34	7	19
福岡群	2	1	1	9
太宰府群	3	2	1	2
柏屋群	4	2	2	
津屋崎群	7	7		1

### 3) 製鉄遺跡の年代

前項で若干触れたところもあるが、製鉄遺跡とりわけ炉址の年代決定にあたっては、考古学よりする直接証明は恵まれた資料のない限り困難といわざるを得ない。かといってC<sub>14</sub>、残留磁気、熱ルミネッセンス等による科学的年代測定法による試みがどれほどなされてきたであろうか。ちなみに本地域で得られたデータは、C<sub>14</sub>による次の2例にとどまる。

野方新池遺跡 製鍊炉木炭 A.D. 577年±14 (CURI 0041)

池田遺跡 製鍊炉木炭 A.D. 387年±30 (CURI は九州大学理学部放射性化学研の意)

さて上述したように、環博多湾古代製鉄遺跡群における鉄生産の開始は古墳時代後期にまで遡ることが明らかになったと思う。では本地域における鉄生産、より限密にいうならば、近隣の海浜砂鉄・川床砂鉄・山砂鉄を原料とした鉄生産の上限がどこにあるのかということになると、いささか不明な点が多い。

かつて三島氏は、宮ノ前E地点出土鉄滓をもって、E地点の出土遺物が弥生終末～古墳時代初頭に限られることから、鉄滓の年代をほぼ当該期と推定したうえで、さらに、当該期鉄生産の段階を踏まえ、その鉄滓がはたして至近海浜の浜砂鉄を原料にした製鉄によるものか否かが問題であると、すぐれた疑問を提起している。まさにそうした疑問は当を得ている。だが今、鉄生産の上限を考えるうえで、宮の前E地点出土鉄滓は、はたして当該期に属すると限定できるかという疑問も残る。たしかに宮の前E地点、同丘陵上にあって東・西に隣接するD・F地

点で出土した土器は弥生末～古墳時代前期に属するものがほとんどである。しかしD～F地点は全面にわたって丘陵上面は削平をうけ、遺存した住居址もかろうじて壁をとどめていた程度である。またE地点の東側に隣りあうF地点第3号住居址からも2個の鉄滓が出土している。報文では出土位置について住居址（内）と、覆土の上面表土という二通りの叙述がある。恐らくは同じ鉄滓をさすのであろう。3号住居址床面に付着していた土器は弥生終末に属する。覆土中からは土師器高杯脚部破片が一点ではあるが出土している。上限を弥生終末～古墳時代初頭におけるとしても、更に5・6世紀に下る可能性もあることだけを指摘しておきたい。したがってE・F地点出土鉄滓を弥生終末～古墳時代初頭の所産とすることは状況証拠としてはいささか過当でないように思われる。

では確実な資料となると、今のところ今宿大塚古墳後円部壇丘盛土中から採集された鉄滓をあげることができ、さらに大又遺跡第1・4号住居址から出土した鉄滓がある。大塚古墳は、昭和11年後円部壇丘に突然ブルドーザーが入りその一部を破壊した。その後の採集である。古墳の年代は限定しえないが、今までに採集された埴輪によれば、6世紀代の前半を下らないとされる。<sup>46</sup> また大又遺跡第1・4号住居址出土鉄滓は確実に床面に密着しており、出土須恵器からII～III A期に求められ、今宿大塚古墳例に後続する年代が与えられる。

以上2ヶ所の鉄滓は、あくまでも周辺における鉄生産の状況証拠でしかない。上限年代は明らかにできないが、6世紀後半～末を下限とする製鉄遺構は数例知られている。大牟田遺跡(7号墳壇丘下炉址)、コノリ遺跡、野方新池遺跡がそれで、コノリ遺跡では6基の製錬炉が、野方新池遺跡で2基の製錬炉がそれぞれ検出されている。先述したように野方新池遺跡炉休周辺から採集された木炭からA・D 577 ± 14というC<sub>14</sub>年代が出されている。コノリ遺跡では製錬炉の南側に隣接して存在する古墳の壇丘盛土中に鉄滓が混入している。古墳築造前に営なまれた製錬炉とすれば、わが列島における最古の炉体遺構例となる。

ついで6世紀末以降7世紀代の資料としては、豊富な鉄滓供獻古墳をあげることができる。かかる事例については次項で仔細に述べるので省略するが、この段階に至って本地域の鉄生産は急激に増加したようである。検出された製鉄遺構としては池田遺跡の製錬炉にとどまるが、鉄滓供獻古墳との関係からみて将来多くの製鉄遺跡が発見されるであろう。

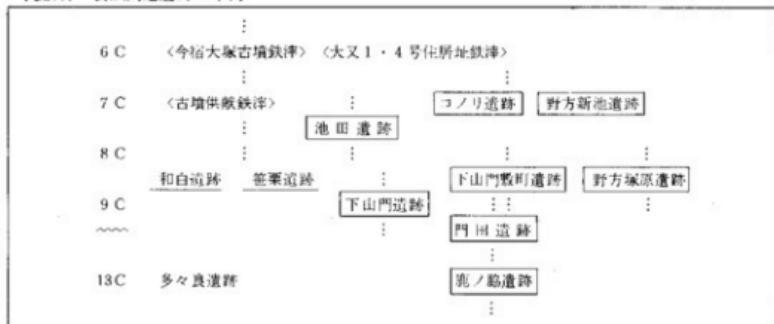
8世紀代と推定される遺跡では、製錬址として下山門敷町遺跡、大綱治址としては筈来遺跡、和白遺跡がある。下山門敷町遺跡は上面がすでに削平され炉体は検出しえなかったが、3条の防湿用溝が7～8m間隔に平行して並び、溝中からは鉄滓・木炭とともに流出した排泄が壁面から底面にかけて付着していた。筈来・和白遺跡はそれぞれ炉体・火床が検出されており、ともに鐵冶炉と推定されている。

9世紀以降では調査例がきわめて乏しく、下山門・多々良・門田遺跡などで検出されているにすぎない。年代を推定しるのは多々良遺跡のみで、12世紀末から13世紀にかけての時期で

ある。ここは方形にめぐる溝で区画された鍛冶場と推定され、ほぼ中央部に火床が検出されている。下山門・門田遺跡はともに炉体・炉体下部施設が検出されている。下山門例は8世紀後半以降というだけで確実な年代をおさえることはできない。門田例は全く時期不詳といわざるえないが、類似する北九州丸ヶ谷遺跡炉から平安時代に属する可能性が強い。

以上通観したように、本地域における製鉄遺跡の調査例は少なく、また確実な年代を知りうる例も皆無に近いのである。今までの調査例と、年代を推定しうる出土鉄滓例を図表化すると下図のごとくである。鉄製産開始期は遅くとも6世紀前半以前に求められるとしうるが、その上限は不明である。しかし、6世紀前半後の今宿大塚古墳・大又遺跡出土鉄滓は、未分析のため製錬・鍛冶滓いずれの判断ができず、必ずしも鉄生産の上限を示す資料とはいいかたい。

Tab.15 製鉄関連遺跡の年代



（ ）内は出土鉄滓、——は鍛冶、□は製錬遺跡をしめす。

#### 4) 鉄滓供獻古墳について

古墳時代後期に至って、埋葬施設内外に鉄滓という通有の副葬品とは異質の物体を供獻する事例が知られるようになったのは、岡山県六つ塚古墳群の調査<sup>248</sup>が契機であった。以後若干の類例を増し、最近では奈良県天理市でも鉄滓と鶴羽口片の供獻例が報告<sup>249</sup>されている。こうした鉄滓供獻は、事例の僅少さ、地域的偏在などから、古墳被葬者の性格の一端をしめすのではないかという考えも提出<sup>250</sup>されている。

さて、福岡市周辺におけるこうした鉄滓供獻古墳例は、ここ数年の宅地化に伴う緊急調査の増加にともなって現在32例にも達することが知られた。その初例は、1969年の池田古墳群の調査に見ることができる。またここ2・3年の調査による検出例が大半をしめるため報告書未刊のものが多く、報告されていても鉄滓出土状況の説明にいさか要を得ないものもある。したがって鉄滓を出土した古墳すべてを供獻例とするには躊躇せざるを得なかった。出土状態か

Tab.16 鉄津供献古墳一覧表

No	古墳名	所在地	出土地点	個数	純重量	推定時期	備考
1	相原3号墳	西区上の原・相原	墓道	12	550g	6C末~7C	文献24
2	広石II-2号墳	西区拾六町・広石	墓道・玄室	37	1350g	7C初 ~8C後半	本著 1960年植木島 治氏著
3	野方1号墳	西区野方	墓道後半部			7C	
4	野方2号墳	*	墓道後半部			7C	*
5	山崎2号墳	西区西油山・山崎	墓道	3		7C	1975年 大川清氏調査
6	山崎3号墳	*	墓道・墓道	2		7C	*
7	山崎4号墳	*	墓道・墓道			6C後半 ~7C後半	*
8	大谷7号墳	西区梅林・大谷	前庭・溝道前半250余 前庭33・溝道191	464余		7C前半 ~7C後半	文献15
9	大谷8号墳	*	溝道4・玄室17	21		7C後半 ~7C後半	文献15
10	大谷14号墳	*	西庭・溝道前半部 約240	240		7C後半	文献15
11	大谷23号墳	*	玄室			7C	文献1
12	大谷51号墳	*	前庭・溝道308 玄室30	338		7C中 ~7C末	文献15
13	駒ヶ原C地区3号墳	西区梅林・駒ヶ原	玄室			7C	文献25
14	影城1号墳	西区野芥・カケツカ	填丘外表			6C末~7C	文献26
15	七隈8号墳	西区七隈	玄室・右袖部			7C	1970年夏 大野田同好会
16	倉瀬戸1号墳	西区片江・倉瀬戸	?			6C末~ 7C前	文献27
17	倉瀬戸2号墳	*	玄室			7C後半	文献27
18	倉瀬戸4号墳	*	?			6C後半 ~7C前半	文献27
19	倉瀬戸5号墳	*	玄室			7C初 ~7C後半	文献27
20	倉瀬戸7号墳	*	?			7C初 ~7C末	文献27
21	大牟田3号墳	西区柏原・大牟田	?			7C	1970~71年 島根氏ら調査
22	大牟田4号墳	*	?			7C	*
23	大牟田6号墳	*	?			7C	*
24	大牟田35号墳	*	?			?	*
25	大牟田14号墳	*	?			?	*
26	観音山1号墳	那珂川町中原・手ノ原深草	墓道			7C末~	文献28
27	観音山6号墳		墓道			8C初~	文献28
28	観音山13号墳		墓道・玄室			7C	文献28
29	観音山20号墳		墓道・玄室			7C後半	文献28
30	池田1号墳	太宰府町太宰府・池田	玄室	?		7C前半	文献21
31	池田2号墳	*	玄室	?		7C前半	文献21
32	清田ヶ浦8号墳	津屋崎町津屋崎・清田ヶ浦	墓道	30	602.5kg +a	7C前半	1976年栗原公 調査

らみて確実な32例について供獻例として掲載した次第である。

**分 布** 紙上32基の古墳は、製鉄遺跡の分布する地域のうち糸島を除いた各地にわたって認められ、13の古墳群に属している。製鉄遺跡群との関係でみると、今宿群：1古墳群1基、早良群：8古墳群19基、福岡群：2古墳群9基、太宰府群：1古墳群2基、津屋崎群：1古墳群1基である。

早良群周辺が他の群をはるかに凌駕する数値をみせることは、製鉄遺跡の発見例と一定の相関性があるとはいえる、むしろ近年の緊急調査数に比例しており、上述データの傾向は必ずしも絶対的とはいがたい。早良群とともに古墳時代における鉄生産の中心地たる今宿群では、11の古墳群からなる総数300基をこえる後期群集墳が分布しているが、調査を終った古墳は3古墳群9基を数えるにすぎないし、津屋崎群周辺では1976年の清田ヶ浦古墳群の調査が初例という調査進行状況の跛行性を反映している。かかる状況からすれば、環博多湾製鉄遺跡群周辺地域の後期古墳群においては、将来の調査によって相当数の鉄滓供獻古墳が検出されるにちがいない。ちなみに周辺地域での古墳群調査状況と鉄滓供獻古墳との関係をまとめると次表のとおりであ

Tab.17 福岡市周辺古墳群調査状況と鉄滓供獻古墳

( )内は推定

地 区	古墳群名	総基数	調査基数	鉄滓供獻古墳	地 区	古墳群名	総基数	調査基数	鉄滓供獻古墳
今 宿	徳永西	(7)	3	ナシ	福 岡	大牟田	43	43	5
	上	3	3	*		門田	2	2	ナシ
	相原	33	3	1		比田	3	3	*
早 良	草場	5	4	ナシ	國 持	親音山	28	28	4
	崎	6	6	*		戸	4	4	ナシ
	ノリ	8	8	*		唐田	(10)	4	*
	広石	9	7	1		田ヶ浦		2	*
	野方	16	2			乙	(100)	35	*
	金武	2	2	ナシ	太 宰 府	池田	4	3	2
	山崎	10	10	3		八隈	9	9	ナシ
	駿ヶ原C地区	6	3	1		桜口	16	16	*
	大谷	10	7	5		昌潤ヶ浦	2	2	*
	影冢	2	1	1	柏 尾	湯ヶ浦	4	4	*
	七隈	8	3	1		カケツカ山	(10)	1	*
	倉瀬戸	9	9	5		飛山	2	2	*
	鳥鶴	3	3	ナシ		高見	5	5	*
	早苗田	3	3	*		宮前	3	2	*
糸 島	瀬戸口	9	2	*		の塚	1	1	*
	井手	4	1	*	津 屋 崎	清田ヶ浦	30	11	1
	神松寺	1	1	*		計	39	272	32

る。ただし、4・5世紀代の古墳群は除外する。

前表によって明らかなように、調査された古墳群は39、古墳数272であるが、なかには5世紀代に遡る可能性のある古墳も数基含まれている。それを除くと6世紀代以降の古墳数は264基となり、鉄滓供獻古墳の含有率は12.1%である。

各地域ごとの比率をみるとTab.18

のように、早良地区ではやはり他地域を抜きんでている。

さて古墳群の歴的構成をみると、単独墳（古墳群と呼ぶには適わしくないが、古墳のあり方からみて便宜的に扱った）、2～3基程度から40基以上で構成されたものもあり、必ずしも同質の古墳群とはいえない。鉄滓供獻例からしても、まったくかかる古墳を含まないばあいもあるし、さらに古墳群中に古墳の含有率もかなりの差異が認められる。一つの古墳群のあり方は、同地域における古墳群との諸関係のなかで正しく位置付けられねばならない。そうした点からすれば上表にみる分布のあり方は、さらに歩を進めて鉄滓供獻古墳の古墳群内での位相を明らかにし、加えて供獻古墳を含まない古墳群との通時・共時の構造的分析によって一層明確化されねばならない。将来の課題である。

**出土状況と供獻年代** 古墳から鉄滓が出土したばあい、その鉄滓がどのような意味をもつかは出土状態によってのみ理解される。先に触れたところであるが、鉄滓は羨道前半部や墓道・前庭部から出土するばあいが多く、1例のみだが墳丘外表例もある。こうした事例では、出土状況が明確でないと、その年代ばかりか古墳（被葬者）に対する供獻か、あるいは後の流れ込みか判然としないケースも生じかねない。さらに墳丘盛土からの出土例もいくつか報告されているが、古墳に近接して製鉄遺跡（製錬・鐵冶）が存在しない限り、こうした鉄滓は墳丘構築時に意図的に埋納したと考えるほかはない。しかしかかる事例は調査時の観察如何によって評価が異なるため、本稿では供獻例として扱っていない。

さて供獻状況の知りうる32例について、出土位置をみることにする。石室の羨道閉塞部を境にして石室内・外に分け、石室外をさらに墓道・前庭部と墳丘外表とに区別すると

石室 内	11
石室 内・石室 外	6
石室 外	19
{ 羨道前半～墓道・前庭部   墳丘外表	1

となる。石室内出土は計11例、うち6例は石室外（すべて狭道前半～墓道・前庭部）からも出土していることになり、狭道前半～墓道・前庭部出土例がもっとも多く、一般的なようである。こうした出土位置は、後の流れ込みとして処理される危険性を孕み、その年代限定を困難にしているわけでもある。

次に出土状況であるが、福岡市大谷古墳群例のように多量の鉄滓が石室内から出土すればともかく、少量の出土例が多く報告書の記載でも意外と無視され難いものがある。叙上大谷古墳群（10基）は2次にわたって7基が調査された。うち5基の古墳に鉄滓供獻が確かめられるという、きわめて供獻率の高い古墳群である。その他に古墳群の立地する丘陵上で3基の炉址が検出されているが、報告にあるように製鉄炉としての確証は乏しい。本古墳群の鉄滓供獻で特徴的なことは、鉄滓の多量さにしめされる。7号墳石室は最終末の複室構造をもつ横穴式石室であるが、奥室191、前室23、狭道前半～前庭250余、計464余個の鉄滓が出土している。ついで51号墳の338個、14号墳の240個となるが、こうした多量の供獻は他に例をみない。他に量の多い例を求めて広石田1・1号墳の37個、清田ヶ浦8号墳の30余個ぐらいにすぎないのである。大谷古墳群では供獻鉄滓のいずれもが、玄室では床面敷石の空隙に入り込んでいたり、前庭部では基底面上から出土しており、その供獻時期を古墳造営後の初葬段階におくことが可能である。古墳の造営年代は出土した須恵器によれば、7号墳がⅣ期に他はすべてⅤ期に属していることから7世紀初頭から前半代にかけての時期と推定される。

他に石室内から出土した例としては池田1・2号墳の例がある。とともに玄室右袖付近にまとまった状態で出土している。報文では、後に投げ込んだものと推定しているが、まとまり具合、1・2号墳に共通した出土位置からみて供獻例としてきつかえない。この2基はともにⅤ期でも後出の須恵器を出土しており7世紀中葉前後の年代がうえられよう。観音山13・20号墳も玄室内から鉄滓が出土している。このように石室内出土鉄滓については、大概初葬から最終追葬時のあいだにその年代を与えることが可能である。大谷例はともかく、池田例は少量の鉄滓を一ヶ所にまとめて置いた供獻形態をとどめている。

残る問題は閉塞部の外側、すなわち狭道前半から墓道あるいは前庭にかけてからのみ出土した例である。出土状態の明確な例としては相原3号墳、清田ヶ浦8号墳、山崎2・3号墳などがある。相原例は、狭道閉塞石前面の狭道基底面にまとまって12個が出土し、山崎2号墳では3個、清田ヶ浦例は30余個が出土している。

墓道出土例では、報告をみてもあまり詳しいものはないが、いずれも墓道覆土（黒色腐植土のばいが多い）中から出土しており、墓道が埋まりきった後のものはないようである。こうした出土状況をどう理解すべきかとなるが、通有の墓道出土遺物のあり方を参考にすれば、石室内最新遺物（12～14世紀頃に行われた塚信仰関係の遺物を除く）は、いわば最終追葬時を大きく下降することはなく、ほぼ同時期、下っても1世紀の差異はないといってよい。鉄滓供獻が

必ずしも他の供獻物とともにに行なわれたとは断じえないとしても、墓道内出土土器の時期に近い年代を与えることはできよう。また12~14世紀に行なわれた塚信仰によって、種々の遺物が玄室内や墳丘外表から出土することもあるが、それに鉄滓が伴ったという報告もない。したがって墓道出土鉄滓も流れ込みでない限り、当該古墳の初葬から最終追葬のあいだ、下つてもごく短期間のあいだの供獻とすることは妥当であり、ほとんどの事例が7世紀代に属するものといってよかろう。

以上のように、鉄滓の古墳供獻は6世紀末ごろに始まり、第3次群集墳の築造が終る7世紀末葉で大半は終わり、一部8世紀に下るものがあるが、その盛期は7世紀代にあるといえよう。

また鉄滓のほかに、古墳の副葬品として鍛冶工具の存在と、その出土のあり方は鉄生産を考えるうえで重要な問題であろう。すでに野上丈助氏によって<sup>註22</sup>鍛冶具の集成が行われているが、九州出土例をまとめると次のようになる。

出上地	古墳名	主部	出土鍛冶工具	推定期	註
福岡県浮羽郡水郷村石垣	石垣古墳群	横穴式石室	鉄鋸1	?	52
*	*	?	鉄鋸1	?	52
* 津屋崎町新原	津屋崎17号墳	横穴式石室	鉄鋸1 タガネ2	6C初頭	43
* 春日市上白水門田	門田2号墳	横穴式石室	金龜1	6C前半	35
* 朝倉郡朝倉町妙見	妙見8号墳	横穴式石室	鉄鋸1 鉄錐1	6C前半	54
佐賀県鳥栖市	東十郎特別区1号墳	横穴式石室	鉄鋸1 タガネ1	6C後半~	53
*	*	口号墳	横穴式石室	鉄鋸1	53
* 神埼郡三川田村	塚山古墳	横穴式石室	鉄鋸1	6C中葉	52
熊本県城南町	丸山3号墳	?	鉄鋸1	6C前半	55

このうち津屋崎17号墳・門田2号墳についてみれば、これまで述べてきた津屋崎・福岡群のなかに存在し、その地域で鉄生産の開始前後にかかる鍛冶具を副葬する古墳の出現はきわめて示唆的といえよう。

上述したことと、福岡市周辺における鉄滓供獻古墳の存在は、本地域における鉄生産の開始が、確実に古墳時代後期に遡ることを明らかにしたと同時に、6世紀後半以降の鉄生産が広範に行なわれたことを想像させる。古墳に対する鉄滓供獻が、被葬者と鉄生産あるいは鍛冶とのなんらかの結び付きの表現だとすれば、本地域の群集墳形成の過程を考えるうえで、製鉄集團のあり方が大きな比重を占めていると考えられる。逆にいえば、古墳造営という社会的秩序の表現を媒介として、鉄生産の実体に迫る糸口ともなりうる。そのためには先述したように、古墳造営の契機をはじめとした古墳群総体を把える視座の構築が極めて重要な課題である。

まず供獻鉄滓についてみれば、前代から行なわれた副葬・供獻品とは著しい質の差異がある。後期古墳に通有の装身具・武器・馬具あるいは須恵器・土師器などの個人もしくは家族の所有にかかる製品とはまったく異質の、いわば鉄生産（製鉄・鍛冶）の過程で生じた排出物であり、

それ自体製品としての価値をもたない物にすぎないのである。それをあえて供獻する意味からすれば、被葬者と鉄生産との結び付きは、鐵滓供獻のない古墳被葬者よりはより強い妥当性を認めるものである。Fig. 101 にみる製鐵遺跡の分布と鐵滓供獻の位置的関係は如実にそれを示している。あえて古墳群と製鐵遺跡の関係を想定すれば、先に若干の分析を試みた池田遺跡をはじめ、野方古墳群と野方新池・カサネ池遺跡、山崎古墳群と山崎遺跡といった対応がみられる。西油山地域に限れば、大谷古墳群・倉瀬戸古墳群・七隈古墳群に対応するように、五箇村池・下隈池・熊ノイ池遺跡などの大製鐵遺跡群が分布している。こうした関係を直接証明する手だてはありえないとしても、上述したごく鐵滓供獻古墳の分布のあり方、古墳群内での位置づけなどの検討によって、さらに明確になると考える。

### 5) まとめ

三島格氏による福岡平野を中心とした地名表作製後すでに7年をすぎ、多くの資料が追加された。種々書き加えたが、古代鉄生産の内容にはほど遠く資料の追加にとどまつた。以上をまとめるに次のとおりである。

1. 博多湾および玄海灘に面した、いわば環博多湾諸地域には多くの製鐵および鉄生産に関係した遺跡が存在し、鐵滓を出土した遺跡は古墳供獻例を除き現在88ヶ所を数える。

2. それらの遺跡は、各平野を単位に6群のまとまりをみせ、各群とも鉄生産の開始期は古墳時代後期まで遡る。

3. 6群のうち、最も遺跡の集中するのは今宿・早良の2群で、6~13世紀代にわたって継続して行なわれている。

4. 遺構の保存は悪く、炉体の検出は少ないため、炉体構造が知られるものは僅少である。

5. 製鐵遺跡群の周辺に分布する群集墳の中には、鐵滓を供獻する古墳があり現在32例が知られている。古墳被葬者の性格とともに、鉄生産に関わった集団のあり方を考えるうえで重要な位置をしめる。

なお本稿の執筆にあたって多くの方々から資料について教示を賜わった。特に大川清・大沢正己・奥野正男・下条信行・鈴木重治・竹石健二・三島格の諸氏には多く資料を与えられた。記して謝意を表したい。

〈追記〉 原稿執筆が終った後、福岡市湯納遺跡から多量の鐵滓および輪羽口の出土していることを知った。拾六町群のほぼ中央に位置する遺跡だけに報告が俟たれる。

(柳沢)

### 註1 文獻4

瀬見浩「鉄の生産と技術」『古代史発掘』10 1974

森浩一・岸田知子「考古学からみた鉄」『鉄』 1974

福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について

- 2 文献1 文獻2
- 3 中山平次郎「鉄津を出す弥生式遺跡」『歴史地理』31-1 1918
- 4 文獻7
- 5 文獻12
- 6 文獻5のはか「伊都団」周辺の古代製鉄。『日本のなかの朝鮮文化』13号 1972、「鞍殿・卓素の系譜」『日本のなかの朝鮮文化』24号 1974、「今宿地区の古墳とその社会的背景」(1)-(3) 古代研会報 41 ~43 1975などがある。
- 7 岡崎 敬・坂田正彦 文献13所収
- 8 坂田正彦 文献21所収
- 9 坂田正彦 文献6所収
- 10 大沢正巳・中山光夫 文献20所収
- 11 文獻3
- 12 古国研究会 1975年調査。下条信行氏の教示による。
- 13 文獻24
- 14 文獻5
- 15 文獻6
- 16 1974・75年 大川 清氏、福岡市教育委員会調査。
- 17 1975年日本大学竹石健二氏ら調査。氏の教示による。
- 18 1971・75年 三島 格・鈴木重治氏ら調査。両氏の教示による。
- 19 文獻15
- 20 文獻18
- 21 文獻13
- 22 文獻16
- 23 1976年市教育委員会試験調査
- 24 文獻17
- 25 1976年市教育委員会調査
- 26 文獻19
- 27 文獻1
- 28 文獻14
- 29 文獻12・14
- 30 文獻12・14
- 31 1970~71年三島 格氏ら調査。氏の教示による。
- 32 文獻20
- 33 北九州市郷土史研究会「丸ヶ谷製鉄場。『水火丸・下上津役の歴史』1971
- 34 文獻28 詳細は県文化課井上裕之氏の教示による。
- 35 甲元真之・松井忠春「門田2号墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1976 福岡県教育委員会
- 36 萩井功ほか『太宰府史跡 昭和45年度発掘調査概報』1971 福岡県教育委員会
- 37 文獻21
- 38 文獻23
- 39 文獻22
- 40 1974年日本大学竹石健二氏調査。氏の教示による。
- 41 文獻12
- 42 1976年県教育委員会調査。調査を担当した県文化課小池史哲氏の教示による。
- 43 1976~77年県教育委員会調査。調査を担当した県文化課石山 猛氏の教示による。
- 44 三島 格 文献1所収

- 45 板田正彦 文獻21所収  
 46 高橋 徹 「九州の埴輪概観」『二子塚遺跡』 1976  
 47 調査を担当した県文化課副島邦弘氏の教示による。  
 48 今井 光緒 『六つ塚古墳群の研究』  
 49 森泉 紋編 『天理市石上・豊田古墳群』奈良県教育委員会 1975  
 50 今井 瑞・近藤義郎 『群集墳の盛行』『古代の日本』4 中國・西國 1970  
 51 1975年大川 清氏ら調査。氏の教示による。  
 52 野上文助 『古墳時代における鉄器および鉄生産の諸問題』『考古学研究』15巻2号 1967  
 53 木下之治 『東十郎古墳群』佐賀県教育委員会 1969  
 54 高山 明編 『妙見8号墳』『埋れていた朝倉文化』 1972  
 55 1971~75年能本県教育委員会調査。  
 調査を担当した野田拓一氏の教示による。

## 表 文 献

- 1 三島 格 「福岡平野の製鉄遺跡」「和白遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集』 1971  
 2 三島 格 「鉄に関する問題」「下山門遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第23集』 1973  
 3 大沢正巳 「福岡県下の古代製鉄」『福岡考古学報会々報第3号』 1975  
 4 齐田義郎 『鉄の考古学』 1973  
 5 奥野正男 「今宿・早良の古代地域国家——採鉱・冶金シャーマニズムに関連して」『筑紫古文化研究会々報44』 1975  
 6 山崎純男編 「下山門遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集』 1973  
 7 大場憲郎 「鐵津を出土する遺跡」1・2 筑紫古文化研究会々報29・30 1974  
 8 副島邦弘 「大又遺跡」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970  
 9 酒井仁夫 「宮ノ前E点」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970  
 10 高倉洋彰・橋口達也ほか 「宮ノ前F点」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集』 1971  
 11 烏津義昭 「牟多田遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集) 1973  
 12 奥野正男 「鐵津を出土する遺跡」3 筑紫古文化研究会々報44 1975  
 13 森 貴次郎・岡崎 敏ほか 「有田遺跡——福岡市古代集落遺跡第二次発掘調査報告」(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第2集) 1968  
 14 石津 司 「早良町の遺跡」福岡考古学報会々報 第3号 1975  
 15 緒方 勉ほか 「大谷古墳群」I (福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集) 1972  
 16 山崎純男 「京ノ隈遺跡——福岡市西区田角所在の古墳と絆塚の調査」 1976  
 17 出坂美代子 「瀬戸口古墳群」1975  
 18 沢 重臣・高倉洋彰ほか 「佐賀古代製鉄遺跡発掘調査報告」 1969  
 19 高倉洋彰ほか 「宝台遺跡」1971  
 20 井上裕之ほか 「第19~27地点(門田遺跡)の調査」『昭和50年度 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』 1976  
 21 宮路賀宏・栗原和彦ほか 「油田遺跡」「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970  
 22 三島 格・烏津義昭ほか 「多く良遺跡調査報告書」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集) 1972  
 23 柳田純孝・塙勝利ほか 「和白遺跡群」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集) 1971  
 24 柳沢一男・森田和裕 「相原古墳群」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集) 1974  
 25 真野 修 「秋ヶ原古墳群」「倉瀬戸古墳群」1973  
 26 三島 格・佐藤伸二ほか 「影塚第1号墳調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集』 1972  
 27 小田富士雄福 「倉瀬戸古墳群」1973  
 28 柳田康男ほか 「親音山古墳群の調査」『昭和47年度・山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概要』 1973

## 4 福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析

——冶金学的見地からのアプローチ——

大沢正己

### 1.はじめに

我が国における鉄生産（製鍊）の起源は、まだ明らかでない。現在までのすう勢として、弥生時代中期もしくは後期頃が始期として考えられているが、これも実際に製鍊炉の検出があつたわけではなく、消費鉄器の増大や、ごく少数ではあるが住居址から出土する鉱滓からの推察である。

しかし、この出土鉱滓も製鍊炉か鐵冶津かとなると、不明瞭であり、冶金学的な追求が必要である。鉱滓は、化学組成や鉱物組成を調査することによって、古代製鉄の技術レベルや原料の問題、又、製鍊時の基本的条件を解明する手がかりが得られる。

このたび、福岡市教育委員会より、近年発掘調査した14遺跡と表面採集品2個所の古代製鉄に関連のある遺物の調査依頼を受けた。対象遺物としては、鉱滓・鐵冶津・鐵打津・炉材粘土・木炭等で、これ等について主に鉱物組成と化学組成を検討した結果を報告する。

従来より、古代製鉄址には文化遺物を伴わない場合が多く、推定年代に悩まされるのであるが、今回の調査試料は、古墳時代後半（6世紀末）より鎌倉時代（13世紀）にかけての、比較的確実な明瞭なものである。これ等の調査結果は、古代製鉄を研究する上で重要な資料になると考えるので、十分な考察を加えることなく取り急ぎ、データー提示にふみきった。また、後日資料の補足と十分なる考察を加えたいと考えている。

### 2. 調査方法

#### 1) 供試試料

今回の調査試料は、16遺跡を対象とし、鉱滓42個、鐵冶津2個、鐵打津2個、酸化した鉄器6個、土器破片粘土（ルツボ？）、炉材粘土各1点及び木炭1種を扱っている。それ等の詳細は、Tab.26・27に示す。

#### 2) 調査方法

##### a. 光学顕微鏡法

試料の調製は、十分に水で洗浄して乾燥後二分割して片方を検鏡試料とした（残りは化学分析用）。検鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリーベーバーで研磨し、酸化クロムとアルミナで仕上げて、構成鉱物を同定した。検鏡試料は鉱滓・鐵冶津・鐵打津・鉄器で总数52個である。

b. E·P·M·A (Electron Probe Microanalyser) による成分元素の分析。

別名X線マイクロアナライザーと呼ばれる方法でもって、敷町遺跡の鉱滓（試料No.34）と上和白遺跡の鐵治滓（試料No.43）について分析を行なっている。

c. X線回折法 (X-ray diffractometer)

回折X線スペクトルを利用する示性分析法。X線回折計を使って鉱滓（粉末状）の回折X線をとり、鉱物組成の同定を行なっている。試料としては、野方古墳群の池の中からの採取鉱滓（試料No.24）、鹿島遺跡鉱滓（試料No.41）である。

d. 化学組成

化学組成は湿式法によって求めた。試料は遺跡を代表する鐵滓に数を取ったため、24個（内鐵打滓2個）になっている。1試料につき35g前後の量を消費するため、検鏡試料の片割れを用いた（十分な洗浄が必要）。

e. 分光分析

鉄器は、1個体の量が少ないので、定性分析であるスペクトル発光分析法を用いた。試料は、倉瀬戸5号墳出土の直刀（試料No.48）と広石古墳群の直刀と鐵鍼茎4個（試料No.49~52）等である。

以上は鉱滓、鐵打滓、鐵治滓、鐵器等の調査項目であるが、粘土についてはSK表示の耐火度、化学組成は螢光X線法、また鉱物組成はX線回折で、diffractometerを使用した。木炭の組成の調査については、JIS（日本工業規格）M8812に準じた方法を探っている。

### 3. 調査結果

#### 1) 鉱滓・鐵治滓の調査結果

Tab.26に示した符号ナンバーに従って説明する。顯微鏡組織のうち、鉱滓・鐵治滓の鉱物組成はPL.89~100(46)に、鐵器類はPL.100(47)~(52)に示す。E·P·M·Aは、PL.102~103に、化学分析値はTab.28に、また、鉱滓のX線回折は、Tab.19にしめす。

#### 1. 相原古墳群3号墳出土鉱滓

当古墳には、12個の鉱滓が供獻されていたが、そのうちの1個である。赤褐色を呈し、比重は大きい。表面状態は粗雑で、重量は160gある。

顯微鏡組織は、PL.89(1)に示すように、白色粒状のワスタイト (Wüstite : FeO) と淡灰色短柱状のファイアライト (Fayalite : 2FeO · SiO<sub>2</sub>)、それに僅かの黒色地のガラス質 (glass) がみられる。ワスタイトは樹枝状に晶出し、ファイアライトは短柱状になって成長しているところから、徐冷津とみなされよう。

化学分析値は、全鉄分 (Total Fe) が47.02%と多く、かつ、そのうちの酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) の高目な鉱滓である。検鏡では、ゲーサイト (Goethite : Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> · H<sub>2</sub>O) が認められなかつたので、末

### 福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析

還元分の多い鉱滓とみられよう(製錬初期の生成物?)。二酸化チタン( $TiO_2$ )は1.05%と低目である。

#### 2. 相原古墳群3号墳出土鉱滓

2の試料は小塊で85gのものである。外観は1に類似している。鉱物組成はウスタイトとファイアライトで占められている。

#### 3. 倉瀬戸古墳群1号墳出土鉱滓

倉瀬戸古墳出土上の鉱滓は25~70gと全体的に小塊である。鉱滓表面は赤褐色を呈し、粗雑な肌を示す。

鉱物組成は、雪結晶に似た多角形状のマグネタイト(Magnetite:  $Fe_3O_4$ )とウスタイトが混在し、長柱状のファイアライト、それに間隙にはウスタイト、ファイアライト、ガラス質等の微結晶から構成された共晶部が認められる。局部的な高溫場所での生成物であろうか。

#### 4. 倉瀬戸古墳群1号墳出土鉱滓

赤褐色でひび割れて8個に分かれている。総量70g、鉱物組成は多角形状の半還元砂鉄粒子とウスタイト、ファイアライトから構成されている。

化学組成は、全鉄分は41%あり、このうち金属鉄が比較的多目である。また、古墳供獻鉱滓の中で二酸化チタン( $TiO_2$ )の最も高目のものである(3.0%)。

#### 5. 倉瀬戸古墳群1号墳出土鉱滓

一部に船状表皮をもつ黒褐色を呈する40gの鉱滓である。鉱物組成は半還元砂鉄粒子とファイアライト及びガラス質である。

#### 6. 倉瀬戸古墳群2号墳出土鉱滓

赤褐色の表面で小さい凹凸があり、破面はコーカス状を呈している。25gの小塊品。

鉱物組成は、大きく成長したウスタイトと微小ウスタイトが混在し、これにファイアライトとガラス質で構成されている(冷却速度の影響であろうか)。

#### 7. 倉瀬戸古墳群2号墳出土鉱滓

表面は赤褐色を呈し、比較的なめらかな肌をした35gの鉱滓である。比重は大で、破面は緻密で硬い。

鉱物組成は、少量のウスタイトが樹枝状に存在することから、溶融スラグからの晶出物であろう。ファイアライトは長柱状に多量にあり、その間隙をガラス質が占めている。

#### 8. 倉瀬戸古墳群5号墳出土鉱滓

赤褐色を呈し、肌は粗雑である。50g、多量のウスタイトと、その粒間にファイアライトが存在している。

#### 9. 大谷古墳群7号墳出土鉱滓

赤褐色の粗鬆な鉱滓で木炭痕が残っている。20gの小塊品のため化学分析は行っていない。

ヴスタイトが樹枝状に晶出し、ファイライトは長柱状に存在する。

#### 10. 大牟田古墳群3号墳出土鉱滓

235 gという大塊品で、黒褐色を呈し、肌は起伏がけげしく、木炭の噛み込みも認められる。

鉱物組成は半還元砂鉄粒子もしくはヘーシナイト ( $\text{hercynite} : \text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) と、ファイヤライト及びガラス質である。ヘーシナイト存在の可能性として、分析結果から、 $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$  の比をみてみると約4になることからもうなずける。

#### 11. 大牟田古墳群35号墳出土鉱滓

小さい凹凸をもった黒褐色の鉱滓で、一部に石英粒子及び粘土を付着している。破面の気孔は比較的少ない。110 g。

鉱物組成は、大半はファイヤライトでそれに少量の半還元砂鉄粒子とガラス質である。ヴスタイトはほとんど晶出していない。

#### 12. 大牟田古墳群6号墳出土鉱滓

表皮は、若干の凹凸があるが、なめらかで赤褐色を呈している。破面は黒紫色で気孔は少ない。また、ひび割れがみられ、外観上は5の試料に類似している。

鉱物組成は、多量のヴスタイトとファイヤライトによって構成されている。

#### 13. 大牟田古墳群6号墳出土鉱滓

滴下状気味の表皮で赤褐色、破面はコーカス状を呈する。

ヴスタイトが多量に晶出しており、その間際にファイヤライトとガラス質が存在する。化学分析値は、全鉄が約58%と多く、また、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) の多いのも顕微鏡組織とよく対応する。二酸化チタンは低目の1.55%である。

#### 14. 大牟田古墳群6号墳出土鉱滓

表皮は、流動性が悪かった様子で粘調である。赤褐色を呈して比重は大きい。また表裏共に石英粒子の付着が認められた。炉材に使用した硅石であろう。

鉱物組成は、ヴスタイトと少量のマグネタイトが混在し、これに短柱状のファイヤライトが認められる。大牟田6号墳出土の12・13・14は同一製錬炉からの排出滓と考えられる。

#### 15. 広石古墳群III-1号墳出土鉱滓

広石III-1号墳には37個の鉱滓が玄室内及び蓆道前半部に供獻されていた。鉱滓は鉄分が多くて比重の大きなものが33個、ガラス質を主成分とするもの1個で、大部分に石英粒子の付着が認められた。

15の試料は、気孔少なくて比重の大きい灰褐色を呈した鉱滓である。破面には、金属鉄が層状に残留して、これが酸化されて周辺に錆をにじましている。表面にはかなりの量の石英粒子を付着している。重量は110 g。

鉱物組成は、ヴスタイトと半還元砂鉄粒子が混在し、長柱状のファイヤライトが析出している。

る。

化学分析値は、全鉄分が45%で酸化第一鉄が49.8%と高目である。硫黄（S）の低い事を特長とし、磷分（P）は若干高目である。

16. 広石古墳群－1号出土鉱滓

表皮は灰黒色を呈し、若干の凹凸がある鉱滓である。塊の中央破面は金属鉄が酸化されて、鏽色をにじませている。比重大。84 g。

鉱物組成はマグネタイトとフィヤライト及びガラス質である。

17. 広石古墳群－1号出土鉱滓

飴状表皮をもった鉱滓で、かなりの量の石英粒子を付着している。表皮は真黒であるが、破面は黒褐色を呈し、若干の気孔があるが、比重は大きい。木炭痕も認められる。60 g。

鉱物組成は半還元砂鉄粒子とファイヤライトで大部分は構成されている。

18. 広石古墳群－1号墳出土鉱滓

灰黒色の表皮で、気孔の少ない鉱滓である。比重は大きく緻密である。75 g。

鉱物組成は半還元砂鉄粒子とファイヤライト、ガラス質で構成されている。

19. 野方カサネ池遺跡出土鉱滓

飴状表皮で排溝時の悪性粘調を示している。気孔少なく、比重は大きい。裏面は、やや滴下状の凹凸を現わしている。また、一部に粘土の付着がみられる。115 g。

鉱物組成は、ウスタイトと半還元砂鉄粒子並びにファイヤライト、ガラス質等が存在する。

分析値は、酸化第一鉄が55.6%と高いことから、炉況はあまり調子のよいものでわなかったと思われる。また、二酸化チタン1.32%から、古墳供獻鉱滓と大差ない砂鉄を使用しているよう見受けられる。

20. 野方新池遺跡製鉄址3トレンチ出土鉱滓

ガラス質を主成分とする炉壁粘土付着の鉱滓である。破面には、多量の石英粒子がみられる。また、炉壁粘土にはスサの混入が認められ、鉱滓と粘土の接触部は赤褐色に変色している。

275 g。

鉱物組成は、鉄分はほとんど検出されず、ガラス質のみで占められている。

21. 野方新池遺跡製鉄址4トレンチ出土鉱滓

表皮は飴状タイプで、局部的に凸起が認められる。粘調で排溝はあまりうまく行ってないようである。破面は紫黒色で気孔は少な目である。裏面の一部に石英粒の大きなものが付着している。460 g。

鉱物組成は少量のマグネタイトとウスタイト、それに長柱状のファイヤライトが存在する。またウスタイト、ファイヤライト、ガラス質等の微結晶からなる共晶部もかなりの量で認められる。

**22. 野方新池遺跡、北端部炉址出土鉱滓**

表皮は粗雑で赤褐色を呈した大塊鉱滓、破面を有して1720 gある。比重は大きく、破面の気孔は少ない。炉壁粘土が付着していて、石英粒子やスサの混入が認められる。

鉱物組成は、成長したヴスタイトが多量にあり、粒間にファイアライトが存在する。

化学組成は、検鏡で確認したように酸化第一鉄(FeO)が多く、58.8%あり、鉄収率は良くない。原料砂鉄も低チタン系を使用しており、カサネ池遺跡と同品位のものである。

**23. 野方カサネ池遺跡、トレンチ出土鉱滓**

炉壁付着のガラス質を主成分にする鉱滓である。表皮は黒色を呈し、破面では石英粒子が半分程占めているので白黒のマダラ模様を示す。裏面の粘土層にも石英粒子がみられる。80 g。

鉱物組成は、ガラス質が主体であるが、これに樹枝状のマグネタイト微結晶が存在している。この鉱滓は、かなりの高温に達し、その冷却過程で晶出したマグネタイトである。

この種の鉱滓の化学組成はあまり意味がないのであるが参考のため行った。鉄分は8.78%とほとんど含まれず、大部分は二酸化硅素(SiO<sub>2</sub>)である。

**24. 野方カサネ池遺跡、池の中の採取鉱滓**

赤褐色の表皮で、サザ波状のシワがあり、これに、石英粒子の嗜み込みがみられる。73 g。

鉱物組成は、ヴスタイトと半還元砂鉄粒子それにファイアライト、ガラス質である。

X線回折(Tab.19)では、次に記載するような鉱物が検出されている。 $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ (ファイヤライト)、 $\text{FeO}$ (ヴスタイト)、 $\text{Fe}_3\text{O}_4$ (マグネタイト)、 $3\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 3\text{SiO}_2$ (Grossularite Garnet)、 $\text{SiO}_2$ (Silica)、 $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ (ヘマタイト)等である。

**25. 石丸古川遺跡SMトレンチ出土鉱滓**

黒灰色の表面に赤粘土が付着し、局部的に気孔があり、角が取れて丸味を帯びている。破面は泥状を示している。110 g。

鉱物組成は、ヴスタイトとファイアライトであり、研磨中にかなり脱落した。

**26. 石丸古川遺跡SMトレンチ出土鉱滓**

25に類似した外観で重量66 g。

鉱物組成は微量のマグネタイトに大部分はファイアライトとガラス質である。

**27. 石丸古川遺跡出土鉱滓**

一見岩石に似た緻密な肌をして気孔の少ない鉱滓である。クチバ色を呈する。比重大。通常、あまり見かけないタイプで、管見では門田遺跡でみた程度である(硬質)。

鉱物組成は、半還元砂鉄粒子に成長したファイヤライト、微結晶のヴスタイト、ガラス質から構成されている。ファイヤライトの結晶からみて徐冷津であろう。

化学組成は、鉄分46.8%とやや多く、低チタン(1.2%)・低純黄(0.00%)の鉱滓である。

**28. 石丸古川遺跡出土鉱滓**

27に似通った外観で、裏面に石英を含有した粘土を付着している。

鉱物組成は、半透光砂鉄粒子にヴスタイトとファイヤライト、ガラス質で、ヴスタイトが十分に晶出したもので、27と製錬経過時間の異なったものであろう。

### 29. 下山門遺跡出土鉱滓

赤褐色を呈し、比較的丸味を帯びた鉱滓である。破面は気孔が多く比重も小さい。一部に粘土を付着していて石英粒子を含んでいる。

鉱物組成は、ファイヤライトとガラス質及びマグネタイトが多量に存在している。マグネタイトはスラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長した結晶である。このマグネタイトの晶癖を示す鉱滓は、送風条件もよく、鉄収率の良い鉱滓に現われるもので、近世たたらに多い組織である。

化学組成は、全鉄分が非常に少なく15.64%で、二酸化硅素が43%と高い。これは製錬条件の良好であった様子を示している。鉱滓中の二酸化チタンは、5.45%と、6～7世紀代の鉱滓ではみられなかった原料の使用が考えられる。顕微鏡組織とこの分析値から、製錬技術の進歩がうかがわれる。

### 30. 戸切遺跡出土鉱滓

黒灰色を呈し、表面、破面ともに気孔の多い鉱滓である。比重は小さい。重量80 g

鉱物組成はヴスタイトとスラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長したマグネタイト並びにファイヤライトで構成されている。29の試料と同様に高温製錬時にみられる組織である。

化学組成は、全鉄分が48.53%と高目であり、特に酸化第一鉄が40%程度残っていて、顕微鏡組織によく対応している。また、二酸化チタンが、11.7%と高目であり、下山門（29）でみられる鉄収率程の炉調はとれなかったものと考えられる。

戸切遺跡では、6世紀前半の遺物も併出しているが、この鉱滓の性格から上級を古くとののは無理があるようで、下山門と同時期ぐらいに考えるのが妥当ではなかろうか。

### 31. 有田遺跡第三次調査出土鉱滓

ガラス質を主成分にする鉱滓でかなりの量の石英粒子を含有している。385 g。また粘土の付着もみられ、これにも石英粒子がみられる。

鉱物組成は、ガラス質を主成分とするスラグ。地にマグネタイトの晶出が認められる。

### 32. 有田遺跡三次調査出土鉱滓

赤褐色を呈し、凹凸の少ない丸味を帯びた鉱滓である。破面では金属鉄が錆化してゲーサイト（Goethite :  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$ ）になっている。

鉱物組成は、かなり成長したヴスタイトとファイヤライト及びガラス質からなっている。

化学組成は、一部に金属鉄の錆化があったせいか、酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) が41.5%と高目である。二酸化チタンは0.6%と非常に低目であることから鐵治滓の可能性も考えられる。遺構との

対応が必要であろう。

### 33. 有田遺跡三次調査出土鉱滓

32と同一タイプの鉱滓で、一部に木炭痕が認められる。

鉱物組成もウスタイトとファイアライト、それにガラス質である。

### 34. 敷町遺跡1号防湿溝西側鉱滓

俗にいう滓（金属錫の様なもので研磨中に剥落する）の中に親指第1関節先程度の硬い塊が多数混入している。赤褐色を呈する。

鉱物組成は、丸味を帯びて白い結晶がウスタイト、淡灰色の角ばったものは半還元砂鉄粒子それにガラス質から構成されている。

PL. 102のE・P・M・Aからも鉱物組成の構成元素は裏付けられる。

化学組成は、全鉄分が50.44%と高目で鉄收率は良くない。二酸化チタンが9.84%、バナジウム（V）が0.293%と多く、銅（Cu）が0.004%と低目から砂鉄を原料としているが、炉調は非常に悪い。

装入原料の還元初期の鉱滓で、大部分の酸化鉄粒子がマグネタイトの段階でとどまっている。積極的に排出したと考えるには難点がある。何らかの理由で止むを得ずに排出したのか、製錬末期に原料を加えたのか、問題を含んだ鉱滓である。ただし造構の地山に貼付いた状態で出土しているので製錬初期の排出滓とみるのが妥当であろうか。

### 35. 敷町遺跡1号防湿溝東側鉱滓

外観は、34に類似している。鉱物組成も34と同じ組合せの個所と、35の組成の個所の半々程度存在する。

35の鉱物組成としては、マグネタイト（酸化鉄粒子と地のスラグは相平衡関係になさそう）とスラグ地にファイアライトが多く晶出し、それにブショードーブローカイト（*Pseudo-brookite* : 2 FeO · TiO<sub>2</sub>）が多数存在している（ブショードーブローカイトは微小板状結晶で灰色をしている）。化学組成は、全鉄分が44.32%あり、二酸化チタンが13.23%と高値である。

これらの結果から、製錬末期に加えた砂鉄（酸化鉄）が低還元度のまま残ったものと推察される（地山貼付きで製錬初期排出でないと矛盾するのであるが…………）。

### 36. 敷町遺跡W2トレチ出土鉱滓

赤褐色を呈した、緻密な鉱滓である。鉱物組成はウスタイト、マグネタイト、ファイアライト、スラグがそろった典型的な製錬滓である。

化学組成は、酸化第1鉄が45.8%と高目で、34・35と製錬過程のちがいはあるが原料砂鉄等は大差ないものが使用されている。

### 37. 野方塚原遺跡3トレチ北寄り表土出土鉱滓

赤褐色で粘土が一層巻き付いた鉱滓。粘土には石英粒子が混入している。破面には気孔が多

いが、その割合には比重が大きい。

鉱物組成は、多量のウスタイトとフィヤライトである。化学組成は、全鉄分が63.63%と非常に高く、また酸化第1鉄の占める割合が大きく56.7%に達している。ニ酸化チタンは1.45%と低目で、バナジンは0.46%と高目である。鉱滓の外観及び鉱物組成からは鍛冶滓タイプに見えるが、ニ酸化チタン、バナジウムからは製錬滓にみえて判断に苦しむ鉱滓である。

### 38. 野方塚原遺跡3トレンチ北寄り表土出土鉱滓

赤褐色を呈する丸味を帯びた鉱滓。破面に気孔が少なく緻密で2分割するのに硬くて苦労した鉱滓である。比重大。

鉱物組成は、ウスタイト、ファイヤライト、ガラス質から構成されている。製錬滓であろう。

### 39. 野方塚原遺跡9区表土出土鉱滓

赤褐色を呈し、表面にも気孔のみとめられる鉱滓である。表皮には石英粒子を嗜み込んでいる。破面にも局部的に気孔があるが、比重は大きい。楕円形に似た縁部をもっている。

鉱物組成は、ウスタイトとファイヤライト、ガラス質からなっている。

### 40. 野方塚原遺跡2区表土直下石組付近出土鉱滓

表皮は輪状タイプであり、裏面には5ミリ近い石英粒を数個と小粒子石英を大量に嗜み込んでいる。破面は若干の気孔があるが比重は大きい。

鉱物組成は、樹枝状の微小なウスタイトと一部に成長したウスタイト、それに長柱状のファイヤライトとガラス質から構成されている。

化学組成は、全鉄分が51.98%と高く、また酸化第一鉄の占める割合も大きく53.78%を示している。ニ酸化チタンは非常に低い0.53%である。鍛冶滓の可能性もある。

### 41. 鹿脇遺跡

鉱状表皮で、排泄状態のよくない鉱滓である。鉱物組成はウスタイトと半還元砂鉄粒子、そ

Tab.19 鉱滓のX線回折結果

鉱物の示性式 及び 鉱物名	野方カサネ池塚取鉱滓 (試料No24)	鹿脇出土 鉱滓 (試料No41)
2 FeO·SiO <sub>2</sub> : Fayalite	+	+
FeO : Wüstite	+	+
Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub> : Magnetite	+	+
3 CaO·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·3 SiO <sub>2</sub> : Grossularite Garnet	+	-
SiO <sub>2</sub> : Silica	+	+
SiO <sub>2</sub> : $\alpha$ -Quartz	+	+
$\alpha$ -Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : Hematite	+	
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·H <sub>2</sub> O : Goethite		+

X線回折測定条件 Target : Co, Filter : Fe, Volt : 35 KV, m.A : 20 mA

れにファイアライトとガラス質である。

化学組成は、全鉄分が高く、46.8%あり、そのうちで酸化第一鉄の占める割合は、45.6%と高い。鉄収率の良好なが調とはいえない。二酸化チタンは1.3%と低目である。

X線回折 (Tab.19) でも鉱物組成の主成分は、ファイアライト、ウスタイト、マグнетタイト等である。

#### 42. 壱岐神社表面採取鉱滓

表皮はやや凹凸のある赤褐色の鉱滓である。比重は大きい。鉱物組成はウスタイトに半還元砂鉄粒子それにファイアライトである。化学組成は、全鉄分が高く52.38%あり、酸化第一鉄が53.39%と高い。二酸化チタンは5.97%で、下山門鉱滓(29)に近いものであるが、酸化クロムが、1.25%と高値を示すのは特異である。

#### 43. 上和白遺跡1号炉出土大銀冶津

赤褐色で凹凸のある鉄滓である。鉱物組成はウスタイト、ファイアライト、それにガラス質で構成されている。また、E・P・M・Aでも構成元素の矛盾はない (PL.103 参照)。化学組成は酸化第一鉄が42.87%と高く、また大銀冶津のせいか二酸化硅素も若干高目で31.08%を示している。しかし、二酸化チタンは1.00%、バナジウムは0.020%と低目である。特にバナジウムは製錬滓の場合、小数第1位に数字がくるが、銀冶津になると、1桁下る傾向がある。

#### 44. 多々良遺跡出土銀冶津

直径10cm、厚み2cmの楕円形滓であろう。表皮は比較的なめらかで、若干の気孔を有し、製錬滓的な緻密さで、比重も大きい。局部的に金属錫を付着している。

鉱物組成は、ウスタイト、ファイアライト、ガラス質等である。化学組成でも、酸化第一鉄が圧倒的に多く51.70%で二酸化硅素は少なく16.46%である。二酸化チタン0.49%、バナジン0.020%と低目である。

##### 2) 銀打津の調査結果

#### 45. 大牟田古墳群4号墳前黒色土より磁力採取

鉄加工の銀打時に発生するスケール (銀打津) を採取したので検鏡と化学組成の調査を行った。このスケールは偏平状 (5ミリ前後で厚みは1ミリ以下) と粒状のものがあったが、20g前後だったので、合せて分析に供した。顕微鏡組織は扁平状のものである。

鐵化膜となって剥落したためか、特別の鉱物組織は現われてない。化学組成も鉄分は低く21.10%であり、二酸化硅素が高く41.00%である。残念ながらサンプル不足で二酸化チタンの分析は出来なかった。大牟田古墳群内には小銀治的性格の施設もあった事が指摘できる。

#### 46. 上和白遺跡2号炉近辺採取銀打津

45と同じように、銀打津 (径5~7ミリ、厚み1ミリ以下) を採取したので調査した。

顕微鏡組織は、特別の鉱物は認められない。しかし化学組成では酸化第二鉄が約37%存在し、

金属鉄の酸化傾向が認められるとともに、成分的には大鐵治澤に類似している。

#### 47. 大牟田古墳群14号墳出土鉄器

当初、鉄滓と見誤って研磨したのであるが、金属鉄が錆化 (Goethite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ) していることが確認できた。

##### 3) 鉄器の調査結果

48. (倉瀬戸古墳群5号墳出土直刀)、49(広石古墳群IV-2号墳出土直刀)、50(広石古墳群IV-2号墳出土鉄鍔茎)、51(広石古墳群I-1号墳出土鉄鍔茎)、52(広石古墳群IV-1号墳出土鉄鍔茎)の顕微鏡組織を示す。いずれも金属鉄は錆化のため、ゲーサイトに変化している。

成分元素を分光分析で測定してみると、Tab.20に示すような結果になる。

検出される元素としては、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、コバルト (Co)、クロム (Cr)、銅 (Cu)、鉄 (Fe)、マグネシウム (Mg)、マンガン (Mn)、モリブデン (Mo)、ナトリウム (Na)、ニッケル (Ni)、珪素 (Si)、錫 (Sn) 等が全試料にあり、一部の試料で検出される元素と

Tab.20 鉄器の分光分析結果

符号	遺跡名	山土状態	鉄器種類	Ag	Al	As	B	Ba	Bi
48	倉瀬戸古墳群	5号墳	直刀	0	2	0	0	0	0
49	広石古墳群	IV-2号墳玄室	*	0	1	0	0	0	0
50	*	*	鉄鍔茎	0	2	0	0	0	0
51	*	I-1号墳玄室	*	0	3	0	0	0	0
52	*	III-1号墳西道後半部	*	0	3	0	0	0	0

Ca	Co	Cr	Cu	Fe	Ge	K	Li	Mg	Mn	Mo	Na	Nb	Ni
2	1	1	2	4	0	0	0	2	1	1	1	0	1
1	1	0	2	4	0	0	0	1	1	1	1	0	1
3	2	1	2	5	0	0	0	2	2	1	1	0	1
3	2	1	2	5	0	0	0	2	2	1	1	0	1
3	2	1	1	5	0	0	0	2	1	1	1	0	1

0:認められない	Pb	Sb	Si	Sn	Te	Tl	V	W	Zn	Zr	P
1:半じて認められる	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0
2:明瞭	1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0
3:強い	0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0
4:可成り強い	0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0
5:非常に強い	0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0

本分析は新日鐵八幡製鐵所で行った。

して、チタン(Ti)、バナジウム(V)、亜鉛(Zn)、鉛(Pb)等である。このうち、鉄鎌だけに砂鉄を原料としたために、不可避元素として残留したと思われるチタン、バナジウムが認められるのは面白い現象である。直刀の原料は鉄鉱石、消耗品の鉄鎌には砂鉄を原料にした可能性が十分に考えられる。

#### 4) 炉材粘土の調査結果

製鉄炉構造に当たっては、耐火度や成形性の観点から、炉材粘土の選択は重要な問題である。特に我が国における「たらら」製鉄では炉材粘土が造漬剤の役目も兼ねるので、長年の経験にもとづく技術体系があったであろう。

藩政時代の福岡藩主黒田長清に仕えた鬼崎精巧の談話によると、反射炉用の耐火煉瓦を製造するのに、早良郡野方村の土を用いて成功した旨述べてあるが、野方周辺に古代製鉄炉が集中している一因に、炉材粘土の供給が無視できない。

こういった事から、炉材に使用された粘土の性状調査を行うのも無駄ではないと考える。

粘土調査の供試試料としては、下山門製鉄1号炉々壁粘土と、相原古墳群3号墳出土土器(ルツボ片? Fig. 102)であり、調査項目は(1)耐火度(2)化学組成(3)X線回折による鉱物組成等である。

##### ① 試 料

下山門1号製鉄炉壁粘土を調査した。ガラス質スラグの溶着した炉壁で、スラグ分を取り除いた箇所を分析している。粘土には、わらと見られるスサと、石英粒子が混在していたが、そのまま分析に供している。炉壁粘土の外観写真を PL. 104 に示す。

また、製鉄に直接関係するか否か判らないが、相原古墳群第3墳III区埴丘横溝黒土層より出土した土器片(Fig. 102 に示すように、肉厚のルツボと思われる様な器種)の提供を受けたので、合せて調査した。

##### ② 調査結果

Tab.21 に分析結果を示す。下山門粘土の耐火度は、SK 26 を示し、これは1580°Cで軟化現象を起こす温度で、参考 Data の門田製鉄址粘土より高温に耐える材質である。もっとも、下山門粘土は石英粒子の混在の影響もあると思われるが、注目すべき結果である。

相原土器片(ルツボ?)は試料不足で耐火度の測定は出来なかった。

化学組成では、下山門、相原炉材とともに、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  が低目で、耐火度には有利と考えられる。 $(\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{MgO} \cdot \text{CaO}$  等の増加は高温によってガラス質を作り易くなり、軟化点も低くなる)。

鉱物組成でも、下山門・相原炉材ともに、共通していて、主要鉱物は、コルツ(石英:  $\alpha-\text{SiO}_2$ )で、これに副成分鉱物として、カリ長石( $\text{K}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ )、それに下山門炉材はムライト( $3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ )であり、相原土器片は曹長石( $\text{Na}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ )である。

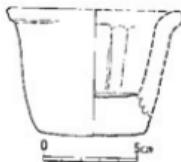


Fig. 102 相原3号墳出土  
ルツボ状遺物実測図

Tab.21 各種粘土の性状調査結果

項目	組成	Sample	相原3号 埴上器片	下山門1 号製鉄炉 炉材粘土		参考 Data		
				門田製鉄 炉址 赤 褐色粘土	近世たら蓋上			
化学 分析 値 (%)	SiO <sub>2</sub>		66.80	71.62	65.42	69.24	68.54	65.59
	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		18.92	19.65	18.46	12.24	13.12	18.63
	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		2.23	2.77	4.99	5.24	4.44	4.82
	CaO		0.51	Tr	0.21	0.15	0.25	0.23
	MgO		0.32	0.19	0.46	0.30	0.26	Tr
	TiO <sub>2</sub>		0.41	0.12	0.70	—	—	—
	Na <sub>2</sub> O		1.97	0.38	—	—	—	—
	K <sub>2</sub> O		2.36	2.61	—	—	—	—
	lg-loss		5.84	1.79	—	—	—	—
	Total		99.36	90.13	90.24	87.17	86.61	89.27
耐火度 (S.K.)		—	—	25 (1580°C)	17 (1480°C)	—	—	—
X線回折 新物組成	Quartz(石英) [α-SiO <sub>2</sub> ]	+++	++	++	++			
	Feldspar(カリ長石) [K <sub>2</sub> O·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·6SiO <sub>2</sub> ]	++	++	++				
	長石 (Na <sub>2</sub> O·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·6SiO <sub>2</sub> )	++						
	ムライト [3Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·2SiO <sub>2</sub> ]		++					
	緑葉母 (K <sub>2</sub> O·3Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·6SiO <sub>2</sub> ·2H <sub>2</sub> O)		微					
	Halloysite (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·2SiO <sub>2</sub> ·2H <sub>2</sub> O)				++			
計			率	率	率	率	率	率

東新日鐵八幡製鉄所で分析

X線回折測定条件 Target : Cuk<sub>α</sub> Filter : Ni Volt : 35 KV Amp : 12 mA

+++ | + 最も多い    ++ | ++ 多い    + 中量

この結果から、下山門炉材は、門田製鉄場のものとは差異が認められる。両者は手近の粘土を無差別に採取したのであろうか。今後とも検討すべき課題であろう。

### 5) 木炭の性状調査

木炭の用途は、暖房用をはじめとして、鉄生産には欠かせぬ原料であり、また防腐・防湿材としても古代より使用されている。

この稿では、古代製鉄に直接関係のない経塙の裏込めに利用された木炭についての、分析結果を記載しておく。

古代製鉄研究においては、今後、木炭の研究も必要となるし、木炭史を考える上でも、これ

等のデーターは参考になるものと思われる。なお、経塚裏込め木炭の中には、鉱滓が1点混入してたとの事であるが、筆者は確認していない。これが間違いなく鉱滓であれば、この木炭は製鉄によつたく無関係とはいえない。

### ① 試 料

福岡市西区田島三丁目京ノ隈経塚等1号主体部出土木炭、推定年代は12世紀前半である。その外観を PL. 104に示す。

### ② 調査結果

木炭の分析結果を Tab.22 に示す。京ノ隈経塚使用木炭は、現代工業用木炭と古代製鉄用木炭との中間的性状を示している。固定炭素量は、古代製鉄用木炭よりも増えているため、カロリーも高目になっているが、これは製炭技術の進歩によるものか、用途による品質の相違かは不明である。

Tab.22 木炭の組成

符号	試 料	付着水分	揮発分	固定炭素 [C]	灰 分	硫 黴 [S]	磷 [P]	発熱量 [Cal]	註
23	京ノ隈経塚第1号木炭	16.91	36.50	60.82	2.68	0.22	—	6185	▲
参 考 テ ー ク	門田製鉄所出土木炭	16.88	30.00	49.55	20.45	0.031	0.019	4855	▲?
	金井たたら用炭窯出土木炭	18.49	40.26	48.72	11.02	0.016	0.008	5587	▲?
	櫻の木消炭	0.63	10.86	87.60	1.54	0.033	—	6819	▲
	現代工業用木炭（櫻）	4.82	21.75	68.77	1.66	—	—	7155	

※新日鐵八幡製鉄所で分析

### 4. 考 察

古代製鉄炉は、操業規模が小さく、製鍊条件も不安定なため、排出された鉱滓は偏析の大きなことが予想される。こういう条件で、ほんの限られた鉱滓について、鉱物組成、化学組成の調査を行ったもので、この調査結果が全面的に、その遺跡を代表するとはいえないが、製鉄技術の或る一面は間違いなく挿しているものと考える。以下5項目について考察を試みてみる。

#### 1) 鉱物組成・化学組成と推定年代

各遺跡から出土した鉱滓を、鉱物組成・化学組成と推定年代で整理すると、Tab.23の様になる。

6世紀末から8世紀前半までの鉱滓の鉱物組成は、基本的に Wüstite + Fayalite であるが、調査鉱滓の数を増すことにより、半還元砂鉄粒子や、一部に晶出型の Magnetic、また、Hercynite 等が補足される。化学組成では、全鉄分 (Total Fe) が44~64%の範囲でバラツキがみられる

Tab.23 鉱物・化学組成と推定年代

No	遺跡名	区分	鉱物組成	推定年代	化 学 組 成 (%)			
					鉱滓成分	Total Fe	TiO <sub>2</sub>	V
1	相原古墳群	製錬跡	W+F	6世紀末	27	47	1.3	0.20
2	大谷		W+F'		-	-	-	-
3	大牟田		W+F+S+(M+H)	~7世紀後半	17~24	48~58	1.6~2.5	0.17~0.54
4	広石		W+F+S+M		31	45	1.4	0.29
5	金瀬戸		W-F+S+M		22	44	3.0	0.48
6	野方カサネ池遺跡		W+F+S+M	6世紀末	34	47	1.3	0.26
7	野方新池		W+F+S+M		18	57	1.3	0.35
8	石丸古川	8世紀	W+F+S+M		31	44	1.2	0.48
9	野方城原		W+F		9~29	52~64	0.5~1.5	0.16~0.46
10	下山門		M+L+F	8世紀	54	16	5.5	0.092
11	敷町		W+F+S+(P)	11世紀	12~25	44~50	9.8~13.2	0.17~0.29
12	戸切		M+L+F+W		(16)	49	12	0.48
13	志岐神社		W+F+S	12~13世紀	21	53	6.0	0.30
14	鹿島		W+F+S		32	47	1.3	0.26
15	有田	鉱冶跡	W+F	12世紀?	26	40	0.6	0.13
16	上和白		W+F+F	8世紀	43	41	1.0	0.02
17	多々良		W+F	13世紀	24	53	0.5	0.01

W: Wüstite F: Fayalite S: 半還元砂鉄粒子 M: 晶出 Magnetite

H: Hercynite P: Pseudo-brookite

ML: スラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長した Magnetite

が、製錬排出期のずれの影響であろう。また、チタン分 (TiO<sub>2</sub>) は、0.5~3.0% の範囲に収まり、低チタン砂鉄の使用が認められる。

これが8世紀後半になると、下山門や戸切遺跡出土の鉱滓から判るように、鉱物組成でスラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長した Magnetite が存在し、製錬温度の大幅な上昇がうかがわれる。化学組成では、鉱滓中のチタン分 (TiO<sub>2</sub>) に変動が出て、6世紀末~8世紀前半の低チタン系に比べて2~4倍の数値になり、製錬技術のレベルアップが裏付けられる（原料砂鉄中のチタン分の増加は、金属鉄と鉱滓の分離を悪化させるので、高温度の製錬が必要となる）。

8世紀後半になると、優良木炭や、大量送風に適したフイゴの改良がなされたとみるべきであろう。しかし、同時期にかかわらず敷町遺跡の鉱滓の様に、消化不良を起した末還元分の多い鉱滓も出現し、遺跡による特殊性（製錬期の突発事故）等も無視出来ないようである。

次に、12～13世紀の製鉄址と考えられる鹿島遺跡、志岐神社等では、年代が下っているにもかかわらず、鉱物組成は Wüstite + Fayalite + 半還元砂鉄粒子で構成され、下山門、下切鉢津の製鍊温度に上昇しておらず、技術的後退とまではいわないが、まだ作業性に安定性を欠いている事が指摘できる。やはり、製鍊温度が安定した高溫になり、鉄取率の上るのは、近世における天秤ワゴン開発後からの様である。この時期の鉱物組成の多くは、スラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長した Magnetite が認められる。例として、真名子、犬鳴、恋の浦等いずれも黒田藩宮たたらの鉢津で確認されている。<sup>209</sup>

## 2) 製鍊津と鐵治津

遺跡から出土した鉢津は、遺構を作なわない場合に、製鍊津か鐵治津か区別するのに戸惑うことがある。現在までに遺構や立地条件の確認から両者の区別のつく鉢津を、鉱物組成と化学組成から分けてみると、Tab.24 の様になる。

製鍊津は、原料鉢石中の脈石（製鍊上邪魔になるような不純物の総称）成分と造錠剤（主に炉號粘土）の混融物であるため、造錠成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) は高目となり、また、原料が砂鉄であれば、これにチタン分 ( $\text{TiO}_2$ )、バナジウム (V) 等多くなる。

鐵治津は、酸化鉄と混入金属鉄に、原料の鉄中の夾雜スラグが紋り出されてきて混じったもので、造錠成分は製鍊津に比べて少なくなる。しかし、これは、一般的な傾向であって、仲々

Tab.24 製鍊津と鐵治津の区別

組 成	方 法	製 鍊 津	鐵 治 津
鉱 物 組 成	顕微鏡組織	W + F	
		W + F + S	
		W + F + P	W - F
		W + F + H	
		W + F + M + M.L	
化 学 组 成	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.0 % 以上	3.0 % 以下
	CaO	2.0 % *	1.0 % *
	MgO	3.0 % *	1.0 % *
	TiO <sub>2</sub>	1.0 % *	1.0 % *
	V	0.1 % *	0.09% *

(福岡県で産出される原料(砂鉄)を用いた場合の一応の目安であってこれから外れる場合  
もありうる。関西・関東地区になるとチタン分の分かれ目が3.0%近くになっている。)

W : Wüstite      F : Fayalite      S : 半還元砂鉄粒子

P : Pseudo-brookit      M : 晶出型 Magnetite

M.L. : スラグ溶液中で溶解析出機構によって粒成長した Magnetite.

此の通りにいかないものがある。

また、製鍊率は、製鍊の時間的経過によって、化学組成は変動する。たとえば、たら製鉄では製鍊期を3期に分けており、製鍊初期をコモリ・コモリ次ぎ、製鍊最盛期を上り、最終段階を下りと呼んでいる。この製鍊経過と鉱滓の成分組成を対比させると次表の通りである。<sup>31)</sup>

Tab.25 鉱滓の製鍊過程に於ける成分変動

	製鍊過程	Total	Fe	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	TiO <sub>2</sub>	P	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	鉱滓 成分
		Fe	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	TiO <sub>2</sub>	P	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		
小塚氏論文 データ <sup>32)</sup>	コモリ期	49.52	58.85	22.52	5.40	0.18	5.10	0.02	1.23	5.40	28.10
	上り期	34.40	39.47	30.16	10.81	1.16	9.24	0.03	2.28	5.32	42.13
	下り期	27.20	30.76	41.30	9.21	1.49	9.15	0.03	1.16	4.62	52.00
日本鉄鋼協会 復元が <sup>33)</sup>	コモリ期	35.50	38.66	28.27	6.85		12.75				
	下り期	43.90	51.81	22.96	5.29		9.23				
	コモリ期	35.29	40.01	29.57	6.41		12.60				
	下り期	46.50	53.64	21.11	4.72		8.43				
	コモリ期	40.96	48.27	25.73	5.54		9.02				
	下り期	47.80	56.02	21.57	4.76		6.91				

(造滓成分 SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO)

小塚氏のデータによると製鍊初期では、炉温が十分に上昇していないので、鉱滓中の鉄分がまだ多く残っているが、時間の経過と共に、鉄分は還元されて減少し、逆に造滓成分である二酸化硅素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム (CaO) 等は増加してゆく。

砂鉄は、その特質として、チタン分 (TiO<sub>2</sub>)、バナジウム (V) を含有しているが、これ等にも変動があり、製鍊初期よりも後期に増加する。ただし、鉄鋼協会復元が<sup>33)</sup>たらでは逆傾向を示すといった結果があり、一基の製鍊炉の鉱滓でも、かなりの偏析や成分変動のある事を留意する必要がある。また、装入原料の配合比によっても、成分変動がありうる。

以上の事を念頭において、鉱滓の分類を行いくと、古墳供献鉱滓から鹿島遺跡の鉱滓 (Tab.23. 7、1~14) は製鍊滓であり、上和白、多々良は鐵治滓と考えたい。

なお、上和白の鐵治滓は、大鐵治滓（精練的性格が強く、その為、造滓成分も43%と高い）であり、多々良は楔形滓で火窯に類した炉で生成された鐵治滓とみてよさそうであるが、有川遺跡や野方塚原の一部の鉱滓（試料 No.40）は、判定のつけ難いものもあり、今後の調査（遺構との対比）で十分に検討する必要があろう。

### 3) 6世紀後半鉱滓からの製鍊温度の推定

古墳供献鉱滓で、最も年代の上ると考えられる相原古墳群 3号墳出鉱滓（試料 No. 1）から

鉱滓の融点を求め、製錬温度を推定して当時の技術レベルを考えてみよう。

まず、Tab.28 から相原古墳鉱滓の分析結果を拾い出すと次の様になる。 $\text{FeO} : 37.69\%$ 、 $(\text{Ca} + \text{Mg})_0 : 2.74\%$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3 : 4.53\%$ 、 $\text{SiO}_2 : 19.42\%$ 。これから相対比を出すと、 $0.585 : 0.043 : 0.070 : 0.302$  になる。以上より  $\text{FeO} 58.5\%$ 、Anorthite  $\approx 19.5\%$ 、 $\text{SiO}_2 = 22\%$  の組成を Fig. 103 に示す  $\text{FeO} - \text{Anorthite} - (\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2) - \text{SiO}_2$  系状態図の中に当てはめる。融点は  $1108 \sim 1120^\circ\text{C}$  が得られる。この場合、初晶の一次は Fayalite になる筈であるが、実際の顕微鏡写真 (PL.89-1) では、Wüstite であり、若干のズレが認められる。試料の採取個所による成分偏析と考えるべきであろうか。いずれにしろ、融点としては、鉱物組成を加味して  $1200^\circ\text{C}$  前後と考えられ、製錬温度は  $1300^\circ\text{C}$  を越えることはなかったであろう。

同じような導き方で、大牟田古墳群 6 号墳供鉱滓 (13) と、野方新池遺跡北端部埠址より出土した鉱滓 (22) を、計算した結果も Fig.103 にプロットしておく。この結果から、いずれも製錬温度は  $1300^\circ\text{C}$  以上の温度までは上昇していないことが判る。

製錬温度を解析した、これ等の鉱滓は、外観写真でも明らかな様に、流動性が悪く粘調鉱滓であり、鉄收率はあまり良好でなかった事を示している。

なお鉱滓の融点を検討する状態図は、 $\text{FeO} - \text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$  状態図の方が適切だという意見

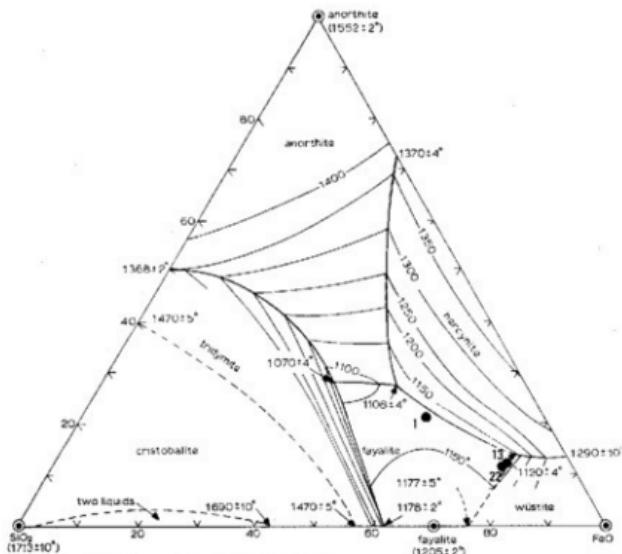


Fig. 103  $\text{FeO}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$  系状態図

もあるが、これ等も後日検討してみたいと考えている。

#### 4) 製鉄原料について

福岡市内一帯で採取した各鉱滓は、顕微鏡組織及び化学組成から、原料は砂鉄であることが確認出来た。この鉄資源としての砂鉄の供給地は何処であったろうか。この問題に触れてみる。

福岡県下の海岸線では、砂鉄が古くより広範囲に産出することが知られている。例えば「筑前国続風土記」卷29・土産考によると、砂鉄产地として、遠賀郡岩屋、轟浦、脇田、柏原、山鹿、芦屋、宗像郡地島、鍾崎のはま、時町の川、大島、柏原郡那多浦等が挙げられている。また、幕末になるが、黒川藩がたたら採業に際して、国中に13個所の砂鉄产地があるとして、鞍手郡大鳴山、柏原郡津屋崎村、宗像郡亘り村、宗像郡福間村、宗像郡神湊村、宗像郡神宮村等を列記している。

響灘から玄海灘の海岸線の背後には、酸性砂鉄の母岩である花崗岩系の岩石が多いのが、砂鉄产地につながっているのであろう。しかし、前述した二文獻の砂鉄产地は福岡市より東側に偏在して、距離的に若干問題がある。この辺の解釈を明らかにするために、現在でも広範囲に砂鉄が採取できるので、砂鉄5個、磁鐵鉱、硫化鉄鉱各1個宛をそれぞれ現地で採取して、分析を行ってみた。

その結果をFig. 104に示している。これには九州北東部地質略図と、採取サンプルの分析結果を円形グラフに示したものである。砂鉄は、鉄分の外にチタン分( $TiO_2$ )やバナジウム(V)を多く含有することを特徴とするので、鉄分とチタン分を円形グラフに割り付けた。硫化鉄鉱は硫黄を追加している。

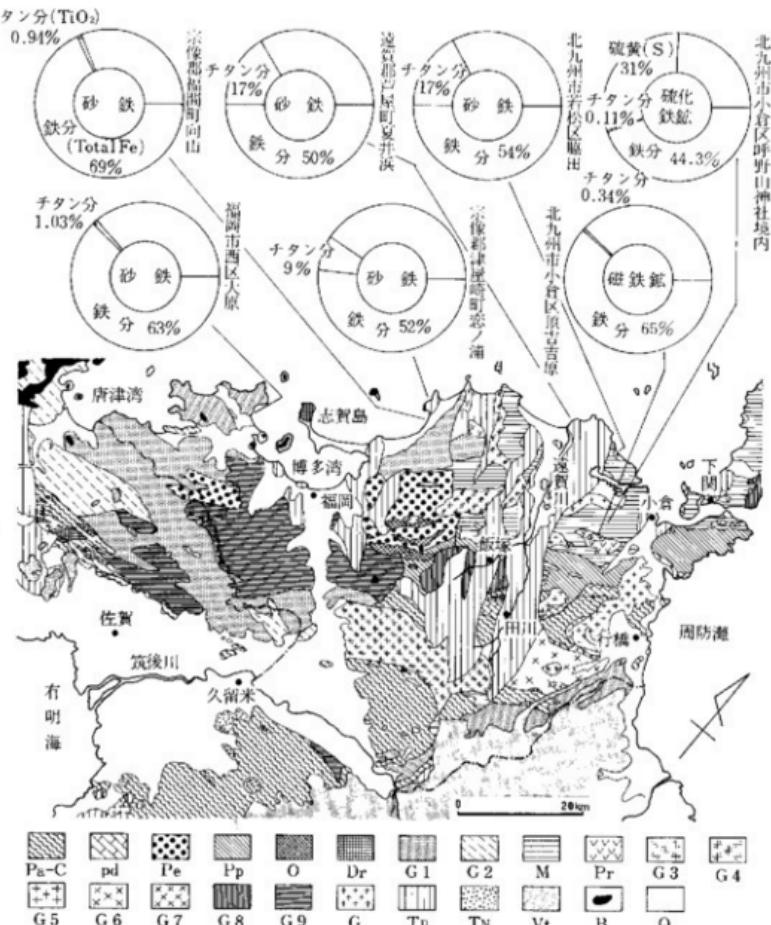
砂鉄の鉄分は、脇田、夏井ヶ浜、恋の浦が50%台で、チタン分も8~17%と多く、品質的に幾分落ちるが、福岡市に近い向山や福岡市内の大原砂鉄になると、鉄分は60%台で、チタン分は0.94~1.04%と低く、非常に優れた品質であることが判る。

今回の調査の様に、福岡市周辺に古代製鉄遺跡が集中しているのも、原料問題が絡んでいるためと考えられる。しかし、8世紀後半代には大原や向山系の優良砂鉄だけの供給では勝ちきれない事態が発生したのであろうか。下山門敷町や戸切遺跡では、高チタン砂鉄の使用が認められ、それに対処できる技術力も養成されている。

高チタン砂鉄の産出地は何處であったろうか。福岡市周辺の古代製鉄址には、何箇所かの砂鉄供給地が存在したと考えられるが、この発明は今後に残された課題である。福岡市周辺の古代製鉄では、鉄鉱石の使用はなかったと考えられるが、それも断定する訳にもいかない。

古代製鉄では、普通鉄鉱石は酸化物系の(i)褐鉄鉱( $2Fe_2O_3 \cdot 3H_2O$ )、(ii)赤鉄鉱( $Fe_2O_3$ )、(iii)磁鐵鉱( $Fe_3O_4$ )の使用が考えられる。それぞれ、鉄鉱石の特徴を示せば、(i)は鉄の還元は容易であるが、水分を10~15%含有している欠点があり、産地によっては鉄に有害な構分(P)の多いものや少ないものがある。(ii)は一般に硫黄(S)や構分(P)が少ないとさ

#### 第4章 広石古墳群をめぐる諸問題



Pa-C: 古生界(先上部石炭系A-C層群), pd: 古生界(上部石炭~二疊系石灰岩層のD層群), Pe: 古生界(綠岩相のE層群), Pp: 古生界(弱変成二疊系), O: 蛇紋岩, Dr: 閃綠岩~角閃石斑岩岩、  
C 1: 采島花崗閃綠岩、G 2: 深江花崗閃綠岩、M: 後期中生代諸層群、Pr: 白堊紀玲岩一石英斑岩、  
G 3: 朝倉花崗閃綠岩、G 4: 鞍手花崗閃綠岩、G 5: 平尾花崗閃綠岩、G 6: 真崎花崗岩、G 7: 勝山花崗岩、G 8: 嘉穂花崗岩、G 9: 早良~佐賀花崗岩、G: 区分未定花崗岩(大牟田)、Tp: 古第三紀層、Tn: 新第三紀層、Vt: 新第三紀安山岩質噴出物、B: 新第三紀玄武岩、Q: 第四系(うすく発達する部分は省いて基盤の地質の方を示した。) (註) 本図では小断層は略してある。なおC 1のうち糸島半島北東部以東のものは、最近唐木田らにより北崎花崗閃綠岩として分離された。

地質図は日本地方地質誌九州地方(松本1957)より引用。砂鉄の分析は新日鐵八幡製鉄所で行った。

Fig. 104 福岡県下の地質図と砂鉄、磁鐵鉱、硫化鉄鉱の成分

れている。(面)は赤鉄鉱に比べて質が堅硬で還元が困難と云われ、時にチタン ( $TiO_2$ ) を含むとされている。

我が国の古代製鉄での鉄鉱石の使用例として、滋賀県北牧野製鉄遺跡が報告されている。<sup>418</sup> 鉱滓中にチタン分が少なく (0.600~0.699%)、酸化マンガン ( $MnO$ ) : 0.577~0.600%、硫黄 (S : 0.511~0.948%)、銅 ( $Cu$  : 0.114%) が多いとされている。

福岡市周辺の今回調査試料には、これ程はっきりした確証は揃っていない。それでも、鉄鉱石使用の可能性がない訳ではない。北九州周辺は、香春岳を中心に各種鉱石が埋藏されており、今回の吉原磁鐵鉱、呼野山神社の硫化鉄鉱等の分析結果でも判るように、高品位 (磁鐵鉱のみ) のものが存在するだけに、今後十分に注意を払う必要がある。

### 5) 鉄器について

古墳出土鉄器のうち、直刀と鉄鎌で成分的な差異が認められた。直刀は鉄鎌に比べて、純度の高い鋼である。スラグから混入するアルミニウム ( $Al$ )、カルシウム ( $Ca$ )、マグネシウム ( $Mg$ ) 等少なく、また、低温で鉄に固溶されやすいと云われる  $Co$  も低目である。ただし、錫 ( $Sn$ ) は高目であるが、チタン ( $Ti$ )、バナジウム ( $V$ ) の検出もみられない。また亜鉛 ( $Zn$ ) も認められなかった。

これは、あながち、同一製錬炉製造素材の純度の相違によって選別加工されたものとはいい難く、製鉄原料の影響とみた方が妥当と考えられる。そうすると、直刀は鉄鉱石、鉄鎌は砂鉄と考えるべきであろうか。この砂鉄を原料とした鉄鎌は、古墳供獻鉱滓として出土した広石川 - 1号墳鉱滓と有機的なつながりがあるものと考えられる。

鉄鎌は消耗品として大量生産が要求され、製錬技術の不安定さのなかで製造された素材を加工した製品と解釈しておきたい。福岡平野で砂鉄製鎌を始めた初期段階の製品と考える。ただし国産の砂鉄製錬鉄が材質的に劣るとは考えられないが、初期段階において大形鉄器等の製造には、非金属介在物等の問題でやや難点があったのではなかろうか。

古墳副葬品としての直刀は、鉄鉱石を原料とした大陸渡来品であり、6世紀後半代になると国産砂鉄製品で、埋納後の補給体制も整のう程の技術アップがあったものと考えられる。

なお、砂鉄製錬技術と5世紀中葉ごろ導入されたと考えられる鋸留技術・大陸系鍛冶技術の関係も考慮しなければならないが、次の機会にゆずりたい。

### 6) まとめ

福岡市内の各遺跡から出土した鉱滓を主体に鐵治滓・鐵打滓・鉄器・炉材粘土・木炭等の鉱物組成・化学組成等を明らかにした。

筑前国が調・庸に鉄・銅を出す國である旨延喜式に記されているのも、その背景を解きほぐすと、砂鉄製錬の成立期としては、古墳に供獻された鉱滓から、6世紀末まで遡りでき、これ等の技術体系の積み重ねと、福岡町向山や福岡市西区大原海岸にみられる高品質砂鉄の賦存、

これに合せて福岡市野方周辺に産する良質ガルバニア粘土、及び豊富な木炭（高度の製炭技術を含む）等の供給に裏打ちされていたのであろう。

特に6世紀末の古墳に供獻された鉱滓は、砂鉄製錬における生成物であり、大陸から伝播された新技術とも考えられる。この時期の鉱滓は、低チタン砂鉄を使用しており、相原3号墳出土洋や、大牟田6号墳出土洋、また野方北端部炉址洋にみられるように、製錬温度は1300°C前後あり、統いて広石古墳群出土鉱滓の Wüstite + Fayalite + 半還元砂鉄粒子を構成する鉱物組成となり、これから局部的にしろ、倉瀬1号墳出土洋にみられる晶出 Magnetite を存在させるような炉採業へと進展し、8世紀以降の戸切出土鉱滓や下山門にみられる鉱滓の様に高チタン砂鉄を使用して、優れた鉄収率を上げるまでの製錬技術の確立をみたのであろう。

大牟田古墳群では、供獻鉱滓と共に4号墳前の黒土中より鐵打滓も検出されており、製錬→精錬（大鐵治）→鐵治加工といった一貫作業の可能性を考える資料を得ている（現在の所精錬滓は検出されていない）。上和白遺跡では、製錬滓は認められず大鐵治滓と、鐵打滓の出土から鐵治工房としての機構が考えられ、律令時代には、製錬と鐵治の分離がなされたものと思われる。製錬体制の集約化、流通形態の変換等であろう。その延長線上に日々良遺跡の橢形洋も位置づけ出来そうである。

次に、炉材粘土は、石英粒子とスサの混入が、對方新池製鐵炉址粘土から、また下山門炉材まで認められることから、耐火性、成型性等の問題を、技術工人達は充分に念頭においていたものと推定される。また、各遺跡の鉱滓の多くは、石英粒子の付着が目立ったが、地山が花崗岩のバイラン土壤が多いせいか、炉材粘土からの溶着か、また溶剤としての添加か検討をする問題である。

木炭の性状は、経塙の裏ごめ用であるため、直接製鐵に関係するかどうか疑問であるが、12世紀代の製炭技術を把握する観点から、調査した。他地域で出土した製鐵用木炭は、どちらかというと燃炭タイプの半焼き炭で、揮発分は多く、固定炭素〔C〕の少ないカロリーの低いものであったが、京ノ隈経塙用木炭は、現在工業炭に近づいたものであった。製鐵用木炭（製錬用）としては、燃炭タイプが適していると云われている。

広石古墳出土の鐵錠は、砂鉄製錬により、製造された鐵素材と考えられ、古墳供獻鉱滓とのつながりもありそうだ。

以上、駆け足で調査結果をまとめたが、考證に不十分な点があり、かつデータの解析に誤りがあるかも知れぬ。先輩諸兄の御批判をお願いして、一先ず筆を擱くことにする。

最後になったが、この小稿作成に当って、多くの分析 Data は清水率男氏（旧新日鉄生産技術研究所所長、現在九州大学工学部冶金学教室教授）の御尽力で出来たのであり、また市教委提供以外の試料は小田富士雄氏をはじめ、竹中岩夫氏・中山光夫氏・奥野正男氏等の協力があったことを銘記して感謝の意を表しております。

## 福岡平野を中心に出した鉄滓の分析

なお、敷町遺跡出土の鉄滓に対する見解は、佐々木稔氏のコメントを一部引用させてもらつたことをお断りしておきます。

### 註

- 1 古田正隆「小原下遺跡報告（第1次調査）長崎県立国見高等学校 1967 繩文時代の層に鉄滓が伴うとされているが、筆者は鉱物組成を調査したところ、ガラス質を主成分としたもので、Total Fe は11.85%、二酸化チタン ( $TiO_2$ ) 11.5%という数値を得ているので、時代は、ぐつと新しいものと判断している。弥生時代になると次の様な文献が付につく。川越哲志「鉄および鉄器生産の開始」たたら研究14。1968. 村上英之助「弥生時代鉄生産の始期について」たたら研究18 1974
- 2 川越哲志・藤田等「弥生時代鉄器出土地名表」日本製鉄史論所収 1970
- 3 濑秀雄・佐々木稔「タカラ製鉄鉄滓の鉱物組成と製錬条件について」たたら研究14 1968 には熊本県玉名郡菱明村下原駒弥生式竪穴6号出土の鉄滓が挙げられているが粒状のため、化学組成は調べられておらず、顕微鏡組織だけ提示されている。鉱物組成は、成長した Wüstite と Fayalite であり、筆者は鐵治津の可能性ありとにらんでいる。  
また、同じ熊本県玉名郡菊水町源訪原遺跡出土の弥生後期の鉄滓を入手しているが、熊本県教育委員会刊行の報告書に近日中に発表する予定であり、詳細は後日に仰するとしても鉄治津と思われる。
- 4 大澤正巳「門田遺跡出土鉄滓及び羽口先端溶着鉄滓の調査結果」山陽新幹線関係文化財調査報告書（III）所収、現在印刷中。
- 5 福岡県春日市大字上白水字辻田（南面出土鉄滓）
- 6 中山光夫氏によって採取された。黒土を水洗し、比重によって洗い分け、磁石によって選鉱した。
- 7 「長崎公御遺事 見鳴精巧氏談話」聞者松原方直、筆記尾形至、明治27年（雑誌「誠智」復刊1分、昭和45年4月収）
- 8 大澤正巳・中山光夫「門田遺跡製鉄遺構出土品の科学分析調査」山陽新幹線関係文化財調査概報所収、福岡県教育委員会。昭和31年3月31日。
- 9 小塚寿吉「日本古米の製鉄法“たたら”について」鉄と鋼 昭和41年。
- 10 人澤正巳「製鉄原料（砂鉄、木炭、粘土）と鉄滓の科学的分析および結果の考察」金井製鉄遺跡発掘調査報告書所収。群馬県渋川市教育委員会。1975。
- 11 真名子鉄山：北九州市八幡西区植松大辺隣。  
大鳴鉄山：鞍手郡若宮町大字多々羅。  
恋の浦鉄山：宗像郡津屋町大字渡恋の浦。  
真名子鉄山については次の報告がある。  
北九州郷土史研究会「真名子鉄山発掘調査報告書」1968  
竹中岩夫「黒田藩営真名子鉄山」たたら研究15。1969。

鉢津の鉢物組成については次の小稿に所収

大澤正巳「花尾城址出土の鉢津について」釋上八幡、創刊号。1973。

- 11 小塚寿吉前掲書（註8）
- 12 たたら製鉄復元計画委員会「たたら製鉄の復元とその鉢について」日本鉄鋼協会 1971。
- 13 J.F.Schaeirer : J. Am. Ceram. Soc., 25 (1942)
- 14 清秀謙・佐々木稔前掲書（註2）
- 15 片岡三郎・井ノ山直哉・細明郎「たたら製鉄反応の冶金学的検討」金属（アグネ）Vol.45 (1975) No.2
- 16 「長薄公御遺事 児島精巧氏談話」前掲書（註6）
- 17 安部英夫「製鉄用原材料」要説鉄冶金所収丸善。1955。
- 18 森清一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」若狭・近江・諏訪・阿波における古代生産遺跡の調査所収。同志社大学文学部文化学科。1971。
- 19 野上丈助「古墳時代における鉄おおよび鉄器生産の諸問題」考古学研究所収。第15巻第2号。

Tab.26 供試試料の履歴及び調査項目（その1）

序号	地名	所在地	山 土 地 点	種	物理的性質		化土の測定項目		備考
					含水率	液塑限	固液比	E.P.M.A 粉末X線剖析	
1	相原古墳群	福岡市西区大字今治	3号古墳前面前	砂	○	○	○	○	160 E C 未
2				1号古墳黑色上層	○	○	○	○	85 s
3	倉庫戸古墳群	糸島市倉庫町	1号古墳黑色上層	砂	○	○	○	○	30 6C未~7C半
4			1号古墳第4レンチ及松脂部	砂	○	○	○	○	70 s
5			2号古墳室内	砂	○	○	○	○	40 s
6				砂	○	○	○	○	25 s
7				砂	○	○	○	○	35 s
8	大谷古墳群	糸島市大谷	5号坑	砂	○	○	○	○	50 s
9			7号坑	砂	○	○	○	○	20 7 C
10	大牟田古墳群	牟婁子大牟田	3号古墳黑色上層	砂	○	○	○	○	235 6C未~7C半
11			3号古墳底部黑色+中	砂	○	○	○	○	110 s
12			6号坑+表面	砂	○	○	○	○	215 s
13				砂	○	○	○	○	135 s
14				III-1号古墳表面	砂	○	○	○	122 s
15	玄石古墳群	糸島市玄石	III-1号古墳表面	砂	○	○	○	○	110 7 C 前半
16				砂	○	○	○	○	84 s
17				砂	○	○	○	○	60 s
18				砂	○	○	○	○	75 s
19	野方古墳群	糸島市野方	カサ永久池中	砂	○	○	○	○	115 6 C 未
20	野方新地古墳	糸島市野方	新地製鉄社3号レンチ灰土	砂	○	○	○	○	275 s
21			4号レンチ	砂	○	○	○	○	40 s
22			北高麗郡社	砂	○	○	○	○	1,720 ?
23	野方古墳群	糸島市野方	トレンチ	砂	○	○	○	○	80 ?
24			地の中	砂	○	○	○	○	73 ?
25	石丸古墳群	糸島市石丸	SIIトレンチB=9	砂	○	○	○	○	110 ?
26			石丸古墳	砂	○	○	○	○	66 12C ~ 14C
27				砂	○	○	○	○	250 ?
28				砂	○	○	○	○	36 ?

Tab.27 低試料の観察及び測定項目(その2)

番号	遺跡名	所在地	出土地点	種別	気候地	酸溶性・熱分解・鏡下の調査項目	鏡下の調査項目	粘土の調査項目	備考
					酸溶性 E.P.M.A 粉末X線回折 性状分析	熱分解 分光分析 粘土分析 X線回折 化学组成	粘土燃焼 分光分析 X線回折 重晶石	粘土燃焼 X線回折 重晶石	测定年代
29	下山門遺跡	福岡市西区下山門		1号が遺跡土。	○	○	○	○	155 8℃後半~11℃
30	戸切遺跡	大字野方字戸切		原生粘土 板状泥炭?	○	○	○	○	*
31	有田遺跡	有田字備		第三土壤をC-4, P-1 第三土壤をE0-Fp	○	○	○	○	80 265
32				*	○	○	○	○	120
33				*	○	○	○	○	40
34	牧町遺跡	下山門系川		1号が遺跡土。	○	○	○	○	*
35				*	○	○	○	○	8 C
36				*	○	○	○	○	272 8℃後半
37	野方源原遺跡	野方字源原		3トレンチ北剖面:	○	○	○	○	*
38				*	○	○	○	○	116
39				*	○	○	○	○	162
40				9(火表上)	○	○	○	○	90
41	鬼塚遺跡	鬼塚ノ池		2区表土直下石壁付近	○	○	○	○	13 C 溶半
42	岩城神社	大字山門字生ノ松原		今野ノ池172-2	○	○	○	○	*
43	上和白遺跡	福岡市西区大字白宮前		福岡市西区大字白宮前	○	○	○	○	8 C 後半
44	多々良遺跡	大字多々良前原		福岡市西区多々良前原	○	○	○	○	325 12~13 C
45	大牟田古墳群	福岡市西区伯原大字大牟田		4号墳前黑色土中:	○	○	○	○	7 C
46	上和白遺跡	福岡市西区大字白宮前		14号墳土室内	○	○	○	○	8 C 後半
47	大牟田古墳群	福岡市西区伯原大字大牟田		5号墳	○	○	○	○	50 6℃後半~7月前半
48	食瀬戸古墳群	大字井口字食瀬4		W-2号墳灰化小塊瓦中	○	○	○	○	7℃前半~7月後半
49	広石古墳群	大字井口字広石		W-2号墳灰化小塊瓦中	○	○	○	○	6℃後半~7月後半
50				1-1号墳灰瓦	○	○	○	○	*
51				W-1号墳灰瓦	○	○	○	○	*
52					○	○	○	○	*

Tab.28 硫酸銅・硫酸鉻・銅打錠の化学分析結果

No.	Sample	明 解	K 分	全 鐵	金 屬 類	第 1 族	二 族	三 族 鉄 化 合 物	四 族 アル ミニクル ム	五 族 チ ロ カ ン マ ク ラ ム	六 族 オ ク チ ナ バ タ ム	七 族 ト ラ ム	八 族 ヘ ム イ ツ ム	九 族 カ ン ジ ウ ム	鋼	碳 素 成 分	TiO <sub>2</sub>	Total Fe			
				Total Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	S	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	C	V	Ca	碳 素 成 分	Total Fe		
1	昭和古墳群 3 号室	家機作	47.62	0.16	37.69	53.72	19.42	4.53	1.81	0.93	0.14	1.05	0.123	0.057	0.02	0.69	0.260	0.004	26.69	0.568	0.022
4	金剛山 1 号墳頭部黑色土中	家機作	44.01	0.56	23.39	29.47	13.14	4.48	3.99	0.80	0.39	3.00	0.167	0.006	0.274	0.144	0.477	0.046	22.41	0.569	0.028
10	人吉田 3 号墳頭部黑色土中	家機作	48.35	0.27	36.76	27.90	15.90	6.04	1.52	0.75	0.24	2.50	0.514	0.010	0.206	0.124	0.537	0.0650	24.21	0.501	0.022
13	人吉田 6 号墳頭部黑色土中	家機作	57.55	0.41	55.47	55.47	11.29	3.27	1.44	0.80	0.18	1.55	0.190	0.006	0.263	0.121	0.167	0.0466	16.79	0.292	0.027
15	法古田 1-1 墓石灰岩	家機作	45.29	0.28	49.77	9.64	22.26	4.22	3.16	1.58	0.23	1.40	0.118	0.00	0.322	0.065	0.263	0.0022	31.22	0.689	0.031
19	野方サネ子母鉢	家機作	47.78	0.44	55.59	5.91	25.50	4.61	3.28	0.77	0.20	1.32	0.114	0.011	0.290	0.025	0.256	0.002	34.16	0.715	0.028
22	野方新宿遺跡化粧品	家機作	56.77	0.14	58.63	15.58	12.59	2.83	1.61	1.20	0.19	1.33	0.157	0.023	0.206	0.034	0.260	0.0046	18.23	0.321	0.023
23	野方サネ子母鉢	家機作	8.78	-	2.72	9.53	65.68	13.33	-	1.76	0.13	1.12	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.004	0.212	0.14	0.025	0.045	(60.77)	9.20	0.128
24	* 池の小採取品	家機作	46.2	0.18	45.2	15.6	23.9	5.1	3.0	1.0	0.34	2.1	0.12	0.023	0.21	0.68	0.24	0.002	33.00	0.714	0.046
27	石丸古川遺跡	家機作	43.75	0.14	44.74	12.63	22.60	4.92	2.27	1.53	0.26	1.20	0.178	0.00	0.400	0.062	0.477	0.0650	31.32	0.716	0.027
29	下山門遺跡	家機作	15.64	0.53	12.50	7.71	43.01	9.67	1.05	0.63	0.27	5.45	0.14	0.017	0.466	0.134	0.692	0.003	54.36	3.48	0.041
30	戸切遺跡	家機作	48.53	0.49	40.57	23.61	10.65	4.31	-	1.03	-	11.70	0.70	0.064	0.112	0.653	0.480	0.018	(15.99)	(0.286)	0.241
32	有川遺跡 (第一次調査)	家機作	39.58	0.14	13.43	41.46	16.80	8.28	0.69	0.44	0.09	0.60	0.102	0.037	0.297	0.300	0.133	0.0063	36.21	0.562	0.015
34	奈良原遺跡 1 号墳中央部	家機作	50.44	0.39	31.46	36.60	8.79	3.50	1.19	1.15	0.85	9.84	1.02	0.016	0.412	0.37	0.285	0.004	14.63	0.290	0.195
35	*	東 東	44.32	0.78	36.22	10.31	3.36	3.30	1.13	1.10	13.23	0.64	0.025	0.490	0.30	0.230	0.003	18.69	0.422	0.299	
36	*	W2 レンチ	45.21	0.28	45.79	13.36	17.20	4.78	2.37	0.99	0.61	9.80	0.33	0.031	0.257	0.06	0.165	0.003	25.34	0.561	0.217
37	野方原遺跡 3 トレンチ北寄土	家機作	63.63	0.27	56.70	27.58	5.77	2.09	0.57	0.93	0.21	1.45	0.269	0.011	0.211	0.133	0.460	0.004	9.36	0.147	0.023
40	*	2 区上直下副付近	51.96	0.17	53.78	14.31	22.53	3.64	2.84	0.60	0.14	0.53	0.093	0.016	0.245	0.050	0.156	0.002	29.01	0.558	0.010
41	西高遺跡	家機作	46.8	1.2	45.6	14.6	22.9	4.9	3.8	1.5	0.26	1.3	0.12	0.032	0.08	0.03	0.26	0.004	32.1	0.668	0.028
42	安岐神社表柱根部	家機作	52.38	0.29	53.39	15.00	13.25	3.64	0.97	0.46	5.97	1.25	0.025	0.092	0.06	0.296	0.003	20.49	0.391	0.114	
43	多々良遺跡	家機作	53.36	0.61	51.70	17.97	16.46	3.89	2.03	1.49	0.56	0.49	0.52	0.025	0.336	0.07	0.210	0.008	23.97	0.449	0.030
44	上和白遺跡	家機作	41.37	-	42.87	11.50	31.98	7.91	2.80	0.81	0.24	1.00	-	0.972	0.337	0.115	0.020	0.003	42.60	1.029	0.024
45	人吉田 4 号墳頭部	家機作	21.10	-	10.23	18.80	41.00	13.01	0.56	1.01	-	-	0.084	-	-	-	-	-	-	-	
46	上和白遺跡	家機作	45.75	0.23	25.29	36.97	24.52	6.38	1.46	0.60	0.35	1.44	-	0.2426	0.267	0.269	0.010	0.004	-	-	-

通常成分: SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO

Tab.29 広石古墳群各古墳規模一覧

		I-1号墳	II-1号墳	II-2号墳	III-1号墳	III-2号墳	III-3号墳	IV-2号墳
立地		丘陵先端	丘陵斜面	丘陵斜面	微高地上	微高地上	微高地上	丘陵上
墳形		不整円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形	不整円形
墳丘規模	長径	8.5m	8m (9.5m)	9m	8.0m	3~4m	12m	
	短径	7m	7m (8.5m)	8.5m				
石室掘り方(上端)	方 向	丘陵上方	斜面直交	斜面直交	斜面直交	斜面直交	斜面直交	丘陵上方
	長	7.8m	7.5m	6.2m	7.3m	4.2m	?	7.0m
	最大巾	4.0m	4m	3.9m	3.5m	3.0m	1.8m	3.7m
	最深長	1.2m	1.3m	1.5m	0.7m	0.8m	0.4m	1.5m
石室	方 位	S-18°-W	N-31°-W	N-30°-W	S-22°-W	S-7°-E	S-19°-E	S-87°-W
	玄室面積	5.1m <sup>2</sup>	3.0m <sup>2</sup>	5.1m <sup>2</sup>	3.6m <sup>2</sup>	2.5m <sup>2</sup>	?	5.8m <sup>2</sup>
	床面高	53.85m	44.05m	44.45m	40.50m	38.95m	39.60m	49.85m

( ) 内は推定

## 第5章 総括

今回調査した広石古墳群は、高校敷地造成地内7基のほか6基が確認されており、計13基によって形成された小古墳群である。この13基は、占地のまとまりから6つのグループに分けることが可能である。前章でI～IV群としたのは、こうした占地、即ち墓域としての平面構成のあり方から、古墳群を形成する最小単位と考えたからにはほかならない。ではかかる最小単位がどのような過程と関係を保ちつつ、総体としての広石古墳群を形成したか、以下各古墳の構造、石室の構造および出土遺物の検討を通して考えてみたい。

### 1. 古墳の立地と石室方位

本古墳群の位置する地形は、叶岳から北に延びる比較的開拓の進んだ低丘陵地帯である。古墳群の北側は、東から深く入り込んだ狭隘な谷地形をなし、律令時代太宰府から肥前北方に通じる官道がそこを貫通している。本古墳群のI～IV群は、その谷に流れ込む小さな谷沿いの丘陵上、あるいは傾斜面などに築造されており、谷を一つの道と考えるならば、いわば幹道から分岐した何本かの支道に沿って古墳が営まれた状態である。

I群 I基のみの築造である。古墳群の北端にあたり、標高55mほどの丘陵先端部に位置する。II群と谷をはさんで対峙し、見おろす場所である。石室はほぼ南に開口する。即ち丘陵端から上方に向かうことになるが、墓道は枝線から東にそれで斜面を下っている。

I'群 I基のみの築造である。II群の位置する丘陵先端部で標高50m、I群に等しい立地条件である。造成地外のため調査を行わず現状保存をはかった。石室は未開口のため不明だが、本古墳群の特徴から南に開口する石室と予想される。

II群 2基からなる。I'群の乗る丘陵北斜面の傾斜変換線上に並列して築造されている。石室は斜面等高線に直角に交わるように構築され、ともに北に向けて開口する。墓道の前面にはゆるく西に弯曲する墓道が延び、谷中央部の流路と交わる。谷地形の流路は移動が激しく、現在の流路より5mほど北を平行しているが、砂の堆積によって現在の地表下1～3mに埋没している。この流路の巾を確認することはできなかったが、流路内は古墳墓道に堆積した土と同様の黒色粘質土で充満し、また須恵器片などが底面から出土している。古墳墓道と谷流路との関係を直接証明する手だてはないものの、谷流路が幹道から古墳にいたる道として機能したことは充分推測できる。

III群 3基からなる。谷中央部に形成された微高地に並列する。各古墳石室は谷下方へのゆるい傾斜に直角に構築され、石室は南に開口する。しかし3号墳は、石室の構造からみて、必ずしも横穴式石室とはいきれない。II群同様谷流路の移動が激しく、微高地南端は浸食を受

けて崖面をなし、1・2号墳の羨道の一部と墓道はすでに流出している。したがってIII群では、墓道と谷流路を利用した支道との関係を見いだすことはできないが、古墳築造当初はII群と同じように谷流路と古墳墓道と接続していたことは充分に想されよう。

**IV群** 2基からなる。古墳群南端に位置し、III群を見おろす丘陵上に形成されている。丘陵先端の1号墳は造成地外で現状保存をはかり未調査である。2号墳は1号墳の南方50mほどに位置し、稜線のやや広がったところを利用して築造している。1-1号墳と同じく石室は稜線上央を南に向かって開口する。墓道は2.5mと短く直線状に延び、稜線上に消えている。

以上のように、本古墳群は谷あるいは丘陵を墓域空間として、1~3基の単位によって形成されるという特徴的な分布をしめす。各単位の古墳は同一方向に石室が開口し、その意味ではII群とIII群では丘陵をはさんで背中合わせの方向に開口するが、いずれも谷流路に墓道が延びていたと考えられる。谷をはさんで向かいあうI群とI'群・II群・III群とIV群は、中央の谷流路を共通の支道とする関係にあったことが推測される。

Tab.30 広石古墳群各古墳石室計測表

(単位 cm)

	I-1号墳	II-1号墳	II-2号墳	III-1号墳	III-2号墳	III-3号墳	IV-2号墳
石室長 <small>(右)</small> (貼石含む) <small>(左)</small>	?	595	?	630	?	?	590
石室長 <small>(右)</small> (貼石除く) <small>(左)</small>	630	563	?	682	?	?	618
石室長 <small>(右)</small> (貼石除く) <small>(左)</small>	?	558	?	520	?	?	530
玄室長 <small>(右)</small> <small>(左)</small>	265-2	163	240	206	218	?	245
玄室長 <small>(右)</small> <small>(左)</small>	242	172	243	208	228	?	250
羨道長 <small>(右)</small> <small>(左)</small>	?	395	?	312	?	?	280
羨道長 <small>(奥)</small>	294	395	?	315	?	?	285
羨道巾 <small>(奥)</small>	186	180	192	178	110	81	170
玄室巾 <small>(中央)</small>	185	180	204	177	120	?	180
羨道巾 <small>(前)</small>	185	180	194	164	109	?	190
羨道巾 <small>(奥)</small>	?	106	95	108	?	?	125
羨道巾 <small>(前)</small>	?	180	?	108	?	?	113
袖巾 <small>(右)</small>	?	35	40	18	?	?	39
袖巾 <small>(左)</small>	36	19	42	48	10	?	30
奥壁~第1擗石	430	285	397	350	?	?	445
奥壁~第2擗石	282	* 210	295	* 240	?	?	307

※は櫛石後面で計測

## 2 石室平面図形の検討

### (1)

今回調査した7基の古墳のうち、III-3号墳を除く6基は、横穴式石室をその埋葬施設としている。III-3号墳石室は、すでに触れたように横穴式石室というよりも、単次葬の性格の強い竪穴式的な構造をしめす。さらに、石室の大半を欠失するため、その全体を知るには困難であって、平面図形の検討に耐えるものではない。したがってここでは、III-3号墳を除く6基の石室について、平面図形の構成と尺度の運用を推定し、原企画を復元してみたい。

ここで用いる資料の検討と操作法は次のとおりである。まず石室各部のデータにおける一定の近似関係と構成比を検討し、それを基礎にした数値分解によって使用尺度を推定する。第2段階として、推定した尺度の方眼上に同一スケールの石室平面図をのせ、方眼と各部の適合関係を検討する。そして石室構築における各種要素を勘案しつつ石室構成法を求め、原企画を復元する方法を用いる。

さて、以下本項の対象とする6基の石室は、平面図形の構成の特徴によって3類型に分けられる。第1に、狹長なプランの玄室に短い羨道を接続するもの。III-2号墳がこれにあたるが、羨道の構造については不明である。第2に、比(長/巾)が1.2前後をしめす矩形の玄室に、玄室長に等しいかもしくはやや長めの羨道を付すタイプ。I-1・II-2・IV-2号墳石室が相

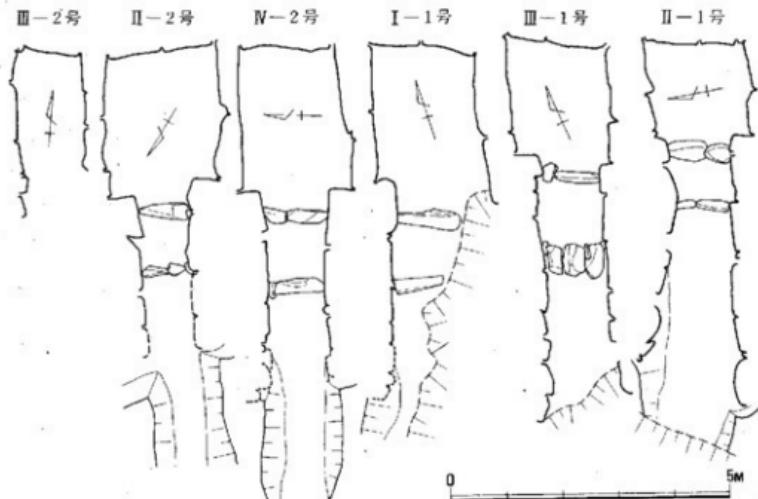


Fig. 105 各古墳石室平面図

当する。第3は、正方形あるいは比1.2ほどの矩形の玄室に、玄室長の2~3倍の長さをもつ羨道を連接するタイプで、II-1・III-1号墳石室が相当する。それそれをI・II・III類型として、以下各類型ごとに記述する。

## (2)

## 1類型 (III-2号墳)石室

羨道の右壁全部と左壁前半部を欠失する。左壁に残存する玄室と羨道の境界には、大きめの割石を立てて袖石としている。右壁にもこれと対応する位置に掘方底面を低く掘り下げて袖石を配した痕跡があつて、両袖型プランをしめすことが知られる。羨道前半は谷水によって削り取られているため不明である。また天井部もすでになく、玄室高も知りえないが、墳高の最も高いところで床面から1.7mをはかる。

本石室のような狭長な玄室プランは、北部九州の初期横穴式石室に普遍的な堅穴系横口式石室に等しい。しかし、すでに明らかにしたように、堅穴系横口式石室には天井石架構の羨道部を付きない構造的要素を通常の石室と区分する特質の一つと考える。本石室では、羨道部の天井石架構の有無を確認しえないといえ、石室の位置と墳丘盛上の関係からみて、架構の可能性もある。また玄室の高さなどから、堅穴系横口式石室というよりも、その系譜を引く石室形態として本来の堅穴系横口式石室とは分けておかねばなるまい。

玄室平面形をみると、中央巾が少し広がり、また奥壁は右隅が前面に突出している。各部データは下記のとおりである(単位cm・括弧内は推定)。

玄室長	右 (218)	奥	109
	左 228		120
玄室巾	中央	120	(110)
	前		

以上のデータから使用尺度を推定するには、計測箇所があまりに少なく困難であるが、高麗尺(約35cm)に換算すると、巾3~3.5尺・長5~5.5尺に、また晋尺系尺(約24~26)では巾4.5~5尺・長9~9.5尺に換算できること。

さて第2段階として、上記2種の尺度方眼上に石室プランを重ね合わせた。その操作によって、晋尺系尺の使用がFig. 106のように、より妥当性をもつことが知られる。規準をどこに求めるべきか困難であるが、玄室側壁の平行する部分が5コマをとり、横線0と5に一致する部分が

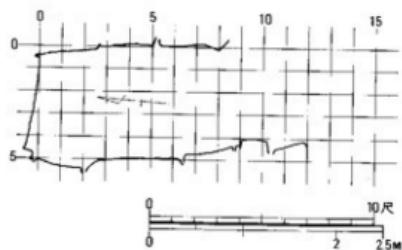


Fig. 106 III-2号墳石室の方眼による操作結果(%)  
(方眼1コマは24cm)

多い。また長さについては奥壁右隅の突出した部分に縦線〇を合わせると、左袖隅角が縦線9に一致し、また右袖の位置もほぼそこに推定できるので玄室長9尺とすることができる。巾における奥壁部と前壁部の縮小は、奥壁腰石を1石としたところから生じた技術的な誤差と、左右袖石との隅角設定時における何らかの誤差と考えたい。なお左袖石内側は横線4に一致することから、本来の袖の出は1コマと推定する。

したがって本石室の原企画は次のように復元できる。使用尺度は約24cmを1尺とする晋尺系の尺度と推定する。(括弧内は推定)

石室長	不明	袖巾	右(1尺)
玄室長	9尺		左 1尺
玄室巾	5尺	漢道奥巾	(3尺)

#### II類型(I-1・II-2・IV-2号墳)石室

先述したように、本類型石室は漢道と玄室の長さが、同程度からしくは漢道長がやや長い程度で、III類型の如く漢道長が2~3倍になるものはない。

さて本類型に属する3基の石室は、平面図形の構成、また周壁の壁体構築においてさわめて類似することが知られる(ただしII-2号墳の周壁構築法は、他の2基に比して小形の石材を使用することは注意される)。このうち、平面形を完全にとどめる石室はIV-2号墳のみで、他は漢道の一部を欠失していて必ずしも最良の資料とはいがたいが、一定程度の復元は可能である。

まず各石室の玄室平面形からみておこう。I-1号墳は、右袖石より前面は右壁のすべてが地山の流出によって欠失しているが、右袖石については掘方底面に残るスタンプと栗石によってその位置を推定できる。各古墳のデータをしめすと(単位cm、括弧内は推定)

I-1号墳	II-2号墳	IV-2号墳	
玄室長	(240)	240	245
左	242	243	250
前	200	194	190
玄室巾	中央 185	204	180
奥	186	192	170

となり、各部データがさわめて類似する値をしめすことが注目される。各計測点ごとにみると、玄室長は左・右をとわず240~250cmのあいだに、また玄室前巾は190~200cmのあいだに含まれる。奥巾ではその差異が大きく170~192cmとなる。すなわち、平面形そのものを度外視すれば、石室各部のデータは奥巾を除いてほぼ一定の数値といえよう。では奥巾における3基間のデータのバラツキが何を意味するか、検討する必要がある。II-2号墳では、前・奥巾はほぼ一致し、I-1号墳は多少の差異があるがその差は12cmである。IV-2号墳では20cmにもなっ

ているが、これは奥壁に巨石の一石からなる腰石を配置したことによると思われる。これに比して前巾のデータは近似しており、かかる傾向は腰石に巨石を配する石室に多く認められることはすでに指摘したところである。こうした傾向は奥壁と左右側壁腰石の隅角が、側壁が奥壁を挟み込むような接合法であるのに対し、袖との隅角では袖石側面に突き合わせるように側壁を接合するため、前巾の設定は奥壁に比して石材の大小に左右されることなく容易に企画どおりの配置が可能であったことをしめしている。

つぎに石室長について考えておきたい。IV-2・I-1号墳の羨道入口部前面にともに貼石がある。これもすでに指摘したところだが、北部九州の横穴式石室のばあい羨道入口部前面に、石室の整体とは異なった石組みが連接することがままあって、石室長を求めるにあたっては貼石を除外する必要がある。I-1・IV-2号墳の貼石は、羨道整体の腰石前面から除々に樋方底面に沿って上っていく形態をしめす。IV-2号墳の貼石先端の位置は、左右不整いでシンメトリカルな配置ではない。左壁の先端1石、右壁では先端の3石が貼石といえよう。かように見れば、I-1号墳では右壁は流失しているので不明だが、左壁では先端から3石が貼石とすることができる。

II-2号墳は羨道前半を流失し石室長は測定しえないが、羨道先端を石室振り方と墓道の境界に求めると、右壁で大略5.3mと推定できる。以上の検討によって得られた各古墳の石室長はつぎのようにほぼ同じ長さになる（単位cm、括弧内は推定）。

	I-1号墳	II-2号墳	IV-2号墳
石室長	右 — 左 530	(530) —	530 532

以上、玄室各部と石室長の観察によって、各部データに一定の相関性があることに気付く。すなわち、玄室長の2.4~2.5mと石室長5.3mは1:1.2の比に近く、また玄室前巾1.9m~2mと玄室長の比は同じく1:1.2~1:1.3のあいだにある。

これらのデータから使用尺度を推定すれば、玄室長2.4~2.5mが晋尺系の尺度ではちょうど10尺に、高麗尺では7尺に換算できるが、玄室巾1.9~2mは前者では8尺に、後者では5.5尺前後となり、より前者の使用が妥当性をもってくる。

第2段階の、推定された使用尺度方眼との適合関係の操作によって得られた結果はFig. 107の如くである。

〈IV-2号墳〉 石室の奥壁の壁線は主軸にはほぼ直交し、玄室左壁腰石は主軸に平行する。したがってこれらを基準にとりながら方眼との適合関係をみると、先に推定したように玄室長は左右側壁とも10コマにあたり、また前巾は8コマ分をとる。奥壁は、奥壁腰石の大きさによって生じた技術的誤差と考えるが、その巾がちょうど7コマ分をとることは完尺を意識した結果かもしれない。袖巾は左右とも1.5コマずつの出である。さらに羨道中央で0.5コマずつ狭くな

石室平面図形の検討

り、羨道巾4コマをとる。羨道入口部はちょうど縦線22に一致し、また羨道内に配置された第1樋石前面は18に、第2樋石前面は13に後面は12に一致する。主軸を中心にしてシンメトリーの平面図形を求めたことが知られる。

〈I-1号墳〉 先述したとおり、羨道右壁を欠失するうえ、前・後壁の縦線は主軸に重んで交わり、基準を求めるのに困難であるが、左壁が全体的に直線的な壁線をしめすので、これに合わせた。玄室長は左壁では10コマ、右壁ではその差みがちょうど1コマにあたり、右袖の位置も縦線11に一致して、右壁長も10コマにあたる。玄室前巾は右袖の隅角が広がるが、これ

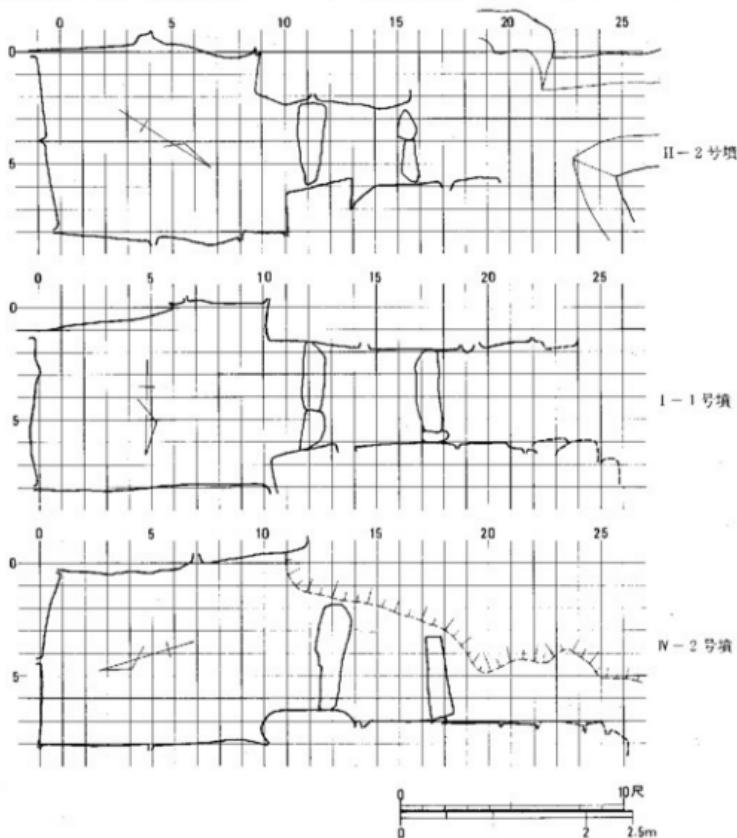


Fig. 107 II-2, IV-2, I-1号墳石室の方眼による操作結果(%) (方眼一コマは24cm)

は袖石と右側壁との接合時の技術的誤差と考えられ、また奥巾が若干10コマに満たないが、これも石材巾からする誤差であろう。袖巾は左右とも1.5コマをとり、羨道入口部はそれより0.5コマずつ広げた可能性がある。羨道入口部は、貼石を除いた先端が縦線22に一致し、石室長22コマをとる。羨道に配置された第1櫛石前面は縦線18に、第2櫛石前面はほぼ14に一致する。

〈II-2号墳〉 玄室の前・後壁壁線は主軸に直交しないで並むが、左・右側壁との各隅角を基準にすると、石室各部と方眼はよく適合する。玄室の前・後壁の添みはちょうど1コマずつで、左右壁長とも10コマにあたる。また、前・後巾は8コマである。袖巾は左・右とも2コマずつ、羨道中央で更に0.5コマずつ内側にせばより、入口部では3コマの可能性が強い。羨道入口部端は、先述したように石室握り方いっぽいに構築されたと考えれば、縦線22にはば該当する。羨道に配置された第1櫛石前面は縦線16に、第2櫛石前面はほぼ12に一致する。

以上のような操作によって、本類型に属する3基の石室は、石室長と玄室規模がまったく同一の構成法に基く企画によって構築されたことが知られた。また石室の企画にあたって、どちらかの壁面(線)を基準にした可能性がある。それは玄室前・後壁線が主軸に直交しないI-1・II-2号墳では、前者は奥壁の内側に突出した面、すなわち左壁隅角を、後者は逆に外側に凹んだ隅角すなわち右壁角を基準にしている。この点については資料の再検討を期したい。以上の分析によって3基の石室原企画は次のように復元される。使用尺度は約24cmを1尺とする晋尺系尺度と推定する。

	I-1号墳	II-2号墳	III-2号墳
石室長	22尺	22尺	22尺
玄室長	10尺	10尺	10尺
玄室巾	8尺	8尺	8尺
羨道長	12尺	12尺	12尺
袖巾	左 1.5尺 右 1.5尺	2尺 2尺	1.5尺 1.5尺
羨道巾	奥 5尺 前 (6尺)	4尺 (3尺)	5尺 4尺
奥壁～第1櫛石前面	18尺	16尺	18尺
奥壁～第2櫛石前面	14( $10\sqrt{2}$ )尺	12尺	13尺

### III類型(II-1・III-1号墳)石室

玄室平面の正方形化と玄室長の2倍以上の長い羨道の連接に、本類型の特徴がある。同時にII類型にみられるようなシンメトリカルな石室構成が崩れるとともに、周壁の壁体構築の粗雑化があらわれてくる。

II-1号墳とIII-1号墳を比較すると、玄室巾はほぼ等しく、長さでIII-1号墳がわずかに

長い。羨道部はIII-1号墳は左・右壁線が平行にのびるが、II-1号墳では左壁が弯曲しながら大きく外開している。羨道先端部の前面にはともに貼石がみとめられる。石室の平面構成上、石室長が大きな比重を占めるることは前項でみたとおりで、貼石と石室壁体とは明確に辨別する必要がある。III-1号墳は、羨道先端部が谷の流路によって削られ全体を残したものか明らかでないが、現存する壁石でみると、右壁では先端2石が、左壁では先端から3石が貼石と考えられる。II-1号墳は、羨道左壁が外開するのみならず、左・右型の先端の位置が著しく異なる。右壁の壁線はほぼ直線状にのび特に乱れる部分もなく、また左壁も弯曲するとはいえる。しかし仮りに左壁の弯曲を石室企画に含められたものと考えれば、その先端は右壁先端から2石目の端にはば一致し、よって先端1石を貼石的な造作とえよう。

羨道床面には2ヶ所に櫛石の配置がある。その位置は必ずしも限定されるわけがないが、III-1号墳の第1櫛石が通例とは異なる形態をしめし、第1櫛石の使用法について示唆されるところがある。この櫛石（厳密には櫛石とはいえないが）は3個の転石を横に並べ、空隙を小石で充填している。石の下底は石室掘り方底面に密着し、約20cmの厚さの埋土によって床面には上半分がのぞくにすぎない。そしてその上面には奥の面をそろえて閉塞石が積みあげられている。いわば閉塞部の最下石としての利用法が考えられる。してみるとII-1号墳の第1櫛石も全く同様の使用法が認められ、板石を第1櫛石の前面に立てるII類型石室とは基本的に異なる配置法が想定される。

玄室平面形は2基とも前・後壁の壁線が主軸に直交していない。左・右側壁は平行に配置されるが、前壁に向って次第にせばまる傾向がある。2基の各部のデータをあげると次のとおりである（単位cm）。

	II-1号墳		III-1号墳	
石室長	左	563		530
	右	558		520
玄室長	左	172		208
	右	163		208
玄室巾	奥	180		178
	前	165		164

これによると両者に共通する数値と、一定の差異が認められる。まず共通するデータは玄室巾において全く同一といってよい数値がでている。玄室長ではその差異が30~40cm、石室においても同程度の差異があり、これが本類型石室の企画における最小単位と考えることができる。したがって、約35cmを1尺とする高麗尺の使用が推定されるわけである。とすれば、共通する玄室巾は5尺前後、長さは5尺と6尺になる。方眼との適合関係を操作するとFig. 108のようになる。

〈III-1号墳〉 玄室・羨道を通して全体的に右壁の壁線が整っているので、そこに横線0を合わせると、右袖が0.5コマ内側に突出し、羨道入口部では広がって横線0に一致している。縦線の基準を前方に突した奥壁面におくと、羨道先端および第1櫛石後面、第2櫛石前面また玄室右壁の隅角が、方眼縦線の15、10、7、6にそれぞれ合致する。先述した第1櫛石は、前面は縦線12とは少し距離があり、縦線10に一致する後面を基準にしての配置を考えるほうが適当であろう。これは使用法からみても妥当性が強い。問題は玄室前巾であるが、左袖角が横線5よりも少し内側に出ている。後に述べるII-1号墳でも全く同じことが認められるので、一概に技術的な誤差とはいきれないようである。奥巾は5コマ、左袖巾は1.5コマをとり、羨道奥巾は3コマ分になる。羨道入口部は正しく3コマ分をとっており、貼石部分では乱れていることがわかる。

〈II-1号墳〉 本石室もIII-1号墳石室と同じく右壁の壁線が直線にのびている。奥壁の壁線も直線であるので、右壁と奥壁に基準をおいて方眼との適合関係を求めた。羨道入口部は左・右壁とも縦線16に先端が一致している。第1櫛石後面、第2櫛石前面はそれぞれ縦線の8と6に、玄室左袖はほぼ5に一致するが右袖は若干内側にずれている。玄室長は左壁をとれば

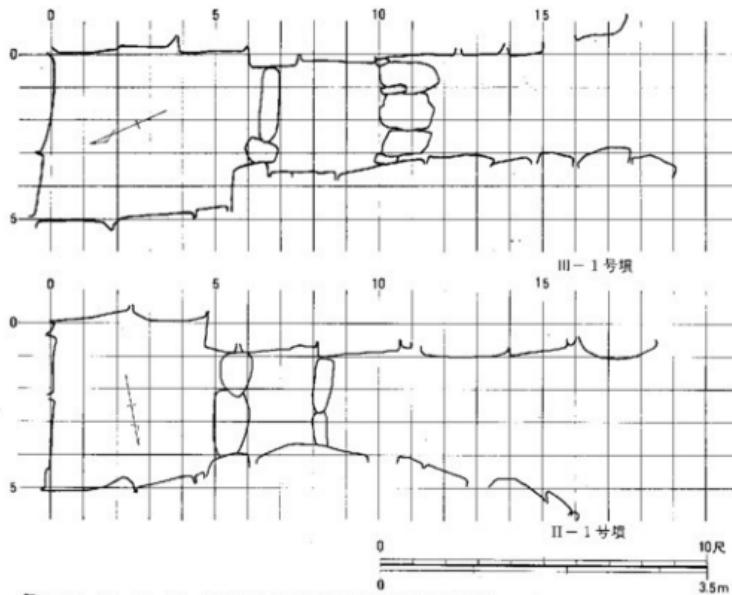


Fig.108 III-1・II-1号墳石室の方眼による操作結果(%)  
(方眼1コマは35cm)

5コマであるが、壁線の整った右壁で誤差をみると、石材の規模等による技術的な問題と解するほかない。

玄室奥巾は5コマ、左右袖巾は各1.5コマ、羨道奥巾は3コマをとる。入口部は左壁先端の基準のとり方が問題であるが、5コマの可能性が強い。玄室前巾については先述した以上の説明はできないので類例の増加を俟ちたい。

以上の検討によって、叙上2基の石室平面图形の企画は次のように復元される。使用尺度は約35cmを1尺とする高麗尺と推定する。

	III-1号墳	II-1号墳
石室長	15尺	16尺
玄室長	6尺	5尺
玄室巾	5尺	5尺
袖巾	左 右	1.5尺 0.5尺
羨道巾	奥 前	3尺 3尺
奥壁～第1楕石後面	10尺	8尺
奥壁～第2楕石前面	7(5 $\sqrt{2}$ )尺	6尺

### (3)

前項において仔細に石室を観察し、使用尺度の推定と平面图形の構成をみてきた。記述が細部にわたり冗漫にすぎたきらいがあるので再度整理し、若干の問題点を述べておきたい。

まず石室形態から整理してみよう。第1類型(III-2号墳)石室は、玄室平面图形において前代の北部九州に普遍的な分布をしめす竪穴系横口式石室に類似することが注意される。玄室平面形は晋尺系の尺度(本石室では1尺≈24cm)によって企画され、内法で巾5尺、長9尺、袖石まで含めると長10尺とその原企画を復原できる。羨道部については不明である。

ところで竪穴系横口式石室は、現在のところ筆者の知りうる範囲で北部九州には54例ほど認められる。そのうち玄室平面形でIII-2号墳と同企画ととる石室に、長崎県黄金山古墳と福岡県糸元3号墳がある。しかし前者は、箱形石棺的な腰石上部に割石小口積みを行い、特殊な羨道施設を作った石室である。また後者は玄室平面形が前壁に向ってややせばまるプランをしめし、正確には奥巾5尺、前巾4尺の企画である。ともに明確な羨道施設をもたないわけで、ここでは同企画の玄室の存在を指摘するにとどめる。

III-2号墳石室の系譜を求める際、竪穴系横口式石室の変遷のなかで把えねばならないが、今のところやや資料不足をまぬがれない。この種の石室の築造年代は福岡県老司古墳を除けば、5世紀後半～6世紀中葉頃と考えられ、特に6世紀前半までの築造が主体を占める。このこと

は、6世紀前半から中葉にかけてと推測される狹長な羨道な連接する両袖型横穴式石室の出現と符号する。ただ今までのところ両袖型横穴式石室の初期の段階では、佐賀県島田塚古墳、福岡県日拝塚古墳などのように首長墓あるいはそれに類する大型墳に採用されたのにとどまり、未だ全面的な採用には至らなかったと考えられる。こうして竪穴系横口式石室そのものは漸次採用されなくなるが、III-2号墳、福岡県こうしんのう18号墳<sup>11</sup>、福岡県片山8・13号墳などのように竪穴系横口式石室的な玄室に羨道を付すタイプ、あるいは羨道は連接しないものの玄室を高く構築するタイプ、あるいは石室平面形を両袖型石室同様に企画しつつも羨道を連接しないタイプ等種々の変化を辿るようである。しかし6世紀中葉～後半段階では、石材にも規定されるとはいえ、石室形態に地域的な差異が明瞭に認められ、今後こうした方向からのアプローチが必要となるであろう。

II類型石室は、矩形の玄室に玄室長と同程度かやや長めの羨道を連接するタイプである。本類型に含まれる3基は、こまかい部分、たとえば袖巾のとり方や櫛石の配置では若干の差異をみせるが、平面图形の最も基本的な玄室平面形と石室長が全く等しい企画に基いている。企画にあたっての使用尺度は晋尺系の尺度（ここでは1尺≈24cm）を用いている。一古墳群内におけるこうした傾向は、倉瀬戸古墳群の3・4・9号墳石室の玄室企画が同一であるように、他に認められる可能性がある。この点についても古墳群レヴェルでの分析が必要と考える。

III類型石室平面图形は、II類型のそれに比して羨道の長大化という変化と同時に、企画における使用尺度の変化に注意せねばならない。I・II類型石室は紙上のごとく、平面图形企画の使用尺度は晋尺系の尺度と推定したが、III類型では長尺系統の高麗尺（1尺≈35cm）が用いられているのである。また玄室平面形は矩形のほかに、正方形をしめす石室（II-2号墳）が出現することも重要である。正方形プラン石室は、福岡市内では、片江6・7・8号墳、倉瀬戸5・6・7号墳、高崎3号墳、大谷41号墳等のように数多く認められる。更に日を転じれば、こうした正方形プラン玄室は肥前・筑前・筑後・豊前・豊後の地域に、6世紀後半それも末ぐらいいから7世紀初頭のあいだに一斉に出現する。そして7世紀前半の第2次群集墳消滅時までこの種の玄室プランが主体を占める。しかし本古墳群のII-1・III-1号墳のように長大な羨道部を連接する平面图形は、必ずしも正方形玄室プランと結びつくものではない。先述したようにこの期になんと羨道を付きない石室は筑前一部、すなわち宗像郡の一部から豊前にかけて存在する。福岡市周辺においても長大な羨道を付す地域は今宿・早良の周辺に限られており、東部の和白付近では、これほど長い例ではなく、地域的な特徴と考えられる。

次に使用尺の変遷に触れておかねばなるまい。すでに指摘したように5世紀～6世紀中葉に構築された石室はすべて晋尺系の尺度（1尺24～26cm）を使用しており、また本古墳群III類型石室、および片江6・7・8号墳では高麗尺を使用したと述べた。問題は高麗尺使用石室の上限である。I類型・II類型石室は晋尺系尺度であり、出土する最古の須恵器はIII B期に、また

III類型ではIV A～IV B期に属するものである。こうした傾向は、北部九州全体を通して認められることであって、小田富士雄氏の須恵器編年<sup>114</sup>に従えば6世紀末前後となるであろう。筆者は先に高麗尺の伝来を570～580年代と推定した。<sup>115</sup>飛鳥寺建立に伴う造守技術、あるいは地割技術の伝来、さらには欽明朝における百濟・高句麗からの種々の技術の伝来や技術者の渡来などからである。しかし今は高麗尺の伝来については、これ以上推測の域を出るものでない。従前の資料の再検討と、恐らくは、列島において最も早く高麗尺に触れ、使用することができたであろう畿内周辺の石室の分析が極要な課題と考える。<sup>116</sup>

### 3 石室石積み技法

#### (1)

横穴式石室の構築が死者を埋葬するための空間を目的とすることはいうまでもない。そこに石を素材とした空間構成即ち周壁の構築法が存在する。北部九州の初期横穴式石室は、前項で指摘したところであるが、豎穴系横口式石室<sup>117</sup>という洛東江流域の石室形態を出自としたタイプで、受容後はそれ以前盛行していた各種の石室・石棺の中に採用され、様々な形態を生みだしている。この段階での周壁石積み技法は、基本的に、前段階の石室・石棺のそれを継承している。6世紀前半から中葉と推測される狭長な羨道を連接する両袖型石室の出現以後、豎穴系横口式石室は構築されなくなると同時に、一方ではその変種ともいいくべき石室が継続されている。羨道をもつ両袖型石室の最古例としては今のところ日押塚、佐賀県島田塚古墳などが知られている。花崗岩を使用した石室で周壁に腰石を配し、上方にいくにしたがって両側壁からの持ち越りが強まり高いドーム状の空間を作りあげている。6世紀中葉以後は、叙上2基の石室平面图形、石積み技法をいわば一つのモデルとして漸次変遷をしめすが、花崗岩の乏しい地域、たとえば朝倉郡の一部や水繩山西麓の一部では、片岩削石を使用した強い胴張りプラン石室が構築され、必ずしも北部九州で一様の変化を辿ったとはいがたい。

とはいって、横穴式石室の壁体構築（石積み技法）に通時、共時的な類似とその変遷があることは確かである。石積み技法にある種の共通性と年代的推移に注目した小田富士雄氏は、技法の基本的を上下の目路がジグザグになる煉瓦積みと、目路の通る重箱積みの二つに分け、前者を5～6世紀代、後者を6～7世紀代に流行したとする。さらに重箱積み技法の出現を6世紀後半代に求め、煉瓦積み技法との過度的技法として目路の斜めに通る斜め積み技法の存在を考えている。<sup>118</sup>

以下、小田氏の所論に導かれつつ本古墳群各古墳の石室石積み技法を観察し、ついで前項で分類した石室平面图形各類型ごとに検討する。なお本古墳群の各石室の使用石材はすべて花崗岩を使用する。

## (2)

**I-1号墳** 右側壁は羨道部が流出し玄室腰石を残すにすぎない。石室上半部もすでに失なわれている。側壁腰石は各壁2石づつ横に立てるが、奥壁では縦に立てて配置する。腰石の上方は不整形削石を用いた煉瓦積みで上部には力石を架構する。羨道は玄室に敷べて小ぶりの石材を使用し粗雑な構成をしめす。煉瓦積み技法に混って一部重箱積みに類する部分もある。

**II-1号墳** 石材は全体に小さく、削石よりも未加工転石の使用が圧倒的に多い。玄室周壁は各2石づつの大ぶり転石を横に立てて腰石とする。壁体上方では側壁と奥壁にまたがる力石を架構して序々に石室の幅をせばめている。奥壁の右壁には煉瓦積み技法が、左壁では重箱積み技法を混える。羨道部は左壁が外方に弯曲しており、壁体構成も粗雑である。右壁先端の1石は貼石と考える。石積み技法は、右壁では煉瓦積みと重箱積みの混合使用、左壁は斜積みが顕著である。

**II-2号墳** 壁体構築からみて、古墳群中もっとも特徴的な技法をしめす。玄室奥壁・左壁は2石ずつ、右壁は3石の腰石を配する。奥壁腰石を縦に立てる手法はI-1号墳のそれに等しい。腰石上部は不整形な削石を使用し、強い持ち送りをもたせドーム状に積み上げる。左壁の一部に重箱積みに類似する部分もあるが、全体的に煉瓦積み技法で力石の架構が顕著である。袖石は大ぶりの長方形転石を立て、高さを玄室腰石にそろえている。

**III-1号墳** II-1号墳に似て、使用石材が小さく、相対的に粗雑な壁体構成である。玄室周壁には未加工転石を横に立てて腰石とし、上部腰石はきわめて小さな転石を主体とした構成である。石積み状況は煉瓦積みに重箱積みを混えた技法で、後者により比重がかかっている。各壁とも直線的に内傾する持ち送りをもたせ、力石の架構が顕著である。石室上部を失い、不明であるが類似するII-1号墳などをみたばあい、かかる持ち送りはII-2号墳のそれと異なって高い玄室空間の構成というよりも、大形の穴井石を必要としない方向でとられた手法で、天井も高い位置にあるものでない。袖石は不整形な転石を立てる。羨道では玄室よりさらに使用石材が少しく、構成も粗雑である。玄室と同じく二つの石積技法の混用だが、右壁では乱石積とでもいうべき一定性の認められない部分もある。

**III-2号墳** 狹長な平面形玄室で羨道部を欠失する。奥壁1石、側壁3石づつの大ぶりの未加工転石や内面のみ整えた転石を横に立てて腰石とする。上部の石積みは煉瓦積み技法で、一部に重箱積み的な構成もみられる。周壁の内傾度は小さく、力石の架構は上部でわずかに認められる程度である。

**IV-2号墳** 石室上半を失う。使用石材は古墳群中もっとも大形である。玄室は奥壁、左壁に各1石の巨石を腰石としている。袖石も同様の巨石を立てるため、上部は側壁腰石よりも高い。羨道にも大ぶりの腰石を置き、上部に残る壁体は煉瓦積み技法が顕著である。

次に前項で区分した石室各類型ごとの異同点をみていく。

まず1類型石室(III-2号墳)では、石室の規模と相俟って、使用石材も小さい。玄室側壁

下部の腰石があまり大形でなく、3石を横列するが、こうした手法は前代の豊穴系横口式石室によくあると同時に、初期の両袖型横穴式石室に認められる手法でもある。玄室周壁の内傾度も小さいことは、使用石材の大きさからしても天井の高さをそれほど求めていないことをしめし、石室平面图形とともに豊穴系横口式石室からの系譜を想定せしめる。

II類型石室（I-1・II-2・IV-2号墳）にあっては、3基ともわずかずつ異なった壁体構成をしめす。なかでもI-1・II-2号墳とIV-2号墳のあいだでは使用石材の大きさのみならず運用法においても変化があらわれている。前2者では、II-2号墳の使用石材が小形で削石を主体にしているのに較べてI-1号墳では転石使用がわずかだが多く、石材の大形化も指摘される。両者にもっとも類似する石室を求めるすれば、今宿・相原6号墳があげられよう。玄室幅8尺・長10尺・石室長20尺の平面图形企画をとる石室である。天井部まで完存し、周壁中位から強い持ち送りを付しドーム状の高い玄室空間の構成が認められる。II-2号墳石室と多くの共通性がある。IV-2号墳は腰石上方が欠失するためどのような構造が明らかでないが、類似した石室としては高崎2号墳がある。この玄室は幅10尺・長14(10 $\sqrt{2}$ )尺と、群集墳のなかでは突出した規模をもつが、IV-2号墳と共通する点が少なくない。奥壁、側壁、袖石の配置法はまさに一致する。玄室の壁体構成法からして両者築造年代の近接さが推測されるが、出土須恵器によってさらにその同時性が裏づけられる。

III類型石室（II-1・III-1号墳）の2基は、使用石材・壁体構成で多くの共通性を有する。石材では未加工転石が主体となり、大きさもII類型石室のそれに比して小形となっている。石積み技法においては煉瓦積みと重箱積みが混用され、一部乱石積みでもいうような粗雑な構成をしめす。こうした石室壁体構成の粗雑化と使用石材の小形化、未加工転石の利用という現象は、片江6・7・8号墳、倉瀬戸5・6・7号墳をはじめとして、福岡周辺に分布する同類型石室に共通するといってよい。

以上のように、本古墳群石室の石積み技法は、小田氏の指摘する如く確かに煉瓦積みから重箱積みへという変遷を、大勢として認めることができる。だが、II類型・III類型に行われる重箱積み技法も、転石を使用するためか著るしいものではない。独立してこの技法が行なわれるよりも、むしろ煉瓦積みとの混用である。逆にいえば当然のことでもある。6世紀末前後の出現と思われる巨石墳においても、煉瓦積み技法は消滅せず、混用という形で存続する。

石積み技法とともに注意されねばならないのは、使用石材の削石から未加石転石へという変遷がある。さらに仔細にみればII類型石室におけるII-2号墳→I-1号墳→IV-2号墳という使用石材の大形化、持ち送りの減少と、さらにII類型石室とIII類型石室との壁体構成の精粗・使用石材加工度の差異などが指摘されよう。II類型石室でのII-2号墳以後の変遷は出土須恵器からも例証されるところである。III類型石室では平面图形では長方形から正方形という推移が推定されるが、壁体構成のうえでは大きな変化はないようである。このように本墳群では、

石積み技法のある程度の変遷とともに、II類型石室における使用石材加工度の変遷、使用石材・持ち送り手法などからする石室の先後関係の見通しが得られた。またIII類型石室は平面图形企画でも明らかのように、II類型石室に比してより簡略され粗雑な構成へと変化することが知られたのである。ただし、こうした推移はあくまでも群集墳に採用された石室相互の関係であって、巨石・巨室などとは位相が異なる点はいうまでもない。

## 4 出土遺物について

### (1) 出土状況

すべての古墳が石室上半部を欠失し、玄室内部は著しく荒れている。床面敷石すら大半が失なわれ一部を保存するにすぎず、玄室からの遺物の出土は少ない。しかし、他の多くの例にあるように、第1樋石と第2樋石のあいだ（狭道後半部）では比較的保存がよく、諸遺物の副葬状況、その取り扱いなど明らかにされたことも少なくない。また本古墳群の調査にあたっては、埋葬施設のみならず古墳塗造全体をより明らかにするためできる限り広範囲にわたり調査することに努めたが、結果狭道前面に延びる墓道のほか、墳丘外表・溝などから多くの遺物が出土している。

全体的にみてまず気付くことは、装身具・武器・工具・馬具などの僅少さである。これらは被葬者が直接的な所有関係をもつもので、多くが玄室内部の副葬のまじかに置かれることを考えれば、上述したような玄室床面状態では望むべくもない。わけても、石室に埋葬された被葬者数を推定するうえで参考になる耳環も、原位置をとどめる例はない。装身具では訓・玉類なども出土状況は上述したとおりで、被葬者数・埋葬位置などを示唆するものはなかった。

遺物出土状態で最も原位置を保存しているのは、狭道後半部であるが、なかでもI-1・II-1・IV-2号墳では最終追葬時の状況をそのまま保存していたといつてよい。この場合、狭道後半部のそれは、一つの状況であって、最終追葬に伴う副葬遺物とはいきれない。その点でとくに注目されるのはI-1号墳の出土状況で、狭道後半部の左壁に沿って数段に重なる土器のとりまとめがある。須恵器70個体・土師器9個体が含まれており、とりまとめの最下底には築造時須恵器と考えられる蓋杯がある。その上部の重ね状態は、混在とでもいうべき感があつて、とくにきわだった配置は認められない。玄室袖部のまわりからは、最も新しい段階即ち最終追葬時の副葬と思われる蓋杯も出土しているが、土器とりまとめの中には同類の須恵器が混在している。したがってこの土器とりまとめは数次にわたる追葬時の土器を、追葬の最終段階に行なわれたといえよう。かかる状況が何を意味するか種々想定されようが、ここでは一つの事例として提示するにとどめておきたい。

I-1・IV-2号墳の狭道後半部も類似した遺物の出土状態であるが、I-1号墳のような

## 出土遺物について

Tab.31 広石古墳群出土遺物一覧表

		I-1号墳	II-1号墳	II-2号墳	III-1号墳	III-2号墳	III-3号墳	IV-2号墳
装	耳 環 鏡	5		1			1	9
	勾 玉	1		1				
身	管 玉	1		2				
	切 子玉	2						
具	九 玉	8		1				
	小 玉			2				1
其	上 製練玉	1						
	滑石製白玉	1						
武	直 刀			1				1
器	鐵 錄	13+α	3+α	9+α		4		9+α
農工具	刀 子	4	2					1
	鋤 先			1				
馬具	轡							1
須	杯 蓋	28	12	10	14	5	4	10
	杯 身	30	13	7	12	2	8	13
恵	椀			1				
	高 杯	1	1	5	1		7	12
器	鉢 瓢			1	3	1		3
	提 平	10	1	2	1		2	3
器	紙	12		4	2		2	4
	瓢	2	4	2				3
土	甕			6	1		2	4
	杯 蓋	1			3			
師	杯 身							
	椀	1	1	2	2			1
器	高 杯	4		12	4	6		5
	培 瓢	3	1	3				
その他	甕	1		1				1
	鐵 洋				37			
その他	紡 織車				2			1

極端なとりまとめの状況ではない。仔細にみれば、II-1号墳では最終追葬と、その前段階追葬時の副葬物を明確に区分している。即ちばば中央を境にして、左壁に前段階副葬物がとりまとめられ、右壁に最終追葬の副葬物を配置している。II-1号墳のはばい石室内最終須恵器と石室外最終出土の須恵器と一致する。IV-2号墳では羨道後半部に台付長頸壺2、提瓶4、半瓶3、その他からなる遺物群が、右壁に沿って配列された状態で出土している。その中に含まれている蓋杯のセット1組は、古墳築造後初葬段階に属するもので、他の須恵器もさほど下降しないが、整然とした須恵器の配列は、やはり最終追葬時のとりまとめであろう。

石室外では、墓道内、墳丘裾、溝などから土器を多量に出土している。IV-2号墳では滑石製紡錘車が墳裾から出土している。なかでも中型・大型甕は各古墳ともすべて墳丘裾か溝内からの出土で、こうした例は群集墳に多くの例を見る。本古墳群では明らかでなかったが、出土状態の明確な例から推して、三つのあり方が知られる。一つは片江8号墳、影塚1号墳のように前面墳丘裾部に、意図的な破砕状況で出土するばあい、一つは、相原3・6号墳・片江6号墳などのように、墳丘外表に浅い穴を穿ち、そこに底部を据えて樹立せしめるものである。その他に、墳丘基底面もしくは墳丘盛上中に、甕の他に各種土器・滑石製臼玉などとともに埋置した例がある。前二者については、甕に対するある種のイデオロギーの存在が、かかる用法を行なわしめたものであり、後者では古墳造営時における一つの祭祀形態に、上述したような意味から甕が使用されたといえよう。

出土遺物で注目されるものとしては、II-2号墳出土上の鉄製剣、同U字形鋤先、I-1号墳出土の陶質土器がある。剣は鍛造丸棒鉄を弯曲させたもので類例に乏しく、U字形鋤先も福岡市内で8例目にあたる。陶質土器として、明確に舶載品とできるものは百濟製の細頸壺1点であるが、小形の広口壺も技法・焼成からみてその可能性を捨て去るわけにはいかない。近年福岡平野東南の乙金古墳群の一基から新羅土器が出土し、それを契機として6・7世紀段階の陶質土器が見なおされ、相当数の朝鮮製陶質土器が確認されている。

その他に副葬品とはいいがたいが、III-1号墳から計37個、1350gの鉄滓が検出された。出土位置をみると、玄室1点、羨道後半部1点、他はすべて羨道前半部の床面に近い堆積土中である。鉄滓は径2~4cmの小形のものが多く、こぶしの大のものは7点ほどにすぎない。表面鉈状のもの、粗鬆なもの、ガラス質のもの、またスサ入りの炉壁を付着するものもある。大沢正巳氏の分析によれば製鍊滓であることが確認されている（詳細は第4章4参照）。問題は鉄滓を供獻した時期だが、それが1回的なものか、數度にわたるものか明らかでない。しかし、玄室・羨道後半部の出土状況や羨道でも床面に近いところにまとめていたことを考えれば、後の混入とはいがたく、初葬から最終追葬のあいだの時期に求められる。福岡市周辺ではこうした供獻例が他に31例知られており、環博多湾地帯の古代製鐵を考える上で重要な位置をしめる。

## (2) 出土須恵器について

7基から出土した須恵器は約280点におよび、固化しうるものについては、各古墳報告にすべて取めている。器種が多岐にわたったため、逐一編年的組み合わせを詳しく検討する時間を持てなかつた。したがつてここでは、最も普遍的に出土すると同時に、形態的変化の著しい須恵器蓋杯をとりあげ、各古墳の築造年代と追葬年代を考える資料にしたい。

まず、本古墳群出土の杯蓋を分類するにあたつて、形態差からA・B・Cに大別し、口徑の大小からA I・A IIというように細分した。さらに、同種のものでも細部に手法の違ひのあるものはa・bなどの記号を付し区分した。

## 杯 身 (Fig. 109)

## A I a類

立ち上がりはb・c類に比して高くのびる。底部は丸みをもち、体部との境の張りも認められる。底部のヘラ削りは $\frac{1}{2}$ ほど範囲に施され、ロクロ回転方向は逆時計まわりである。

## A I b類

立ち上がりは内傾の度を強め、a類よりやや低い。底部は丸みのものと扁平になるものがある。底部ヘラ削りの範囲はせばまり $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ ほどに行なわれる。ロクロ回転方向には時計・逆時計まわりがある。一部に口徑の若干小さなものがあるが、本類に含めた。

## A I c類

立ち上がりに特徴的なものもあるが、高さはほぼ等しい。底部は扁平なものと、中央が尖りざみのものがある。広部ヘラ削りの範囲はb類にはほぼ等しい。ロクロ回転方向は時計まわり。

## A II類

I類より口徑が小形になる。立ち上がりは強く内傾する。底部ヘラ削りは難になり、平坦化するものもある。ロクロ回転方向は時計まわり。

## A III類

さらに口徑は縮少する。立ち上がりは強く内傾するものと中央で屈曲し、端部を鋭くおさめるものがある。底部はヘラ削り面積の縮小と手法によって平坦面をなす。底部ヘラ切り離し未調整のものと、その上面をナデたものがある。一部土器の底部平坦面周囲に回転利用のヘラ削りもあるが、削り方向からみれば、切り離し後の調整でなく、切り離しに平行して行なわれた簡略化形態といえよう。

## B a類

体部は底部からゆるく内弯ぎみに外反する。体下位に1~3条の凹線をめぐらし、さらにカキ目を加えたものもある。体・底部の境の器壁は厚い。

## B b類

体部は底部から一段屈曲して外開する。底部は粗いヘラ削りのものと、切り離し未調整のも

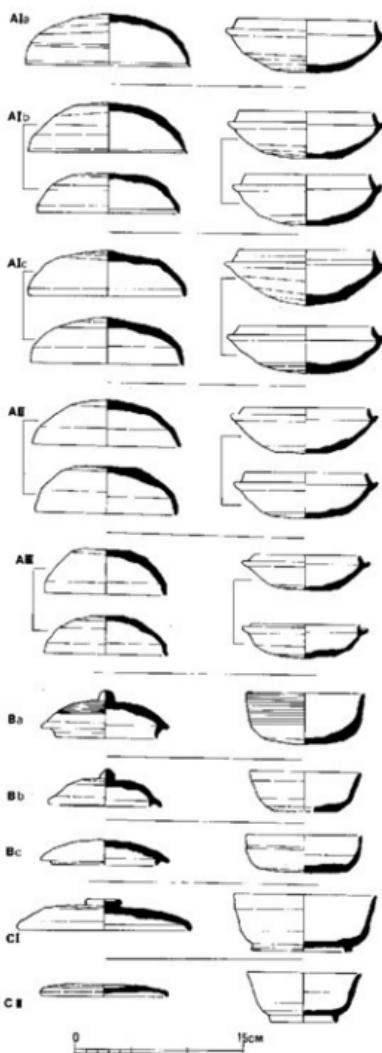


Fig. 109 蓋、杯の分類

のがある。

#### B c類

ゆるく内湾ぎみに外開する体部はあまり高くない。体中央に凹線がめぐり、底部は静止ヘラ削りによって丁寧に整えている。

#### C I類

底部に付す高台は高くないが、下端外方を若干跳ね上げる。体部は内湾ぎみに高くのび、口縁部で外反する。底部はナテ調整。

#### C II類

底部の高台は、体部との境に近く付され下端にしたがって器壁を薄くする。体部は内湾ぎみにのび上方で外開する。

#### 杯 蓋 (Fig. 109)

##### A I a類

体部と天井部の境には鈍い凹線がめぐる。口縁内面には弱い段を付す。天井部は丸みをもち、ヘラ削りは殆どどの範囲に行なわれる。ロクロ回転方向は逆時計まわり。

##### A I b類

天井部・体部の境は不明瞭でゆるく屈曲するにすぎない。口縁内面には弱い段を付す。天井部ヘラ削りはa類よりせばまり3%～5%ほどの範囲に行なわれる。ロクロ回転方向は時計・逆時計まわりがある。

##### A I c類

天井部・体部の境は不明瞭で、口縁内面の段もなくなる。天井部は丸いものと、やや平坦で中央が尖りぎみのものがある。

##### A II類

口径はやや小形化し、天井部ヘラ削りが机難になる。天井部に丸みを残すものもあるが、削り範囲の縮少にともなって平坦の

ものが多くなる。

#### A III類

II類よりさらに口径が縮小する。天井部はヘラ切り離し未調整のものと、ナデを加えたものがあるかいずれもその面積は狭く、平坦に近い面をなす。一部に平坦面の周囲に回転利用のヘラ削りに似た手法も認められるが身身 A III類に等しい手法である。

#### B a類

口縁内面のかえりは、口端より下方に長く突出する。天井部には荒いカキ目を加え、中央に乳頭状のつまみを付す。

#### B b類

口縁内面のかえりは、口端と等しいかやや突出する程度である。天井は $\frac{1}{2}$ ほどどの範囲にヘラ削りを施し、中央に宝珠形つまみを付す。

#### B c類

内面のかえりは口端よりやや下方に突出する。天井部は丁寧な静止ヘラ削りで整え、わずかな高まりをみせる程度で扁平な形態である。

#### C I類

天井部は平坦なヘラ削り面から下降して口端部に至り、鈍く折れた口縁部をなす。天井中央に扁平なつまみを付す。

#### C II類

口径が小さく、扁平な器形である。天井部は $\frac{1}{2}$ ほどにヘラ削りを行ない、つまみをもたない。蓋および杯の各分類の組み合わせは、Fig.109のようにそれぞれ対応する。先述したように、各器種のセット関係は今後検討していくべきだ。第3章で報告した各古墳出土の蓋杯の分類を、上述の分類に対照させると次表のとおりである。

Tab.32 杯蓋の分類対照表

小田氏 編年	I - 1号墳	II - 1号墳	II - 2号墳	III - 1号墳	III - 2号墳	III - 3号墳	IV - 2号墳
A I a類				I a			
A I b類	I			I b	(蓋)	(身)	
A I c類	II	(蓋)	(身)	II a	I	I	
A II類	III			II b	II		
A III類		I	II				
B a類		II	IV				
B b類		III	III	III b	III	II	
B c類				III a			
Ⅳ a					IV a	III a	
C I類					IV b	III b	
C II類							

福岡平野周辺での窯址調査例が乏しいため、筑紫野市牛頭窯址群出土須恵器と対比してみると、先に行なった蓋杯分類の推移は牛頭窯址で行なわれた編年とはほぼ同様の変化をしめすことが知られる。本古墳群で最も遅るA I類は野添6・9号窯のb類に類似する手法と形態を備えたものである。以後、蓋の天井・体部境の不明瞭化、口縁内面段の消滅する過程も等しい。A III類での天井部や底部での切り離し後の調整省略化は、中央部の平坦面を残し、蓋・身の逆転を推測せしめるが、本古墳群の諸例ではかかる例は認められないようである。A III類での形態の違いは、B類にそのまま継承されており、B類にみるa・b・cの差異は、時間的な変化として認ることはできない。したがって本古墳群の蓋杯の分類を先学の進めてきた編年に対照させるならばA I a・A I b類がIII B期に、A I c類はIII B～IV A期、A II類はIV A期、A III類はIV B期、B類はV期、C I・C II類はVI a期に属するであろう。C II類は類例に乏しいが、小郡市極塙場S-3号墳でC I類との共伴が認められている。

### (3) 追葬について

先述したように、各古墳の玄室床面の状況からは、被葬者数・配置について何一つ知ることはできない。したがって検出された耳環と、須恵器にみる時間的差異からそれらを窺う方法しか残されていないわけである。

須恵器については上述したとおりだが、それらが、追葬次副葬品として石室内に納められたという前提が必要である。このばあい、3基の古墳の古墳でみられた土器のとりまとめや配列の状況から、ある程度例証されるであろう。耳環についても、被葬者が必ず耳環を着装したことが前提となるが、着装しない例も認められており、一つの目安としかいえない。

したがって正確な数値とはいがたいが、各古墳の被葬者数は次のように推定される。

耳環数からみた被葬者数 （）内は付になる耳環	須恵器の年代差からみた追葬回数
---------------------------	-----------------

I-1号墳	5 (1)	4	3
II-1号墳			4
II-2号墳	1		5
III-1号墳			5
III-2号墳			2
III-3号墳	1		1
IV-2号墳	9 (3)	6	4

## 5 古墳群の形成過程

これまで1～4節にわたって、古墳・横穴式石室の構造、出土遺物の検討を行ない、各古墳の築

造年代、追葬使用年代などをみてきた。以下、これらを概括しつつ、古墳群の形成過程を考えてみたい。

**古墳の築造年代** 調査した7基の古墳は、横穴式石室の構造と出土須恵器との対照によって、その築造年代が、6世紀後半から7世紀初めと推定され、約四半世紀強のあいだに築造されたことが知られる。須恵器編年のはうでは1~2型式の推移にあたるが、仔細にみれば、7基の古墳が順次時間をおいて築造されたのではなく、前・後のある特定の年代に集中して行なわれたことが知られるのである。古段階古墳はI・II類型石室に、新段階古墳はIII類型石室に相当する。

III類型石室では、3基とも同一の石室長・玄室巾・玄室長をもつ間企画で、近接した築造年代を推測させるが、壁体構成のうえで先後関係の存在が指摘され、それは出土須恵器からも例証されている。III類型石室では、正方形プランと長方形プランの玄室がある。前者が7世紀前後に出現し、以後長方形プラン玄室が認められない以上、両古墳の築造に先後関係のあることは確かである。この点に關しても、出土須恵器はわずかではあるが変遷をしめすようである。

したがって、近年の須恵器編年の成果に準拠して7基の古墳築造年代を推定すれば、古段階古墳（I-1・II-2・III-2・IV-2号墳）は6世紀第4四半世紀の初め頃、新段階古墳は7世紀を前後する時期の築造と考えられる。このように本古墳群は前後2つの時期の築造古墳の累積形態であるが、形成過程を詳しくみれば古段階、新段階ともさらに2時期に区分できる。これによって古墳群の形成過程を図化するとFig. 110のとおりである。

本古墳群に初めて古墳が築造されたのは、II群の谷奥のII-1号墳である（I期）。やや下ってほむ同時期的にI・III・IV群に古墳の築造が開始されている。I-1・III-2・IV-2号墳がそれである（II期）。その後時間を隔てて、III-3・III-1号墳（III期）、やや遅れてII-1号墳が築造された（IV期）と考えられる。未調査の2基は石室が埋没しており、年代推定の決め手を欠くが、群の形成を復元することによってその位置づけは可能となるであろう。

**墓道と単位群の抽出** 本古墳群を当初からI~IV群に区分したのは、本章第1節に述べたように、各古墳の立地が谷と丘陵とに分かれていることもあったが、この一帯が国有林で、福岡市移管以前には雑木一本の伐採も許されない状況で分布調査を行なったことによる未発見古墳の検出を想定し、古墳番号の混乱を避けるためであった。しかし調査終了までに検出した古墳は、わずかに1基（IV-2号墳）にすぎなかつたのである。

すでに述べたように、調査によって得られた古墳の立地状況の復元をもとにして、石室開口方向と墓道との関係をみると、当初設定した小群が古墳群を構成する最小単位としてのあり方を示唆するものであった。先に述べた各古墳築造年代をその群ごとにみてみれば、各群ともほぼ平行するような形成過程が窺われる所以である。完掘したII・III群をあげれば、II群では2号墳から1号墳へと、III群では2号墳から3・1号墳へという推移である。このように一つ

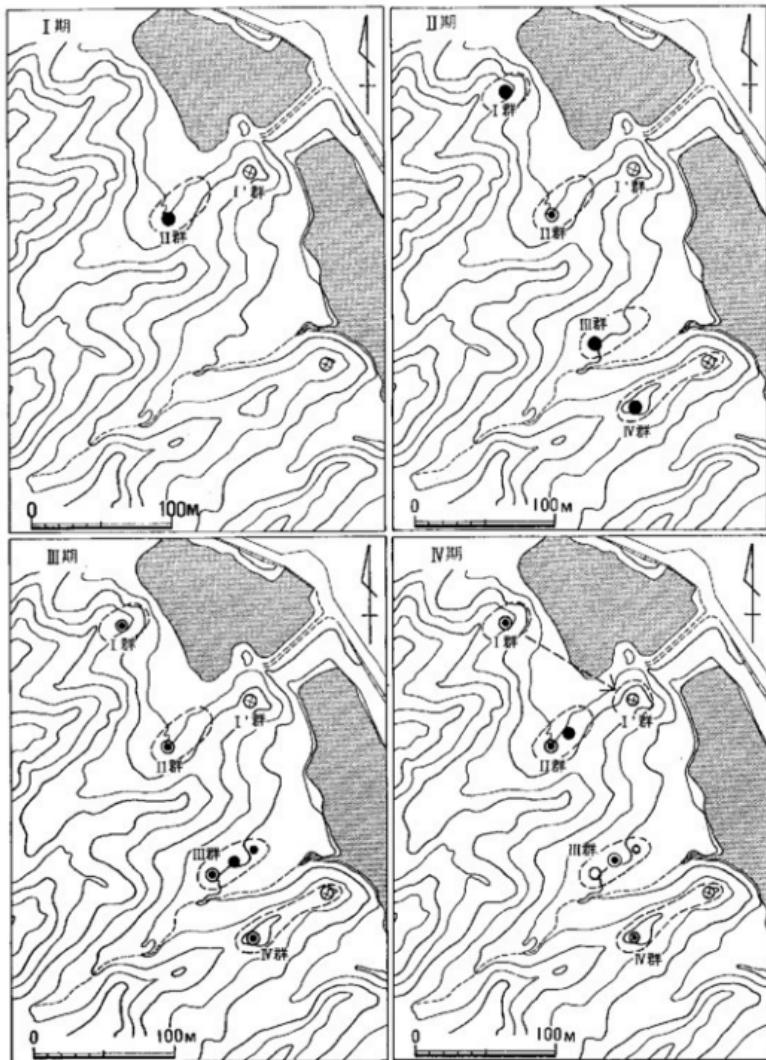


Fig. 110 古墳群の形成過程 (●は当該期築造、◎は追葬をしめす)

の小群が、四半世紀前後と推定される古墳の累積からなり、同一の墓道にそって形成される点を勘合すれば、これらが同一家族による世代単位の造墓活動の表出として一つの単位群と考えることができる。

IV群とI群は各1基ずつの調査にすぎないが、IV群では未調査の1号墳が丘陵先端に、I群では谷をはさんだ丘陵先端にI'群古墳がある。これら相互の関係は充分推測できるのであるが、転じてII・III群での古段階古墳の追葬状況と新段階古墳築造の関係から窺ってみよう。最終追葬時に必ず須恵器を副葬したという前提にたてば、II群では2号墳が須恵器蓋杯B類まで追葬され、A II類段階で2号墳が築造されている。III群では2号墳がA I c類までの追葬、A I c類段階で新たに1号墳が築造されたことになる。

I - VI - 2号墳の最終追葬は前者がA II類、後者はA III類の段階までであって、II・III群で

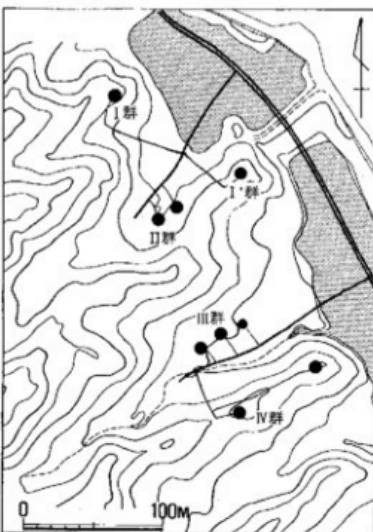


Fig. 111 古墳群と墓道想定図

のあり方を参照すれば、この段階前後での新たな古墳の築造は充分推測される。この点から推して、IV群では丘陵先端の1号墳が新段階の築造と考えてよい。I群では同一丘陵に後続する古墳がなく、谷をはさんだI'群古墳との関係が想定される。I群の立地する丘陵は浸蝕が激しく、1号墳の上方には古墳築造を可能にするような整った地形を見いだすことは困難で、あえて谷をはさんだ同じような地形を求めたともいえる。いわば、I群は新段階古墳の築造に墓域の移動という形をとったのではなかろうか。とはいって、I群は下方の谷流路を利用した墓道から派生した位置にあり、I'群もまた同様と考えられ、異なった墓道への移動ではないのである。このようにみてくると、I~IV群はほぼ相似した単位群であり、こうした古墳の築造が戸主の死を契機に、加えて政治過程を媒介にしつつ行なわれたものであるとすれば、これらは1戸の家族（古代家族）の累積的な造墓活動を現出したものといえよう。

さて、I~IV群を形成した4戸の家族が地域においてどのような位置にあったのであろうか、未だ明らかにしうる段階ではないが、周辺には密集した分布の古墳ではなく、谷や丘陵上に立地し、本古墳群と同じ様な分布形態をしのす古墳群が散在する。そうした点からすれば、各古墳群の形成即ち墓域の設定にあたって、強力な規制が行なわれていないことを推測させる。こうした傾向は早良平野の中では平野北側にみられる状況で、油山周辺の密度とは大きな差異が

ある。今回これらを充分検討する余裕をもたなかつたが、こうした地域的な分析を行うことによって、後期古墳時代の群集墳構造の実体を明らかにする必要があるだろう。(柳沢)

## 註

- 1 水野正好氏の墓道の概念にしたがつた。水野正好『群集墳の構造と性格』『古代史発展』6 1975
- 2 この分析法は、下記の文献によるが、横穴式石室平面图形の問題に関しては尾崎喜左雄氏の『横穴式古墳の研究』を一読されたい。
- 3 石川正之助『越社』、子山古墳前方部石室の平面構成について』『考古学雑誌』54巻4号 1968
- 4 柳沢一男『北部九州における初期横穴式石室の展開』『九州考古学の諸問題』1976
- 5 註文獻
- 6 小田富士雄「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」九州考古学39・40 1971
- 7 西谷真治ほか『福元古墳群第1次調査報告』1976
- 8 森貞次郎、国崎 敦『老司古墳調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集) 1969
- 9 後藤守一『北部九州に於ける古墳の二、三』『考古学雑誌』12巻4号 1922
- 10 渡辺正氣『福岡県筑紫郡春日町日押原古墳』『九州前方後円墳集成』I 1959
- 11 小田富士雄編『こうしんの古墳群』調査報告書録稿 1968
- 12 石山 駿ほか『片吉古墳群』福岡県文化財調査報告書第46集 1970
- 13 柳田純孝・塙屋勝利ほか『和白遺跡群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集) 1971
- 14 註文獻
- 15 柳沢一男『北部九州の横穴式石室一特に宮室墳について』1975年度九州史学会発表、活字にしたもののは『九州考古学』51に収められている。
- 16 墓内では森 浩一氏らの分析がある。さらに多くの事例を対象にする必要があつた。
- 17 森 浩一『古墳の発掘』1965
- 18 小田富士雄『北九州』『日本の考古学』V、1966
- 19 小田富士雄氏の石橋 技法に関する論議は以下の文献に取扱われている。
- (1)小田富士雄編『豪ノ谷・釣崎・童男山古墳』八女古窯跡調査報告III 1971
- (2)小田富士雄編『牛焼谷古墳群・衆塙古墳』八女古窯跡調査報告IV、1972
- (3)小田富士雄編『倉瀬戸古墳群』1973
- 20 力石による用語は、小田富士雄氏の使用する概念にしたがう。註17文献。
- 21 柳沢・藤田和裕『相原古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集) 1974
- 22 浜田信也『高崎2号墳』『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1970、使用尺度については註3文献
- 23 稲田純孝・柳沢一男『片江古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集) 1973
- 24 三島 格・佐藤伸二ほか『影坂1号墳発掘調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集) 1972
- 25 かかる例は埴丘を除去する調査の增加に比例して例を増している。
- 26 柳田康男ほか『鶴見山古墳群の調査』『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概要』1968
- 27 川辺昭人『東田古墳群』1976
- 28 高山 明ほか『持丸古墳群』1973
- 29 片江8号墳・倉瀬戸2号墳・大牟田2号墳・高崎2号墳・貝花尾1号墳・七瀬8号墳・宝満尾古墳
- 30 これらの陶質土器については次の方々から貴重な教示を受けた。小田富士雄・西谷 正・武末純一・藤口健二・東 勝の諸氏。
- 31 片江2号墳・倉瀬戸2号墳・大牟田2号墳・高崎2号墳・貝花尾1号墳・七瀬8号墳・宝満尾古墳
- 32 田邊正三氏は陶瓶大系『須恵器』(1975)の中で、舶載品であることに否定的な見解を述べられている。論證が不明確で同意しがたい。今はそうする前に前述の資料の再検討がなされるべきであろう。
- 33 小田富士雄・柳田康男編『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書第43集 1970
- 34 小田富士雄『八女古窯跡調査報告』I~IV 1968~72
- 35 亀井明徳『向佐野・長浦窯跡の調査』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』IV 1975
- 36 水野正好氏の用語概念にしたがつた。註1 文獻
- 37 ここで用いた古代家族といふ表現は、6世紀後半代以降の群集墳の造営主体が、後の郷戸のみならず戸戸の内容をもつ家族レヴェルまで含むか否か、私自身理論的決着がついていないためである。この点については、かつて行なわれた諸論争を踏まえ、佐田茂・田嶋明人氏らによって更に深化されている。また群集墳全体を観く間違す作業を進めている広瀬和雄氏もこの問題に触れているが、氏の述べるようすに古墳に導かれる政治関係にかかる問題であり、家族の実体とともに、律令時代の前段階での支配形態と質を問うものである。
- 38 佐田 茂『群集墳の形成とその被葬者について』『考古学雑誌』58巻2号 1972、同『群集墳形成の一視点』『史源』110輯 1973、田嶋明人『袖論』『法皇山横穴古墳群』 1971
- 39 広瀬和雄『群集墳研究の一情況』『古代研究』7 1975

図 版

PLATES

O  
卓列石墳群

O  
古跡古墳群

宮ノ前  
遺跡群

I群○

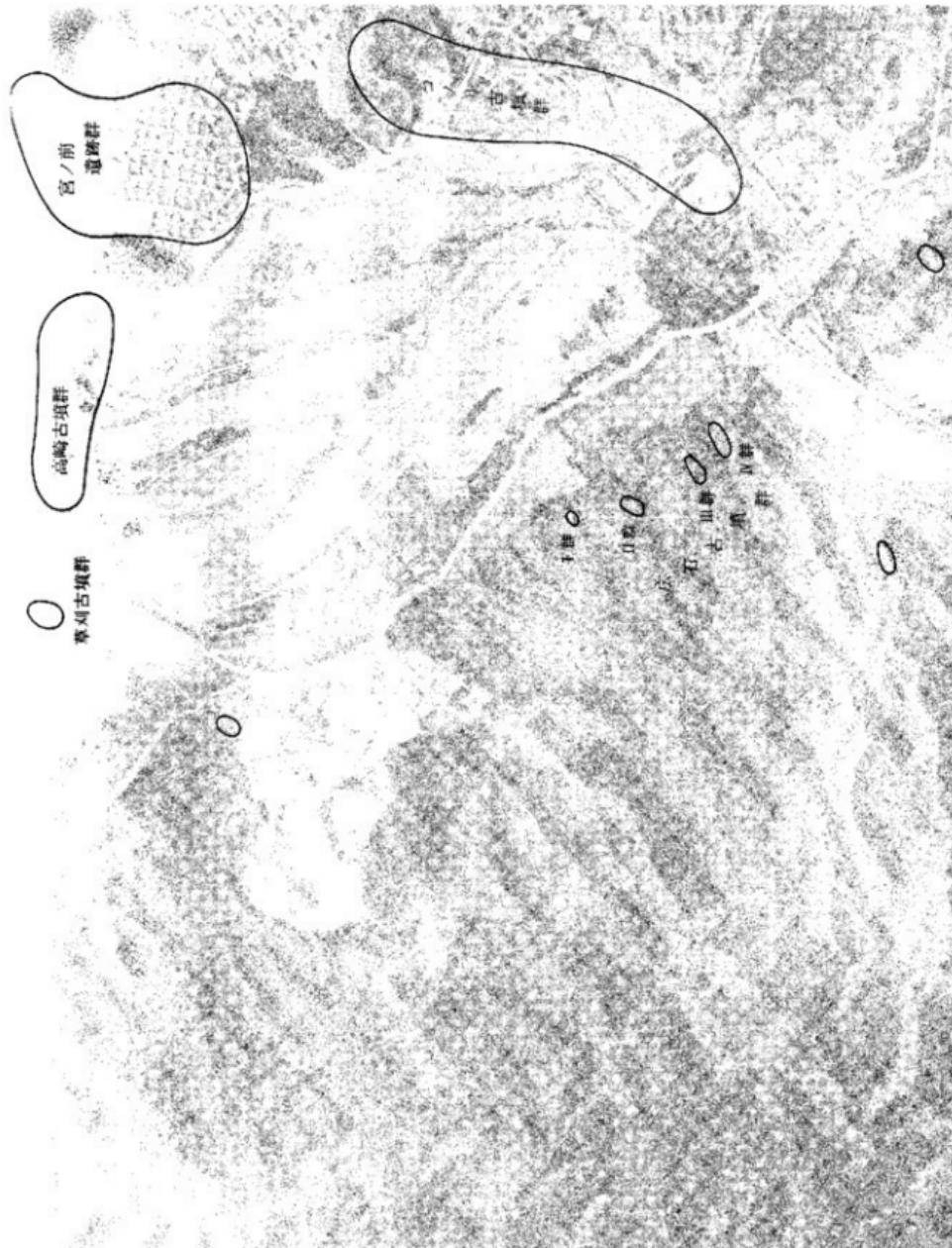
II群○

石古墳群  
Ⅲ群○  
Ⅳ群○

コノ  
リ古墳群

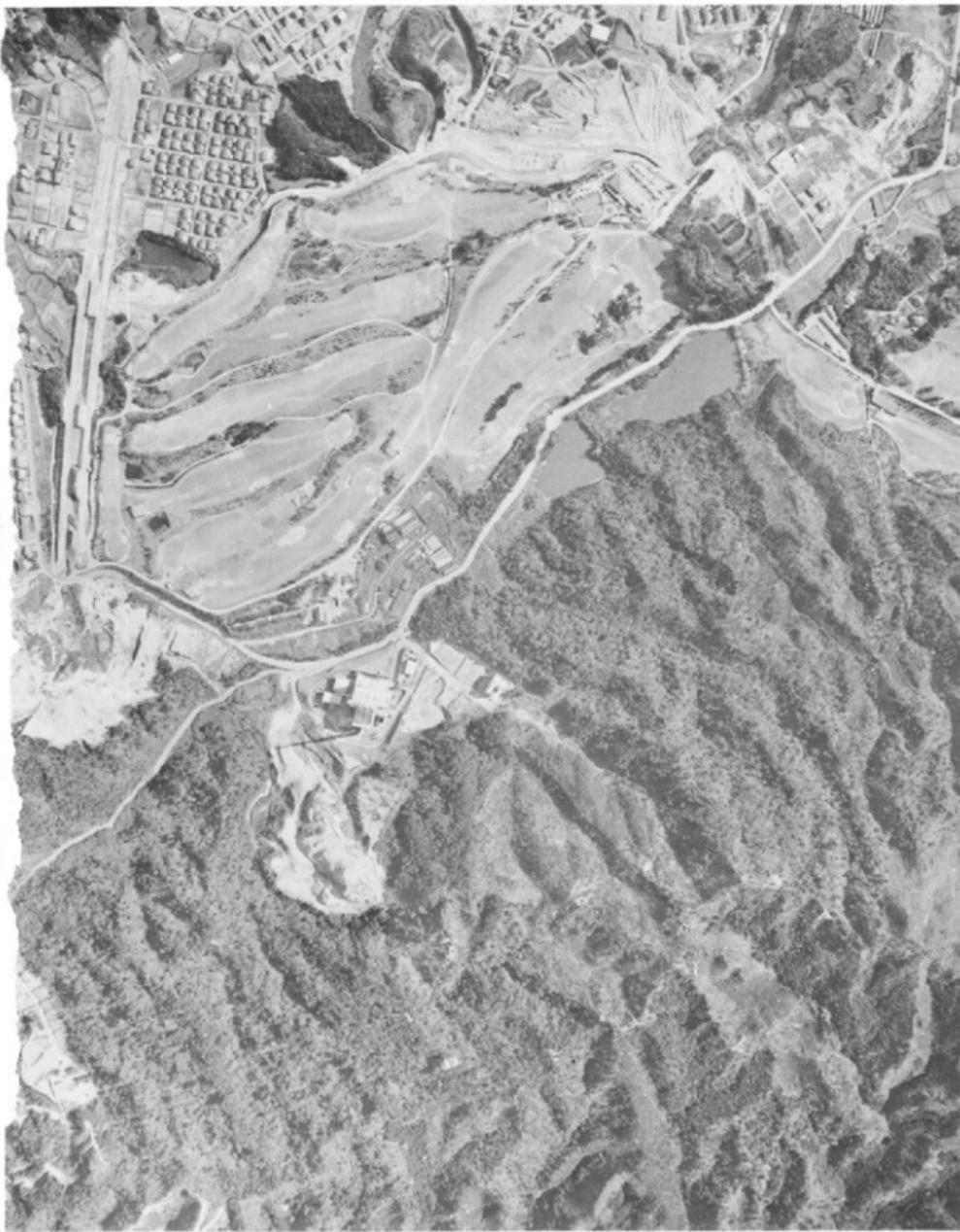
灰岩古生物群埋藏点空洞（洞土堆积）

PL. I

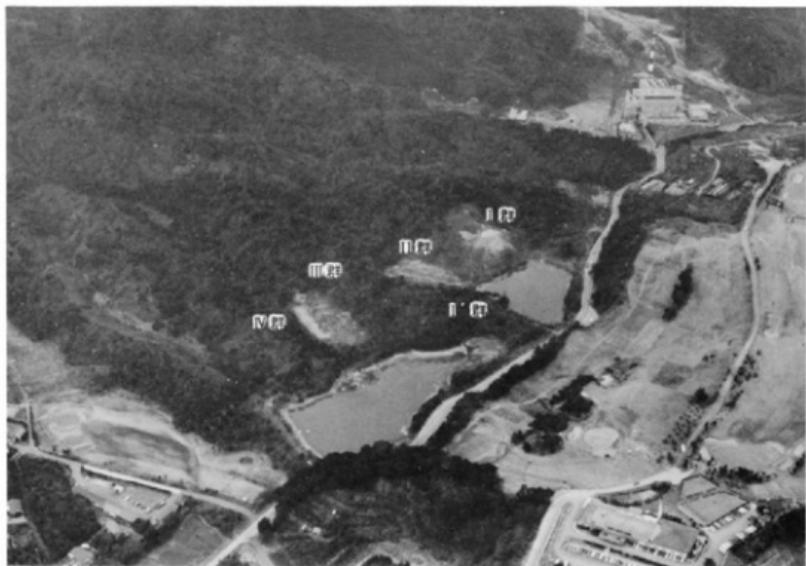


広石古墳群周辺航空写真（国土地理院）

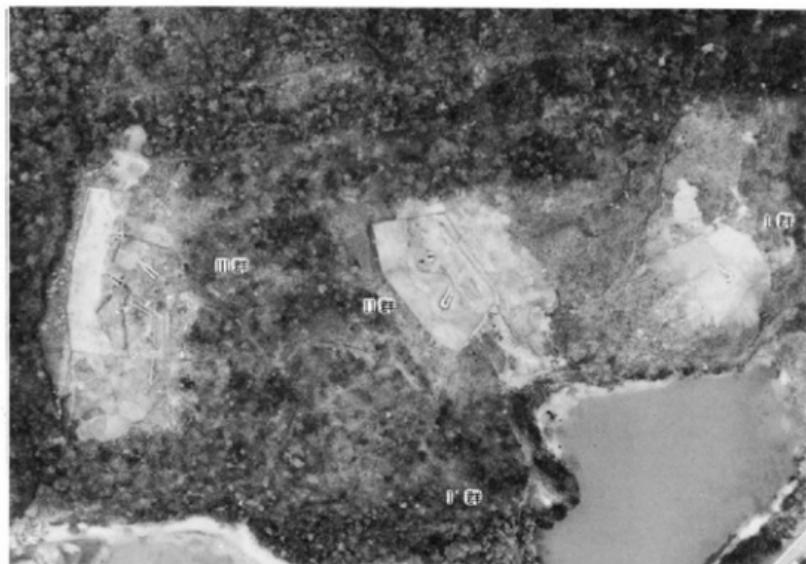
PL. I



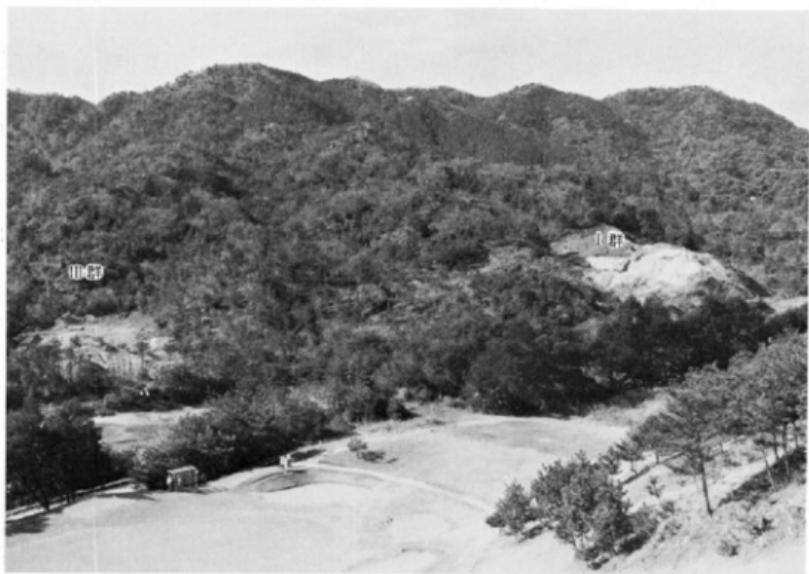
広石古墳群遠景



(1) 航空写真（東から）



(2) 航空写真（北東から）



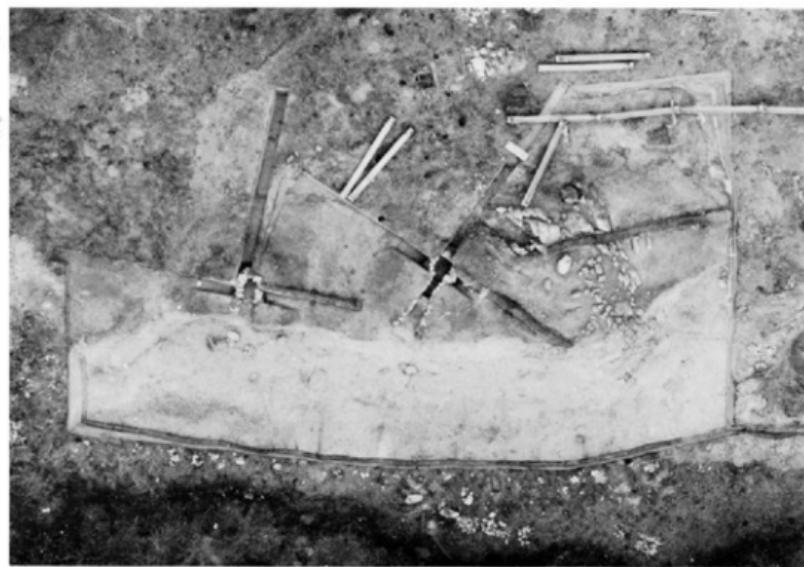
(1) 生の松原ゴルフ場より（東から）



(2) I・II群航空写真（北から）



(1) II群全景航空写真（調査終了後）



(2) III群全景航空写真（墳丘遺存面露出作業中）



(1) 調査前全景（南から）



(2) 墓丘遺存状況全景（南から）



(1) 遠景（東から）



(2) 遠景（東から）



(1) 墳丘遺存状況（南から）



(2) 墳丘除去後状況（南から）



(1) 石室左側壁・壁体構築状況（東から）



(2) 掘り方と石室の関係（北から）



(1) 奥壁



(2) 前壁



(1) 玄室・羨道（北から）



(2) 羨道後半部（玄室から）



(1) 玄室・渢道後半部（東から）



(2) 渢道後半部（東から）



(1) 羨道後半部（上から）



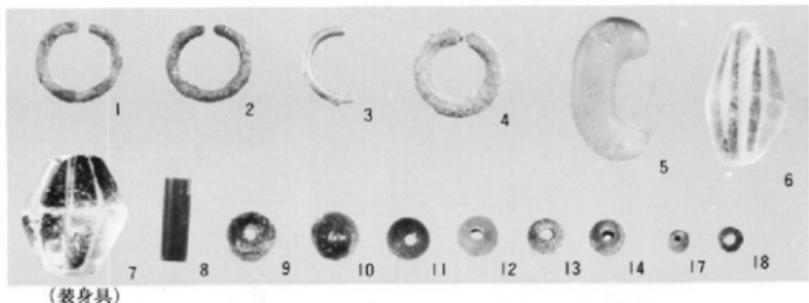
(2) 羨道後半部（玄室から）



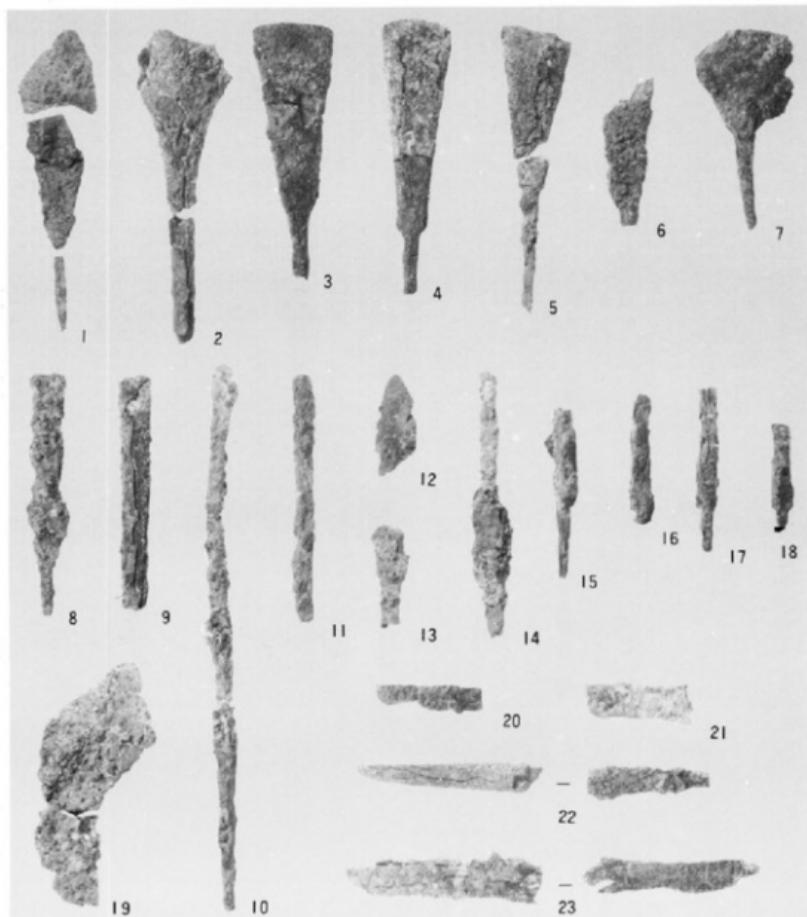
(3) 羨道後半部（墓道から）

I - 1号墳出土遺物 I

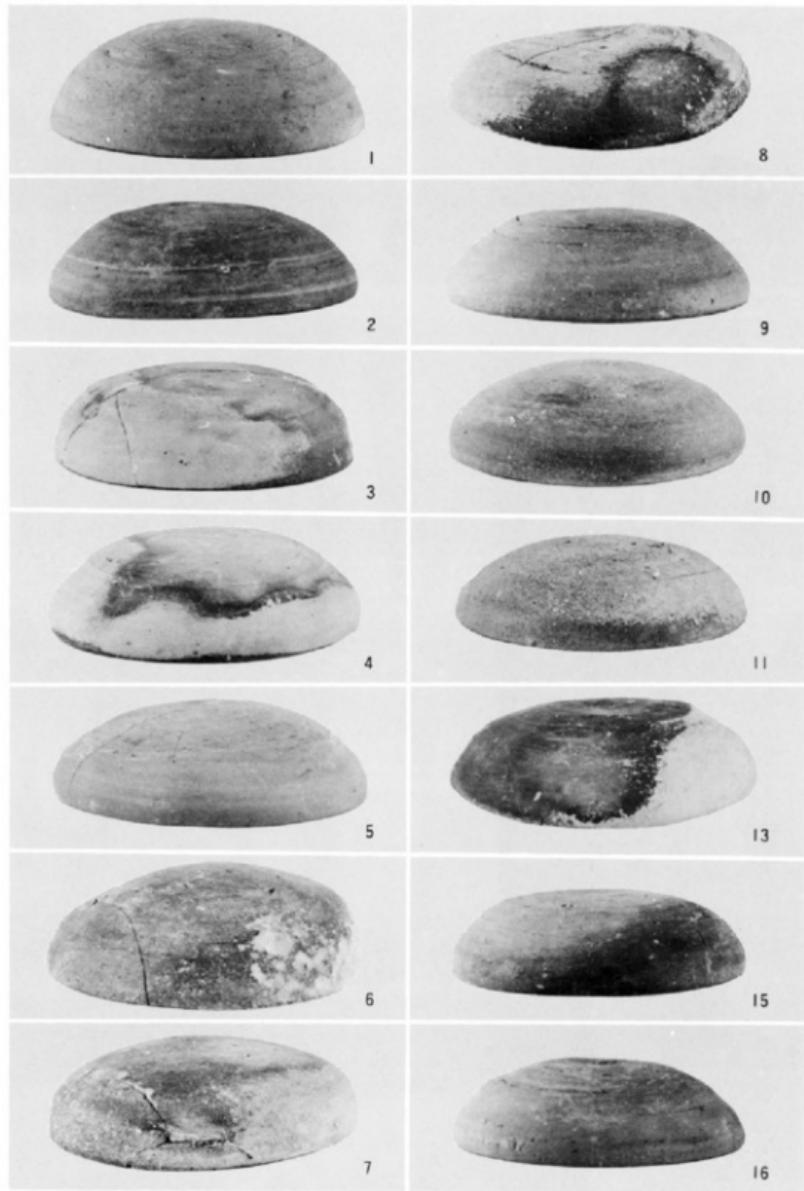
PL.13



(装身具)

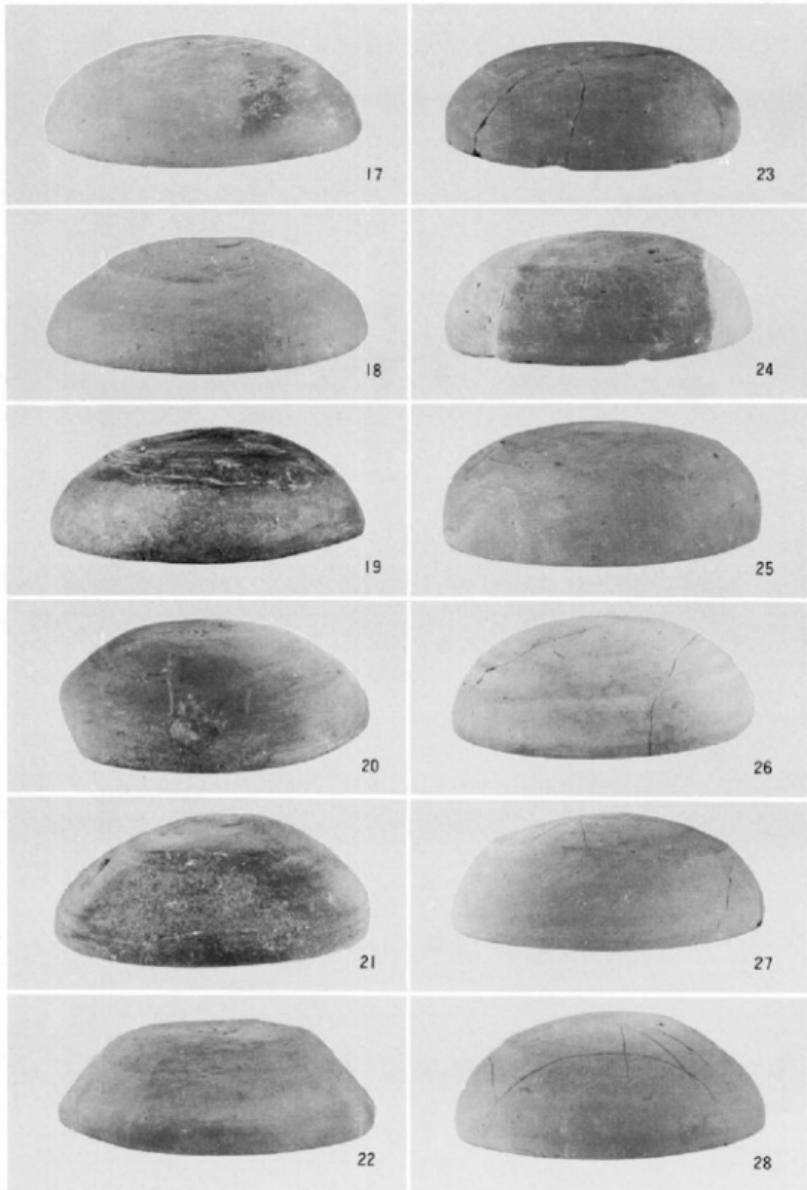


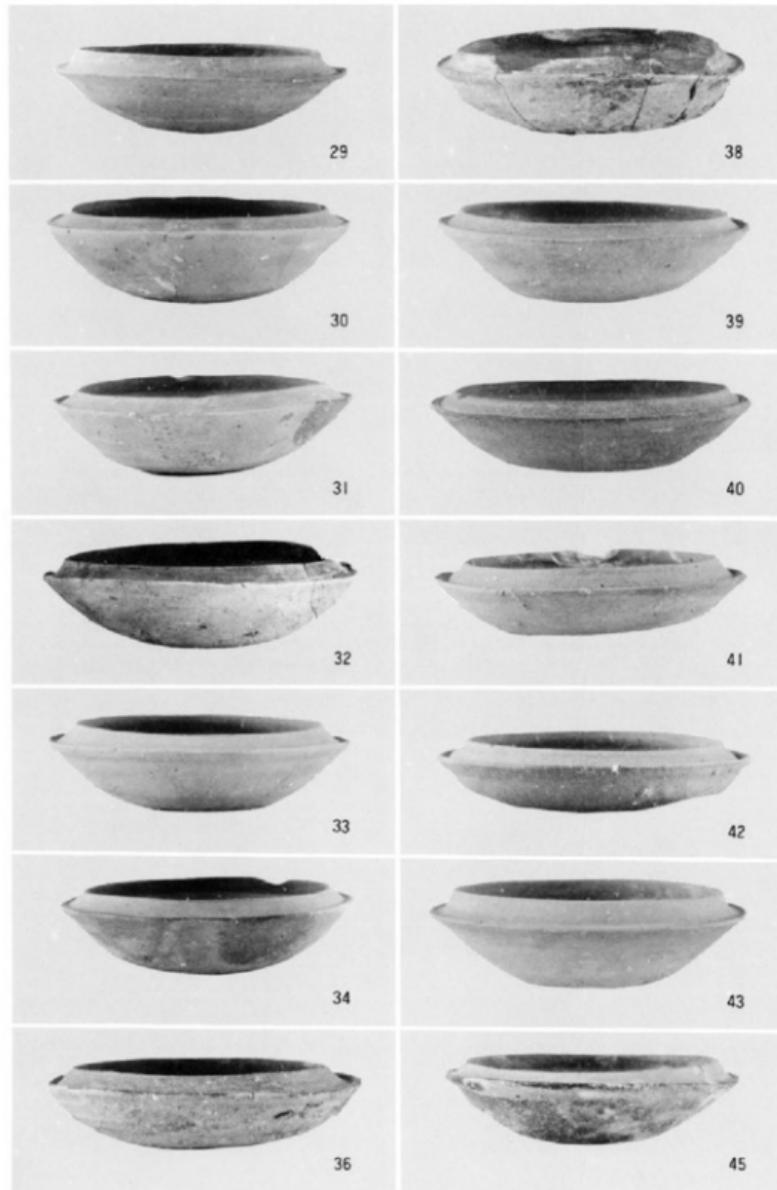
(武器・不明鉄器)



I - 1号墳出土遺物III (須恵器)

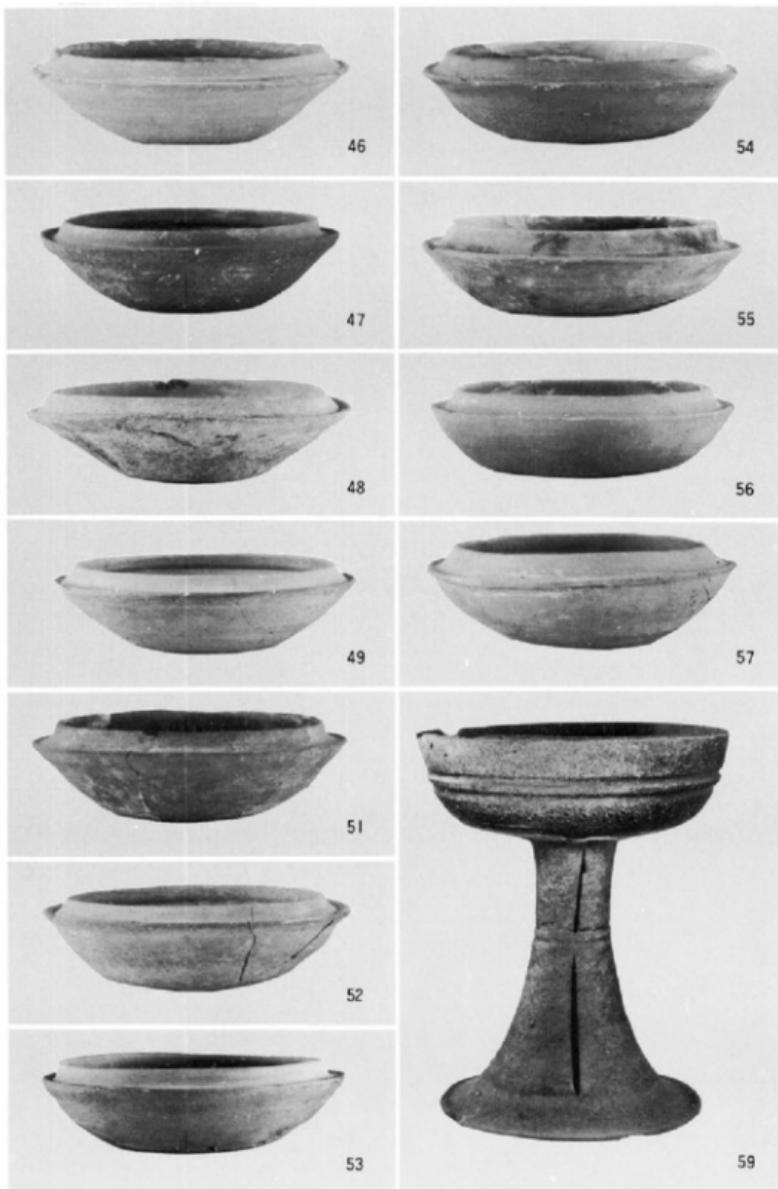
PL.15

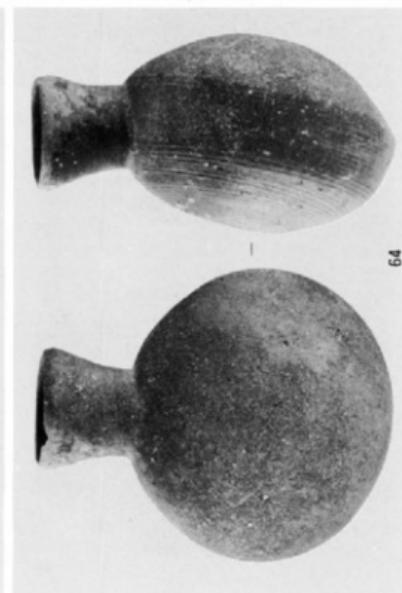
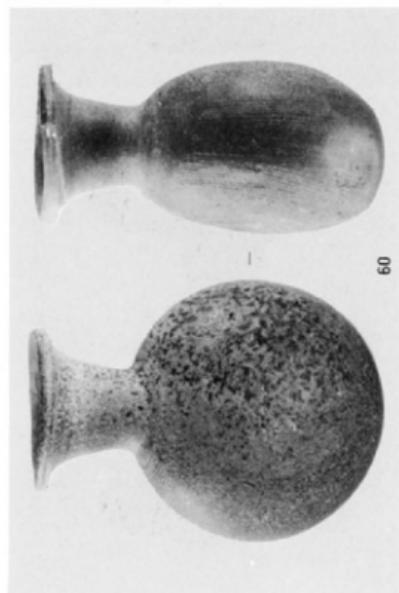
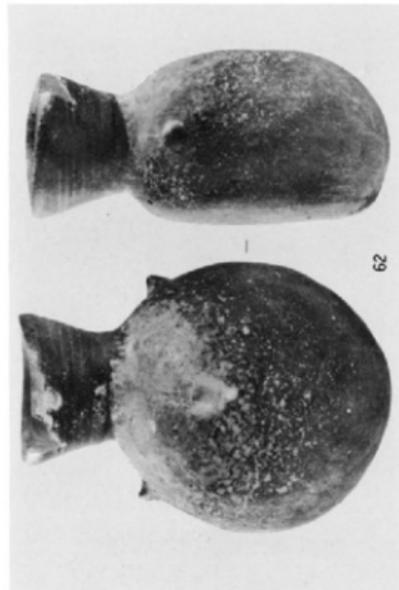


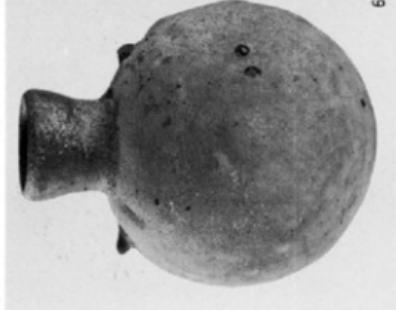
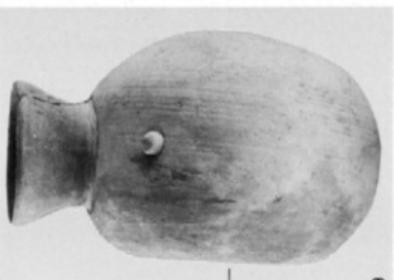
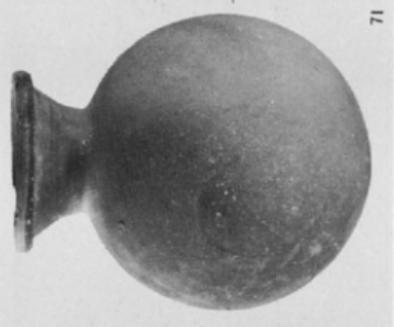
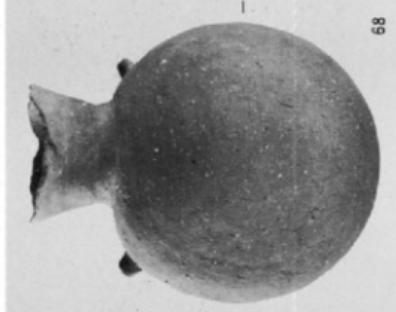
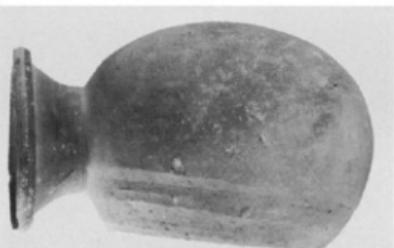
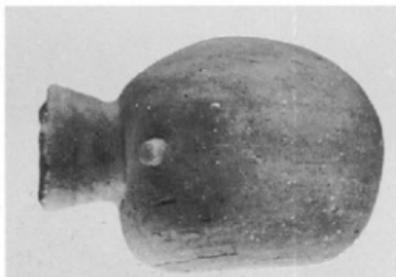


I - 1 号填出土遺物 V (須惠器)

PL.17









I - 1号墳出土遺物IX (須恵器)

PL.21





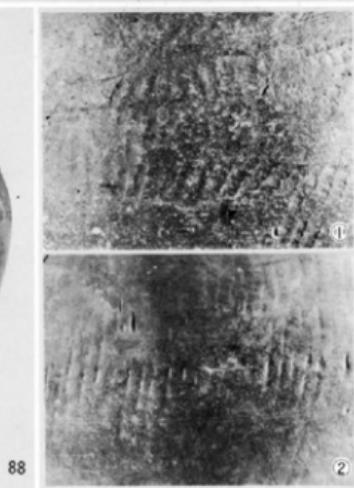
87



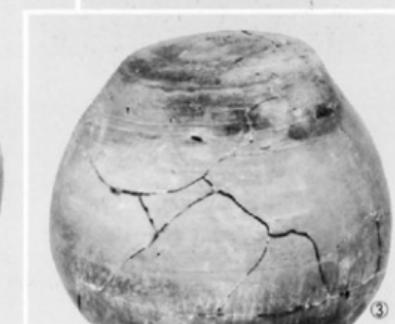
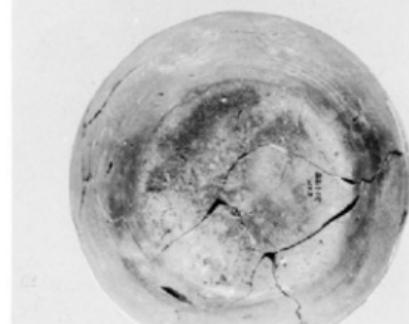
86



③ ↗

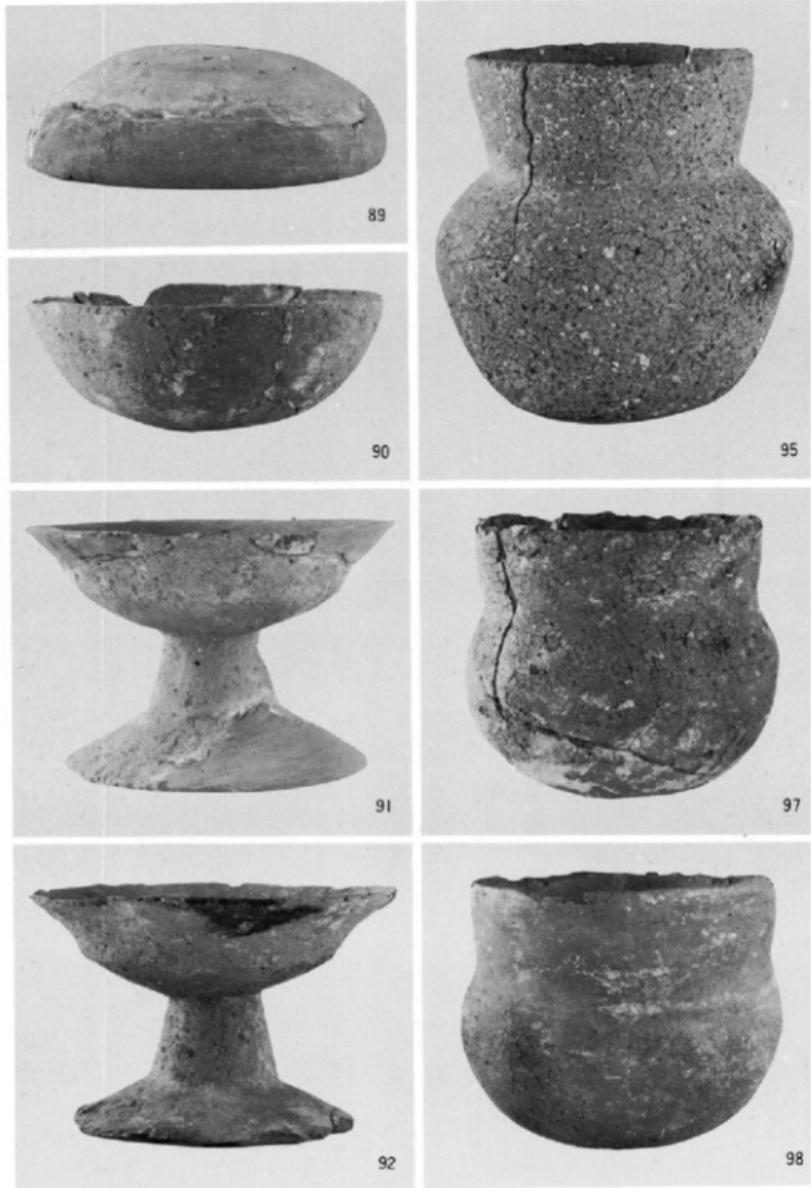


88



I - 1号墳出土遺物Ⅺ（土師器）

PL.23





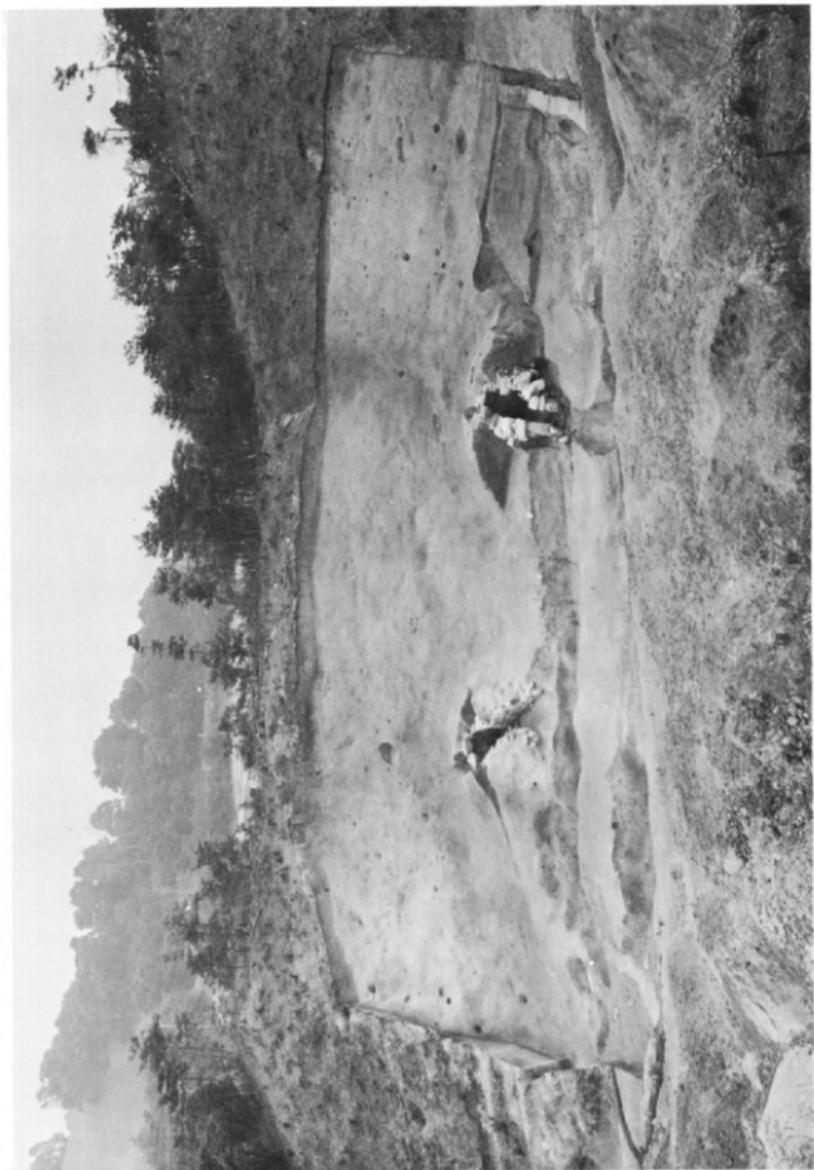
(1) 北から



(2) 南東から

II群全景（北から）

PL.25



2号墳

1号墳



(1) 填丘遺存状況（北から）



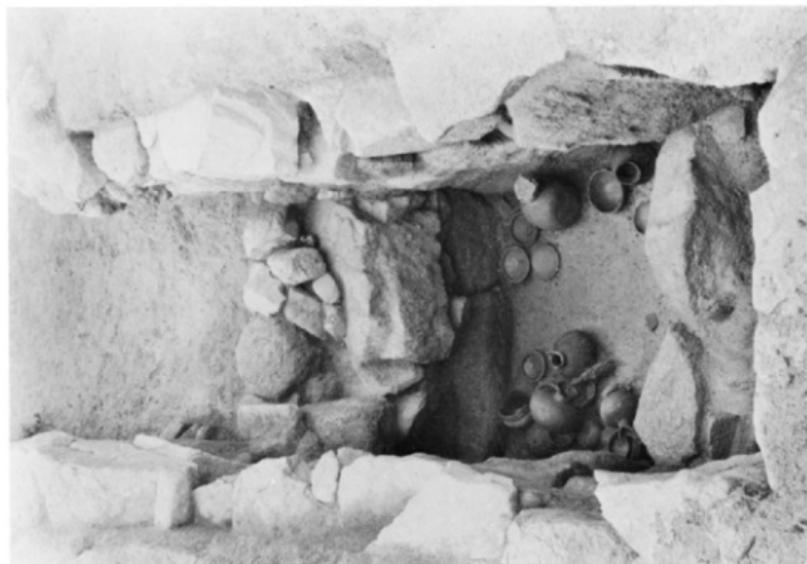
(2) 填丘遺存状況（北東から）



(1) 調査前全景（北西から）



(2) 墳丘遺存状況全景（北西から）



(1) 石室全景（閉塞石・遺物検出状況、南から）



(2) 石室全景（閉塞石除去後、南から）



(1) 掘り方と石室（西から）



(2) 掘り方と石室（西から）



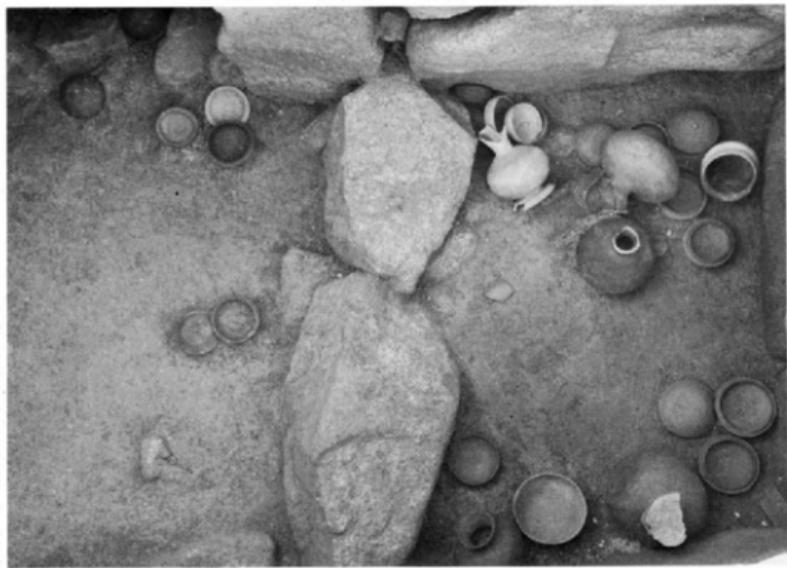
(1) 掘り方と石室（北から）



(2) 掘り方と石室（東から）



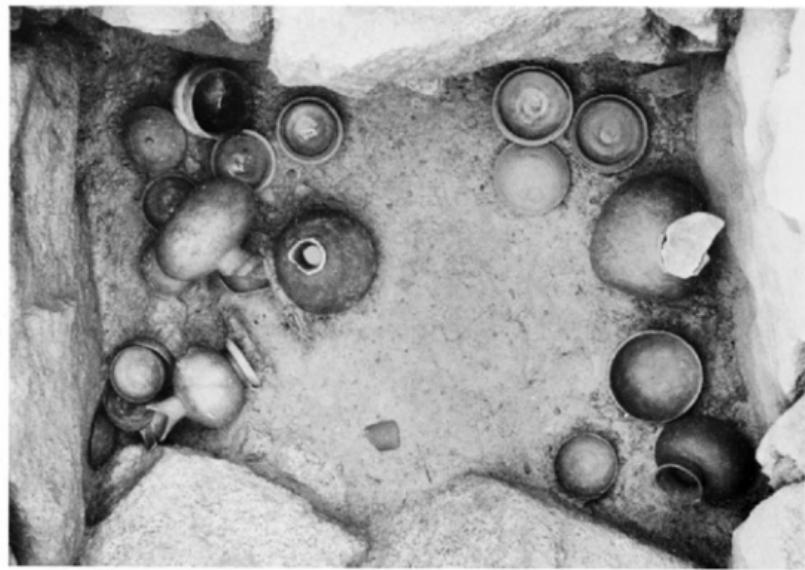
(1) 奥壁



(2) 玄室・漢道後半部遺物出土状況（上から）



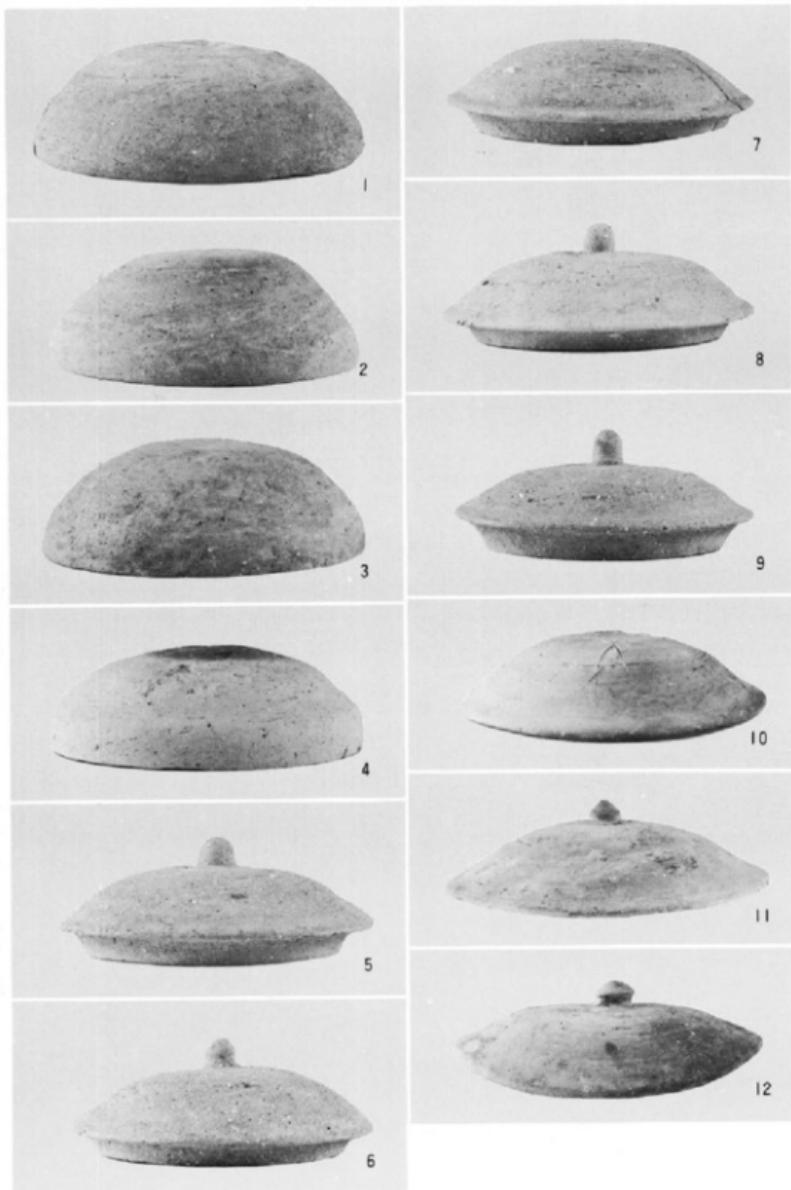
(1) 渋道後半部（玄室から）

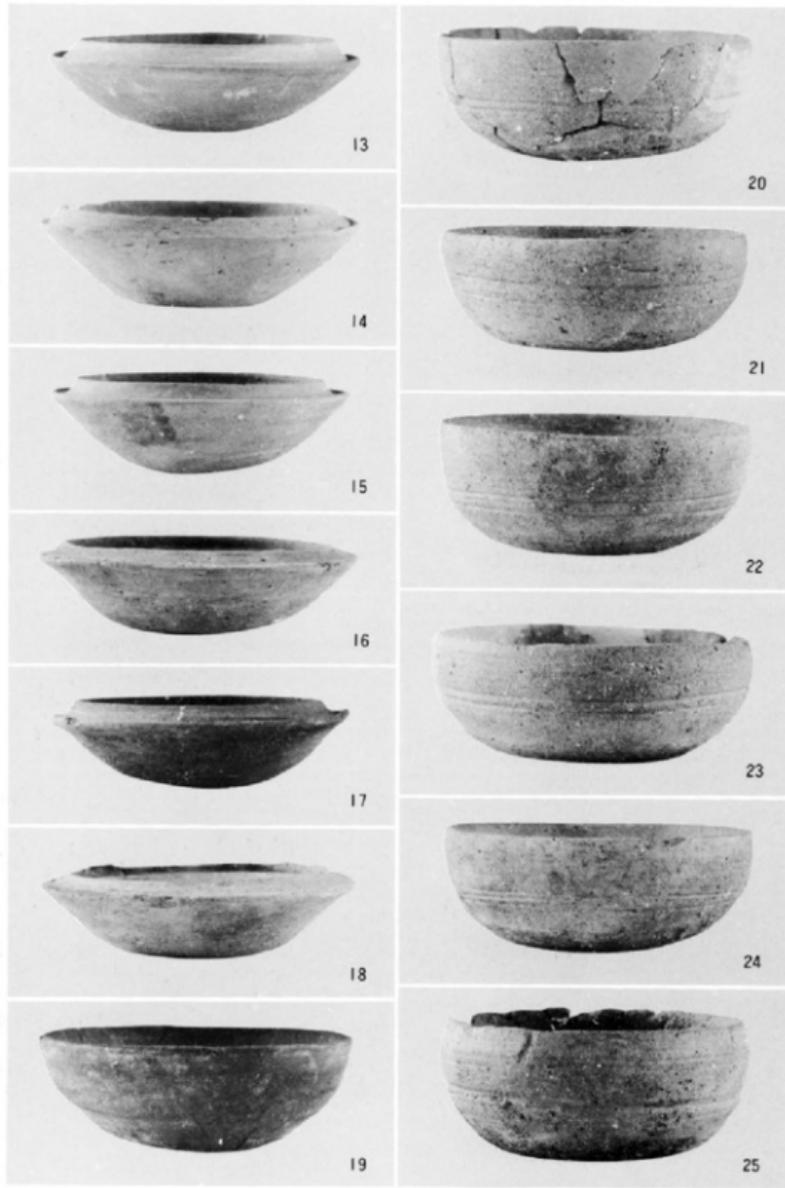


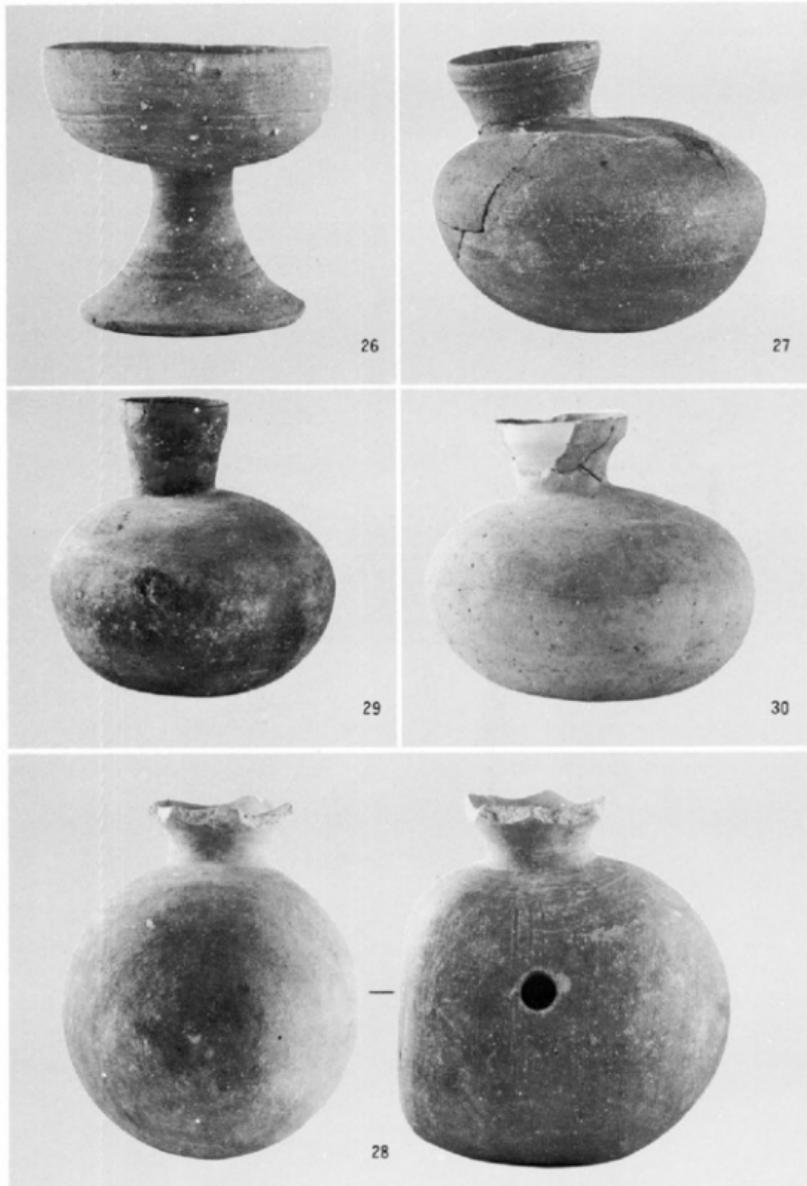
(2) 渋道後半部（上から）

II-1号墳出土遺物I (須恵器)

PL.33



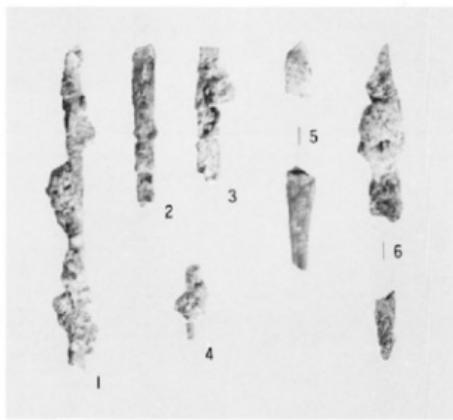






(須恵器)

(土師器)



(武器・工具)



(1) 調査前全景（北から）



(2) 墳丘遺存状況全景（北から）



(1) 墓丘遺存状況（西から）



(2) 墓丘遺存状況（南から）





(1) 玄室・羨道後半部（上から）



(2) 玄室（上から）



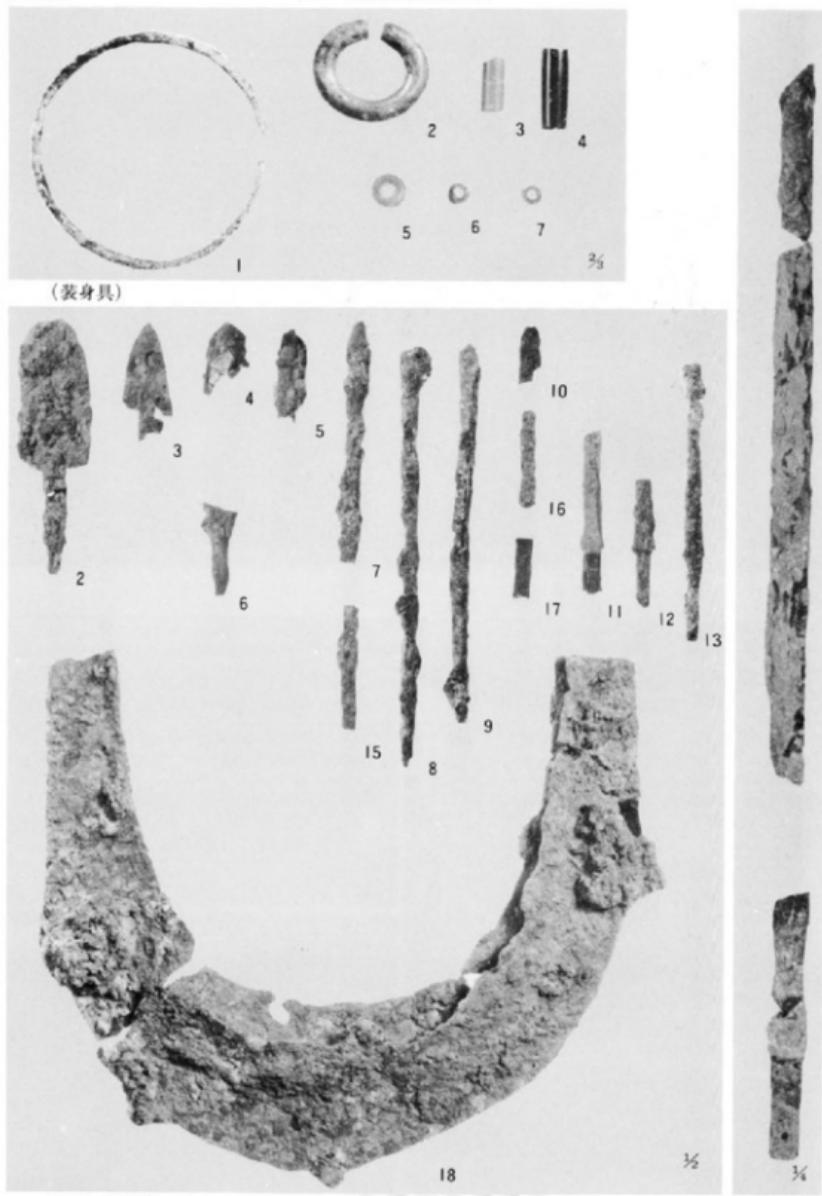
(1) 玄室



(2) 玄室右袖隅角



(3) 鋤先  
(4) 鋤

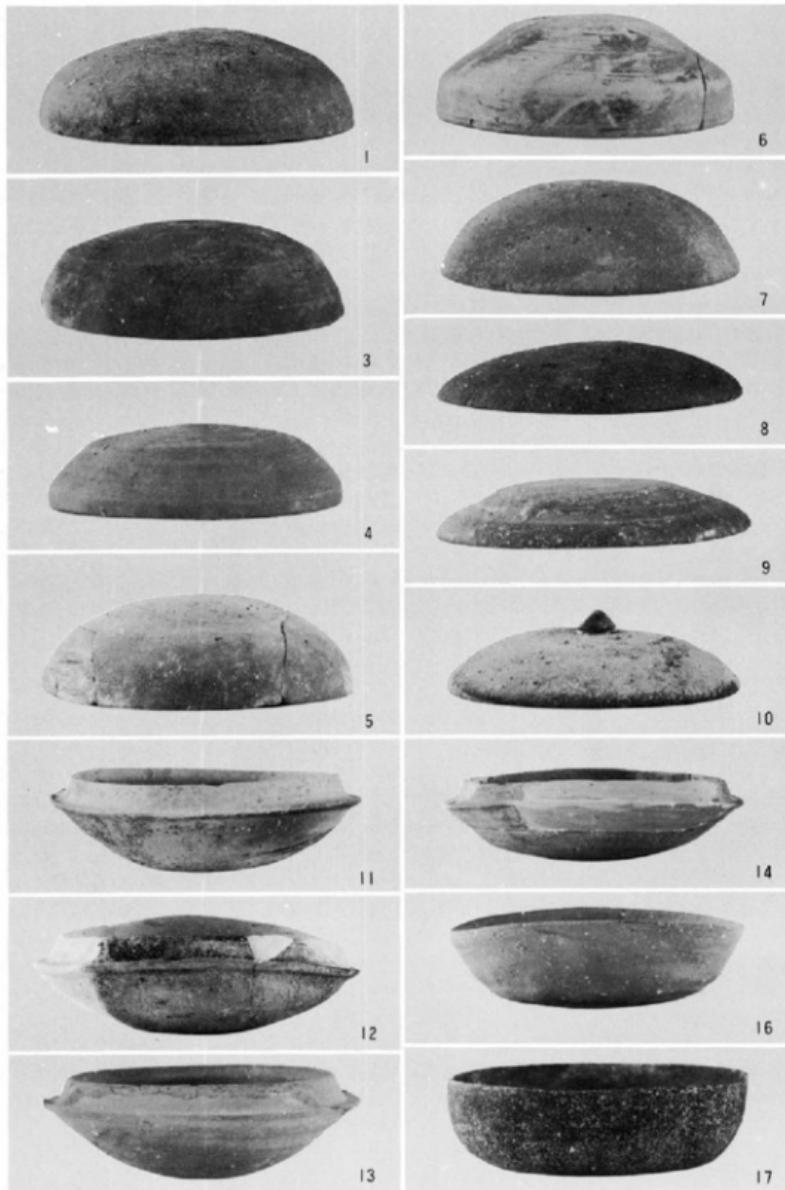


武器·农工具

直刀

II-2号墳出土遺物II(須恵器)

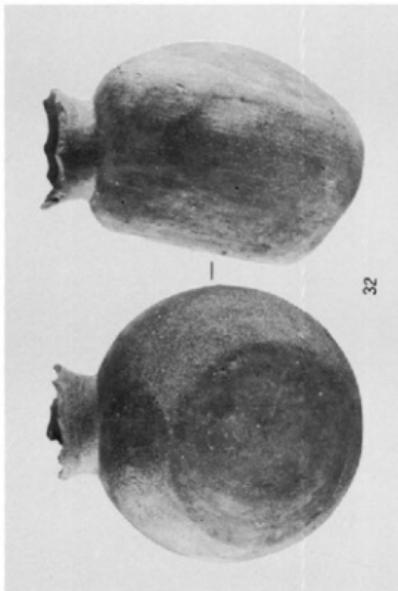
PL.43



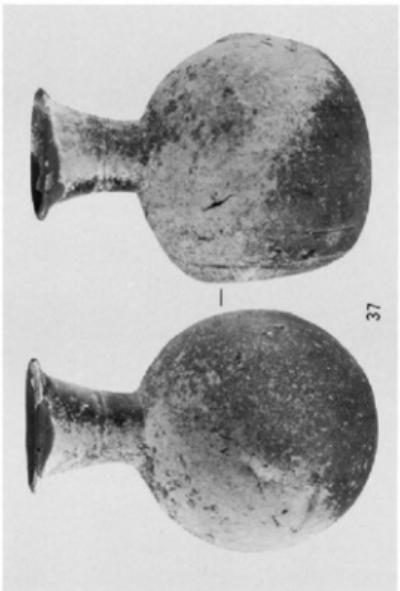


II - 2 号墳出土遺物 IV (須恵器)

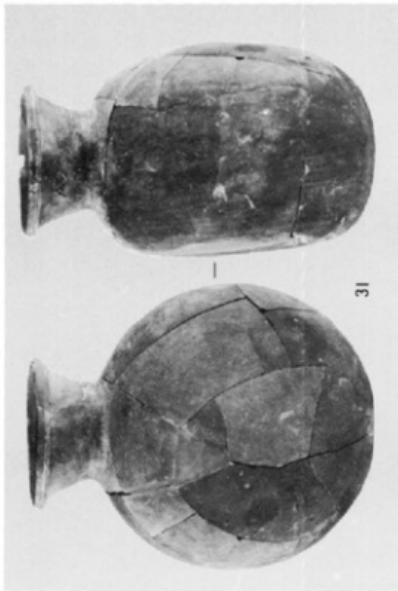
PL.45



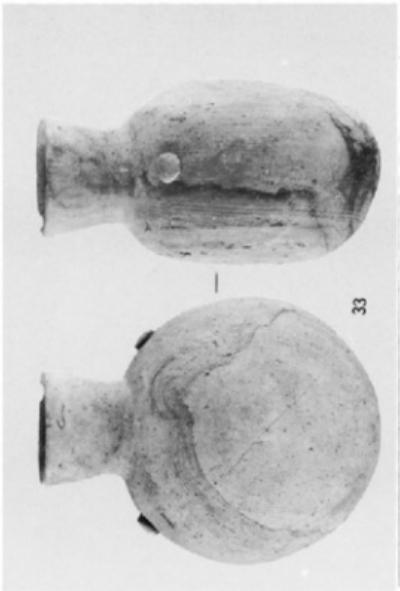
32



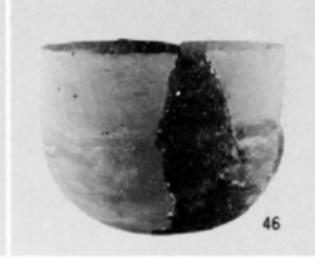
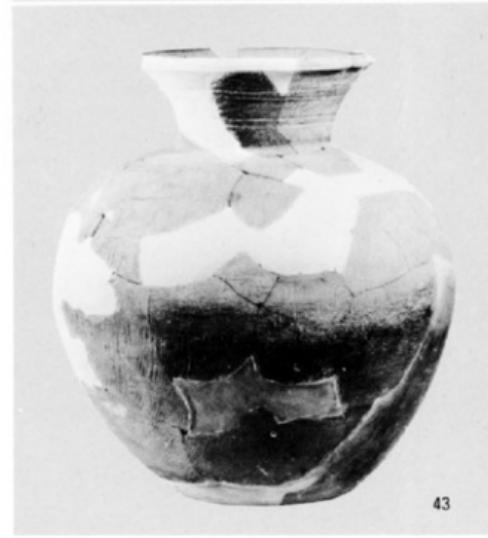
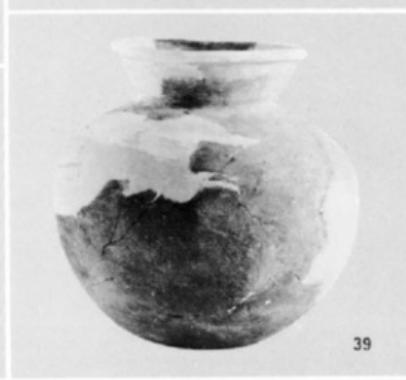
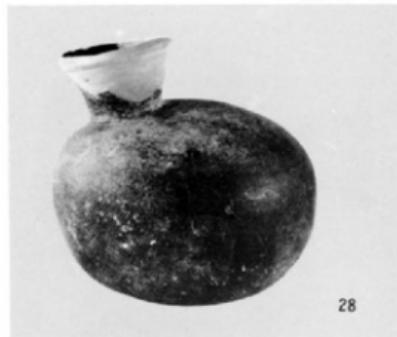
37



31

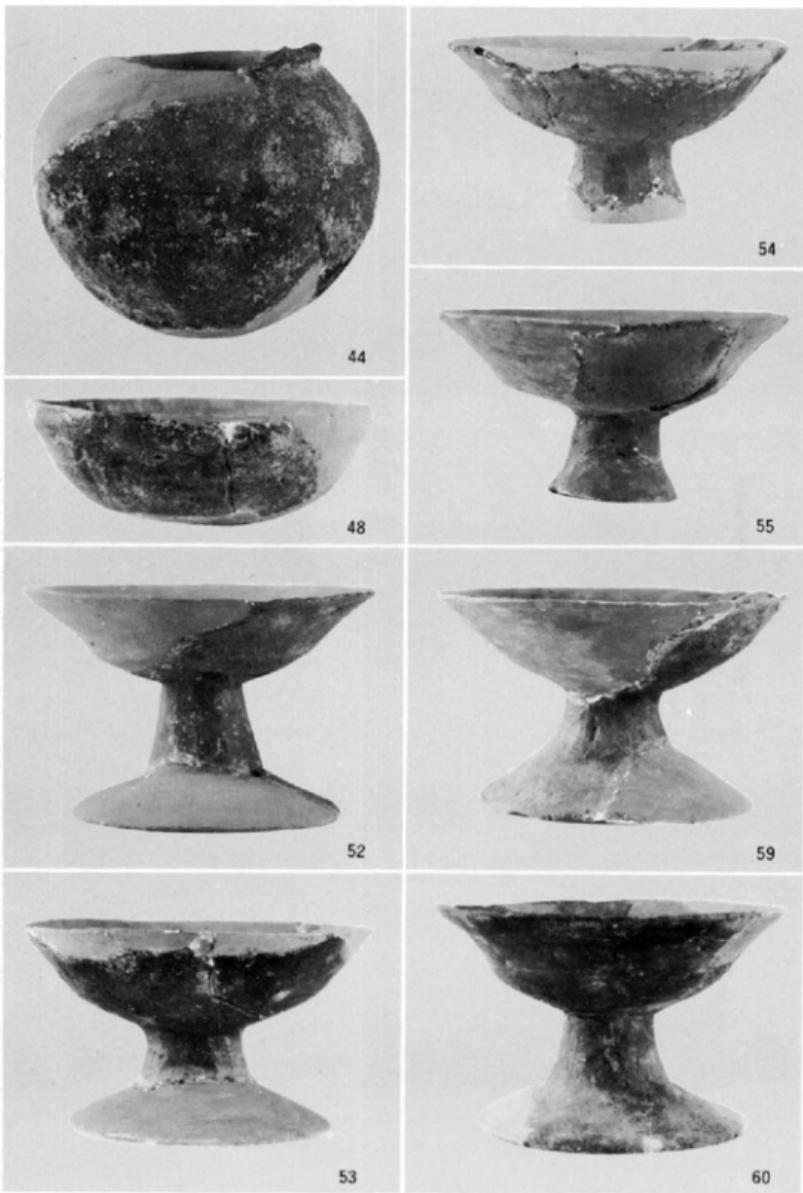


33



II - 2号墳出土遺物VI (土師器)

PL.47

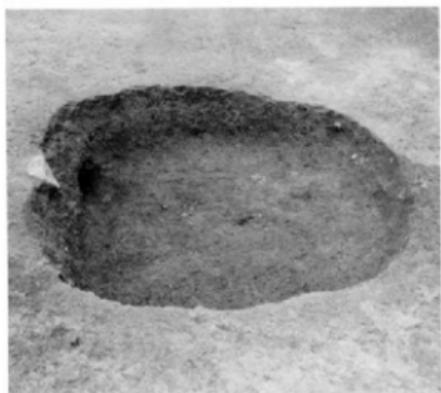


PL48

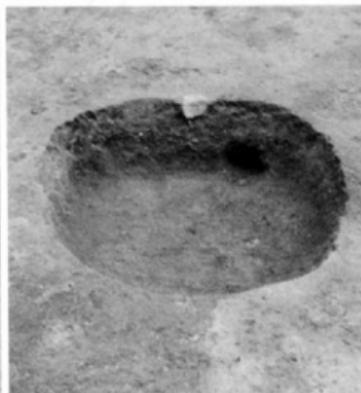
II群土塙



(1) 第1号土塙



(2) 第2号土塙



(3) 第3号土塙

